
カンピオーネ!
Campione
XI
ふたつめの物語
丈月 城
Illustration シコルスキー
スーパーダッシュ

スーパーダッシュ文庫
SUPER DASH

集英社

カンピオーネ！

XI　ふたつめの物語

丈月　城

この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。


丈月城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
ふたつめの物語
Campione XI


ルクレチア
パンドラ
メルカルト
エリカ
ドニ
護堂


「ねえ璃堂、いつまでわたしを
ひとりきりにさせているの」
そして、璃堂は見た。
生まれたままの姿で、
矢下のエミーとメイドたちにかしずかれるエリカを。
彼女のスタイルのよさはとっくに承知していた。
だがわかった。
想像していた以上にすばらしいものだった。


「じゃあ、ひとつ派手に決めてみようかな！」
刃渡り八メートル弱。プラス柄の部分が一メートルほど。
その長さにふさわしく、刀身の巾も広く、がっしりした造りだった。
この剣の裏に、子供くらいなら余裕で隠れられるはずだ。
ドニの身長が一八五センチ前後。
彼の背のなんと四倍超のスケールだ。
まったく釣り合いの取れていない長大すぎる剣を、
銀の腕のカンピオーネはひょいと片手で振りあげている。
すごいを通りこしてバカげていた。

主要登場人物

草くさ薙なぎ護ご堂どう

軍神ウルスラグナを殺し、魔王・カンピオーネとなった少年。

エリカ・ブランデッリ

《赤銅黒十字》の魔術師。護堂の神殺しに立ち会った少女。

ルクレチア・ゾラ

サルデーニャの魔女。年齢不詳。

ワルテル・ザンパリーニ

魔術結社《パノルモス》の総帥。

パオロ・ブランデッリ

エリカの叔父。《赤銅黒十字》総帥。

サルバトーレ・ドニ

イタリア最強の騎士たる「剣の王」。

メルカルト

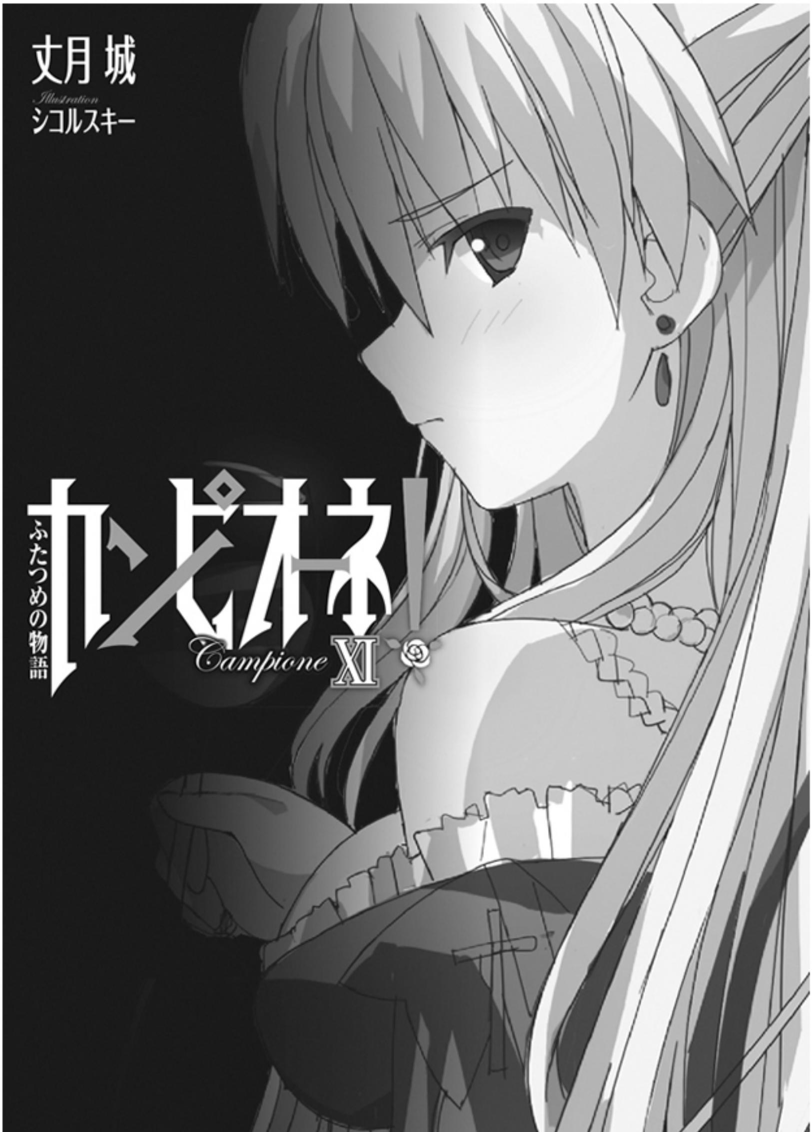
フェニキアの神王。

パンドラ

神殺しの義母にして支援者たる女神。

Contents

イラスト / シコルスキー


丈月城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
ふたつめの物語
Campione XI

第１章　魔王誕生……？

1

　気がつけば、草くさ薙なぎ護ご堂どうは囚とらわれの身となっていた——。と、はじまるのは、あまりに唐とう突とつすぎるかもしれない。だが、護堂の感覚的には、まさにそういう状況であった。

　思いかえせば、四日前。

　高校への進学をひかえた春休みに、祖そ父ふの代理として護堂はイタリアのサルデーニャ島を訪ねた。そこで出会ったのは、記憶喪そう失しつだという謎なぞの美少年、騎士にして魔術師エリカ・ブランデッリ、サルデーニャの魔女ルクレチア・ゾラ——。

　あやしくも不思議な能力を持つ人々だった。

　そして、護堂は『神』と出会った。

　神と対面し、神と語らい、神と戦い、勝利した……らしい。

『プロメテウス秘ひ笈きゅう』を使ったあとは意識も朦もう朧ろうとしてしまい、何が起きたのかはよく覚えていない。だが、ひとときの友ゆう誼ぎを結んだ少年が焔ほのおのなかで愉ゆ快かいそうに笑い、しかし口くち惜おしそうに双そう眸ぼうを鋭くし、別れの言葉を告げたのはちゃんと記憶している。

「草薙護堂よ。神殺しの王として新生を遂とげるおぬしに、祝福をあたえよう！」

　死ぬ間ま際ぎわだというのに、あざやかな声こわ音ねだった。

　あの少年を『英雄』たらしめていた魅力の全すべてが、そこにこもっていた。

「おぬしは我われ——勝利の神の権けん能のうを簒さん奪だつする、最初の神殺しじゃ！　何なん人ぴとよりも強くあれ。ふたたび我われと戦う日まで、何人にも負けぬ身であれ！」

　よく意味はわからなかったが、そのように告げられた。

　死を前にして、尚なおも再戦を約す闘志と気け高だかさ。

　まさしく彼の真しん骨こつ頂ちょうだった。古代ペルシアの軍神。十の化け身しんと共に戦い、民衆を守護し、常勝不敗の英雄として崇すう敬けいされたウルスラグナならではの最さい期ごであったろう。

　さて。

　この時点で草薙護堂は瀕ひん死しの重体だったはずだ。そのまま意識を失った。

　そして、数時間後。ウルスラグナと戦ったのは明け方頃だったが、護堂は昼すぎに一度、目を覚ました。すぐそばにエリカがいてくれた。

　戦場となった遺い跡せきを離れ、いちばん近くの村に移動したのだという。

　部屋数わずか四つという小ささだが運よく宿を見つけたエリカは、部屋を借り、昏こん倒とうした護堂をベッドに横たえたのだそうだ。

「あれだけ無茶しておきながら、よくピンピンしているものね……。こんな短時間で立ち直るだなんて、やっぱり——」

　エリカが枕まく元らもとで胡う乱ろんそうにつぶやくのを聞いて、護堂は首をかしげた。

　ウルスラグナにさんざん痛めつけられ、とどめの電撃まで喰くらった。『プロメテウス秘笈』を使ったせいで、脳と全身も燃えるように熱くなっていた。

　あのまま死んでいて当然だったはずだ。

　ベッドの上で起きあがり、体をチェックして、護堂はつぶやいた。

「本当に無傷だな。俺、夢でも見ていたのか？」

　打だ撲ぼく、骨折、擦すり傷、出血、火傷やけど、内臓破裂、高熱などなど。

　草薙護堂が耐えねばならない苦痛の数々を確認できず、代わりに傷ひとつない健康優良児の肉体を見み出いだした。しかも。

「……ん？」

　何気なく右肩をまわしてみたら、何かがおかしい。

　去年の夏、護堂は右肩を壊してしまい、長年続けてきた野球をあきらめた。あの故障以来、右肩を大きく動かすと、なんとなしに違和感を覚えるのが常であった。

「変だな……」

　右肩をぐるぐるまわしても、何も感じない。なめらかだった。

　そして、もうひとつ気づいた。すごい空腹だ。ぎゅるぎゅると胃袋が蠕ぜん動どうし、食物と栄養を求めて騒いでいる。

「なあエリカ。食い物はないか？」

「近くに食堂があったから、頼めばテイクアウトもできるでしょうけど。でも護堂、あなた死にかけたのよ？　すこし様子を見て、胃に負担のないものを食べるべきじゃないかしら」

　もっともな意見である。だが、護堂は力強く訴えた。

「大丈夫だ！　今なら革かわ靴ぐつだって食える自信があるッ。早く持ってきてくれ！」

　三〇分後。エリカが調達してきた品々を、護堂は大いに食べた。

　豚肉やチキンを春野菜とはさんだパニーニ数個。ゆでたソーセージ。生ハム。

　ぶあつい馬肉のステーキ。蒸し野菜に手作りマヨネーズ風ソースを添えて。

　ウサギ肉を煮こんだシチュー。ミネラルウォーター二リットルにオレンジジュース一リットル、ロゼワインなどなど。

　目についた食べ物を片っぱしからつかんで口に入れ、豪快に咀そ嚼しやくし、がつがつ喰らい、ぐびぐび呑のむ。とにかく栄養を補給しなければ――。

　本能めいた何かに突き動かされて飲み食いする護堂を、エリカはじっと眺ながめていた。

　新発見した珍獣の生態を観察するような、思し慮りよ深ぶかげな顔つきで……。

「そうだ。わたし、用事があったのを忘れていたわ。すこし出るわね」

　途中でつきあいきれなくなったのか、エリカは部屋を出ていった。

　護堂はかすかにうなずくだけで栄養補給を続け、用意してもらった食材をすべて食い尽くし、満足感と共にふたたびベッドへ横たわった。

　栄養のあとは休息、睡眠――。

　と、体が訴えている気がして、迷わずにそうしたのだ。とにかく寝る。力をたくわえる。戦うための体を完成させる……。

　眠っていたのが何時間かは不明である。とにかく、目覚めたとき。

　草薙護堂は囚とらわれの身となっていた。

「……目を覚ましたか」

「……では、訊じん問もんをはじめさせてもらおう」

　いきなり陰気そうな声が聞こえてきた。

　護堂はやわらかな何かの上に寝かされていた。両手両足を拘こう束そくされるおまけつきで。

「こ、こらっ。何だよ、これは？　俺をどうするつもりだ!?」

　苦情を言いたてながら、護堂は周囲を眺めた。

　農家の納な屋やのなからしい。干し草の束たばがたっぷり積まれており、護堂が寝かされているのもその上だった。両手首には、鉄製の手て枷かせが装着ずみ。両足首にも同じ足枷。

　そして、護堂を見おろすのはコスプレした男ふたり。

　どちらも灰色のローブをかぶっていた。似たような格好でジェダイの騎士が宇宙をさすらう超大作映画、はたまたファンタジー映画の魔法使いなどを思い出す。

　ローブのフードを深く下ろしているため、男たちの素顔は見えない。

「俺は日本の旅行者で、こんなことされる覚えはないぞッ。人ちがいじゃないのか!?」

「……いいや。君で合っているはずだ」

　護堂の訴えに、男の片方が陰気に答えた。流りゅう暢ちような日本語だ。

　しかし、フードの奥に見えるのは、明らかに白人の顔立ちであった。

「……君は『くさなぎ・ごどう』なのだろう？　われわれはすでに情報を得ている。日本からやってきた草薙少年と共に、ミラノの騎士エリカ・ブランデッリがサルデーニャ島各地に出没している、と」

　エリカのことまで知られていた。驚く護堂に、男たちは暗い視線を向ける。



「……われわれのことは詮せん索さく無用だ。古き魔道の結社に属する者、とだけ言っておこう。ここ一週間ほど、われらは突とつ如じよ顕あらわれた『神』について調査していた」

　護堂はぎょっとした。神。やはり、ウルスラグナのことか？

「エリカ・ブランデッリと日本の少年が、神の痕こん跡せきを追うように移動していたという。そして今日の早朝、神の気配はいきなり消滅し、島に平穏がもどってきた……」

　やはり、あの戦いは本当にあったことなのだ。

　短い間とはいえ友だった少年との、死闘と別離。軍神ウルスラグナとの対決の記憶。

　思い出して護堂は胸を熱くしたが、続く男の言葉にハッとした。

「この状況から、われわれはひとつの可能性を危き惧ぐしている。もしや、サルデーニャ島に顕けん現げんした神はエリカ・ブランデッリによって倒され、彼女は『カンピオーネ』に転生したのではないかと！」

　エリカが神に勝った？　そして、何になったと？

「そういえばあいつ、たしかにその言葉を言ってたような——」

　ウルスラグナとの決戦に向かう前、エリカと交わした会話。

　たしかにあのとき、護堂は『カンピオーネ』という単語を聞いたはずだ。

「ほう。心当たりがあるようだな。くわしく聞かせて欲しいものだ……」

　ローブ男のひとりが護堂にささやく。

「今回サルデーニャ島に顕れた『まつろわぬ神』は、われら《東方マギ教会》にとっても重要な神格であると、啓示がもたらされている。おそらくは勝利の神ウルスラグナ……」

　こいつらがウルスラグナの関係者!?　護堂は驚いた。

「……もしエリカ嬢がかの軍神を弑しいし奉たてまつったのであれば、由ゆゆしき事態だ。われら結社の総力をあげて、神の復讐を果たさなければ！」

「うむ。少年よ、そのような事情ゆえ、エリカ嬢の居場所を教えてもらおうか！」

「教えないというのであれば、強制的に聞き出すまでよ！」

　口々に言いたてられてしまった。

「そ、そんなこと知るかよ。寝て起きたら、もうあんたらにつかまってたんだッ。大体、知っていたとしても教えられるか！」

　護堂は叫んだ。復讐のためにエリカを探すと聞いては、協力などできない。

「そうか、では仕方ないな……。契けい約やくの神ミトラの御み名なにおいて命ずる。真実のみが汝なんじの法、誠実のみが汝の言葉なり。偽いつわりの発言を禁ずる」

　男の片方があやしい文句をつぶやく。

　護堂は生まれて初めての感覚を味わった。男の吐き出した言葉が『力』を帯び、無色無形のくせに存在感のある『何か』になり、護堂の体にからみついてくる！

　言こと霊だま――？　漠ばく然ぜんと、その言葉が思い浮かんだ。

　もし言霊とやらが実在するなら、こんなふうに作用するのかもしれない。

　だが、そんな現象をどうして知覚できるのだ、自分は⁉

「む？　この少年、私の魔術をはじいたぞ？」

　しかし、護堂だけでなく、言霊を使った方も驚いていた。

「おそらく、護身の魔術で体を守っているのだろう。術で情報を引き出せないよう、前もって処置していたにちがいあるまい」

「さすがは《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》の大騎士が仲間とするだけあるな……」

　護身の魔術？　もちろん護堂はそんなものを使えない。やはりエリカの仕し業わざなのか。でも、あいつは本当にどこへ行ったんだ――と、あせったとき。

「ならば是ぜ非ひもない。穏おん当とうな手段が通じないのであれば、野や蛮ばんな手法に頼るのみ」

　男のひとりが物ぶつ騒そうなことを言いだした！

「名門《赤銅黒十字》に敬意を表し、われらが最さい凶きようの秘術をご披ひ露ろうする。脳のう髄ずいを沸ふつ騰とうさせ、インド象をも死に至らしめる呪じゆ詛そ……これより君に進呈しよう。守護の呪法では、この呪詛をしのぐことはできぬ」

「死にたくないのであれば、知っていることを洗いざらい吐はくがいい」

「さあ、早く言え。今ならまだ間に合う！」

　護堂はごくりと生なま唾つばを呑のみこんだ。

　物騒な脅おどし文句がはったりに思えない。魔術師たちがどれだけデタラメなことをできるか、ここ数日でさんざん見聞きした。だが、エリカを売るわけにはいかない。

　ちらつく死の恐怖を抑おさえながら、男たちをにらみつける。

「ふむ。仲間のために死ぬ覚悟があると――。残念だ。……我わが恩おん寵ちようなくば、義なる者も畜ちく獣じゆうも悉ことごとく光を失うであろう。邪じや悪あくなる者の勝利は成れり！」

　言霊が『力』を帯びる、あの感覚。

　あれをふたたび感じながら、護堂はどうにかして防げないかと考えた。何か楯たてにできるものはないかと。また、ウソを教えて時間稼ぎする手もあったよな、と今さらな後悔が頭によぎったりもした。

　しかし、もう遅い。致死の呪じゆ詛そとやらが襲いかかってくる

のを護堂は感じた。

　神様との戦いを生きのびたのに、ここで死んでしまうのか――あれ？

「われらが最凶の呪詛もはじくだと！　大騎士級の使い手でも、対抗魔術もなしに防ぐなどできないはずだぞ!?」

「信じられん……。この少年、何者だ……？」

　ローブの二人組が愕がく然ぜんとつぶやいている。

　無理もない。まったく理由はわからないが、呪詛の言霊とやらは護堂の体に当たると、すぐに消滅したのである。そして、この直後。

「そこまでよ。エリカ・ブランデッリの連れを拉ら致ち監かん禁きんするだなんて無茶、よくも実行したものね。その無む謀ぼうさに、むしろ感心してしまうわ」

　いきなり、納屋の扉が開いた。

　颯さつ爽そうと入ってきたのは、夕暮れの日差しを受ける美少女だった。

　赤みがかった金髪を王冠のようにかかげている。その美び貌ぼうは覇は気きと才気で輝き、陰気なローブ男たちをひるませる。

　もちろんエリカ・ブランデッリ。皆が探し求めていた少女だった。

2

「決闘の名乗りをあげる必要はなさそうね。……腕ずくという形になるのは申し訳ないけど、その子を返してもらうわ」

　くすりと微笑ほほえんだエリカの手に、忽こつ然ぜんと剣が出現する。

　クオレ・ディ・レオーネだ。細身の刀身が清せい冽れつに輝く、獅し子しの魔剣。ウルスラグナ戦でも活躍したのを、護堂はよく覚えていた。

「待て、エリカ・ブランデッリ。君は本当に『まつろわぬ神』を殺あやめたのか⁉」

「神殺しの魔王——カンピオーネになってしまったと⁉」

「ふふっ。その答えは実際に戦って、たしかめてみたらいかが！」

　たじろぎながら問うローブ男たちの困惑など気にもせず、エリカはあでやかに笑いながら獅子の魔剣を一いつ閃せん、二に閃せんする。

　迷いのない剣さばきに、護堂は絶句した。

　時代劇じゃあるまいし、この男たちを斬きり捨てるのか⁉　恐れと不安が喉のど元もとにせり上がってくる。しかし、幸いにもその危き惧ぐは外れた。

　エリカの剣が切り裂いたのは、ローブ男ふたりのまとう『力』だった。

　彼らを保護するように取りまいていた、不思議な気配。それをクオレ・ディ・レオーネは断ち切ったのだ。『力』はすぐに雲うん散さん霧む消しようした。

「剣の心得もないうえに護身の術を失ったのだから、もうわたしの敵ではないわね」

「ちっ！」「おのれ！」

　エリカに『力』を切られた男ふたりが、指で複雑な形を描く。

　宙に描かれた図形が『力』を生み出し、何か獰どう猛もうそうな性質を帯びようとする。護堂はその気配を察して、驚いた。まただ。俺に何でこんなことがわかるんだ？

　護堂のとまどいをよそに、エリカは動きを止めない。

　ローブ男たちの『力』が動きだす前に、今度はあざやかなハイ

キック。

　男のひとりの延えん髄ずいをみごとに蹴けり抜いて、一撃でＫＯする。もうひとりにはクオレ・ディ・レオーネの柄つかをみぞおちに突きこんで、悶もん絶ぜつさせた。

　戦いはあっけなく、エリカの勝利に終わったのである。

「こんなところかしらね。この後どうなるかは、この人たちの運にまかせましょうか」

　納屋の奥から持ってきたロープで、エリカは気絶した男たちをしばりあげた。

　開け放たれた扉からは、夕焼けの空が見える。まもなく夜になるのだ。

「こいつら、東方なんとかの人間だって言ってたけど……もしかしたら宗教関係の人かもしれないぞ。ゾロアスター教だっけ？　その宗教の神様なんだろう、ウルスラグナって？」

　護堂は訊たずねた。手足の拘束はもう解といてもらっている。

「そんなに立派なものじゃないわ。禁きん呪じゆ系けいの魔術を使っていたもの。たぶん、古代ペルシアの神々を信仰対象にでっちあげたカルトの、木こっ端ぱ魔術師よ」

「カルト……新興宗教の一種、みたいな感じか」

　たしかに〝カルト〟という雰ふん囲い気きがしっくりくる連中ではあった。

「たぶん邪じや派はの魔術結社ね。躊ちゆう躇ちよなく『脳のう髄ずい破壊』の術を使ったくらいだし」

「邪派——ああ、邪悪な一派ってことな。たしかになあ……って、ちょっと待て」

　昏こん倒とうした男たちを見おろしながら、護堂は気づいた。

「エリカおまえ、俺がそんな代しろ物ものを浴びせられるの、黙って見てたのかよ!?」

「現時点であなたが、どれくらい人間ばなれしているのかを確認したかったのよ」

「に、人間ばなれ？」

「ええ。おめでとう、護堂。今日はあなたが『怪物フエノメノ』に生まれ変わった記念すべき日。第二の誕生日のようなものよ」

　と、エリカはにっこりと笑った。

　それはとても可か憐れんで印象的な、さすがエリカ・ブランデッリと賞賛すべき、華やかな笑顔だった。しかし護堂には、ファウスト博士を若返らせた悪魔メフィストフェレスの笑みに思えてしまった。妙に悪魔的といおうか……。

「言いわけさせてもらうなら、わたしは知っていたの。人間の使う魔術——それがたとえ最強最高の秘ひ儀ぎであっても、あなたを傷つける恐れはないって」

「どういう意味だ？　いや、たしかにさっきからすごく変な感じなんだけどさ」

　今の一幕で自分が感じていた『力』——。

　もしかして、あれが魔術なのか。呪力、言こと霊だまというヤツなのか。そのことを察して、護堂が戦せん慄りつした瞬間、エリカがにこやかに言い放った。

「何て言えばいいのかしらね？　そう……あなたはもう、ふつうの人間ではない。草薙護堂は神殺し、カンピオーネである。こんなところかしら？」

「か、神殺し？　カンピオーネだって？」

「ほら、ウルスラグナと戦う前に話したでしょう？　世界に六人しかいない神殺し。神の権けん能のうを簒さん奪だつした魔王、カンピオーネ。あなたは晴れて七人目になってしまったの」

「なにィィィィィ!?」

　ローブの二人組は、護堂が爆ばく睡すいしている間に部屋へ忍びこんだ。ちょうどエリカが不在だったときだ。彼らは情報源として護堂を拉ら致ち。村はずれの納屋に連れこんだ……。

　これを察知したエリカが速すみやかに駆けつけ、あの救出劇になったのだという。

「小さなカルトの、道を踏み外した魔術師らしい、短絡的で思し慮りよの浅い行動よね」

　夜の田いなか舎道みちを歩きながら、エリカは決めつける。

　ちなみに、ロープで拘束した男たちはそのまま放置してきた。

「それについては同意するけどな。エリカ……おまえがあのとき部屋を出ていったの、もしかして、俺を囮にするつもりだったのか？」

　隣を歩く金髪の少女へ、護堂はボソリと言った。

　まあ、これは邪じや推すいの類たぐいであろう。あのときエリカは自己申告したとおり、本当に用事があった……そう考える方が自然だ。

　しかし、護堂はもうひとつの可能性を思いついていた。

　そう、たとえば。聡そう明めいで勘かんのいいエリカは、ローブ男たちのような輩やからが現れたのを察知していた。また、草薙護堂がどういう状態にあるのか確認したいとも思っていた。

　そこで彼女の悪魔的頭脳が、

『エリカ自身は姿を隠し、護堂ひとり残して何が起こるのか静観してみる』

　なんて思いついても、不思議ではないような……。

「囮おとりというのは、あまり適切ではない言い方よ。わたしは思いついたなかでいちばん面白くて、ドラマチックな案を採用しただけだもの」

　エリカはむしろ自慢そうだった。ここまでありがたみのない命の恩人も珍しい。

「おまえ、なんていうか……いい性格してるよな」

　護堂はしみじみつぶやいた。

　出会った当初、エリカはひどくツンケンした態度だった。だが、いっしょに死線をくぐり抜けるうちに、すこしずつ彼女との距離は縮まっていった。

　だからだろう。護堂もすこしずつわかってきた。エリカはただ頭がいいだけではない。よくいえば才さい気き煥かん発ぱつ。身もフタもなくいえば、おそろしく悪魔的。

　その智ち力りよくをまず、自分が面白がるために活用する類の人間なのだ。

「俺のまわりにはどうしてこう、変な性格のヤツらが多いんだろうな……」

　身近にいる家族や親戚、友人たちを護堂は思い出した。

　逆に、そのおかげでエリカのような女にもたじろがずにすむ。困った人間ではあるが、根はいいヤツで、仲間であるのは変わらない。

「まあいいか」と独りごちる護堂に、すかさずエリカは言った。

「あら。すこしでもわたしに似た知り合いが多いだなんて、護堂の人脈もなかなかね。ちょっと見直したわ」

「……ま、ひとまず宿に帰るか。今夜はもう休もうぜ」

　変な性格と言われたのをポジティブにしか捉とらえないエリカに感心しつつ、護堂は提案した。しかし、首を横に振られてしまった。

「いいえ。さっきの二人組に仲間がいる可能性もあるし、すみやかにこの村から出るわよ。どうとでもやりすごせるとは思うけど、無駄に危険を冒おかす必要はないわ」

「そういえば、おまえは狙ねらわれてるんだっけな」

「何を言ってるの。狙われているのは、むしろ護堂の方よ。あなたは魔王。神を殺あやめた七人目のカンピオーネなんだから」

　目を白黒させる護堂に、エリカは幼子へ言い聞かせるようにささやく。

「さっきの二人組みたいに、状況証拠から『エリカ・ブランデッリが神を弑しい逆ぎやくした』と考える魔術関係者は多いでしょうね。でも、彼らもいずれ悟るわ。——そうではないのだと。神を殺めたのは何の魔術も心得ない日本人、草薙護堂なのだと」

「俺が神殺し……」

「ええ。サルデーニャ島に顕あらわれた『まつろわぬ神』が消滅した事情を探りに、イタリアはもちろん、欧州各地の魔術結社が調査員を送りこんでくるわよ。まあ、最初はわたしの方にばかり関心が集まるでしょうけどね」

「…………」

「あなたはそのうち、ウルスラグナから簒奪した権能に目覚めるわ。権能はね、もともと神の所有物であった聖なる力。天上の神々が振るうべき、大いなる力なの。そんなものを所有する人間に、もう只ただ人びととしての生は許されないわ」

　エリカのなめらかな語り口を、護堂は呆ぼう然ぜんと聞くばかりであった。

　それでも、ようやく言葉を見つけて声に出す。

「でも、その力を使わないって選択肢もあるはずだろ？」

「どうかしら？　あなたがそんな道を選べる人間だったら、そもそもウルスラグナと戦うこともなかった気がするわよ」

「だけど、昨日までとは状況が全然ちがうじゃないか」

　すこし気を落ち着けて、護堂は言った。

「神様がらみの事件は終わったんだから、俺は日本に帰るよ。そう

すれば、神だ魔法だ大魔王だってゴタゴタとも縁が切れるだろうし——」

「ずいぶん落ち着いてると思ったら……すっかり忘れているのね、護堂」

　あきれた感じでエリカは言った。

「あなた宛あての伝言があるわ。オリエントの神界を統すべた王の御言葉だから、心して聞きなさい。——貴様の最初の敵は、軍神ウルスラグナ。第二の敵はこのわしよ！」

　おそろしく重厚な〝誰か〟の口調を、エリカは真ま似ねしていた。

「まもなく、わしは完全なる力を取り戻す。その暁あかつきには、かの軍神めの代わりに我が怒りの矛ほこを向けてくれようぞ。剣を磨みがいて待っておれ——だそうよ」

「……メルカルトか！」

　護堂は己おのれの迂う闊かつさを呪のろった。この島に顕れた神は、もう一体いたのだ！

「ええ。フェニキアの神王メルカルトはあのあと、何ど処こかへ飛び去ったわ。草薙護堂との戦いに備えてね。……住民が目ざわりだから、サルデーニャ島を海に沈めると豪語した王様よ。この先、どんな災さい厄やくが起きるか楽観できないわね」

　自分はウルスラグナを倒すため、メルカルトの力を利用した。

　草薙護堂の負うべき責任に気づいて、体に震えが走った。……もしかして、またなのか。また神様と戦わなければいけないのか？

「どう、護堂？　『まつろわぬ神』相手に二度も戦うのはごめんだというのなら、ひきとめるのはなしにしてあげるけど」

「俺としても、そうしたいのはやまやまだけどな」

　護堂はため息をついた。ここで帰国するなど許されまい。エリカが見逃してくれても、自分で自分を許せない。

「メルカルトの件にカタをつけるまで、こっちに残るよ。……俺はいつのまにか嵐の中心に放りこまれていたんだな」

　ため息と共に護堂が言うと、エリカは肩をすくめた。

「自みずから飛びこんだという方が、適切な表現だと思うわよ？　じゃあとりあえず、わたしといっしょにカリアリへ向かいなさい。人の多い街の方が隠れやすいし、情報も集めやすいわ」

　カリアリはサルデーニャ島最大の都市で、港町だ。

　エリカの提案は理にかなっている。奇抜なことを思いつくだけでなく、合理的に物事を考えられる少女なのだ。天は二物も三物も彼女にあたえ、彼女自身もその才におごることなく、天からの贈り物を存分に磨いて活用している……。

　すごい女だなと感心したところで、ふと護堂は気づいた。

「おまえの言うとおりにしようと思うんだけどさ。そっちは帰らなくてもいいのか？」

「あら、何の話？」

「だからミラノへ。おまえ、ミラノから出張で来たんだろう？」

　エリカが何度か口にしたプロフィール。

　イタリア北部の大都市ミラノ出身。《赤銅黒十字》とかいう秘密結社所属の魔術師で、大騎士とかいうエリートだったか。たしか叔お父じさんが組織のえらい人。なのにエリカは、護堂に同行するような物言いをする。

「まだ帰るつもりはないわ。ウルスラグナの件、まだ結社にも報告していないし」

「え？　いいのかよ、そんなことで？」

「よくはないわね。騎士としての責務をないがしろにしているわけだし、携帯の電源も切って連絡を絶っているし。でも、背に腹はかえられないわ」

「電話ぐらいはしろよ。向こうだって心配してると思うぞ」

「そうしたら、帰還命令が下るかもしれない。それを避けたいのよ」

　護堂は思い出した。エリカは将来を嘱しよく望ぼうされる天才児なのだ。危険な状況に放置して逸いつ材ざいをつぶす愚ぐは、組織側も冒おかしたくないということか。

「偽にせの報告書を提出してもいいのだけど、裏を取られたら元も子もないしね。とにかく、わたしはまだサルデーニャを離れるつもりはないの。こんなに面白いことが起きているのに、その中心から遠ざかるなんてバカ、断じてできないわ！」

　神様とのゴタゴタを『面白い』と言い切る、エリカの神経。

　護堂はあらためて感心した。また、もうひとつの可能性にも気づいて、ひそかに感謝した。

　もしかしたら、彼女は右も左もわからない草薙護堂をひとりにしないよう配慮して、共にいることを選んでくれたのではないかと――。

　うぬぼれかもしれないが、なぜかそう思えたのだ。

3

　カリアリをめざすにあたって、エリカは移動手段を確保したいと言い出した。

「タクシーは……こんな田舎いなかの村、走ってるわけないよな。バスでも待つか？」

「そっちも一日に二、三本しか、走ってないんじゃないかしら？」

　というわけで、護ご堂どうとエリカはバス停を通過した。

　代わりに村をうろついて、レンタカーで気ままに旅行しているというイタリア人の中年男性を見つけ、頼みこんでヒッチハイクさせてもらった。

　イタリア語を話せない護堂は、全てエリカまかせで、おとなしくしていた。

　美しいだけでなく社交的でおしゃべりも得意なエリカは助手席にすわり、運転席のおじさんとにこやかに話す。

　すでに陽ひは沈んでおり、三人を乗せた乗用車は夜道を快走した。

「……ん？」

　後部座席の護堂は首をかしげた。前にいるふたりが話す内容をなんとなく理解できる――気がしたのだ。ほんの一瞬だけだが。

（これから君たちはどこへ行くんだい？　へえ、カリアリ？　おれは島の西の方をこのままぶらぶらするつもりさ……）

　と、おじさんが言ったように思えたのだ。

　やがて車はオリスターノという街に着き、おじさんとはそこで別れた。

　時刻は夜の九時すぎ。小さなホテルにエリカと護堂は泊まり（もちろん部屋はべつべつだ）、翌朝八時半発の電車に乗って、カリアリに向かうことにした。

　……余談だが、護堂はこのときエリカの寝坊癖ぐせを知った。

　集合時間になっても部屋で寝ていた彼女を起こすため、護堂は拳こぶしが痛くなるまでドアを乱打しなければならなかった。

　イタリア本土は地中海に面している。

　このおだやかで美しい海に浮かぶサルデーニャ島は、日本の四国程度の面積だ。島全体がサルデーニャ自治州であり、その州都がカリアリであった。

　カリアリは古い港町だった。起源は何しろ紀元前の八世紀。

　航海術に長たけたフェニキア人が島に上陸したとき、この地に港

と街を築いたのだ。

「それにしても、あのお菓子のひどい味ときたら、特筆すべきものがあったわね……」

　カリアリの駅で電車を降りるなり、エリカはつぶやいた。

「仕方ないだろ。おまえが寝坊しなけりゃ、もっとマシな朝飯が食えたんだ」

　肩をすくめて護堂は言った。

　カリアリまで、電車で約一時間半の旅路。その間の腹ごしらえにと時間のないなか護堂は駅の売店に走り、チョコバーを買った。一応、エリカの分も。

　これがひどいまずさだった。とにかく甘い。歯が痛みそうなほど甘かった。

　欧米の菓子類は、たいてい日本人には甘すぎる。しかし、同じものを食べたエリカも「これはチョコレートというものを、どこまで冒ぼう涜とく的てきな味に変えられるかの挑戦ね」と評したから、万国共通のまずさだったはずだ。

　それでも、ふたりともきれいに食べ切ったのだが。

「もっと時間があれば、まともな店で買い物もできただろうに……」

「わたしの責任のように言われるのはおかしいわ。あなたが前もって買い出ししておけばよかっただけですもの！」

「おまえが早起きするって選択肢はないのかよ！」

　護堂の反論に、エリカはツンと顔を背そむけて、

「ないわ。まさか神殺しに生まれ変わったくらいで、エリカ・ブランデッリの安らかな眠りを邪魔する特権が己にあると思ってないでしょうね？　それは全世界を統すべる皇帝ですら持ちえない、至上の特権よ！」

「朝寝坊したいだけなのに、そこまで言うかよ……」

「まあ、でも。ひどい味ではあったけど、逆にそこが趣おもむき深ぶかくもあったわ。だから護堂、今回の不ふ手て際ぎわに苦情を言わないであげる。感謝して頂ちよう戴だい」

「しかも、なんで上から目線……。それはそうとエリカ」

　個性的すぎる美少女に、ふと護堂は言った。

「まずいまずい言いながら全部たいらげたり、趣きがどうとか言ったり。おまえ、結構ゲテモノな食い物も好きなのか？」

「まさか。わたしは選択の余地があるなら、常に上質な方を選びたい人間よ」

　と、エリカは赤みがかった金髪を王冠のようにかかげた。

「でも選択の余地がないときは、食べ物の味を無視する特技も持っているの。騎士である以上、体が資本ですもの。どんな食糧もおろそかにはできないわ」

「育ちがいいくせに器用なヤツだな……」

「それに覚えておいて。無難な味でもつまらない料理より、おいしくなくても個性的な料理を尊そん重ちようするのがわたしの生き方なの。そういう意味では、あなたの選択は最良ではなかったけど、悪くもなかったわ」

　しれっと言ってのけるエリカだった。

　ともあれ、護堂はサルデーニャ最大の都市カリアリにもどってきた。

　石造りの街並みが整然とならぶ、海辺の小さな古都だ。そこそこ都会で十分に暮らしやすいのだが、観光地特有の〝ゆるい〟空気も併あわせ持っている。

「ところで護堂。カリアリに到着したことだし、あなたには『カンピオーネとして名乗りを上げ、サルデーニャ島の魔術師に号令をかける』という選択肢もあるわよ」

「いいよ、そんなことしなくても」

駅を出たところでエリカに訊きかれて、護堂は即答した。

「カンピ何とかになったとか言われても、実感とか全然ないし」

「まあ、権能を掌しよう握あくしていない段階で魔王誕生をアピールしても、信用されない可能性が大だから、それでもかまわないわ。となると、次の懸けん案あんは情報収集ね」

「メルカルトについての、だな」

「ええ。それも信用のおける、正確性の高い情報よ。こういうときは地元の魔術師に接触するのが定じよう石せきだけど……サルデーニャのような田舎だと、『まつろわぬ神』相手に役立ってくれる一流どころがすくないのよね」

エリカのつぶやきで、護堂はある人物を思い出した。

「なら、ルクレチアさんに連絡したらどうだ？」

サルデーニャの魔女、ルクレチア・ゾラ。この島に来る発端となった女性であり、護堂とエリカをささやかに導みちびいてくれた年長の仲間でもある。

ウルスラグナと戦ったあと、バタバタしすぎて連絡するのを忘れていた。

報告も兼ねて、彼女と連絡を取ればいいと思ったのだが。

「実は昨日、護堂が寝ている間にルクレチアに電話しておいたの。事の顛てん末まつを報しらせるために。そのとき彼女は言ったわ。『ひとまず事態は小しよう康こう状態になったようだから、私は力を回復させるために爆睡する。しばらくいないものと思え』って。あの言い方だと、二、三日は眠りっぱなしでしょうね」

「ずっと眠りつづけるのか？　一度も目を覚まさずに？」

「ええ。なるべく短時間で心身の消しよう耗もうを回復させる、魔術の眠りよ。じっくり静養しないと体の芯しんに残る疲れは取れないけど、急場しのぎにはなるわ」

「そういえばルクレチアさん、呪力とかいうのを使い果たしたんだよな……」

　エリカのそつのなさに感心しつつ、護堂は魔女の心配をした。

　外見のせいで忘れがちになるが、ルクレチアはかなりの老齢（らしい）のだ。

　別れる前は、だいぶ憔しよう悴すいしていた。一週間ほど前に顕けん現げんした二神、メルカルトとウルスラグナの戦いに巻きこまれ、そこから逃げるために力を使いはたしたらしい。

「だけどね。その間、もし助けが必要になったら、当てにできる人物がいるとルクレチアから教わっているの。都合のいいことに、ここカリアリの住人よ」

「なら、その人のところに行ってみようぜ」

「ただルクレチアはこうも言ったのよね……。その人、ちょっと浮うわついた性格で、一〇〇％は信頼できない人間だって」

「そうか……ルクレチア・ゾラの紹介とあっては、無む下げにもできないね」

　妙に気取った声でダヴィド・ビアンキは言った。

　ここはカリアリ港とアンジェリ湾を見おろす、丘の上の館やかただった。カリアリはローマと同じく、七つの丘を擁ようする高台の多い街なのだ。

　こんなロケーションの立派な洋館。いかにも金持ちの屋敷という風ふ情ぜい。

　その応接間で、護堂とエリカはビアンキと向き合っていた。

「二ふた柱はしらの神が降こう臨りんしていたことは、ぼくも承知していたよ。片方がメルカルトだということもね。もう片方は東方の神だろうと推測していたけど、ウルスラグナだったのか」

　感心したように、魔術師ダヴィド・ビアンキは言う。

　二〇代なかばの美男子だった。仕立てのいいスーツを隙すきなく着こなし、いかにも伊だ達て者もの、色男という雰囲気だった。

「ええ。ルクレチアから、あなたは卓たく越えつした地ち相そう術じゆつ師しだと聞いておりますわ。その魔力で是非、メルカルトの行方ゆくえを追っていただきたいのです」

　お嬢さま口調でエリカは訴え、その横で護堂は黙ったままだ。

　連れは日本語しか話せないとエリカに伝えられて、ビアンキは興味深げに護堂を見たものだ。だが、彼はすぐに流りゆう暢ちような日本語で会話をはじめてくれた……。

「まあ、かまわないよ。ルクレチアとの義理もあるしね。でも、ひとつ教えて欲しいな。軍神ウルスラグナはメルカルトの手で殺害された——って、本当かい？」

「ええ、本当ですわ。わたしと、この草くさ薙なぎ護堂がたしかに見届けました」

　しれっとエリカはウソを口にした。

　事情説明をする際、彼女は事実を偽いつわったのだ。ビアンキは「ふうん」とあまり信用してなさそうな口調でつぶやいてから、フッとキザに微笑んで、

「とにかく、観かん相そうの準備をはじめようか。必要な資材を用意するから、しばらく待っていてもらえるかな？」

　と、応接間を出ていった。

「……なあエリカ。あのビアンキって人、ちょっと軽薄そうじゃないか？」

「……そうね。肚はらに一いち物もつあるのを隠し切れないのも、小物っぽくて微妙だわ。でも、それなりに実力者でもあるそうだから、様子を見ましょう」

　ふたりきりになったので、小声でささやき合う。

「ここは向こうの本拠地。彼と敵対することになったら、侵入者のわたしにはすごく不利な状況だけど……。それでも負けはしないでしょうしね」

「本当かよ。結構すごい人なんだろ？」

「ええ。あくまで〝そこそこ〟。一流ではあるけど、超一流フオリクラツセではない程度よ。わたしが自分の身を死守するつもりで防御を固めたら、それを破る術、ビアンキにはたぶんないわ。手詰まりになった彼は、あなたを狙うかもしれないけど……」

　ここでエリカは、まじまじと護堂の顔を見つめた。

「そうなったら、痛い目に遭あうのは向こうの方じゃないかしら」

「へ？」

「魔王カンピオーネについて、ある姫君から何度か教えていただく機会があったの。それにわたしの個人的体験も合わせて考えると――かなりロクでもない展開になるはずよ」

　まるで予言者のように、厳おごそかに語るエリカだった。

4

　一時間ほどしてもどってきたビアンキは、エリカと護ご堂どうを別室に案内した。

　ビアンキ邸ていは広く、それに比例して廊ろう下かも長い。窓からはエメラルドブルーの地中海を一望できる。海辺の丘の上というロケーションのおかげで、眺ながめが抜群にいいのだ。

　金持ちの家らしい廊下を歩きながら、護堂は小声でエリカに訊たずねた。

「ところで、『地ち相そう術じゆつ』って何をやるんだ？」

「東洋人の護堂にわかりやすくいうと、『風ふう水すい』によく似た魔術よ。その土地の地相、霊気の流れを見定めて、自分たちに都合のいいようコントロールする儀式魔術なの。自分や組織、国家を豊かにするためにね」

「あー……風水か。たしかに金持ちっぽい人だもんな」

黄色い服を着て金運アップ。縁起のいい方角に開運グッズを配置。

エリカの説明で、護堂は日本のワイドショー的な縁起かつぎを思い出した。

「地上に顕けん現げんした『まつろわぬ神』は、その土地の相と霊気にもすくなからぬ影響をあたえるわ。すぐれた地相術師なら、そこから神の動向——今どこにひそんでいるのか、どんな状態か、次に顕あらわれそうなところなんかを観相できるかもしれないの」

やがて、目的の部屋に到着した。

天てん井じょうは吹き抜けになっていて、高い。かなり広く、この室内にテニスコートを造っても、余裕でプレイできるだろう。それほどの大部屋だった。

中央には大理石のテーブルが置かれ、上に大きな〝模型〟が載のっていた。

地中海周辺の地形図を立体化した模型だった。横五メートル、縦二メートルくらいの長方形上に、スペイン、イタリア、ギリシア、トルコ、地中海、北アフリカ諸国などが精せい巧こうかつ美しく再現されている。

なんて趣味的で金のかかっていそうな——というのが、護堂の感想だった。

「さあ。君たちが目撃したメルカルトの『気』を追ってみよう」

ビアンキは茶色い粉末の入ったビーカーを取りあげた。

「これは古代フェニキア人の母港テュロスの遺い跡せきより出土した壺つぼの破片を、さっき砕いて粉にしたものだ……」

ビーカーが逆さにされ、粉末が模型の上に落ちる。

ちょうどサルデーニャ島の南側——護堂たちがいるカリアリに当たる場所に。

すると、粉末がひとりでに動きだす。蛇へびのように模型の上を這はい、地中海に飛び出し、東へ向かう。その方角にはサルデー

ニャ島よりも大きな島があった。

「シチリア？　メルカルトはシチリア島に向かったのですか？」

　目をみはるエリカに、ビアンキはうなずきかけた。

「そのようだね。フェニキア人が勢力範囲とした地中海の島はサルデーニャだけじゃない。シチリアもそうだ。……メルカルトは己おのれのアイデンティティ、彼という存在の根源を求めて、より母国に近い聖域へ移動したのかもしれない」

　メルカルトを信しん仰こうしたフェニキア人は、テュロスという都市を基地としたらしい。

　テュロスは今でいうレバノンの一角。サルデーニャから見れば『東』の方角である。なるほどと護堂は納得した。

「さて。実はここに、もうひとつ用意したものがある」

　と、ビアンキが試験管を取りあげる。少量の白い粉末が入っていた。

「サーサーン朝ペルシアのゾロアスター教神殿跡より出土した石版を、さっき削って粉末にしたものだ。勝利の軍神ウルスラグナの『気』を追うために用意した」

　ビーカーが逆さにされ、白い粉末が模型の上に落ちる。

　イタリア本土のまんなかに落ちたのだが、粉はひとりでに動きだし、海を渡り、サルデーニャ島の南——ここカリアリの位置に這ってきた。

「エリカくん……君が言ったとおり、ウルスラグナ神がメルカルトに斃たおされたのなら、この粉は消滅するはずなんだ。でも、見てのとおりだ」

　ここでビアンキはにやりと微笑ほほえんだ。

「ぼくはこう観相するよ。ウルスラグナは人間の手で殺あやめられた。結果、軍神の権けん能のうは簒さん奪だつされ、新たな所有者は今、このカリアリにいると。それはおそらく君のはずだ」

　と、気取った美男子は護堂をまっすぐに見つめてきた！

「さっきお待たせしている間にこの館やかたの霊相を観じてみたら、くすぶる火薬のような『気』がわだかまっている。エリカくんではなく、その日本の少年が秘めた〝何か〟が、暴れだす機会を待ってうずうずしているんだ！」

「でもダヴィド・ビアンキ。仮にそれが真実だとしても、何か問題ありまして？」

　宣告するエリカは、ふてぶてしいほどの優ゆう雅がさだった。

「草くさ薙なぎ護堂がカンピオーネだとしたら——あなたがまずなさるべきは、新たな『王』に頭こうべを垂たれることでしょう。その即位に祝しゆく辞じを述べ、畏い怖ふと敬意を捧ささげるために」

「ああ。それはたしかにそうなんだけどね」

　歳とし下したの美少女にさとされて、ビアンキは苦笑した。

「ぼくは前々から考えていたのさ。たしかにカンピオーネは神殺しなのだろう。でも、全ての彼らが『王』に値あたいすると思うかい？　ぼくたちの王……サルバトーレ・ドニがいい例じゃないか。とんでもない大バカで、本物のど阿あ呆ほうで！」

　サルバトーレ某なにがし。六人目の魔王でイタリア人だったか。しかし、なんて暴言だ。王への畏敬をよく口にするエリカが怒るのではないか——と、護堂は考えたのだが。

「そこはまあ……ああいう御お方かただと、割り切るしかないんじゃないかしら」

　意外にも、無難に受け流すエリカだった。

「それに剣しか、本当に剣しか取とり柄えがない御ご仁じんだろう？　いくら術が通じないといっても、ぼくらがその気になれば——どうとでもできると思わないか？」

「まさか、カンピオーネを打ち倒せるとでも？」

「そうさ。彼らが神を殺めたように、ぼくらにだって魔王を倒せ

る。すくなくとも、つけいる隙すきの多い未熟なカンピオーネが相手ならね！」

　ビアンキは自信たっぷりに言い切って、護堂を改めて眺めた。

「ぼくが観相するのは土地や霊気だけじゃない。人の相を観みるのも得意なんだ。……その少年、魔道の血脈に生まれたわけでもなければ、武ぶの心得もない。戦場に出た経験もないね。これじゃ、神から簒奪した権能が宝の持ち腐れだ」

　護堂はギョッとした。この男、顔を見るだけでそこまで読めるのか！

　さすが魔法使い、地味にすごい技の持ち主だ。

「全てのカンピオーネが絶対の覇は者しゃではないという仮説をたしかめるのに、格好の相手じゃないか。ふふふ、是ぜ非ひおつきあいいただきたいね！」

　ビアンキの目つきがすこしだけ鋭くなる。

　直後、護堂はうなじの毛が逆立つような感覚を味わった。もしかして〝殺気〟というヤツだろうか。あの男から、たしかに物騒な意思を向けられている。それが理解できる。

　二枚目ぶった魔術師の行動よりも、己の変化に護堂はとまどった。

「ダヴィド・ビアンキ……わたし、あなたのことをぎりぎり一流の使い手だと思ったのだけど、見立てちがいをしてしまったわ。あなたはせいぜい一流半。たぶん、そこより上には一生いけない人ね」

　あきれた口調で毒を吐はいたのは、もちろんエリカだった。

「その程度の浅知恵、今まで幾千人の魔術師が考えたと思うの？　サルデーニャの片隅で達人ぶっているだけの半はん端ぱ者ものらしい、浅はかすぎる思いつきだわ」

　皮肉のアクセントを加えた声こわ音ねは、むしろエリカらしい華やかさだった。

　護堂に『バカ』とか言うときとちがって、一いち抹まつのかわい

らしさも加減もない。相手を嘲ちよう弄ろうするためだけの言葉だった。

「わたしたち《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》のような名門では、そういう心得ちがいをさせないよう、カンピオーネがどれほど強大——いえ、デタラメで理屈の通用しない生き物か、歴代の『王』の逸いつ話わを教材にして徹底的に教えこむものだけど」

　エリカはくすりと微笑を唇くちびるに形作る。

「どうやら、あなたにはそういう機会がなかったようね。わたし、サルバトーレ卿きようをバカだと言う人には共感を禁じえないのだけど、『倒せるかも』なんて意見は心の底から侮ぶ蔑べつさせてもらうわ。そういう寝言は、墓場で永眠してから言うべきよ！」

　なんとも彼女らしい、凝こった言いまわしでの嘲あざけりだった。

「ふん。『王』に尻しつ尾ぽを振るばかりの名門らしい言いぐさだね。でも、忘れてもらっちゃ困るな。ここはぼくの館、君にとっては敵地も同然だ。——死を想おもえ！」

　ビアンキが叫んだ直後、エリカの足もとで床がぐにゃりと変形し、先端のとがった太い錐きりのような形になり、真上にのびていった。矢のように速い。

　だが下からの奇襲を、エリカは軽やかなバックステップでやりすごした。

「汝なんじは不死なる神でなく、死すべき人の子であると自覚せよ！」

　またビアンキが叫ぶ。魔術が発動する気配に護堂は気づいた。

　たぶん、今までていちばん強い術だ。屋敷全体が『ゴゴゴ！』と鳴めい動どうをはじめた。

　エリカの周囲に『闇やみ』が立ちこめていく。

　闇色の靄もやが突とつ如じよとして発生し、エリカのまわりに立ちこめ、黒々とした雲が輝く月を隠すように金髪の少女を包みこもうとする！

　護堂はわけもなく確信した。あれはとても危険な魔術だ。

　あの靄に接触した生物はすみやかに死ぬ。生命力を吸われるのか、不治の病やまいに冒おかされるのか、心臓が急停止するのかは知らない。だが、本能が告げていた。あれは生あるものの命を奪う、非常に悪質な魔術なのだ。

　このとき、護堂のなかで何かのスイッチがオンになった。

　よくもエリカに――俺の仲間にあんなものを。怒りが心を昂たかぶらせ、激しく闘志をわきたたせる。闘志は体に火をつけ、戦うための力を全身に行き渡らせる。

　そして、悪意ある攻撃にさらされたエリカは、

「ローマの秩ちつ序じよを維い持じするため、元げん老ろう院いんは全軍指揮権インペリウムの剥はく奪だつを勧告する。獅し子しの鋼はがねよ、その礎いしずえとなれ！」

　あざやかに呪じゆ文もんを唱となえていた。

　それに応こたえて、獅子の魔剣クオレ・ディ・レオーネが忽こつ然ぜんとエリカの手に出現。同時に変形をはじめ、銀に輝く一〇本の鎖くさりとなる。

　鎖は先端と最後尾が結合し、『鎖の輪』になっていた。

　この一〇本の輪がエリカを取り囲み、闇色の靄を防ぐ防御壁となった。

「元老院最終勧告セナトウス・コンスルトウム・ウルテイムム、発令！」

　さらにエリカが呪文を唱え、魔術を完成させた。

　やはり漠ばく然ぜんと護堂は理解した。これは防御の術なのだ。ビアンキあたりが全力を振りしぼっても、おそらく破ることはできない――。

「どう？　魔剣クオレ・ディ・レオーネと元老院最終勧告で築いた防御壁、あなたに破る手立てはあるかしら？」

「ない——が、これで君も手出しはできなくなった」

　挑発的なエリカに、ビアンキは唇を笑いの形にゆがめた。

「元老院最終勧告の術で築く守護結界は、籠ろう城じようと同じだ。術者はその場から一歩も動けなくなる。いいのかい、そうやって我が身を守るかぎり、君は新たなカンピオーネである少年を一切手助けできなくなる」

　護堂はたじろいだ。そうなるとビアンキが次にやりそうなことは、やはり。

「ぼくは遠慮なく、その少年を狙わせてもらう。かまわないね？」

「ええ。どうぞご随ずい意いに」

　しかも、エリカまで『当然』という顔つきで言う！

「カンピオーネが王者であり、覇は者しやである理由——人の世の理ことわりをデタラメに崩壊させる埒らち外がいさ、存分に教えてもらうといいわ。生き残ることができたら、いい教訓になると思うわよ」

　護堂は息を呑のんだ。やはり、こうなるのか。

「そういうわけだから護堂、あとはお願いね。その勘ちがいした人に、あなたたちの恐ろしさを教えてやって頂戴。大丈夫、そんなに面倒なことにはならないと思うわ！」

　と、エリカは華やかに笑いかけてきた。

　それは美しく魅惑的な、『悪魔の笑顔』としか言いようのない表情だった。

5

「ちょっと待て、エリカ。俺にこの人をぶっとばせと？」

「ええ。あなたには軍神ウルスラグナから簒さん奪だつした勝利の

権けん能のうが（どんなものかは知らないけど）あるはずだもの。（痛い思いをするかもしれないけど）その程度の魔術師相手なら、ぶっつけ本番でも軽く蹴け散ちらせると思うわ」

「肝心なことをさらっと言って、流そうとするな！」

　ところどころ小声になるエリカへ、思わずツッコミする護ご堂どうだった。

　横でビアンキも気分を害している。

「その程度とは言ってくれるね。ぼくを地ち相そう術じゆつだけの男だとは思わないで欲しいな。こう見えて、実戦の場数もそれなりに踏んでいてね」

「要するに『自分は小物のなかではマシな方』という主張よ。無視していいわ」

　護堂は確信した。エリカのヤツ、明らかに意図して毒を吐はいている！

　焚たきつけられたビアンキは、物騒な目で護堂をにらんだ。

「……七人目の魔王殿。あなたに何の恨うらみもないが、ああまで言われては男として引き下がるわけにもいかない。ぼくの腕うで試だめしにおつきあい願いましょう」

　この程度でムキになる方が、男として度量に問題ありでは。

　出かかった言葉を護堂は呑のみこんだ。エリカはどうして、ビアンキと自分を争わせようとするんだ？　意味がわからない。

「ちょっと落ち着きましょう。神様を殺したとか言われても、俺自身は何のことか全然わからないんですよ。でも、俺はこう見えて平和主義者なんです。あなたと荒っぽいことをする気は本当にありません」

　真しん摯しな声で、誠意をこめて訴える。

　草くさ薙なぎ護堂は平和主義者。争いごとを好まない文明人なのだ。エリカはすごい女だし、あれで意外にいいヤツだが、すぐ刃物を振りまわすのはどうかと思う。

　同じ人間同士。まず対話を重ねて、わかり合おうとすべきなのだ——。

「残念ながら、あなたの主義主張など関係ないのです。この戦いは、当方の一身上の都合によるもの。観念しておつきあいいただこう。……森よ！」

　ビアンキが最後につぶやいたのは、言こと霊だまだった。

　力が——呪じゆ力りよくが生まれ、ざわめき、動きだし、『術』となる。呪力や魔術の気配を察知することに、いつのまにか護堂は慣れてしまっていた。

　この魔術が生み出した神秘は何だ——？

　気づいた護堂は絶句した。ビアンキの背後にある壁が〝変化〟している。ここは豪ごう邸ていの一室なのに、〝そこ〟だけべつの場所になっていた。

　豪邸の壁が消え、その向こうになんと『密林』が広がっていた。

　木々が生い茂り、緑であふれかえっている。そこに茂る植物の相は地中海のそれではなく、明らかに熱帯雨林の草木であり、花だった。

「空間をねじ曲げて、どこかのジャングルにつなげたのよ！」

　すかさずエリカが教えてくれた。さすが魔術、こんなデタラメもありなのか。

「虎とらよ！　そもいかなる不死の手または目が、汝なんじの恐るべき均整を作りしや！」

　さらにビアンキは言霊をつむぐ。新たな魔術が完成した。

　たぶん『召しよう喚かん』の術だったのだろう。密林の奥から、爛らん々らんとエメラルド色に輝く小さな球体がふたつ、近づいてくる。それは獣けものの眼球だった。その体たい躯くは黄色と黒の毛皮におおわれ、強きよう靭じんで、大きく、野生そのもの——『虎』だ。

　かなり大きい。体重三〇〇キロはありそうだ。しかも、一匹だけ

ではない。

　二匹目が密林の奥から歩み出てくる……。

「カンピオーネに魔術をかけても、全てはじかれる。これは有名な話だ」

　ぼそりとビアンキが言う。護堂はそれで理解した。

　納な屋やで術をかけられたとき、だから自分には効かなかったのだ。

「でも、抜け道はあるものさ。たとえば骨こつ相そうや顔……うわべを見るだけなら問題ないから、さっきのように観相することはできる。カンピオーネが身にまとう強大な『気』を手がかりにして、探たん索さくの占術で居場所を探ることもできる……」

　ビアンキはのそのそ室内にやってきた大虎たちを、満足そうに眺めた。

「魔術で呼び出した物品で傷つけることもできるから、こうして人造の魔獣をけしかけるのも問題ない。——『王』よ、こやつらは人肉と血の味を覚えた人ひと喰くいの虎ども。平和の尊とうとさを訴えても、到底聞き入れぬ輩やからですよ」

　人喰い!?　護堂は体が硬直するのを感じた。

　ビアンキがしたがえる二匹の虎は、グルルルとうなり、爛々と輝く瞳ひとみで護堂を見み据すえ、牙きばをむき出しにし、涎よだれを垂たらしている。

　さすが魔術で呼んだ獣。攻撃の指示が出るのを待っているようだ。

　逃げ場はないのか!?　護堂が部屋の出入り口に目をやった途端、鋼鉄製のドアがひとりでにバタンと閉まった。カチリと鍵かぎのかかる音までする。

　これも魔術のようだ。護堂は絶望的な気分になった。

　二匹の人喰い虎と同じ部屋に閉じこめられて、まさに絶体絶命！　どうすればいい？　どうすれば、あいつらに勝てる!?

　――心が勝利を求め、闘志で猛たける。そして護堂はつぶやいた。

「我われは最強にして、全すべての勝利を掴つかむもの……」

　ぼそり。口のなかで、ひとりごとのように。

「全ての邪じや悪あくなる者よ、我を畏おそれよ。力ある者も不義なる者も、我を討うつあたわず……」

　またぼそり。これは聖句だ。たしかウルスラグナも唱えていた。

　自然と口をついて出た言葉だった。護堂のなかに眠る勝利の神――あの不思議な少年から奪い取り、引き継いだ『力』が教える言霊だった。

　護堂は虎の存在を忘れ、目をつぶる。まぶたの裏に一〇の姿が見えた。

　まず強風。次に雄牛。そして白馬。駱らく駝だ。猪いのしし。輝く一五歳の少年。高く速く飛ぶ鳳おおとり。山や羊ぎ。最後に、黄金の剣を持つ戦士――！

『我は障しよう碍がいを打ち破る者ウルスラグナ！　最強にして最多の勝利を得し守ヤ護ザ者タなり！　我は闘争を求む。我に敗北をあたえうる大敵を求む！』

　涼すずやかで鮮烈な、あの少年の声。一日ぶりに聞いた。

　これがそうか。これがあいつの権能か。これで戦うことができるのか！

「護堂、来たわよ！」

　エリカの警告に、目を閉ざしていた護堂はハッとした。

　横へ跳んで襲撃をかわす。目を開けたのは、そのあとだった。見てから避けたのでは間に合わないと、本能が教えてくれたのだ。

　人喰い虎の一頭が、今まで護堂のいた空間に躍おどりかかっていた。

凶きよう暴ぼうな牙が虚こ空くうを噛かむ。上う手まくかわせた。しかし、虎はまだいる。残りの一頭が跳躍で体勢を崩していた護堂に、満を持して飛びかかってきた。

体重三〇〇キロ超の大虎。その巨体はしなやかで敏びん捷しようだ。

最も俊しゆん足そくの人類を凌りよう駕がするスピードで突進してくる。だが奇妙なことに、護堂にはこの突進が見切れてしまった。——見える。そして、かわせるぞと。

護堂はもともと、動体視力がずば抜けていい。

そのおかげで野球選手時代、たいていの剛速球は打ち崩してきた。最高に調子のいいときは、ボールの軌き跡せきがよく見えたものだ。

——今の見切りは、ああいうときの感覚に似ていた。

所しよ詮せんは中学生の投げる速球と、人喰い虎の突進ではレベルが大いにちがうはずなのだが。

だが、詮せん索さくしている暇ひまはない。護堂は身を伏せた。

ごろごろと丸太のように床を転がり、虎の来襲をやりすごす。見み栄ばえはよくないが、気にならない。回避できれば、それでいいのだ。

「なんだと？」

いきなり動きの鋭くなった護堂を見て、ビアンキが驚いていた。

こいつ、エリカがけなすほど弱くはないな。護堂は理由もなく思った。金髪の美少女騎士が一〇だとすれば、六くらいの力はありそうだ。

そして、ちらりと彼女を見る。

エリカは例の顔つきだった。新発見した珍獣の生態を観察する、興味深げな顔。

——あいつはこれを見たかったのか。

〝相棒〟の意図を理解して、護堂は舌打ちした。悪魔のようなヤツめ。草薙護堂の得た力と体質を調べるため、エリカはわざとビアンキをけしかけたのだ。

　護堂は壁に手をかけて、立ちあがった。

　まだ危険は去ってない。ごろごろ転がった態勢のままでは、虎どもに襲ってくださいと言うようなものだ。そのとき気づいた。

　あれ？　今の俺なら、もしかして……。ふたたび確信がこみあげてくる。

　そして、人造生物だという虎どもをにらむ。

　これだけ逞たくましい野生の虎は、自然界にもそうそういまい。だが『勝利』の権能を簒さん奪だつした男には、この強さに対抗するための力がある——。

　護堂は両手を壁に当てた。思いっ切り押す。歯を食いしばり、叫ぶ。

「ぐぬ——っ。だあああああああッ！」

　それはデタラメとしか言えない光景だった。

　護堂が力いっぱい押したことで、『壁』が崩れたのだ。

　この豪邸の壁——ビアンキが密林とつなげた方とは反対側の、石の壁が。ガラガラと草薙護堂の腕力に突き崩されて。

　いや、これは腕や筋肉が生む剛ごう力りきではない。

　護堂が踏みしめる足もとから、すさまじく巨大な力が送られてくる。これは大地の精が生み出す、聖なる剛力だった。

　この力こそ、ウルスラグナ第二の化身『雄牛』。護堂はなんとなく理解した。

「くっ。いくら力があっても、戦う技がなくては意味がないッ。やれ！」

　ビアンキが虎たちをけしかける。

護堂はとっさに壁の外——屋敷の庭に出た。特に理由はない。ただの勢いである。せっかく壁を壊したのだからと。

そして、すぐにビアンキの指摘にも一理あることを知らされた。

護堂の生存本能と危機回避能力は、『カンピオーネ』になったことで爆発的に上昇したらしい。だが、それらだけで人喰い虎× 2 から逃げつづけるのは無理な相談だった。

すぐにつかまり、虎の大きな顎あごで左肩に噛みつかれてしまった。

「痛い！　あ痛たたたたたたたたた！」

あまりの痛さに、護堂は絶叫した。

昨日、ウルスラグナにたたきのめされたときも痛かったが、ダメージが大きすぎて逆に感覚が麻ま痺ひした面もある。これが人生最大の苦痛であるように思えた。

しかし、護堂は気づいてしまった。

虎の牙に肩を抉えぐられ、肉を喰い破られた。だが、骨が——。

骨が人喰い虎の鋭すぎる牙をがっちりと食い止めている。本来なら、骨ごと肩と腕を喰いちぎられてもおかしくないのに。

「俺の体、もしかして、めちゃくちゃ丈夫になっている……？」

あげくに、もうひとつの事実にも気づいた。

かなり痛い。痛いは痛い。だが、根性を振りしぼれば耐えられるといおうか。

しかも、この絶好のチャンスはどうだ？　護堂は噛まれてない方の右腕で、自分に喰いついた虎の喉のどをつかんだ。

バカげた剛力があっても、野生の猛獣と格闘をして人間に勝ち目はない。

俊しゅん敏びんさとスピードがケタちがいなのだ。ボクシング世界チャンピオンでさえ、虎との殴り合いで勝ち目はあるまい。だが

喰いつかれている今なら、手をのばすだけでいい。

　グルルルッ!?　虎が困ったようにうめく。

　そうだろう、『雄牛』の剛力で喉をつかまれたのだ。そのままつぶす。

　護堂は虎の喉を頸けい骨こつごと握りつぶした。その瞬間、人喰い虎の巨大な体は黄色と黒の砂になり、さらさらと崩れていく。これが人造生物の死に様というものか……。

　護堂は残った一頭に目をやった。

　また自分を囮おとりにしてもいいが、もうひとつ使える化身があることに気づいた。体の痛みが護堂に新しい力を加えていたのだ。

　重傷を負った今だけ行使できる化身。凶暴で強壮、猛たけ々だけしく獰どう猛もうな『駱駝』の化身！

　直後、人喰い虎が飛びかかってきた。

　同じタイミングで護堂も跳躍。『雄牛』を捨て『駱駝』になったことで、さっきの怪力は失われてしまった。だが問題ない！

　右足一いつ閃せん。膝ひざ蹴げりを虎の鼻はな面づらに、カウンターでねじこんだ。

　ギャル――ンッ！

　頭ず蓋がい骨こつごと顔面を砕かれた、虎の短い啼なき声。すぐ砂になって崩れ去った。この格闘センス、蹴りの破壊力、跳躍力。全て『駱駝』の化身がくれたものだ。

「ええと、ご覧のとおりです。そろそろやめにした方がいいんじゃ――」

　温厚そうに聞こえるよう、護堂も努力したのだが。

　ビアンキは顔を蒼そう白はくにして「闇よ！」と叫んだ。エリカの周囲を取りまいていた闇色の靄もやが動きだし、護堂にまといつく。

　靄はひんやりしていた。戦いで火ほ照てった体には、逆に心地よい。

「……すいません。やっぱり効かないみたいです」

　護堂はまたおだやかに言った。この声を出すのに、実はさっきよりも多くの努力を必要としたのだが。ビアンキは「くそっ！」と毒づいて、何かを投げつけてきた。

　妙に硫い黄おうくさい、石灰石のようなものだった。

　何だろうといぶかしんだ瞬間、それは護堂の目の前で爆裂した。

「ぐはっ!?」

　たぶん、常人には手しゆ榴りゆう弾だんか爆薬のような悲劇を生む品だったのだろう。だが、魔術が生んだ熱と爆裂と爆風は、護堂に当たる寸前で雲うん散さん霧む消しようしてしまった。

「く……バケモノめ！」

　ついにビアンキは護堂に背を向けた。

　さっきの石灰石をまた取り出し、屋敷の庭を取りまく壁に投げつける。爆発で壁の一角はガラガラと崩れ、そこから彼は外へ駆け出していった。

「まあ。あれだけ大口をたたいておいて、竜りゆう頭とう蛇だ尾びもいいところね」

　鎖の結界を解いて、エリカが近づいてくる。

　術者が離れたことで闇色の靄は消え失せており、脅きよう威いは去ったと判断したのだろう。

「どうするの、護堂？　平和主義者らしく、黙って見逃す？」

「なんでそんなことを訊きくんだよ？」

「そういう寛かん大だいさを示しそうな表情に見えないから。あなた、結構怒ってない？」

　ちょっとおかしそうなエリカに図星を指されて、護堂はうなずい

た。

「あれだけやられたら、さすがに反撃してやりたくなるのは当たり前だろ」

「平和主義者なのに？」

「平和主義と無抵抗主義はちがう。俺はマハトマ・ガンジーじゃないし、右の頬ほおをぶたれて左も差し出すほど人間もできちゃいない」

　つぶやきながら、護堂も崩れた壁から屋敷の外に出た。

　ビアンキ邸はカリアリ港とアンジェリ湾を見おろす丘の上に建っている。遠くに視線をやれば、エメラルドブルーの地中海が輝いている。屋敷の前の坂道を下れば、そこは数日前に護堂も訪れたカリアリ港だった。

　この坂道を、ビアンキは必死に駆けおりていた。

　なかなか足が速い。あのままなら、直じきにカリアリ港へ駆けこむだろう。だが、ここで護堂はまたしても気づいてしまった。

　己おのれのなかで、内なる声がささやいている。

　——やっちまえよ。オレの力があれば、あんなのいちころだぜ……。

　心にひそむ黒い獣がアピールしている。しかし、護堂は頭を振った。やめておこう。これはたぶん、悪魔のささやき的な何かにちがいない。

　なのだが、急にエリカが心臓のあたりを押さえてうずくまった。

「どうした、エリカ!?」

「む、胸が苦しいの……。ビアンキの術を完全に防げなかったんだわ。あの闇のせいで、わたしの心臓が止まりそうになっているみたい……」

　苦く悶もんにゆがむ美少女の横顔を見た瞬間、護堂のなかで何かがはじけた。キッとビアンキの後ろ姿をにらむ。

　オオオオオオオンンンンンンッ。心のなかの獣も叫ぶ。やっていいのか!?

「やれ！　ぶちのめしてやれ！」

　護堂は思わず叫んでいた。

　その瞬間、坂道をひた走るビアンキのすぐ後方で、地面が黒く濁にごった。そこからなんと、一匹の巨獣が飛び出してきた！

　オオオオオオォォォォォォンンンンンンンッ!!

　それは巨大な『猪いのしし』だった。体長二〇メートルはあるだろうか。

　毛皮は黒。おそろしく魁かい偉いな、獰猛そうな容よう貌ぼうで、猛々しいことこのうえない。口元から生える二本の牙は長く、鋭く、まるで長大な豪刀だ。

　ウルスラグナ第五の化身『猪』を、はじめて呼んだ瞬間だった。

　護堂は思い出した。サルデーニャに来た初日、港で暴れていた怪獣！

　そのときにはもう、『猪』は駆け出していた。猛烈な速さと勢いと重量で、カリアリ港めがけて。途中で踏みつぶされそうになったビアンキは、必死に道路の端っこへ跳びのき、うつぶせになってブルブル震えながら、やりすごしていた。

　その後、いろいろなことが起きた。

　まず、黒い怪獣の出現を見てエリカが平然と立ちあがり、

「ふうん。あなたがウルスラグナから得た権能は、すごく多彩な現れ方をするようね」

　と言った。護堂はみごとにだまされたのだ。

　そして、さっき聞こえた『あんなのいちころだぜ』の〝あんなの〟はビアンキではなく、その先のカリアリ港だったことが判明した。

　数日前、ウルスラグナの分身として襲った港に、『猪』が嬉き々きとして（と護堂の目には見えた）乗りこんでいったからだ。

　怪獣の黒い巨体は活いき活いきと躍動した。

　手近な建物や港湾施設に突進し、体当たりし、豪快にぶちこわす。その破壊活動に護堂は頭を抱え、必死で「バカ、やめろ！」と訴え続けた。

　その指示に『猪』は不満そうな雄お叫たけびをあげて応こたえたものだ。

　それでもしばらく暴れ続けていたのだが、約一〇分後、ついに動きを止め、出てきたときと同じ唐突さで地面のなかに引っこんでいった。幸いにも『猪』が壊したのは無人の倉庫や施設ばかりで、人的被害は奇跡的にゼロだった。

　しかし、護堂は己の軽けい率そつさを深く後悔し、悔くやむのであった。

　これからの人生、似たような後悔をこりずに何度も繰りかえしていくとも知らずに……。

第２章　嵐の島で

１

　今朝、護ご堂どうがカリアリ駅についたのは午前一〇時頃である。

　それからまだ五時間しか経たっていない。だが、〝神殺し〟草くさ薙なぎ護堂を取りまく環境は、おそろしい早さで急変していた。

「みなさま、本日はお忙しいなかお集まりいただき、お礼申し上げます。今回の召集でみなさまにお伝えすべきことは只ただひとつ。すなわち七人目のカンピオーネが誕生し、今ここにすわっておられるという一事です」

　カリアリで最も格式高いというレストランの個室で、『布告』は行われていた。

　語るのはもっぱらエリカ・ブランデッリである。彼女が手振りで示した途端、いっせいに注目が集まり、護堂は居心地悪くなった。

　集まった人々は三人。いずれも中年から老年の成人男性ばかりだった。

　皆、カリアリ近郊の魔術結社で総そう帥すいの地位にあるらしい。

「ここ半月ほどの間、サルデーニャには二ふた柱はしらの神――古代ペルシアの軍神ウルスラグナとフェニキアの天空神メルカルトが降こう臨りんしておりました。しかし、ウルスラグナはこの草薙護堂の手で討うたれた旨むねを、エリカ・ブランデッリが証人として

ご報告いたします」

　そこに至るまでの過程を省略して、エリカは語った。

　だが、つっこむ声はない。三人の総帥たちはカリアリ港に『黒い怪獣』が顕あらわれたことを知っており、そして、呼び出したのが若い日本人らしいと承知している。だから黙ってエリカの布告を聞き、草薙護堂に懐かい疑ぎと畏い怖ふが入りまじった視線を向けるのだ。

　注目されながら、護堂は室内を見まわした。

　高級レストランの、しかも個室である。天てん井じようにシャンデリアはないが、下がっていても違和感はないだろう。護堂が腰かける木製の椅い子すにも凝こった意い匠しようが施ほどこされ、素しろ人うとにもわかるほどの高級感だった。

（まさか、こんなところに入る日が来るとはなあ……）

　思いがけない人生の成りゆきに、ため息が出る。

　その間、エリカは『王』の代理人として、てきぱきと指示を出していた。

「みなさまに草薙護堂が望むことは、多くはございません。カリアリ港で起きたことの事後処理と情報隠いん蔽ぺい。狼ろう藉ぜき者ものダヴィド・ビアンキへの処しよ罰ばつ。そして、メルカルトを追跡する『王』への全面的な支援。以上です」

　カリアリ港で騒ぎを引き起こしたあと、エリカは提案した。

『ここまでしでかした以上、後始末のこともあるし、もう王の名乗りをあげる方が手っ取り早いわ。七人目の魔王が誕生したと、全世界の魔術師に向けて大々的に布告しましょう。そうすれば、今後も動きやすくなるし』

　すこし考えてから護堂はその案に修正を加え、許可した。すると、エリカはあちこちに電話をかけて、この席の準備を一時間ですませてしまったのである。

「全すべて承知いたしました。委い細さい、王のお望みどおりに」

「新たなカンピオーネのご誕生、まさに驚きよう嘆たんすべき快かい事じ。即位まもない身で古き神王たるメルカルトに挑いどまれるというご気き概がいもまことに末頼もしい」

緊急召集に応じた結社の者たちは、口々に言った。

目の前の日本人が本当にカンピオーネなのか、内心では半信半疑かもしれない。だが、それを表には出さず、粛しゅく々しゅくとした顔つきだった。

「そうそう、もうひとつお願いがございました。みなさま、どうか彼の誕生をまだサルデーニャとシチリア以外の魔術関係者には伝えぬよう、ご留りゆう意いくださいませ」

エリカ案の『全世界の魔術師に向けて大々的に』という部分。

それを修正した結果だった。すると、総帥たちのひとりが首をかしげた。

「かまいませぬが……それはまた、どうして？」

「変に目立ちたくないからです。俺はこの先もふつうに暮らすつもりですし」

エリカが何か言う前に、護堂は自分自身の口で答えた。

総帥たちはちょっと不思議そうな顔をした。意表を突く言葉だったようだ。

しかし、彼らはすぐにまじめな表情にもどる。『王』への不ふ敬けいに見えたらまずいと用心したのだろう。護堂の居心地悪さは、さらに深刻になった。

年長者にこんな態度を取らせてしまい、申し訳なくて仕方ない。

「シチリアへ行かれるのでしたら、やはり飛行機で？　手配いたしましょう」

総帥のひとりに申し出られたので、護堂はあわてて遠慮した。

「あ、いえ。わざわざ用意してくださるのでしたら、何でもいいです。飛行機でも船でも、どちらでもかまいません」

　エリカがちらりと窓の外を見て、目くばせしてきた。

　このレストランは海に近く、窓から地中海を一望できる。すました表情がなんとなく『わたしは船の方が好みだわ』と言いたげに見えた。

　しかし、護堂はある事情に思い至り、エリカの主張（？）を蹴ることにした。

「考えてみたら、船は無理ですよね。港の方は今、大騒ぎでしょうし」

　数時間前、怪獣が出現したばかりなのだ。護堂は申し訳なさで肩身がせまくなった。

　日本の駅なら、電車が終日運休してもおかしくないところだ。しかし。

「もし海路をお望みでしたら、そのように取りはからいますが」

「へ？　いや、さすがに今日は船とか出ないんじゃ」

「そういうこともあるやもしれません。しかし、王のご要望とあらば話はべつ」

「私どもの方から、船舶会社の上に話を通しておきましょう。よろしければ、船を貸し切りという形にもいたしますが」

「え!?」

　サルデーニャ島からシチリア島へは、飛行機なら一時間で移動できる。

　この区間を一晩かけて、ゆったり優ゆう雅がに船旅しようというのが夜行フェリーのコンセプトだそうだ。船上のホテルというべき大型船に揺られながらのナイトクルーズ。夜の地中海を船上から眺めて楽しんだあと、個室で眠りにつく——。

「本当に出航するとは思わなかったぞ……。無茶にも程ほどってものがあるだろう」

　護堂は暗い声でぼそりと言った。

　大型フェリー船内のレストランで、エリカと差し向かいにすわっている。

　船を港で見たときの感想は「でかい！」だった。甲かん板ぱんより上の居住部分だけで六階あり、レストラン、バーラウンジ、映画観賞用のシアタールームまで備える充実ぶり。

　大型船の上に、そのままホテルを持ってきたような造りだった。

「ちょうど週末でよかったわ。カリアリ港からシチリアのパレルモ港への船は、週末限定で運行するものだそうだから」

　食前酒のリンゴ酒を口に運びながら、エリカが言った。

　ちなみに今夜のメニューはタコのカルパッチョ、魚介のスープ仕立て、カラスミのパスタ、カニのグリル焼きなど、海の幸中心のメニューらしい。

「本来出航する予定のない日にフェリーを呼びつけて、わたしたちふたりのために船を出してもらうのも、さすがに良心がとがめるものね」

「今の段階でもう良心はとがめているよ！」

「べつにいいんじゃないかしら。今日の便を出すかどうかで船舶会社も迷っているときに連絡が行って、出航が決まったそうだし」

　あでやかに微笑ほほえみながら、エリカが言う。

　レストランでは、護堂たち以外の船客も何組かいた。夜の地中海を目の前にしての晩ばん餐さんは、他では味わえない楽しみだろう。

　貸し切りにならなくて本当によかった。つくづく思う護堂だった。

「魔王カンピオーネが要望を口にすれば、欧州の有力魔術結社なら、どこもこれくらいやってくれるわよ。数百年とか千年の歳さい月げつをかけて培つちかった財力や政治力、地元有力者への影響力があるから、そんなにむずかしいことでもないし。遠慮は無用だと

思うわ」

「無茶苦茶もいいところだ……」

「そうね。でも、そうさせるのはそれだけの力があなたに――カンピオーネにあるからよ。そして、その力でしか倒せない存在もいる」

「神様のことか？」

「ええ。カンピオーネとは、すなわち戦士チヤンピオン。『まつろわぬ神』が顕あらわれたとき、人類の代表として神々と戦う。彼らはそれゆえに『王』としての特権を有し、地上の覇は者しや・魔王として君臨するのよ」

　つまり、俺にもメルカルトと戦えと――。護堂は天ならぬ天てん井じようをあおいだ。

「神様相手にどうすればいいのか、見当もつかないぞ……」

「今日の昼間みたいにぶっつけ本番でいいんじゃない？　護堂の体は、とっくに戦うための準備をすませているようだし」

「準備!?」

「ほら、虎や熊は戦うためにみみっちく体を鍛きたえたりしないでしょう？　あなたたちカンピオーネもきっとそうなんだわ。息を吸うように戦うことが体にしみついている。そうでなくては、昼間のことは説明がつかないもの」

「強くなるために努力する方が健全じゃないか？」

「それは人間同士の間でだけ通用する、近視野的な感覚よ」

　エリカはあっさり言い切った。

「自然界では、人間はもともとたいして強くないわ。なのに、武器や武術を工夫して涙ぐましく戦力増強する――。その方がよほど不健全で不自然よ。『生き物として強いから強い』という在あり方は、すごくシンプルかつナチュラルで、動物的だわ」

　そういうものだろうか。首をかしげる護堂に、エリカは言った。

「お望みなら、もっと理屈立てて護堂の戦力分析をしてみてもいいけど」

「……やってみてくれ」

「まず人間としてありえないレベルの生命力よね。あんな感じで魔獣に噛かまれたら、ふつう肩ごと腕を食いちぎられて死ぬはずだわ。なのに、護堂は平気で戦いつづけた」

「あー……なんか体がやたらと丈夫になってたよな」

　ビアンキ氏と戦ったあと、エリカから謎なぞの丸薬を渡された。

　傷の治りが早くなる魔術の薬だという。護堂がそれを飲んだあと、エリカは人喰い虎に噛まれた肩の傷を消毒し、包帯を巻いてくれた。

　あきれたことに、そのまま何時間か放置していたら、傷はすっかり完治した。

　驚異的どころではない。バカバカしいほどの回復力である。

「護堂の骨は今、まちがいなく鉄より硬いわよ。もしかしたら、地上のどんな合金よりも頑丈かも。筋肉繊せん維いは硬いというより、ちぎれにくい感じね。で、アドレナリンの作用がよほど強力になったのか、出血もすぐ止まるし、痛みも感じにくいみたい」

　暇ひまができたら検査してみましょうと、エリカに言われてしまった。

「そういえば俺、何カ月か前に肩を怪け我がしたんだけど、それも直ったみたいなんだよな」

　昼の戦いのあと、ふと思いついて海に石を投げてみた。

　護堂は怪我によって自慢の強肩を失った——はずだった。しかし、なんとなく投げた石の飛距離と速さは、怪我する前と同等以上であった。

「数カ月前の怪我なら、カンピオーネとして復活するときに治ち癒ゆしたんじゃない？　最近の負傷ということで、いっしょくたに治ったのよ、きっと」

「俺の体、いいかげんすぎるぞ……」

「それに気づいてる？　あなた今、イタリア語で話しているわよ」

「え？　あれ、そういえば、いつのまに。何でだ⁉」

　エリカの指摘で愕がく然ぜんとした。護堂はいつのまにか母国語のようにイタリア語を使用していたのである。思いかえせば、昼間の総帥たちもみんなイタリア語で話していた。

「わたしたち魔術師は幼少の頃から特殊な言語感覚を磨いて、さまざまな言語を短期間で習得できるの。ほら、外国の言葉を難なく覚える人っているじゃない？」

「そういえば、エリカたちはやたら日本語上う手まいよな……」

「魔術師の教育には、そういう人種になるよう鍛きたえるカリキュラムがあるのよ。そして、カンピオーネも同じ素養を持っている。地味だけど、とても役に立つ能力だわ」

「…………」

「で、最大の武器はやっぱり『権けん能のう』よね。さっき聞いた話から考えたのだけど、護堂はもしかしたらウルスラグナから十の化身を簒さん奪だつしたのかもしれないわ」

　この船が出航したのは夜の一九時半だった。時間があったので、今日の戦いで感じたもろもろをエリカに問われるまま語っていたのである。

「ひとりの神様が一〇も力をくれるのかよ？」

「十分にありえることよ。たとえば北米の魔王ジョン・プルートー・スミスさまは魔神テスカトリポカから奪った『変身』の権能で、五つの姿に変わるもの」

「そんなにか！」

「英国の黒王子アレクさまは『電光石火ブラックライトニング』の権能を持つわ。これであの方は稲いな妻ずまと同じスピードで動くだけでなく、稲妻そのものに化身したり、電撃を武器として放ったりできるし」

「要するに、だいぶ適当なんだな……」

　カンピオーネの権能とやらは、よくいえば柔軟フレキシブル。

　身もフタもなくいえば、かなり大おお雑ざつ把ぱなのだと了解する護堂だった。

「護堂の権能がもし一〇パターンあるとすれば、それぞれに厳しい使用条件なんかが設けられているのかもしれないわね」

「思い当たるふしが、なきにしもあらずだな。……ところでエリカ」

　言おう言おうと思っていたことを、ついに護堂は口にした。

「おまえ、『猪』を呼ぶ直前、俺をだましただろ！　何が『胸が苦しいの』だ！」

「あら。だましたとは心外な言い方ね。あなたが力を使うことに消極的だったから、最後の一押しをしてあげただけよ」

「そんな一押しするなッ。仲間をだますなんて最低だぞ。俺があのとき、どれだけ怒って、心配したと思うんだ⁉」

「わたしがそうしてくれと頼んだわけじゃないわ！」

「頼まれなくても心配するに決まってるだろ！」

「エリカ・ブランデッリがあの程度の術で窮きゅう地ちに陥おちいるはずないでしょうっ。そんなこともわからないくせに、人を仲間扱いしないで欲しいわね！」

　不毛な舌ぜつ戦せんを終わらせたのは、唐突に轟とどろいた雷らい鳴めいだった。

2

　今日の昼間は、いかにも地ち中ちゅう海かいらしい快晴だった。

まだ三月なのに初夏を思わせる日差しで、夜になっても空には雲ひとつなかった。月明かりと星々の光で照らされた夜の海には、えもいわれぬ趣おもむきがあった。

しかし、今の雷鳴――。

ゴロゴロと天より響く轟ごう音おんで、護ご堂どうは奇妙な感覚を味わった。

心がざわめく。畏おそるべき大敵が近くに来たと、理屈抜きでわかる。

体に力が満ちる。全身が熱くなる。手足や指先、毛細血管のひとつひとつにまで力と熱さは宿り、戦闘態勢が整ったことを教えてくれた。

「なんなんだ、この感じ……」

つぶやいた護堂は、例の雷らい鳴めいを聞くうちに悟さとった。

これだ。これこそが敵なのだ。昼間の魔術師など、神殺しにとっては何でもない。敵などと呼ぶにも値あたいしない。たとえ相手が天才を誇るエリカでも、彼女を超える究きゅう極きょくの達人であっても同じだ。人間など神殺しの敵ではない。

神殺しの敵は神――。そうに決まっている！

そうと悟った瞬間、護堂はレストランの席を立った。

無言で外へ駆けだし、階段を昇る。フェリーの屋上デッキへと駆けあがる。

すぐあとにエリカも続いた。口論を即中止にするあたりはさすがだった。ふたりそろって屋上デッキへ出ると、無人だった。

天を見あげる。いつのまにか暗雲が満ちていた。

護堂にはなんとなくわかる。あの雲のなかに『神』がいる。すくなくとも、神の一部くらいは収まっている。そうでなくては、ここまで体が猛たけりはすまい。

轟ごう！　稲光がひらめき、雷らい霆ていが暗い天を一瞬だけ青

白く照らしたとき。

『ひさしいな、小僧。数日見ぬうちにすこしは神殺しらしくなったと見える』

　重厚な男の声が天より降ってきた。

「あんたはメルカルト……だよな？」

『無論。偉大なる王の声すら聞き分けられぬとは、未熟よな』

　念のため確認したら、嘲あざけられた。仕方ないじゃないかと、護堂は肩をすくめる。

　こんな形での会話は、はじめてなのだ。すこしは慎重にもなる。

　護堂はちらりとエリカを見た。何か言いたいことがあるかもしれないと思ったのだが、意外にも彼女は『あなたが話すべきよ』とばかりに首を振った。

　相手が神なら、会談は草くさ薙なぎ護堂の領分……。そんな思いなのかもしれない。

『まあよい。貴様がウルスラグナを弑しいした場に立ち合ったのも何かの縁。神殺しの罪に報むくいをあたえる役、わし自みずからがつとめようと思う。貴様もわしが仮の宿とした島をめざしてくるくらいだ。否いなやはあるまい？』

「イヤに決まってるだろ！　あんたとケンカするつもりはないぞ！」

『神殺しらしくもない。そのように遠慮するな。なに、どうせついでよ』

「ついでだって!?」

『この海はかつて、わしに仕つかえる民たみがしろしめす版はん図とであった。しかし今はどうだ。この地の民草は古き王たるメルカルトの名も忘れ、余の聖域を朽くちるにまかせておる。わしは王者たる度量を持つ神だが、民を甘やかすような愚ぐ行こうもせぬ』

　メルカルトの声がささやくたび、天に稲光が走る。これは単なる

勘かんだが、『まつろわぬ神』の本体はここにはいない。彼は声のみを送ってきている。なのに、この怪異。

　神々のすさまじさを思い知りながら、護堂は天に向けて言った。

「そういえば、あんたは前にも島を沈めるとか言ってたな」

『うむ。ひとまず貴様やウルスラグナと逢おうた島。そして、わしが当座の寝所とした島。あとは目についた古き領土のいくつかを海に沈めてくれよう』

　メルカルトの気安いともいえる宣言に、護堂は戦せん慄りつした。

『わしは考えておる。神罰をくだす前に貴様を誅ちゅう殺さつし、景気づけにしてくれようとな。今ここではまだ戦わぬ。島を沈めるために力をたくわえているところなのだ。あと一日か二日で終わるはずよ』

「もしかして、俺にそれだけ言いにきたのか？」

『左様。古き神王の召喚にはまだ間があくゆえ、それまで気を抜かず、剣を鋭く研といで待つがいい。ひきかえに、安らかな旅路を貴様にくれてやる……』

　安らかな旅？　ここで護堂は気づいた。メルカルトが嵐の神だと、何度かエリカたちが言っていた。今の雷雲もその権能で生んだのだろう。ということは——

「あんたがその気になれば、嵐を呼んで、海や空を大荒れにできるわけか！」

　そうなったら船も出航できず、飛行機も飛ばない。

　人間たちは移動手段と逃げ場を失うわけだ。護堂はゾッとした。今この瞬間に嵐を呼ばれたら、船も乗員も全て海の藻も屑くずと化す……。

『くくく！　貴様もすこしは察しがよくなってきたな。よきことだ。その調子で、わしを楽しませるほどの戦士となるがいい。では、報しらせを待て！』

　天に神王メルカルトの哄こう笑しようが響きわたる。

　それから急に雷鳴と稲光は収まり、夜空はふたたび晴れ渡った。

　ふぅ。護堂は深く息を吐いた。メルカルトとの会談は短時間だったが、だいぶ消耗してしまった。古代フェニキアの神王は、声だけでも半端でないプレッシャーだったのだ。

　本当なら、このまま船室で寝てしまいたいところだが。

「これからどうなるかわからないけど、とにかく体力はつけとかないとな。レストランにもどって、今度こそちゃんと夕飯にしようぜ」

「……あなたも結構、今の境きよう遇ぐうに慣れてきたわね」

　感心したようにエリカに言われて、なんとなく憮ぶ然ぜんとする護堂だった。

　べつに、慣れたくて慣れたわけではないのだ。

　護堂とエリカはそれぞれの船室で一夜を明かし、翌朝。

　午前九時頃、ふたりはふたたび屋上デッキに上がった。

　天気は快晴で、朝の地中海をよく見渡せる。マリンブルーの海と白い波が黄金の日差しを浴びて、きらきら輝いていた。何より、前方に陸地と港が見える！

　フェリーの目的地、シチリア島とパレルモの港だった。

　シチリアは地中海最大の島で、サルデーニャと同じく自治州でもある。オリーブやワインの一大産地、新鮮な魚介やジェラートの本場など、売り文句にはことかかない。

　パレルモはその玄関口ともいえる都市だ。

　古来、良港として知られてきたシチリア島北西部の古都だった。かつてはシチリア王国の首都で、現在でもシチリア自治州の州都である。

「なあ。向こうに着いたら、俺たちはどこへ行くんだ？」

　護堂は眠そうな顔のエリカに訊たずねてみた。

　いつも華麗な彼女が朝だけはボーッとしている。そこがちょっと面白い。

「ひとまずパレルモの魔術結社《パノルモス》のお世話になる予定よ。ここはシチリア島でも最大の結社なの。昨日、カリアリの総そう帥すいたちに連絡してもらったわ。それにパレルモは古代フェニキアと縁の深い都市だし」

「もしかしてカリアリといっしょで、昔フェニキア人が造った街なのか？」

「ええ、正解。この都市の支配者は何度も代わったけど、その起源がフェニキアにある史実は変えようがないわ。メルカルトがシチリア島でいちばん注目しそうな地域ですし、このままパレルモを拠点に行動しましょう」

　話すうちに調子が出てきたらしい。エリカの表情に覇は気きが戻ってきた。

「港に着いたら、《パノルモス》の人間が迎えに来てくれるそうよ」

「いたれりつくせりで助かるな」

　このとき、銀髪の太った老人が近づいてきた。

　護堂は『ゴッドファーザー』を思い出した。名作映画である。一九二〇年代アメリカを舞台に、イタリア移民のギャングたちが血で血を洗う抗争に明けくれる。

　老人の雰ふん囲い気きは、あからさまに堅かた気ぎではなかった。

　身につけるのは、いかにも高級そうなスーツ。右手に持つ葉巻もおそらく高級品。すごみと威い厳げんとヤクザくささが渾こん然ぜんーいつ体たいになっている。そういえば、シチリア・マフィアという言葉があったような……。思い出した護堂の前に、彼はやってきた。

「ザンパリーニのおじさま。この船に乗っていらしたのですか？」

「ああ。君とはたしか一度すれちがったきりだと思ったが、よく覚えているものだ。パオロ・ブランデッリの姪めいはうわさにたがわず聡そう明めいだな」

　エリカの知人らしい。だが、ザンパリーニ老人はすぐに彼女から顔をそむけた。

　代わりに護堂へ向けて、洒しゃ脱だつな仕草で頭こうべを垂たれる。

「ワルテル・ザンパリーニ……すでにお聞き及びと思いますが、結社《パノルモス》の総帥でございます。最も若きカンピオーネを我がパレルモでお迎えする栄誉、慎つつしんで拝はい命めいさせていただきましょう」

「え？　でも、船はまだ港に着いてないですよね？」

「なに。種明かしをすれば、単純な話です。カリアリの結社より御おん身みがシチリアへ来られる旨むねを聞いて、私は飛行機でカリアリへ飛んだのですな。あとはこの船に乗るだけでいい」

　カリアリ～パレルモ間は飛行機なら一時間程度。

　十分に可能な旅程である。だが、老人は何のためにそんな真ま似ねを？

「おかげで昨夜、まさにこの場で御身がメルカルトと相あい対たいし、魔王として神と言葉を交わす場に立ち合うことがかないました。このザンパリーニ、身しん命めいを賭として御身の——草薙護堂のために働かせていただきましょう」

　そうか。護堂は理解した。

　ザンパリーニ老人は、草薙護堂を見きわめるつもりで同じ船に乗りこんだのだ。真にカンピオーネか否いなか。神との対決をゆだねてもいいか否か。その目で推おし量はかるために。

　そして昨夜の出来事を見て、護堂が『本物』だと確信した……。

「俺なんかのために何かをしていただく必要はないですけど、メル

カルトの始末をつけるために協力していただけるなら、すごく助かります」

「とんでもない。カンピオーネに仕えるのは魔術師の義務。われらの奉仕を存分にお受けいただきたく思います。……ああ、それとブランデッリ」

　ザンパリーニ老人は、いきなりエリカの姓を口にした。

「若き『王』の介かい添ぞえ役、今まで御苦労だった。だが、君の保護者であり《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》総帥であるパオロ・ブランデッリから、帰還指令が出ている。あとはわれらにまかせて、急ぎミラノへもどるといい」

　それは護堂とエリカにとって、青せい天てんの霹へき靂れきともいえる宣告だった。

3

　ザンパリーニ老人との出会いから三〇分ほどで、船はパレルモ港に到着した。

　面つらがまえもファッションも、どう見てもシチリアン・マフィアの首領という老人に先導されて、護ご堂どうとエリカは船を下りた。

「車を呼んであります。ああ、あれだ」

　港を見渡したザンパリーニの視線の先に、二台のＢＭＷがあった。

　重厚かつシックな外観の高級車を見て、護堂は思った。やっぱり防弾ガラスなどで銃撃戦に備えているのだろうかと……。

　一台目のカラーは白、二台目は黒。とても堅かた気ぎの人が乗る車には見えない。

「私と『王』はあちらに。ブランデッリ、君は後ろの車だ。空港ま

で送らせよう」

　ザンパリーニは黒いＢＭＷの方にあごをしゃくった。

　どちらにも運転手がいる。スーツを着崩した、その筋の『業界人』にしか見えない、やたら目つきが鋭い男たち……。

　老人の指示に護堂が反論しようとしたとき、先にエリカが口火を切った。

「申し訳ございませんが、おじさまのおっしゃるとおりにはできかねますわ」

「それはわがままというものだ。未成年の少女に『家へもどれ』と、親代わりの男が言っている。彼女が属する組織もすぐに帰き還かんせよと指示している。ならばブランデッリ、それにしたがう以外、君に残された選択肢はない」

　葉は巻まきに火をつけ、唇くちびるにくわえながら老人は言う。紫し煙えんを吐き出す仕草のなんと堂に入り、威厳に満ちていることか。それでも護堂は口をはさんだ。

「すいません、ザンパリーニさん。そういうことなら、エリカはたしかに帰るべきなのかもしれません。でも、こいつがいないと俺が困るんです。すくなくともメルカルトとの決着がつくまでは俺のそばにいて、いろいろ助けてもらいたいんですよ」

「わかります。御身は『王』とはいえ、まだお若く、神殺しとなって日も浅い」

　紫煙をくゆらせながら、ザンパリーニはうなずいた。

「そのような人材はたしかに必要でしょう。ですが、必ずしもエリカ・ブランデッリでなくともよいとは思われませぬか？」

「え？」

「彼女のようなうら若き乙女おとめを、神と対決する御身に介添えさせる……。この老いぼれには、酷こくな仕打ちに思えますな。なんといっても死と隣り合わせの大役です」

　死？　護堂は自分の迂う闊かつさに気づいた。エリカと行動を共

にするということは、たしかに彼女を危険な神の前に連れていくのと同じ意味なのだ。

しかし、それでも自分にはエリカの助すけ太だ刀ちが必要で――。

「そこでですな。ブランデッリに代わり、この私が介添え役となりましょう」

「へ、誰がですか？」

意外なことを言われたので、護堂はバカげた質問をしてしまった。

「私、ワルテル・ザンパリーニがあなたの戦いをお助け申し上げるのです。ふふふ、こう見えても若い頃は多少の火遊びをした身……微力を尽くしましょう」

ザンパリーニ老人は言葉こそひかえめだが、えらく自信ありげだった。

護堂はあるイメージを思い浮かべた。白いスーツにボルサリーノ帽。伊だ達てにマフラーを首に巻き、葉巻をくわえた老人が片手に機関銃、もう片手にダイナマイトを持つ――。

意外と実像に近いのかもしれない。

実はひそかに、この老人がエリカよりも強そうに感じるのである。だが。

「いいえ。いくらおじさまでも、わたしの代役はつとまりませんわ。草くさ薙なぎ護堂の隣で戦い、彼に然しかるべき助言を行うのはエリカ・ブランデッリの役目と存じます」

あざやかに〝相棒〟は言い放った。

そうだ。どんなに危険でも、いっしょに神と立ち向かう人間はエリカ以外にいない。彼女の宣言で、護堂はその認識を新たにした。

エリカを返さないよう、あらためて口添えしようとした――そのとき。

「なぜなら、わたしはもう草薙護堂の『女』……愛人なのですもの。おじさまといえども、彼と愛し合うわけにはいきませんでしょう？　おあきらめくださいませ」

　な、に？　思いきり予想外のセリフを聞かされた。



　ひとまずエリカの帰還問題は棚たな上あげとなった。

　護堂たちはザンパリーニの車に乗りこみ、パレルモ市内を移動することになった。

　エリカと護堂は後部座敷にならんですわったのだが、その間ずっと、エリカは護堂にべったりとくっついていた。いかにも仲のよい恋人風に仲むつまじく、寄りそい、抱きつき、体を密着させ続けていた。

　護堂は気が気ではなかった。

　パレルモはイタリアでありながら、イスラム文化の影響が濃い都市だ。その街並みが窓の外にあるのに、ほとんど見えていなかった。

　エリカのウソも気になる。だが、それ以上に密着する感触が悩ましかった。

　やわらかで、弾力にとんでいて、香水のよい香りがして、あたたかで心地よい……。金髪美少女の肢体がはりつく感触に、護堂はクラクラしてきた。

「ふむ。ブランデッリ……つまり、君と草薙護堂は男女の仲であると？」

「ええ、そのとおりですわ。おじさま、ですから護堂とわたしを引き離すような野や暮ぼはなさらないでくださいませね？　かつてシチリアーの伊達男で鳴らしたワルテル・ザンパリーニの名声に、傷がついてしまいますもの」

「それを言われるのは、私としてもつらいところだな……」

　助手席の老ザンパリーニと、護堂の隣のエリカが会話している。

「仕方ない。結社の長としては、君の叔お父じパオロの言うとおりにしてやりたいところだが。ひとりの男としては、話のわからぬ堅物と思われるのもしゃくだ。君と若き『王』のために便べん宜ぎを図ろうではないか」

「まあ。ありがとうございます！　ほら護堂、あなたからもお礼を言って」

「あ、ああ。ほ、本当にありがとうございますっ」

　いきなり話を振られて、護堂はぎこちなく礼を言った。

「なに、かまいませぬよ。男であれば、誰しも遊びのひとつやふたつはするもの」

　ザンパリーニに言われて、護堂は硬直した。

　自分のような男がエリカほどの美少女と恋仲になるなど、ありえない話なのだが。

「それに草薙護堂、御身が美しき乙女おとめに健全な興味をお持ちだというのは、われら下しも々じもの魔術師にとってはよろこばしき話です。何しろ当代の魔王方ときたら、どなたも浮ういた話ひとつない堅物ぞろいですからな」

　意外な話に護堂が驚いていると、車は海辺の公園の前を通りがかった。

　するとザンパリーニが「ふむ……すこしこちらで時間をつぶしますか」とつぶやき、車を止めさせた。変に気を遣つかってくれたようだ。思わぬ自由時間を得て、護堂とエリカは腕を組みながら車から出て、いっしょに公園を歩きはじめた。

「どういうつもりなんだよ、おまえは⁉」

「仕方ないでしょう、これ以外に選択肢がなかったんだから！」

　腕を組んで海を眺めながら、ふたりは小声で話しだした。ザンパリーニとその配下は気を利きかせて、離れたところにいる。なので、心置きなく言い合えた。

「いい、護堂？　順を追って説明するわ。まずザンパリーニはあなたのことをかなり気に入っているわね。昨日のメルカルトとの対話を盗み見したからでしょうけど」

「そうなのか？　でも俺、あのときたいしたこと言ってないぞ」

「バカね。『まつろわぬ神』と対等の口を利きけるだけで、ものすごいことよ。しかも、あなたは魔術界にまだ協力者も配下も後うしろ盾だてもない、完全にフリーな立場のカンピオーネ。ザンパリーニは今のうちにあなたと親密な関係をきずきたいのよ」

「仲よくしたいってことなら、俺の方に異論は何もないけどな……」

「ただ友好関係にあるだけなら、たいして旨うまみはないわ。でも、ザンパリーニがたとえば七人目の魔王の『右腕』ともいうべき相談役になるなら、わからないわ。すくなくとも彼の権威は大いに高まるでしょうね。そういうことを狙っているのだと思う」

　腕を組んで護堂に密着している以外、エリカは完全にいつもどおりになっていた。

「だから、あなたに付き添っているエリカ・ブランデッリが邪じゃ魔まだった。そこで手っ取り早く追い払おうと、《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》に連絡を取ったんだわ」

「でも、俺の右腕になるのが得なことなら、おまえのところも帰ってこいとは言わないんじゃないか？」

「いいところに気づいたわね。ええ、問題はそこなの」

　エリカは考えをまとめるように、虚こ空くうをにらんだ。

「ザンパリーニの結社はシチリアでは最大手だけど、欧州全体から見れば中小規模の組織にすぎないわ。そういうところがカンピオーネの庇ひ護ご下かに入れば、よくも悪くも魔王直属の結社として、もっと大きな名門結社と肩をならべるようになる」

「…………」

「でも、わたしが所属する《赤銅黒十字》のような名門は、特定のカンピオーネとだけ親密になるのを避けたがるわ。もちろん、最大限の敬意と奉仕は捧ささげるわよ。でも、たとえば総帥の姪で未来の総帥候補者を、まだ器量定かでない魔王の『右腕』にしたがるかというと……答えはノーね」

「なるほどな。でも、それでどうして『愛人』なんだよ」

　護堂はしみじみと言った。他に手はなかったものか。

「し、仕方ないじゃないッ。結社の魔術師としてではなく、個人的な立場から護堂の協力者になるなら、これがいちばんいい肩書きだもの。カンピオーネが『俺の女を追い払うのは許さない』って言えば、さすがにうるさく口出しされないでしょうし」

　たしかに愛人云うんぬんの宣言をしたら、ザンパリーニも訳知り顔になった。

　さすが情熱のラテン民族、恋愛には他の物事より寛かん容ようなのかもしれない。だが、草薙護堂はつつましやかな大やまと和みん民族ぞくである。

「だ、だったら親友とかでもいいだろ！」

「バカねッ。それだとザンパリーニでもいいことになるでしょう！」

　密着しながらの口論が白熱しかけたので、ふたりともあわてて声を抑おさえた。

「……あと『愛人』だって宣言した方が、わたしの安全を確保できると思うのよね」

「どういうことだ？」

「うすうす気づいているでしょうけど、ザンパリーニと結社《パノルモス》は本物よ。魔術師集団でありながら正しょう真しん正しょう銘めい、本物のシチリア・マフィアでもあるの」

「やっぱりゴッド・ファーザーなのかよ⁉」

「護堂のそばで介添え役をしているわたしが邪魔だと思ったら、暗殺くらい気軽に仕掛けてくるわよ。特にこれからメルカルトとの対決があるわけだし。そのどさくさにまぎれて、わたしを背中から撃つ。真実は闇のなか——なんて筋書き、あってもおかしくないわ」

「なんて連中だ……」

「気が荒い分、情に厚かったり面倒見がよかったりもするのだけどね……」

　最後に、エリカはまとめるようにささやいた。

「だから『愛人』なの。カンピオーネの寵ちよう愛あいを一身に集める女となれば、そうそう迂う闊かつな真ま似ねはされないわ。だから護堂、わたしを最愛の女性と思って接しなさい。いいわね？」

　以上で密談は終わった。

　ふたりは『恋人同士』に見えるよう努力しながら、車の方にもどっていった。

　その後、ザンパリーニは観光スポットを案内してくれた。

　古代ギリシア、ローマ帝国、アラブ、ノルマンなど多くの民族に侵略されてきたパレルモには、その歴史ゆえ、ほかの都市にはないエキゾチックな魅み力りよくがある。

　海に近い旧市街は、特に古い建築物が多い。

　教会、礼拝堂、目抜き通り、さらにノルマン王宮——九世紀にアラブ人が築き、一二世紀にノルマン人の王が王城として改築した宮殿などに連れまわされた。

「さて。それでは参りますかな」

　午後五時頃、車に乗りこんだところでザンパリーニは言った。いいかげんあちこち連れ回されるのに疲れていた護堂は、やや暗い声で訊たずねる。

「……今度はどこへ？」

「私の屋敷です。草薙護堂、御身にはそろそろ休息していただかなくては。今こ宵よいはどうか、我が屋敷の客人としておくつろぎいただきたい」

　護堂はホッとした。いいかげんエリカとの『恋人ごっこ』に疲れていたのだ。寝室でひとりになったら、たっぷりくつろごう……。

　やがて、パレルモ市内の高級住宅街にあるザンパリーニ邸に到着した。

　やたら広壮で豪ごう奢しやな館やかたでは、たくさんの使用人が

まめまめしく働いていた。

　堅気には見えないスーツの男たちも、あちこちで見かけた。彼らはマフィア稼業と二足のわらじをはく、魔術結社《パノルモス》の魔術師らしい。

　あてがわれたのは、屋敷で最も豪奢だという広い寝室だった。それはいい。だが、ここに泊まるのは護堂ひとりだけではなかった。

　エリカも同室である旨むねを、当然のように告げられたのである。

4

　夜を待って晩ばん餐さん会かいが催もよおされた。といっても、やたら立派な食堂に主人であるザンパリーニと護ご堂どう、そしてエリカの三人しかいない席だったが。

　食べきれるわけないのに、高級食材、山海の珍味が山ほど並ぶ。

　エリカと『男女の関係』にあるふりをしながら、護堂は人生で最も豪勢な食事を機械的に口へ詰めこんだ。おかげで味もメニューもよく覚えていない。

　その後、寝室にあてがわれた部屋にもどる。

　もちろんエリカもいっしょだ。ふたりの視線を否いやが応おうでも集めるのは、天てん蓋がい付きの巨大なベッドである。あたりまえのように他に寝台はなかった。

「お、俺は今夜、そっちのソファで寝ることにするよっ」

「そ、そうねっ。いくら愛人関係にあるふりをするといっても、こんなところまで徹底する必要はないものね！」

　すみやかに意見が一致した直後、部屋の電話が鳴った。

「これは私の道楽のひとつですな」

　ザンパリーニ邸の一角にしつらえられた大浴場。

　護堂とエリカを丁てい重ちような電話で招待した屋敷の主人は、誇らしげに言った。

「現代のヨーロッパでは、入浴という習慣があまりに軽視されている……私は常々そう考えておったのです。そこで古代ローマの風習を偲しのび、これを職人に造らせました」

　護堂は浴場に見入りながら、「はあ」と相づちを打った。

　どこのプールかと見まごうほど広い浴槽が三つもあり、ふたつは温水、ひとつは冷水で満たされていた。その周囲にはギリシアのパルテノン神殿めいた太い円柱が建ちならび、清せい澄ちような荘そう厳ごんさを演出している。

　もちろんサウナルームもあり、比較的小さなジャグジーの浴槽なども完備。たしかに、大浴場が隆りゆう盛せいしたという古代ローマめいた空間だ。

「若き『王』とその愛人をお迎えしたのも何かの縁。御身に是ぜ非ひ、こちらで愛人殿とのひとときを楽しんでいただきたいのです」

「「えっ？」」

　ザンパリーニの唐とう突とつな言葉に、護堂とエリカはそろって絶句した。

「ふふふ。愛し合う若いふたりが、こういう場所で羽は目めを外はずすのも自然の成り行き。僭せん越えつながら、そのお手伝いを買って出ようと思いましてな。――おい」

　老人は訳知り顔でほくそ笑んでから、横おう柄へいに誰かを呼んだ。

　すると、奥の方から「お呼びでしょうか、ご主人さま」と、十数人の女の子たちがそそくさと登場した。彼女たちのあられもない姿を見て、護堂は驚きよう愕がくした。

　――全員、すけすけの薄布をまとうだけ。肌も露あらわな裸同然

の格好だった。

白人もいれば黒人もおり、東洋系らしき娘もいる。みんな容姿・スタイルどちらもすばらしい美女・美少女ばかりだった。

「我が家のメイドたちです。遠慮なく御用を申しつけください」

「とととととんでもないですっ！　お、俺はこんなのダメです、勘かん弁べんしてくださいっ。ふ、ふつうの風ふ呂ろに入らせて——」

「まあ、おじさま。お気き遣づかい、感謝しますわ」

反射的に拒絶しかけた護堂を目顔で制し、エリカが礼を言った。

「ふふふ。とても素敵じゃないの、護堂。照れないで、ここはザンパリーニおじさまの厚意に甘えさせてもらうべきよ」

エリカはわざとらしく護堂にしなだれかかってきた。

それを面白げに眺ながめてから、ザンパリーニは粋いきな仕草で一礼し、浴場から出ていく。

「若さま、お嬢さま。お召し物をこちらに」

露出度の高すぎるメイドが数人、近よってきた。

今ここで裸になれと⁉　護堂が愕然としたとき、すかさずエリカが割りこんだ。

「ふふっ。ちょっと待って。あなたたちの仕事を奪うつもりはないの。でも、彼の服をぬがせる行為は、このわたしにだけ許された特権なのよ？　申し訳ないけど、しばらくふたりきりにさせてもらうわね」

と、やさしく優美に護堂の腕を引きながら！

ぬが——？　思考停止した護堂は、引かれるままにふらふら歩き、脱衣所にやってきた。

ふたりきりになれた途端、エリカは護堂の腕を放す。

「ど、どういうことだよ⁉」

「静かに。あのメイドたちは検けん分ぶん役――わたしとあなたが本当に『男女の仲』か、確認するようザンパリーニに命じられているはずだわ」

　エリカに小声で言われて、護堂もあわてて声を低くした。

（検分だって？）

（わたしたちの関係、疑われてるのよ。考えてみたら、ザンパリーニは昨日の夜から、わたしたちのことを見ていたわけですしね）

（そういや口くち喧げん嘩かとかも結構したしな……。くそ、どう乗り切ったらいいんだ？）

　今まで以上に恋人らしく見せるにはどうするべきか。

　恋愛沙ざ汰たにうとい自分が忌いまわしい。護堂は頭をかきむしりたくなった。

（仕方ないわ。護堂、おたがいに肚はらをくくりましょう）

（肚をくくる!?）

（ええ。たとえば『ふたりきりでゆっくりしたい』とか言って、すぐメイドたちを追い払うこともできるわ。でも、それはむしろザンパリーニの疑心を大きくさせるでしょうね。ここはこちらから攻めこむべき局面よ）

　エリカが決然と、女騎士らしい猛たけ々だけしさで言った。

　なるほど、わかる。護堂はうなずいた。勝負事の世界では、リスクを冒おかすことから逃げたら、さらに大きな危険に見舞われたりするものだ。

（わかった。で、具体的に俺たちはどうすればいい？）

（そ、それは――まずぬぐの。ふたりいっしょに、着ているものをぬいで、あの娘たちの前に出ていくの）

　ちょっと前の猛々しさがウソのように、エリカはいきなり赤面した。

　護堂は「へ？」と間抜けな声を出した。

（こ、これはあくまで、この難局を切り抜けるための策。それも窮きゆう余よの策よ！　だから護堂、いやらしい心は封印して、作戦の遂すい行こうにだけ集中しなさい。これから見たり経験する全てを一時間後には記憶から抹まつ消しようし、忘ぼう却きやくすることを誓いなさいっ。いいわね!?）

　脱衣所から大浴場にもどった護堂は、腰にタオルをまいただけだった。

　エリカもだ。エリカは胸元から腰にかけてを、大きなバスタオルでまいて隠していた。それ以外は一いつ糸しまとわぬ裸体である。

「お体を洗わせていただきますわ」

　さっきと同じように、数人のメイドたちが近よってきた！

「そうね……じゃあ、わたしの方だけお願いできるかしら」

　優雅な口調でエリカが答えると、メイドの代表格らしい美女が言った。

「若さまの方はよろしいのですか？」

「ええ。もしかしたら、彼はそうしてもらいたいのかもしれないけど……ふふふ。わたし、他の女があの人にさわったりしたら、嫉しつ妬とで狂ってしまうわ。勢いあまって、彼とその女をいっしょに斬きり殺してしまうかも」

「うふふ。それは大変ですわね。かしこまりました」

　物騒な発言の割りに、エリカは冗談めかした表情と口調だった。

　それに微笑で応こたえたメイド代表が他の娘たちに目くばせする。薄布をまとうだけという刺激の強すぎる彼女たちは、護堂からすこし距離を取ってくれた。

　護堂はエリカからの指示を思い出した。

『なるべく悠ゆう然ぜんとかまえるの。うろたえているところをすこしでも見せたらダメよ！』

　というわけで、必死に自然体を装った。

　心のなかで『平常心平常心！』と呪じゆ文もんのように唱となえながら。

　エリカのバスタオルに、メイドたちが手をかけた。ほどかれる。護堂の知るかぎり、最も美しく魅惑的で華麗な少女の裸体を隠していた布きれが、メイドの手でほどかれてしまう。

　そして、護堂は見た。

　生まれたままの姿で、女王のごとくメイドたちにかしずかれるエリカを。彼女のスタイルのよさはとっくに承知していた。だが甘かった。想像していた以上にすばらしいものだった。

　乳房は美しい形に高々と隆起し、すこしもぶざまに垂たれさがったりはしていない。

　一方、その先端に散る桃色の蕾つぼみはつつましやかで可か憐れん。

　ウェストはきゅっと引きしまり、一辺の贅ぜい肉にくすらないだろう。そして、腰から下にかけての丸みが描く曲線のみごとさたるや……。

　また、エリカは肌の白さも極上だった。

　雪花石膏アラバスターと同じほど白い肌が浴場の熱さでほんのり紅あかく色づくさまは、これだけで護堂の理性がどうにかなりそうなほど衝撃的だった。

「ふふふ。護堂ったら……いつまで経たっても、わたしのことを狂おしく見つめるのね。あなたのそういう情熱的なところ、とても愛いとおしいわ」

　護堂の視線を受けて、エリカが微笑ほほえみながら言う。しまった。『わたしを見るときは、見慣れた美術品を鑑賞するような感じで』という指定をつい忘れてしまった。

エリカにフォローされて、護堂はこほんとせき払いした。

「お、おまえの魅力がそうさせるのさ」

事前にレクチャーされたセリフのひとつをどうにか言う。

『ボロを出さないよう口数はすくなく』とも厳げん命めいされたので、すぐに口をつぐんだ。

そうこうする間にも、メイドたちはエリカの体を湯で流す。シャワーなどは使わず、湯ゆ桶おけでくんだ湯を使ってだ。

さらに、その完かん璧ぺきな肢し体たいを洗い、磨きあげていく。

美しく壊れやすい芸術品にふれるような、うやうやしい手つきで丹たん念ねんに。

きれいに磨きあげられたエリカはメイドたちに先導されて、湯をはった大浴槽に入っていった。そのまま自分専用のプールで楽しむ女主人のように体をのばし、くつろぐ。

その湯には、メイドたちの手で紅い椿つばきの花が浮かべられた。

さらに香油まで流し入れられ、馥ふく郁いくたる香りが大浴場を満たしていく。

「ねえ護堂、いつまでわたしをひとりきりにさせているの。そういう気の利きかないところ、あなたの欠点だわ。早くこっちに来て頂ちよう戴だい」

「あ、ああ」

大浴槽のふちにもたれかかりながら誘うエリカに、護堂は言葉すくなに答えた。すぐに立ちあがって湯に入り、彼女のそばへ行く。

近づいてきた護堂の胸に、エリカは自分の背中をもたれかけさせた。

金髪の女騎士は剣の名手だが、体つきは華きゃ奢しやだ。細身の体と、絹きぬのようになめらかな肌の感触を、護堂は湯のなかで抱

きかかえる格好になった。

　――う。全身が熱くなるのは、もちろん湯のせいだけではない。

　――む。酒に酔ったような気分になるのも、湯にのぼせたせいではない。

「もう……またわたしをじらして愉たのしんでいるの？　護堂ってば本当に意地悪だわ。それとも、わたしに魅力がないせいかしら……」

　湯のなかでエリカは体の向きを変え、護堂と真正面から向き合った。

　もちろん、また抱きついてくる。エリカのふくよかで弾力にとむバストが自分の胸に当たるのを感じて、護堂はまた心のなかで『平常心！』と叫んだ。

　だが、さらにエリカは追い打ちをかける。

　頬ほおやあご、首筋など、唇以外のいたるところにチュッと軽くキスをして、何かをねだるように上うわ目め遣づかいで見つめてくるのだ。

　あやうく理性が飛びそうになったが、どうにか持ちこたえた。護堂は打ち合わせどおりの行動を取る。メイドたちをちらりと見て、エリカに何かささやくふりをしたのだ。

　この茶番劇の黒幕である美少女は「まあ、そうなの」と微笑んだ。

　そして、命令することに慣れきった姫君のように、メイドの代表に目くばせする。

「あなたたち、そろそろ下がってもかまわないわ」

「よろしいのですか？」

「彼が言うの。『他の女がいたら、気が散る』って。しばらくふたりきりにさせろって。わたしたちは……もうすこし〝愉しんで〟から、上がらせてもらうわ」

「左様でございましたか。では、そのように」

　くすりと笑って、メイドの代表はうやうやしく頭を垂れた。

　それから、実にすばらしい速さでメイドたちは撤てつ収しゅうしていった。彼女たちはおそらく、護堂たちが〝愉しむ〟行為について、エリカの思おも惑わくどおりに解釈しているだろう。

　もちろん、護堂の手柄ではない。あれだけ恥ずかしがっていたくせに、エリカの『芝居』はとにかく自然で、説得力にあふれていたのである。

　彼女の器用さ、本番での強さを改めて思い知らせてくれる一幕だった。

　メイドたちが消えてからも、ふたりは湯のなかで密着していた。

　数分後、おもむろにエリカは小声で言こと霊だまをつぶやき、探知の魔術を使った。

「どうだ？」

「大浴場の周囲には誰もいない。このなかを魔術でのぞいている者もいないわ」

　安全を確認できたので、ふたりは「ふぅー」と大きく息を吐いた。

　エリカはそそくさと身を離し、護堂から大きく距離を取る。限界まで湯船につかっていたので、どちらも湯あたりする寸前であった。

　その夜、護堂とエリカは同じ寝室で休んだ。

　しかも同じベッドで同どう衾きんするという、とんでもない状況で。

　大浴場でも使われた探知の術で、機械的ないし魔術的な手段による透視・盗聴は行われていないと聞き、はじめ護堂はひとりソファで眠ろうとした。しかし。

「あんなふうに疑われている状況で、べつべつに寝られるわけないでしょうっ？　部屋の後かたづけするのは、館やかたの使用人たちなのよ。ちがう場所で寝たのなんて、すぐに見破られてしまうわ！」

　エリカに怒られてしまった。たしかに。あれだけ風呂場で〝はしゃぐ〟カップルが、寝るときだけべつべつなのも不自然だ。

　ふたりは広いベッドのまんなかに『見えない国境線』があることにした。

　領土侵しん犯ぱんは絶対にしないという条約を設けて同じベッドとシーツに横たわり、同衾する形になったのである。護堂は左側、エリカは右側で寝る。

　護堂はうっかり領土侵犯しないよう、エリカに背中を向けて横たわった。

　エリカの方も同じつもりらしく、護堂に背を向ける格好だ。ふたりはやや距離を置いて、背中合わせになっていた。

　とにかく寝よう。とっとと寝てしまおう。要いらぬ邪じや念ねんが首をもたげる前に、護堂はかたく目をつぶり、必死に眠気を呼び起こそうとした。そして聞いてしまった。

　ぐすっ。驚いた。ごくかすかな、すすり泣きの声だった。

「……エリカ、もしかして泣いているのか？」

「……そ、そんなことあるはずないでしょう。ただ、これでわたしの純じゆん潔けつは失われたのかと思って、すこし感傷的になっただけよ」

　強がるのに疲れたような小声でエリカは答えた。

「じ、純潔を失うって、そんなことないだろ。実際には何もしてないわけだし……」

「本当にバカね！　わたし、あなたに一糸まとわぬ姿を見られてしまったのよ。処女おとめにあるまじき行為もしてしまったわ。そのうえ褥しとねまで共にして――しかも、わたしたちがこういうことをしたって、いろいろな人に知られてしまうのよ」

「し、知られる？」

「カンピオーネに愛人がいて、しかも相手がブランデッリ家の令嬢……わたしたちの業界では、政治的にもゴシップ的にもセンセーショナルなニュースになるわ。いずれあちこちでうわさになるはずよ」

「そうか……」

「うわさを聞いた人は、誰もわたしの純潔を信じたりしないわ。誰よりもわたし自身が、もう自分を清らかな処女おとめだと思えないもの」

　ぐすっ。またかすかなすすり泣きを聞いた。

「でも、いいわ。後悔はしていないし」

「そ、そうなのか？」

「あたりまえよ。エリカ・ブランデッリはあとで後悔するような真ま似ね、決してしないの。あ、勘ちがいしないで頂戴っ。べつに、護堂のことがわずかにでも好きだから——なんて理由ではないんですからね！」

　護堂は沈黙した。一瞬だけ勘ちがいしかけたのはないしょだ。

「いい？　あれはあくまで、突然カンピオーネになってしまった男の子を助けてあげようという同情と憐れみ、騎士としての義ぎ侠きよう心しんからやったこと。あそこまでしたのも、わたしなりの完璧主義ゆえよ。そこを勘ちがいして欲しくないわ」

「そうか……ありがとうな、エリカ。おまえにはいくら礼を言っても言い足りない」

　このあたりでちゃんと礼を言わなくては。

　そう思って、はっきりと護堂は言った。すると背中越しに、エリカがもじもじと身もだえする気配を感じた。照れているのかもしれない。

「い、いいのよ。わたしと出会わなければ、あなたも今みたいな境遇にはならなかったんだから。気にしないで」

「気にするよ。そうだ。純潔がどうのって話な」

　恥ずかしさを堪こらえながら、護堂は言う。

「もしおまえさえよければだけど、や、やっぱり俺が責任取るべきなのかな？」

「バカね、そんなもの取る必要ないわっ。わたしが自分の意思でやったことなんだからっ。それよりも約束どおり、あの浴場での全てをすみやかに忘却しなさい。いいわね⁉」

　同じ布団にくるまりながら、ふたりは長い間おしゃべりを続けた。

　身も心も疲れていたが、なぜか目が冴さえ、そして隣に横たわるおたがいの存在が気になって仕方なかったのである。

　翌朝、護堂はめざめるとすぐに窓へ駆けより、外を見た。

　やはり豪雨だった。風も激しく、ときどき稲いな妻ずまがひらめく。嵐が来たのだ。

　轟とどろく雷らい鳴めい。そのなかにひそむ『声』を、護堂はたしかに聞いた。

『――待たせたな、神殺しよ！　来い！　我がもとに来い！　いにしえの王が竜狩人の流儀と稲妻をもって、貴様に真の戦いを教えてくれる！　東をめざすのだ！　東の方かたに遺のこされし朽くちた都にて、こたびはわしが貴様を待つぞ！』

　荒れ狂う風雨雷鳴がそう告げていた。これは護堂にしか聞こえない声のはずだ。神王メルカルトは今、草薙護堂以外の者など気にも留めていないのだから。

「……もしかして、メルカルトなの？」

「ああ。俺のことを呼んでるよ」

　眠そうな声のエリカにベッドのなかから訊きかれて、護堂は言った。

　まだ午前七時前。朝に弱い彼女が目を覚ますには早すぎる時間だ。しかし、嵐が起こす物音と、大気に満ちる神気で覚かく醒せいをうながされたのかもしれない。

「いよいよ今日が正念場ということね……。それはそうと」

「なんだよ？」

「たいしたことじゃないけど、寝るときはやっぱり、もっと薄着の方がいいわね。なんだか暑く感じるわ……」

「おまえ、ふだんはどんな格好で寝てんだよ⁉」

　エリカは屋敷で用意してくれた、うすいネグリジェ姿だった。寝ぼけているのか妙なことをつぶやく彼女につっこんでから、護堂はまた窓の外をにらむ。

「東の朽ちた都で待つ。そうメルカルトは言ったよ。どこだかわかるか？」

「たぶんソルントよ。パレルモの東一七キロの位置にある、古代フェニキア人が前線基地とした街の遺跡……」

　神様のアバウトすぎる位置指定を聞いて、エリカがささやく。

「ザンパリーニに頼んで、《パノルモス》の魔術師を偵察に出してもらいましょう。『まつろわぬ神』の気を検知できたら、すぐ向こうへ移動するわよ」

　だんだんしゃっきりしてきた〝相棒〟の言葉に、護堂はうなずいた。

5

「なんとなく思い浮かぶのは……光る武器のことだな」

　ソルントに向かう車中で、護ご堂どうは答えた。

　隣にすわるエリカが訊たずねてきたのだ。「嵐の神であるメルカ

ルトとの対決で役立ちそうな力、自分にあると思う？」と。護堂はしばらく考えてみた。何も思いつかない。

　もうすこし考えてみても、ダメだった。

　当然だろう。草くさ薙なぎ護堂は一週間前まで、神々とも魔術とも縁のない一般人だったのだ。三分考えて、これ以上は無駄だと割り切り、考えるのをやめたときだった。

　ちらっと頭の隅をイメージがかすめたのだ。

「うん。キラキラ光る武器が何か使えそうな気がする」

「ずいぶんと曖あい昧まいすぎるヒントなのね……」

　皮肉っぽくエリカに言われて、護堂はただ肩をすくめた。

「やはり『まつろわぬ神』との戦いは、ぶっつけ本番以外にないということですかな」

　運転席でハンドルをにぎるザンパリーニが言った。

　彼の白いＢＭＷは、嵐のせいで交通量のすくない国道を東に向けて走っている。

　――護堂たちが起床してから三時間ほど経たっていた。あのあとエリカの推測どおり、ソルント遺い跡せき公園付近で膨ぼう大だいな量の霊気が確認されたのだ。

　その報しらせを聞くなり、エリカは言った。

「これからメルカルトと対決しに参ります。車と運転手をお貸しください」

「いいだろう。すぐ手配する」

　ザンパリーニの重々しい答えを聞いて、護堂とエリカは館やかたの玄関に向かった。

　すると、シチリア・マフィアの首しゅ領りようと魔術結社の総そう帥すいを兼ねる老人は、白いＢＭＷの運転手として再登場したのである。

「ふふふ。申し上げたでしょう、私も多少は腕に覚えがあると」

　あきれ顔で後部座席に乗りこんだ護堂へ、ザンパリーニは言ったものだ。

　ちなみに、助手席には黒のアタッシェケースが置かれていた。

「……中身を見せてもらってもいいですか？」

　なんとなくイヤな予感がして、ケースを確認させてもらったら。

　黒光りするサブマシンガンが収まっていた。トンプソンＭ１９２１、通称トミーガン。銃器にくわしくない護堂だが、これには見覚えがあった。映画『ゴッドファーザー』でマフィアの殺し屋たちも愛用した、世界初の軽機関銃だからだ。

　しかも銃身の付け根に、ドラムマガジンという予備弾だん倉そうまで装着ずみ……。

「ザンパリーニのおじさまは、欧州各地やアメリカで武闘派として活躍した魔術師なの。わたしが剣で『鉄』を操あやつるみたいに、おじさまは銃弾や火薬で『焔ほのお』を操るのよ」

「あー……あんな感じなのか」

　エリカの説明にうなずく護堂だった。

　ともあれ、パレルモ市からソルントの遺跡まで三〇分ほどの道みち程のりだった。

　かつてソルントは紀元前四世紀頃、海沿いにそびえる山の中腹にフェニキア人が造った街だった。その後、ギリシアやローマ帝国の領地となったが衰退。イスラム教徒のアラブ人によって破壊された。

　現在はソルント考古学公園として、博物館と共に運営されている。

　ザンパリーニが手配してくれたおかげで、公園と博物館は急きゅう遽きよ休みとなっていた。

　もっとも、烈風が吹き荒れ、ザーザーと大雨が降りしきり、黒い

雲からは稲いな妻ずまがひっきりなしにほとばしっている。こんな天気ではもともと来客もなかっただろう。

　それでも、公園職員を人払いしてくれたのはありがたい。

「護堂！　わたしはすこし離れたところに待機して、援護役にまわるわ！」

　駐車場でＢＭＷを降りるなり、嵐の騒音に負けないよう大声でエリカが言った。

「そうか！　なら、それで頼む！」

　ザンパリーニが何か言う前に、すばやく護堂は許可した。

　昨日の話を思い出したのである。エリカが言った『戦いのどさくさにまぎれて……』というやつだ。杞き憂ゆうかもしれないが、警戒するに越したことはない。

「これを持っていきなさい！　何かの役に立つかもしれないから！」

　護堂の手にあるものを乗せて、エリカは去っていった。

　置き土産みやげはライオン型の置物だった。手のひらサイズでそこそこ重い。ふところにしまいながら、護堂は遺跡公園に入っていった。付きしたがうのはザンパリーニ老人である。

　この天気では、傘かさを差しても飛ばされる。

　護堂もザンパリーニも、さっき別れたエリカもレインコートをはおっていた。だが効果はうすく、下の衣服はぐっしょり濡れそぼっている。

　護堂はレインコートのフードをはねのけた。視界が悪くなるだけで邪魔なのだ。

　激しい風と雷雨、びゅうびゅうという騒音のせいで、何か言ってもどうせ聞こえない。護堂もザンパリーニも口を利きかず、黙々と公園の奥をめざす。

　やがて、護堂はふつふつと全身に力が満ちていくのを感じた。

フェリーでメルカルトの『声』を聞いたときもこうなった。これは戦うための力だ。神と戦うため、神殺しの闘争本能が生み出すものだった。全身の感覚と五感、第六感が最大限に研とぎすまされる。指先や毛細血管にまで力と熱が満ちていく。

そして、ついに護堂は遺跡の最奥部へやってきた。

そこは海辺の丘で、二本の柱がならんで立っていた。鹿しかや山や羊ぎの頭に二本の角が生えるように、柱だけがふたつセットであった。他には何も建造物はない。

長い年月の間に崩れ果てたのではない。

紀元前の昔より、ここには二本の柱しかなかったはずだ。

事前にエリカから教わっていた。並び立つ二本の柱は、フェニキアの天空神メルカルトの象しよう徴ちようなのだ。そして、護堂は直感した。——いる。

二本の柱の上にメルカルトはいる！

実体を持たぬ風として、雨として、熱き雷らい霆ていとして空中にひそんでいる。

天空の神メルカルトは、嵐の姿でも顕現できるのだ！

『ふはははは！　ついにまた逢あえたな、若き神殺しよ！』

「こっちは逢いたくなかったよ！　俺は文明人で平和主義者なんだ！　いくら神様が相手だからって、物騒なケンカ沙ざ汰たは御ご免めんだぞ！」

メルカルトの声と嵐に負けないよう、護堂は怒鳴った。

『神殺しらしくもない、柔弱なことを言う。まあ、貴様が戦わぬのであれば、それでもかまわぬさ。一向にわしは痛つう痒ようを覚えぬ。しかし、よいのか？　あと六日だぞ？』

「六日？　何のことだよ!?」

『くく……わしはしばらく嵐を起こしつづける。大地を程ほどよく湿しめらせ、崩れやすくするためにな。そして六日の間、日没が来

るたびに都をひとつ沈めてくれよう』

「なんだって？」

『六日間、陽ひが沈むたびに我が旧領たる都のいずれかを海に落とす。そう申したのだ！　一日目……つまり、今日はここだ！』

　天から轟とどろく声との不可思議な問答。その内容はひどく物騒なものだった。

　ここ——このソルントの遺跡か!?　気づいた護堂は戦せん慄りつした。

『ここよりすこし西の方かたに、もうひとつ都があったな。二日目はそちらだ。三日目は例の島——わしらとウルスラグナが相まみえた島に戻ろうか。四日よりあとは……まあ、そのときに考えよう。ひとまず六日の間、地上と人間どもに神罰を下してくれようぞ！』

　つまり、二日目はパレルモが。

　三日目はおそらくサルデーニャ島のカリアリが海に没するということか。

　メルカルトが宣言した内容に、護堂は恐怖と怒りを覚えた。

「ふざけんな！　そんな勝手をさせられるか！」

『異論があるならば、力をもって神王の道を阻はばむがいい！　さあ、これよりは闘争の時ぞ。未熟な貴様がどこまでわしについてこられるか、試ためしてくれよう！』

　轟ごう！　二本の柱が暴風をまき散らすのと同時に、天の声も轟いた。

　護堂のそばにいるザンパリーニのことなど、メルカルトは何もふれない。無視した——いや、ちがう。たぶん、視界に入っていないのだ。

　神であるメルカルトには、人間など道ばたの小石と同程度なのだろう。

　だが、仕方ないのかもしれない。

……柱が生んだ暴風に吹き飛ばされながら、護堂は思った。すぐ横にいたザンパリーニもいっしょに吹き飛ばされていく。おそらくエリカをも超える魔力と経験の持ち主が、紙くずか何かのように空へ舞いあがっていく。

「うおおおおおおおおおっ!?」

老人の絶叫がこだましているが、それだけだ。

彼は神に抗あらがうことができなかった。神の権けん能のうを前にして、叫ぶことしかできなかった。そうである以上、メルカルトの視界に入らないのは当然かもしれない。

だが、護堂は――

突然の暴風に吹き飛ばされながら、とっさに腕をのばしていた。

たまたま近くに枝振りのいい、大きなオリーブの木が生えていたのだ。護堂はその枝をつかみ、命いのち綱づなの代わりにした。かろうじて地上にしがみつけた。

これを可能にしたのは、最大限に研ぎすまされた反射神経だろう。

そして『死んでたまるか！』という根源的欲求。なにより運――ちょっと手をのばすだけでつかめるものがあった運。その運を無理矢理つかみ、引きずりよせた生き汚さ。

これらが草薙護堂にはあり、ザンパリーニにはなかった。

言いかえれば、そこがカンピオーネと只ただ人びとのちがいかもしれない。今の一幕でなんとなく護堂がそれを感じた直後、ふたたび天の声が響いた。

『さあ、さあ！　まだまだ小手調べにすぎぬぞ！　わしをもっと愉たのしませよ！』

電光が天より駆けおりる。今度は草薙護堂の肉体めがけて。

その瞬間、護堂は『当たる！』と直感した。

だが稲妻だ。かわせるはずない。避ひ雷らい針しんを持って立つ

以外に対策もない。死ぬのか？　いいや、死ねるか！

　死の疑問を、死の否定で蹴け散ちらしたとき。

　誰よりも速く高く飛ぶ、猛もう禽きんの力――『鳳おおとり』の化け身しんに護堂はめざめた。

　草薙護堂の肉体・知覚・思考が加速をはじめ、代わりに周囲の世界が減速をはじめる。風に乗って飛ぶ木の葉や屑くず、大荒れする海の高波、稲妻のきらめきですら、護堂の目にはスローモーションに見えた。全てかわせる。全て回避できる。

　確信にまかせて、護堂は命綱代わりだった木の枝を離した。

　暴風に巻きあげられて、天高く舞う。

　だが、そのおかげで直撃するはずだった稲妻をやりすごせた。しかし、空中での上昇はある一点で止まり、護堂の体は地上に急降下していく。

　このままなら大地に激突し、墜つい落らく死し。しかし護堂はひらりと着地した。

　身軽になっていた。まるで体重などないかのように。草薙護堂は風のように軽く、風のように速くなっていた。

『ほう！　くくく、よいぞ。神しん速そく閃せん電でんの領域に踏みこみおったか。ならば、貴様と速さ比べに興きようじてみるか！』

　天より稲妻が立てつづけに落ちてくる。

　だが護堂は『鳳』の目で見切り、『鳳』の速さで必死に避けた。なんと、この化身は電光と同じくらいのスピードを授けてくれるらしい。護堂は驚嘆と共に回避行動に専念した。

　今のうちに次の武器を見つけたい。何か武器はないか？

　護堂は逃げながら、必死に頭を回転させた。そうだ。さっきエリカに訊きかれたとき思い浮かんだ、光る刃物のイメージ。あれは何の化身なのだろう……？

『只の稲妻ではなかなか当たらぬか。ならば、我が武具の出番よな。追いて駆ける者よ、来たれ！　ヤグルシよ、アイムールよ、神殺しめを撃ち抜くがいい！』

　天あま翔かける魔法の棍棒、ヤグルシ・アイムール！

　護堂は戦せん慄りつした。軍神ウルスラグナとの戦いでも使用された武器だ。第一の棍こん棒ぼうヤグルシが虚こ空くうより顕あらわれる。第二の棍棒アイムールが雷雲より顕れる。

　前者は風をまとい、後者は電光をまとう。

　ヤグルシは旋せん風ぷうに乗るツバメのように、軽やかな軌道で飛来する。アイムールは天降る稲妻のごとく、直線的な軌道で飛来する。しかも、どちらも護堂の――『鳳』の速さに負けないスピードだった！

　それでも護堂は逃げつづけた。

　横に跳びのき、前に走り、後ろへ倒れこみ、ときには地に伏して。みっともなくゴロゴロ地面を転がって。獣けもののように四よつん這ばいになって。

　泥まみれになって逃げながら、護堂は光る武器のことを想い――

　思い出した。もしかしたら、あれか？　あの武器のことか!?

　だが、その直後。

　魔法が解ける時間となった。いきなり心臓に激痛が走ったのだ。

　足が止まる。遅くなっていく。動けなくなる。気づけば護堂は棒立ちになっていた。

　そこにヤグルシが『Ｕ』の字を描いて飛んでくる！

　直撃を受けた護堂は、天高く舞いあげられた。その体めがけて一直線に飛んでくるのは、もちろんアイムール。また直撃だった。

　護堂の体はホームランボールのように空中を吹っとんでいく。

　感覚としては、猛スピードで突っこんできた大型トラックにはね

られた気分だった。カンピオーネほど頑がん丈じようでない普通人が喰らった場合、もしかしたら跡形もなく消滅したかもしれない。それほどすさまじい破壊力だった。

　護堂の全身を熱と激痛が駆けめぐる。

　さすが神の武器。人間たちの魔術や人ひと喰くい虎の襲撃など、比較にならない威力だった。肉が裂け、骨が砕けた。肉が灼やけ、骨が溶とけた。

　対魔術師のレベルでは、不死身といってもいいカンピオーネの肉体。

　だが対等以上の敵である『まつろわぬ神』の前では、まったくそうではないことを護堂は身をもって知った。苦しくも痛い教訓となった。

　それでも——それでも即死でないのだから、この体はデタラメだ。そして。

「まだどうにかできる……って、ウソだろ？」

　宙高く飛ばされながら、護堂は耳元で女性の声を聞いた、ような気がした。エリカではないはずだ。もっと幼い、歳とし下したの娘っぽい声だった。

　そして、脳のう裏りに思い浮かぶのは黄金の毛皮を持つ羊ひつじ。

「頼む……」

　理性ではなく本能のささやくまま、黄金の羊にあとを託す。

　そのまま意識が途絶え、草薙護堂は心しん肺ぱい停てい止しの状態におちいった。もちろん、メルカルトとヤグルシ・アイムールが健在なのだから、このまま生きのびられるはずもない。

　魔法の棍棒たちは旋回し、ふたたび護堂を撃とうとする。

　しかし、このとき。

　護堂がふところにしのばせていたエリカの置き土産みやげ——ラ

イオン型の置物が光を放った。すると突然、磁じ石しやくで引きよせられるように護堂の体が動きだす。

　ギュン、と護堂の体はかなりのスピードで海の方向へ飛ぶ。

　そのまま大荒れの海へ。メルカルトが呼んだ嵐のせいで、荒れに荒れた海の波間へと護堂の体は沈んでいった。

第３章　剣とエリカとメルカルト

1

「おおゴドーよ、死んでしまうとはなさけない！」

「…………は？」

　いきなりのふざけた発言に、護ご堂どうは間抜けな声で答えた。

　目の前にいるのは可か憐れんな女の子だった。繊せん細さいにととのった顔立ちだが、美しさよりも『かわいさ』が際きわ立だつ。推定一四歳。髪型がツインテールのせいか、かなり幼い印象だ。

　そんな娘の珍発言にとまどいつつ、護堂は周囲を見まわした。

　……そこは何もない空間だった。全すべてが灰色で塗りつぶされていた。地平線の先まで灰色でしかない、灰色の不思議な世界。

　目の前の美少女は白い薄うす布ぬののドレス姿だった。どこの国のものだろう？

「ここは『生と不死の境界』よ。ひらたく言うと『あの世の直前』『もうちょっとで三さん途ずの川』みたいな感じ？」

　思いっきり軽い口調で美少女は教えてくれた。



「そして、あたしはパンドラ。『まつろわぬ神』とかじゃない、ちゃんとした女神様だから、こういう場所じゃないと現世の人間になかなか会えないの。息子と顔を合わせるために、今日はわざわざ『不死の領域』から出張してきたんだから」

「……息子？　誰がですか？」

「もちろんゴドーのことよ。あなたはあたしの息子なの。ママでもママンでもマンマでも好きなように呼んでいいのよ？」

「……じゃあパンドラさん、お訊ききしたいことが」

「うわ、そっちにいくんだァ～最低ェ～」

　パンドラはわざとらしく口をとがらせ、語ご尾びをのばした。

「親子の絆きずなをないがしろにするのは、感心しないわよォ～」

「俺の母親はれっきとした日本人です。俺より歳とし下したでもありませんし」

「いいのよ、義理だから。あたしみたいに童顔・幼児体型で血のつながりがない義母って、地上的感覚だと『萌もえ』なんでしょう？　ラッキーじゃない」

「それはたぶん、地上でもすごくせまい範囲限定の感覚だと思います」

　護堂は話題を変えることにした。

「さっき『死んでしまうとは』って言ってましたけど、俺、死んだんですか？」

「ええ。メルカルトさまにサクッと殺されて。でも安心して。ゴドーの肉体は今、地上で復活中だから。死にかけたとき、あたしが送ったヒントをちゃんと理解できたのね」

　パンドラと自じ称しようした女神は、にんまりと微笑ほほえんだ。

「最初の実戦だから大サービスしたんだけど、きちんと活いかした

のはすばらしいわ。あたしと旦だん那なの子供って血の気が多いのばかりだから、なかなか長生きしないのよねー。ほとんどがどこかの戦場で野たれ死ぬの。だから、ゴドーも気をつけてね」

「あなたと旦那の子……そうか！」

　護堂は思い出した。前にエリカから聞いた話だ。

「カンピオーネはエピメテウスとパンドラの落とし子、でしたっけ？」

「正解よ。特にパンドラはあなたたち神殺しの義母にして支援者。かなり気まぐれで無責任だけどね。でも、たまにヒントを教えるくらいはするのよ♪」

　微笑するパンドラは、幼い容姿に反する色いろ香かをまとっていた。

　それはまさしく『女』そのものだった。その蠱こ惑わく的な可憐さと、内に秘めた叡えい智ちをかいま見て、護堂は悟った。どれだけ軽薄に見えても、彼女は女神なのだと——。

「ま、あたしと会ったことは地上に帰ると忘れちゃうんだけど、教えてあげた内容は無意識の領域に残るから、そこは心配しないで」

「忘れるんですか？」

「ええ。この領域と地上を行き来するときに、いろいろあるのよ」

「はあ……。ところで、よかったら教えてください。俺、神様にケンカ売られてるんですけど、どう戦えばいいんでしょう？　何か光る武器があるみたいなんですが」

　せっかくの機会なので、護堂は訊ねてみたのだが。

　パンドラはちょっと意地悪そうに、にんまり微笑んで言った。

「それをあたしが教えたら面白くない——じゃなかった、盛りあがらない——でもなくて、ゴドーのためにならないわ。自力でがんばってみてね♪」

「そうですか……了解です」

　護堂は食いさがらず、あっさりうなずいた。

　どのみち戦うのは自分なのだ。勝負どころで他人を当てにするようでは、きわどい接戦をものにできない。あくまでジュニアの育成世代ではあったが、野球選手としては猛も者さの部類だった護堂は異議を唱となえなかった。

　どれだけ仲間がいても、結局、戦うのは自分だ。

　チームの——仲間のバックアップはもちろん信じる。しかし、個で戦えないやつがチームとして戦えるはずもない。だから、まずは自分が全力を尽くす。

　そんな護堂を、パンドラは面白そうに見つめていた。

「ふふっ。神殺しになるような子はどんな出しゆつ自じでも、たいてい戦い方をわきまえているものだけど、ゴドーもその例に洩もれないようね。……突き放すだけじゃアレだから、役立つことも言ってあげる」

　意外にも義母っぽい発言が出たので、護堂は背筋をのばした。

「あなたは人類の歴史をとおして見ても、ごくわずかしかいない神殺しのひとりよ。誰かのやり方を真ま似ねしても意味がない。バカげてる。だから、どこまでも己おのれを貫つらぬきなさい」

「……つまり、オレ流でいけと？」

「ええ。心の赴おもむくまま、本能の導みちびくまま、だけど狡こう猾かつに、抜け目なく戦う。それさえできれば、あなたたちは地上最強の戦士よ。深く考える必要なんてないない！」

　教えられたとおりにしたり、誰かの真似をする方がよほどかんたんなのだが……。

　とてつもなくむずかしい指針をさらりと言われて、護堂は苦笑した。

「とりあえず、力を使いこなす練習あたりからはじめてみますよ」

「ゴドーったらマジメー。でも、やめた方がいいわよ。無駄だから」

「へ？」

「人間を神殺しに転生させる大呪法……さすがに無茶がすぎるせいか、変なところが多いの。たとえば『とにかく実戦あるのみ☆』とか。神殺しは人間に似てるだけで、中身は魔獣みたいなものだから、自然と獣けものっぽくなるのかしらねー？」

「つまり、地道な努力はまったく意味がない？」

「イエス！　神殺しの権けん能のうは戦場と実戦でしか磨かれないの。でも大丈夫、昔の戦士はみんなそうだったのよ。殺した敵の数だけ強くなったんだから♪」

「物騒な喩たとえを言わないでくださいよ！」

　ウインクしながら親指を立てるパンドラに、思わず叫ぶ護堂だった。

「あとゴドーの権能、ぬるい自作自演は危険そうだから気をつけてね」

「ぬるいといいますと？」

「友達に手伝ってもらって、条件を満たすみたいなズル。ほら、誰かにゴドーをぶん殴なぐってもらえば使えそうなの、なかにはあるじゃない？」

「そういえば、『力の強いヤツが敵のとき』みたいな条件もありましたね」

「それをやって、本番とか実戦並にゴドーの心が昂たかぶらなかったら……たぶん、権能は使えないと思うの。結局、神殺しの力を研ぎすますのは荒ぶる魂たましいだから」

　テンションの高さや緊張感が大切ということか。思い当たる節はたしかにあった。

「だから、もしやるなら『俺を殺してもいい』くらい言っとくといいわよ♪」

「そんなのは絶対にごめんですよ！」

前ぜん途とはさまざまに多た難なんらしい。だが、それでもやらなければ——

目がさめたとき、護堂は白い壁の室内にいた。簡素なベッド。薬品臭。白く味気ない壁に、実用一点張りという感じのサイドボード。どうやら病室らしい。

そして、枕まくら元もとの椅子にすわるのはエリカだった。

ベッドの上で護堂は上体を起こした。メルカルトとの対決で死にかけたが、どうにか復活を遂とげたのだと、なぜか確信していた。

「あなたにひとつ、言っておくべきことがあるわ。心して聞きなさい」

エリカは開口一番に告げた。平静を保とうとはしているが、自制しきれず怒りがにじみ出ている。そんな雰ふん囲い気きの震ふるえた声だった。

「あとでちゃんと生きかえるなら、はじめにそう言ってから死になさい……！　あなたって本当に気の利かない人ね！」

「む、無茶言うなよ。俺もぶっつけ本番だったんだから」

ぴしゃりと怒声をたたきつけられて、護堂はぼやいた。

「この死にかけても復活する力、死ぬ寸前に使わないとダメっぽいから、完全に即死だと無意味みたいだし……。でも、たしかに俺が悪かった」

ベッドの上ではあったが、護堂はきっちりと頭を下げた。

「すっかり心配させたみたいで、本当にすまない。このとおりだ」

エリカの怒りは、本気で心配したからこそだろう。

だからこその謝罪に、勝ち気な金髪少女は意外な反応を示した。

「バカなことを言わないで！　あなたの心配なんて、誰がするものですか！」

　と、顔を真っ赤にしたのだ。しかし、心配していなければ怒る理由もないはず。

　いぶかしむ護堂に、エリカはさらに言いつのる。

「わたしはただ、あなたの不ふ手て際ぎわが目にあまったから苦情を伝えただけ。変なふうに誤解しないでちょうだい！」

　どうやら、怒りの理由をごまかすための宣言のようだ。

　気取った言いまわしを好むエリカにしては、余裕のない物言いだった。

「わたしが心配したのは、せいぜい自分の面めん子つくらいよ。あなたを手伝うために、純潔まで犠ぎ牲せいにしたのですもの。そこまでしたのにあなたが死んだら、いい恥さらしじゃない！」

　しまいには、ツンと顔を背そむけてしまう。意地でも認めたくないらしい。

　苦笑を押し殺しながら、護堂はエリカが落ち着くのを待った。

「ところで俺、どれくらい寝てた？」

「メルカルトと戦ったのは昼すぎ、午後一時前だったわ。でも、今は夜の午後七時。あなたは約六時間、眠りっぱなしだったのよ」

　話題を変えると、エリカはさっと答えてくれた。あいかわらずそつがない。

「ここは病院か？」

「ええ。ソルントの遺い跡せきから二キロの位置にある、小さな病院。倒れたあなたをかかえて、どうにかここまで避ひ難なんしたのよ」

「あの神様相手に、よく俺を助けられたなあ……」

「獅し子しの像を渡しておいたでしょう？　あれは『変形』の魔術で姿を変えさせたクオレ・ディ・レオーネだったの」

　護堂は驚いた。ライオンの置物の正体は、あの魔剣だったのか。

「わたしは離れた場所で戦いのなりゆきを見守るつもりだったけど、あなたったらすぐ死にそうになるのですもの。あわててクオレ・ディ・レオーネを『磁じ鉄てつ』の術で呼び戻したのよ。持ち主のあなたごとね」

「メルカルトは追いかけてこなかったのか？」

「来るわけないわ。さっきも言ったけど、あなたはほとんど死んでいたし」

「え!?」

「全身打だ撲ぼく、数え切れないほどの骨折、内出血、内臓破裂、脳・脊せき髄ずいの損そん傷しよう、全身の八割を超える火傷やけど……。もちろん意識不明で心しん肺ぱい停てい止し、自発呼吸なし」

「そ、そこまでひどかったのか……」

「今度ばかりはさすがのカンピオーネも最さい期ごかと、覚悟を決めたけど」

　憤ふん懣まんやるかたないという感じで、エリカは言った。

「今のあなた、本当にデタラメね。しばらくしたら息を吹きかえして、しかも寝ている間にどんどん体も治ち癒ゆして……今や完全なる健康体だもの」

　本当にデタラメだ。我わが事ながら、全力でうなずく護堂だった。

「ところで、ザンパリーニさんは？」

「暴風に吹き飛ばされたまま行方不明。でも、メルカルトはあのとき彼のことを眼中に入れてなかった。だから、生きのびている可能性は低くないと思うわ。《パノルモス》の魔術師たちが捜索中よ。この天候だから、はかどってはいないけど」

　護堂は窓を見た。びゅうびゅう吹きつけてくる強風と大粒の雨にたたかれて、さっきからずっと窓がガタガタいっていた。

「嵐はあいかわらずなのか？」

「ええ、ずっとこの調子。ただし、暴風圏はパレルモ市を中心としたシチリア島の北西部のみだけど。それとソルントの遺跡公園……すこし前、日没と同時に海へ沈んだわ」

「なんだって!?」

「あの遺跡、海に面した山の斜面にあったでしょう？　大雨で地盤がゆるんだところに、メルカルトがヤグルシとアイムールを撃うちこんだの。遺跡のある山の斜面ごと、土石流になって海に沈んでいったわ」

　護堂はメルカルトの宣言を思い出した。

　日没が来るたび、彼の旧領だった都市をひとつ海に沈める――。

　ソルントの遺跡は観光地とはいえ、幸いにも訪れる人のすくない場所だった。だが、明日の標的はパレルモ。一〇〇万の人々が暮らす都市だった。

　護堂の恐怖を見抜いたようにエリカはうなずくと、話題を変えた。

「ところで、いくら生命力過か剰じようなカンピオーネでも、今回の復活劇はちょっと奇跡的すぎると思うのだけど。手品のタネは何？」

「……ウルスラグナの化け身しんに羊ひつじはいたっけか？」

「十の化身の八つめが『雄羊』になるわね」

「じゃあ、それだ。メルカルトにやられたとき、羊のことが思い浮かんだんだ。そいつに頼れば死なない気がして、念じてみたら……このとおりだ。でも、わからないな」

　護堂はベッドの上で首をかしげた。

「十の化身の能力は牛が怪力、駱駝らくだがキック力、猪いのししが怪獣で、鳥はすばやくなった。その辺はなんとなくわかるんだけど、羊で回復するのは何でだ？」

「古来、羊は豊ほう穣じようなる生命力の象しよう徴ちようだからかもしれないわね」

　エリカがよどみなく答えたので、護堂は目をみはった。

「羊はとても飼育しやすい獣だから、かなり古くから家畜として、食糧として人類の生活を支えてきたわ。つまり、命を支える獣というわけね。そこから転じて、聖獣となる」

「聖獣……」

「羊は王権との結びつきが強い聖獣よ。古代——特に遊牧社会では、牧畜の規模がそのまま食糧の豊かさ、財力、そして養える民たみの数に直結したから」

　羊にそんな意味があったとは。護堂は目を丸くした。

「護堂が簒さん奪だつした十の化身は、たぶんウルスラグナがそれぞれの姿に変化したとき発揮する能力——それらを部分的に再現するんだわ」

「たしかに、あいつはもっといろいろできたよな。回数制限もなかっただろうし」

「回数制限？」

「この力をはじめて使ったときから、なんとなく感じてるんだよ。一度使った化身は、しばらく使えなくなるようだなって。そうだな……勘だけど、たぶん丸一日はダメだと思う」

　護堂が言うと、エリカは軽くため息をついた。

「まあ、十もバリエーションがある以上、そういう制限があってもおかしくないわね。あとは化身を使うための条件よね」

「ああ。牛は力の強い敵と戦うとき。駱駝は傷を負ったとき。猪はでかい標的をつぶしたいとき。鳥は敵がものすごく速いとき。羊はたぶん死にかけたときだけ使えるみたいだ。……じゃあ光る武器はいつ使えるんだろうな？　そうだエリカ、例の光るやつだけど——」

「ウルスラグナが使っていた『黄金の剣』でしょう？」

　死にかける前のひらめきを言おうとしたら、エリカに先まわりされた。

「あなたの回復中にわたしも思い出したわ。『キラキラ光る武器』なんて野や暮ぼな形容じゃなくて、『輝く光の剣』とか言ってくれれば、すぐ気づいたでしょうけど。どうやら護堂、あなたには詩人の才能が欠けているようね」

　憎まれ口をたたかれて、護堂は頭をかいた。

「まあ、そいつは全面的に認めるよ……。とにかくさ、どうにかして『剣』の使い方を突きとめられないか？」

「今までそうだったように、ぶっつけ本番しかないんじゃないかしら？」

「神様との戦いは、たぶんそれだけじゃダメなんだ」

　考えこむエリカに、はっきりと護堂は告げた。

「何て言えばいいんだろうな……そう、心の赴くまま、本能の導くままに戦うのは大前提なんだけどさ。でも、ずるさとか抜け目なさを忘れたらいけない気がする。あの遺跡に行く前の俺は、そこがダメだったんだと思う」

　心のどこかに刻まれた警句を読みあげるように、つぶやく。

　それを興味深げに聞いたあとで、エリカは新情報を教えてくれた。

「わかったわ、あとで考えてみましょう。ところで、サルデーニャ島のルクレチアが目覚めているの。さっき向こうからカリアリの結社経由で連絡があったわ。護堂とも話をしたがっていたから、電話をかけてみましょう」

2

『ふむ……ひとまず祝いを言っておこうか、少年。一般人から魔王レベル１へのジョブチェンジ、無事すんだようで何より。まことにめでたい』

小さな病院の閑かん散さんとしたロビー。

その隅にあった公衆電話で、護ご堂どうとエリカは旧知の女性宅と連絡を取っていた。

『大体のところはエリカ嬢から聞いた。神殺しに転生してすぐに神王メルカルトとの対決とは、君もなかなか波は瀾らん万ばん丈じような身の上だな』

ルクレチア・ゾラは、あいかわらず超然たる口調だった。

『手伝いにいってやりたいが、この悪天候だからな。船も飛行機も出ないし、魔術で飛ぶのも危険だ。というわけで、心からの声援だけ送ってやろう。まあ、がんばれ』

「……ありがとうございます」

テンションの低い激励だったが、護堂は受話器越しに礼を言った。

「ところでルクレチアさん。ウルスラグナが使っていた金ピカの『剣』……どうやら俺も使えるみたいなんですけど、どんな条件があると思います？」

単たん刀とう直ちよく入にゆうに訊きいてみた。欧州屈くつ指しの魔女だというルクレチアなら、有益なコメントをくれるかもと淡く期待したのだ。

『私にわかるわけないだろう』

「ですよねえ」

『たしかウルスラグナは敵とする神の来歴をつまびらかにすることで、相手の神格を切り裂いたのだったな。——いや、待て……』

不意にルクレチアは口ごもり、それからささやいた。

『学べ。敵を学び、智ち慧えの刃やいばを研とぎすませ』

いきなりの指示。護堂は「え!?」と聞きかえした。

『ふふふ、急に霊視が降りてきたので託たく宣せんできた。運がい

いな、少年。いや、地ち中ちゆう海かいに満ちるメルカルトの神気がわたしの霊感を刺激したのだろうから、幸運ではないか……』

「どういう意味ですか、それ？」

『なに。敵の強大さが君にささやかな有利をもたらしたということだ。くわしい解説はエリカ嬢に頼むといい。御ご武ぶ運うんを祈っているぞ、魔王陛下』

「さすが、ルクレチアは最上位の魔女ね」

　嵐の夜道を走るＢＭＷの後部座席で、話を聞いたエリカは賛嘆した。

　さっきの病院は、ソルント遺跡公園近くの小さな街にあった。しかし、護堂が回復した以上、留まる理由もない。《パノルモス》に連絡を取り、迎えに来てもらったのだ。

　ハンドルをにぎるのは、ザンパリーニの配下である。

「彼女が得てくれた霊視はとても大きいわよ。これで勝負の行方ゆくえが決まるかもしれない」

「霊視――千里眼みたいなやつだったな、たしか」

「ええ。ウルスラグナ最後の化身は黄金の剣を持つ『戦士』。わたしたちも見た、神を切り裂く言こと霊だまの使い手よ。護堂、あなたはおそらく敵とする神格について学ぶことで、あの剣を研ぎすませるのよ。さっそく試ためしてみましょう！」

　エリカが勢いこんで言う。もちろん異論はない。

「メルカルトは古代フェニキアの神界を統すべた王。本名がバアルというのは、前にも教えたわね。彼の神話はギリシアにも伝わり、英雄ヘラクレスの原型にもなったわ」

　以前も語った話を、おさらいするようにエリカは繰りかえした。

「バアルはとても古い起源を持つ天空神よ。彼の名が旧約聖書にもはっきりと記しるされているのを知ってる？　バアルはユダヤ教と

キリスト教の《神》にとって最大の敵であり、また、それらの一神教に多大な影響をあたえた神格なの」

「え、そうだったのか!?」

「旧約聖書では、唯ゆい一いつ神しんへの信仰を持たぬ人々がたびたび邪じや神しんの偶ぐう像ぞうを崇あがめているわ。あれは多くの場合、バアルのことなのよ。彼は旧約聖書の舞台となる古代のカナン地方で、最も信仰された神だから……で、どう？」

「うーん。何かがたまっていくような感じ……って言えばいいのかな？」

　心のなかのプールに、わずかずつ水滴が落ちていくような——。

　エリカの語るうんちくを聞いて、そんな印象を受けた護堂だった。

「方向性としては、まちがってない気はする」

「そう。なら、取りいそぎメルカルトの来歴をあなたに講義してあげるわ。二、三時間もあれば、ひととおり終わるでしょうから、心して聞きなさい！」

　風ふう雨う雷らい鳴めいが荒れ狂う夜道をパレルモ市までドライブする間、エリカは明めい晰せきな口調と音楽的な声で語りつづけた。

　主人不在のザンパリーニ邸ていに落ち着いたあとも、昨日の寝室で講義は続いた。

　エリカは話すのも教えるのも上う手まかった。筋道立てて、たとえ話なども交えて、わかりやすく『メルカルトとは如い何かなる神か？』を教えてくれた。

　だというのに——

「ダメ……みたいだ。何でだ!?」

　いまだ嵐の収まらない深夜〇時。護堂は頭をかかえた。

　エリカの講義を聞いていると、心のプールにわずかずつ知識とい

う水がたまっていく。黄金に輝く鋼はがねがすこしずつ錬れん成せいされるようにも感じる。だが——足りない。

「何が足りないんだ、一体？」

　メルカルトについて二〇〇字以内で小論文を書けといわれても、今の護堂なら大丈夫なはずだった。なのに、なぜ？

「ルクレチアがまちがえた……？　いいえ、彼女ほどの魔女が得た霊視に、そんな不ふ手て際ぎわがあるはずない。ありえそうな問題は——まさか」

　エリカが何かに気づいた様子でハッとした。

「ねえ、護堂はバアルをはじめとするウガリット神族が、そのルーツのひとつである古代シュメールの文明から受けた影響について語ることはできる？」

「無理に決まってるだろ。たしかシュメールってメソポタミアの古代文明だっけ？」

　うろおぼえの知識で護堂は言った。

「そもそも、そんなことエリカから教わってないんだからさ」

「じゃあ、バアル＝メルカルトを主神として信仰したフェニキア人やカナン人、ヘブライ人なんかが古代オリエントと地中海の間ではたした役割については理解している？」

「まさか。フェニキア人は海洋民族ってくらいしか聞いてないし」

「きっとそれだわ！」

　かぶりを振ったら、すかさずエリカに言われた。

「今のあなたは神のプロフィールを暗記しただけで、神の本質や形成過程を真に理解したわけじゃない。だから黄金の剣を使えないのかも……」

「丸暗記するだけじゃダメってことか⁉」

　護堂は愕がく然ぜんとした。だが、たしかにうなずける話だっ

た。

「小論文どころか、本の一冊や二冊書けるくらいの知識が要いるのかよ。……参考までに訊きくけど、俺はどんなことを勉強すればいい？」

「そうね……フェニキア史はもちろん必ひつ須す。古代パレスチナについても同じね。オリエントの土ど壌じようから生まれたユダヤ教とキリスト教についても押さえておきたいし、最古の文明といわれるシュメールについても知っておいて然しかるべきだわ。あと、やっぱりエジプトも。それから、天空神という存在を生み出した原始遊牧社会についても――」

「その講義、半日くらいで終わりそうか？」

「バカね。その二〇〇倍は時間をかけなくちゃ無理よ」

「「…………」」

　直面する問題の厄やつ介かいさに気づいて、護堂とエリカは絶句した。

　その瞬間、巨大な雷が近くに落ちた。

　ドオオオオォォォォォォンンッ！　轟ごう音おんが鳴りひびく。

　さらに、強風にあおられて飛んできた板きれが寝室の窓に「バン！」とぶつかった。ガラスがパリンと割れ、強風と強雨が室内に吹きこんでくる。

「こうなったら、やるしかないか……」

　嵐が勢いを増していると知って、護堂はつぶやいた。

「エリカ、とにかく必要だと思うことを片っぱしから俺に教えてくれ。間に合うかどうかはわからなくても、やれることは全部やるべきだ」

「やるだけ無駄よ。そんなことよりも、もっと現実的なプランを検討すべきだわ」

　ともかく前に進む意志を示した護堂に、エリカが意見する。

「たとえば『教授』の術で、必要そうな知識を全て短時間で脳に流しこむとか……。そちらの方が遥はるかに効率いいし、現実的だわ」

「え？　そんな便利な魔法があるのか⁉」

「ええ。半日くらいしか保たない術だけど、書しよ斎さいにある全すべての書物の内容を教えることだってできるわ。ただ、あなたはカンピオーネだから」

　一度は希望を示したエリカだったが、すぐ憂ゆう鬱うつそうに言った。

「わたしたちの魔術、あなたには全てはじかれるのを覚えてる？　あれは敵対的な術だけでなく、有益な魔術も同じなの」

「じゃあ、やっぱり魔法抜きで覚えるしか方法はないわけか……」

「まあ、そこはビアンキじゃないけど、抜け道が——あ」

　エリカはまずいことを言ったという感じで、口をつぐんだ。しかも、彼女の美び貌ぼうが真っ赤になっていく。護堂は首をかしげた。何だというのだ？

「そこまで教えて、途中でやめないでくれよ。続きを言ってくれ」

「い、言えるはずないでしょう！　わたしはこれ以上純潔を失うわけにはいかないの！　今のは聞かなかったことにして頂ちよう戴だい！」

「ち、ちょっと待てよ！　どこに行くんだよ⁉」

　赤面しながらエリカは叫び、唐突に寝室から出ていってしまった。護堂の制止も聞かず、彼女の背中はどんどん遠ざかっていった。

3

そして夜が明け、翌日の午前一一時。

護ご堂どうはザンパリーニ邸ていのやたら広い居間で、無む為いにすごしていた。ホテルのロビーさながらに、大きなソファが三つも置かれている。大画面の液晶テレビもあった。

エリカは昨夜いなくなったままだ。メイドたちに訊きくと、館やかたから出ていったらしい。

探そうかとも護堂は考えたが、思うところあってやめた。今はひとりソファに腰かけて、テレビを眺めている。地元ケーブルテレビのニュース番組だった。暴風暴雨の圏内に入ったまま半日以上が経過したパレルモ市の模様を、ライブ中継している。

港のある内湾は、おだやかな海のはずだった。しかし、今は激しく荒れている。

海に近いヴィットリオ・エマヌエーレ大通りも水びたしだった。

ここは市の目抜き通りで、ドゥオモやノルマン王宮など観光名所を数多く楽しめる。通りの西端にはヌオーヴォ門、東端にはフェリーチェ門という一六世紀の建築物があった。

さっきスーツ姿のザンパリーニ配下をつかまえて、市内の状況も訊たずねた。

なんでも、パレルモ湾の上空におそろしく濃い霊気がわだかまっているらしい。そこでメルカルトは嵐を起こしている……と、魔術師たちは観測したそうだった。

それにしても、たしかに激しい嵐だが——。

護堂が知る最大級の台風とくらべれば、雨量も風速も決して最高潮とはいえない。テレビを見るかぎり、パレルモ湾近辺の道路をどうにか自動車も走っている。都市機能が麻ま痺ひするほど冠水していないのだ。

メルカルトにとって、この嵐は準備運動にすぎないのだろう。

日没後に繰りだす攻撃こそが、かの天空神にとっては正式な神罰なのだ……。

「やっぱり、俺がどうにかしないとまずいんだよなァ……」

　つぶやくと、護堂は気分が重くなった。

　状況に流されるままメルカルトと〝対決〟したら、結果はあのとおりだ。反撃の糸口すらつかめないまま死にかけた。再挑戦しても結果は変わるまい。

　テレビの映像を、護堂はずっと暗い気分で眺めていた。

　停泊していた船という船が大小問わず、かたっぱしから流されていった港。

　やまない豪雨のせいで、水びたしの市街。ごうごうと吹く強風に飛ばされていく看板や木材、どこかの家の建材らしきレンガや木造の小屋……。風で枝が折れるどころか、幹をへし折られた街路樹もあちこちで散見できた。

　パレルモ市内は惨さん憺たんたる状態だった。

　すでにメルカルトは予告している。今日の日没、この街を海に沈めると。

「見て見ぬふりはできないか……」

　数々の光景は、あくまでテレビを介して目撃したものだったが。

　護堂の決意をうながすには十分すぎた。軍神ウルスラグナと嵐の神メルカルトの戦いに首を突っこんだ者として、事態を収拾しなければ――。

　このとき、気配を感じて護堂はふりかえった。そこにエリカがいた。

「何よ。わたしを探そうともしないで、こんなところでのんびりして」

　なじるようにエリカから言われて、護堂は冷静に答えた。

「おまえのことだから、戻ってくると思ったんだよ」

「どうして？」

「メルカルトにすこしでも勝ち目がありそうなのは俺だけ。そして、勝ち方がわかっていそうなのはおまえだけ。俺とおまえが組まなきゃ、あの神様は止められない。頭のいいおまえなら、きっとそう考えて戻ってくると思ったんだ。まあ——」

　明らかに怒っているエリカの顔を見て、護堂は付け加えた。

「たぶん、ほかの選択肢がないから仕方なく……だろうとも思ったけど」

「あたりまえでしょう!?　これ以外に活路はないから、断だん腸ちようの思いで帰ってきてあげたの。なのに護堂ったら、あいかわらず能天気そうで腹が立つわ！」

「の、能天気なことあるか」

　八つ当たり気味のエリカにとまどいながら、護堂は言った。

「これでも狙ねらわれている街や島のこと、本気で心配しているんだぞ」

「わたしだってそうよ。……処女おとめの純潔を守るためなら、都市のひとつやふたつ犠ぎ牲せいにしても——とか思ったけど。騎士として、そんな邪じや念ねんに負けることはやっぱりできなかったわ」

「純潔？　そういや昨日もそんなこと言ってたよな」

　いぶかしむ護堂の前で、いきなりエリカは指先で複雑な形の印を宙に描いた。

「……結界の魔術よ。しばらくの間、何なん人ぴともここに立ち入ることを許さない術」

　人払い！　護堂はますます不審に思った。

「魔王カンピオーネに魔術は通じない。これは容易にくつがえせない大原則よ。でも、例外事項はちゃんとあるの。護堂、あなたはもうそれを経験しているわ」

「え？」

「ビアンキと揉めたあと、薬を渡したでしょう？　あれは服用した人間に治ち癒ゆ術じゆつをかけるのと同じ効果があるの。そのおかげで傷の治りが早くなったのよ」

「あれ？　でも、カンピオーネに魔術は効かないんだよな？」

「ええ。ただし魔術的な薬品を摂せつ取しゆして、体の内部から術をかける場合はべつ」

「じゃあ昨日エリカが言った、知識を教える魔法の薬——それを飲めば！」

「問題はそこ。ないのよ、そんな薬は。仮にあったとしても、あなたが必要とするメルカルトの知識を都合よく教えてくれる可能性は……ゼロでしょうね」

　にべもなくエリカは言ってから、決然と護堂をにらんだ。

「残された方法はひとつしかないわ。あなたに経けい口こう摂せつ取しゆで『教授』の術をかけて、然しかるべき知識を吹きこむ——。一晩考えぬいたけど、それ以外にないのよ！」

　経口摂取？　つまり、それはもしかして。

「まさか……く、口うつしってことか⁉」

「ええ、そのまさか。他の方法であなたに術をかけることは不可能だもの」

　いつしか護堂とエリカは真正面から向き合っていた。

　ふたりとも顔が真っ赤だった。こんな話、恥ずかしいにも程ほどがある。

「純潔を気にするってことは……エリカもやっぱり、経験とかない、のか？」

「な、ないに決まってるわ。わたしはブランデッリ家の娘として、処女おとめのまま愛する男性と結ばれることになると思っていたもの……」

　わなわなと唇くちびるを震ふるわせながら、エリカが告白する。

「だけど、でも、こういう事態になったのだから、仕方ないじゃない。もしわたしが『王』の立場で、戦うために必要な知識を持つ乙女がそばにいるなら――即座にその唇を捧ささげろと命じるわ。神と戦うためですもの」

「い、いや、でも。やっぱりこういうのはよくないだろ！」

「だから仕方ないこと――いいえ。この言い方は卑ひ怯きようね。これは、わたしたちが為なさねばならないことなの。あなたは『王』として戦うために。わたしは騎士として『王』を補佐するために。何より無む辜この民たみと街を救うために」

　凛り々りしい誇りと共に、また純潔の乙女らしい恥じらいと共に、エリカは言った。

　そして、護堂の顔へと己の唇を寄せながらささやく。

「あなたにもわかるでしょう？　他に方法はないって」

「あ、ああ。だけどさ、こういうのはなんというか――」

「煮えきらない人ね……。いいわ、その勇気がないというなら、わたしの方からあなたの唇を奪ってあげる……」

　勇ましく宣言して、エリカはさらに唇を寄せてきた。だが。

　護堂の唇に届く寸前で、動きが止まる。彼女のつややかな唇は、わなわなと震えていた。やはり怖いのだろう。初めての経験をすることに躊ちゆう躇ちよしているのだ。

「護堂。あなたは『王』で、わたしは騎士なの。おたがいにすべきことを見失ったらいけないわ……」

　震えながらエリカは勇気を振りしぼり、ふたたび顔を寄せてくる。

　それで護堂も決心がついた。ウルスラグナとの戦いのあと、主導権はほとんどエリカのものだった。だが、いつまでもそうではいけない。

絶対に他人まかせにしてはいけないことがある。

その最たるものが『決断』だ。そして『責任を負うこと』だ。だったら俺は――

「エリカ、俺はメルカルトと戦う。すまないけど力を貸してくれ！」

宣言するのと同時に、護堂は自分から顔を寄せ――エリカの唇を奪った。

「ん、んんっ⁉」

「教えてくれ、あの神様のことを」

不器用にキスしながら、つぶやいた。エリカの唇をふさぐ。

「わ、わかったわ。いい、護堂？　メルカルト＝バアルはもともとセム語族系の原始遊牧社会が生み出した、きわめて古い神格よ……」

「せ、セム語族？　そ、それって具体的には……？」

「いちいち訊かなくてもいいのっ。ちゃんと教えて――伝えてあげるから……んんっ」

ふたりとも明らかに慣れていなかった。

キスしながら、唇を合わせながら、せわしなく話したり問答をする。その拍ひよう子しに歯と歯がぶつかったり、要いらぬことを言ったりもしてしまう。

しかし、それでもふたりはしっかりと、唇を合わせた。

多た彩さいなイメージと知識を、エリカの魔術が護堂の脳内に送りこんでくる。数多くの地名と歴史のドラマ。この地に君くん臨りんした神々の名と神話。さまざまな要素を結びつけ、あるいは解体するためのキーワード……。

「メルカルトの本体であるバアルは、日本のような四季のある土地では成立しない神格よ。彼は砂漠と荒野で誕生した神。そして、烈はげしい太陽と雨の双方に形成された『嵐の神』なの」

　熱くささやくエリカの唇は、たまらなく甘やかだった。

「バアルについて記しるした文ぶん献けんはとてもすくないわ。だけど、彼が頻ひん繁ぱんに登場する古こ文もん書じよがひとつ、わたしたちのごく身近に現存している。それが旧約聖書。バアルの痕こん跡せきは、実は彼を最も敵視した宗派の聖典にこそ数多く見み出いだせるのよ！」

　知識の伝達を繰りかえすうち、ふたりは次第にのめりこんでいった。

　護堂は自分の唇を、エリカの唇にかぶせるように押しつける。エリカの口がふさがれる格好になったが、それでも途切れることなく知識は送りこまれてくる。

　だが、彼女はそのまま受け身にはならない。

　エリカは唇を開き、今度は彼女が護堂の口をふさぐようにキスしてくる。



さらに護堂の唇を自分の唇で丹たん念ねんになぞる。ふたりの唇の間にわずかな空間、隙すき間まさえ作るまいと丁てい寧ねいにキスを続ける。

もっと深く、もっと心をむき出しにして相手とつながりたい——。

護堂はそう願っていた。おそらくエリカも同じ気持ちだったはずだ。だから、ふたりの接せつ吻ぷんは自然と濃厚になっていった。

ふたりともこういうことに不慣れなせいか、あまり激しくはならない。

だが、唇の端から唾液がこぼれ出てしまうほど濃密な口づけを繰りかえし、ふたりとも口元をたっぷり濡らしながら、行為に夢中になった。

やがて、おたがいにハッとした表情で唇を放し、赤面してしまう。

直後、自分のなかに眠るウルスラグナの力が目覚めるのを、護堂は感じた。

さっきまで水滴がわずかずつ溜たまるだけだった心のプールに、一気に水が湧わき出てきたような——不思議な充足感に満たされていた。

使える。軍神ウルスラグナも用いた、神を切り裂く言こと霊だまが使える。

新たな武器を得たと確信し、深くうなずく護堂だった。

4

事後の気まずさといったら、並大抵のものではなかった。

おたがいの顔をまともに見ることができない。とにかく恥ずかし

かった。

　エリカになんと声をかけるべきか、護ご堂どうは必死で考えた。だが、この手の経験が皆かい無むの一五歳男子である。模範的な解答など見当もつかない。

「あ、あのな、エリカ……」

「何も言わないで！　その必要はないから……。わたしは大丈夫。エリカ・ブランデッリはこんなことで取り乱したり、ショックを受けたりしないの」

　護堂の声をさえぎってから、エリカは自みずからに言い聞かせるようにつぶやいた。

「それに……いくら緊急事態でこれしか選択肢がなかったとはいっても、わたしにだって許容範囲があるもの。相手がミミズやハイエナのような男の子だったら、舌を噛かんで自殺してでも唇くちびるなんか許してあげなかったわ」

「……そ、そうか」

「ええ。カエルに化けた王子さまにキスした姫君だっていたのだもの。それとたいして変わらないわ。だから、わたしは本当に大丈夫」

　ショックもあるようだが、負けん気も健在らしい。

　護堂はすこし安心した。この華か麗れいな少女にわずかでも活力が甦よみがえるのなら、ミミズでもカエルでも好きなように呼んでくれてかまわない。心からそう思う。

　ここまでしてくれたエリカに、なんとしても報むくいたい。護堂は言った。

「なあエリカ。俺は平和主義者だし、ケンカや暴力沙ざ汰たはきらいなんだ。それと、勝負事に絶対はないってのも、俺の信念なんだけどな」

「どちらもあなたらしい言いぐさよね」

　すこしらしさを取りもどしたエリカへ、さらに告げる。

「これからメルカルトにケンカを売りにいくぞ。あいつには絶対負けない」

「……本当に絶対？」

「ああ。誓ったっていい」

「そう。ならいいわ。それなら全て許してあげる。護堂、わたしのために戦うと約束しなさい。そして、この島から必ずメルカルトの脅きよう威いを振り払ってみせると！」

「あたりまえだ。まかせろ！」

　それっきり、ふたりは『教授』について何も言わなくなった。

　エリカは力強く顔を上げ、いつもの華か麗れいさで金髪を王冠のごとくかかげる。護堂も今の一幕を忘れることにして、いつもどおりに戻る。

　あとは戦うだけだった。エリカが《パノルモス》の魔術師に声をかけ、車を出させた。めざすは海。メルカルトが上空にひそんでいるというパレルモ湾だった。

　テレビでなく豪雨に打たれる車の窓越しに、市内の惨さん状じょうを見ることができた。

　悪天候のせいで、ほとんど人の姿はない。

　排水しきれない雨水が道路にあふれ、ちょっとした川ほどの水量だ。

　それでも車高が高く、水に強い４ＷＤを出してもらったおかげで、どうにか海沿いの大通りにやってこられた。パレルモ湾に面するカーラ通りである。

　昔は貿易港だったという広いヨットハーバーの前で、護堂とエリカは車を降りた。

「昨日のうちに《パノルモス》が手をまわして、海辺の建物や施設にいた人たちを避難させたらしいわ。この界かい隈わいは基本的に無人のはず。人的被害は考慮しなくても大丈夫よ」

「こんな荒れた海の近くにいたら、いつ大波に呑のまれるかもわからないしな」

　パレルモ湾は紀元前の昔から良港だった。すばらしくおだやかな内湾なのだ。しかし今、この海は嵐の外洋さながらに荒れ狂っていた。

　スコールのような雨のせいで、ふたりの服もぐっしょり濡れる。

　今は午後の二時前。日没までに神を倒さなければ、パレルモも海に沈む——。

　護堂が目くばせすると、エリカはすぐに離れていった。すこし距離を取り、戦況の変化に合わせて援護に入る。それが彼女の役割だった。

　神との対決で、ＲＰＧのパーティーよろしくいっしょに戦うのは危険だ。

　ザンパリーニの一件が教えてくれた。あのときのエリカのように、仲間は後方にひかえて予備戦力となる方が臨機応変に対応できていい。

「いるか、メルカルト!?　今度は俺の挑戦につきあってもらうぞ！」

　護堂は大雨に打たれながら、海へ叫ぶ。直後、稲光がきらめいた。

『ほう！　東方の神殺しよ、なんと生きのびておったか！』

「ああ、どうにかな！」

　雷鳴と共に轟とどろく神の声へ、護堂も大声で答えた。

『くくく……我が兄にして竜王なるヤムを討うちしメルカルトも、すこし老いたな。よもや、敵の余力を見あやまるとは！　不死の神性を持つ神は多いが、どうやら貴様にも同じ権能が備わったと見える！』

　やにわに豪雨がやんだ。

　ぶあつい雷雲に切れ目が生じ、陽ひの光が地上に降りてくる。

　その光のなかに『まつろわぬ神』がいた。姿形はかつてサルデーニャ島の遺い跡せきで対たい峙じしたフェニキアの神王と同じである。

　筋きん骨こつ隆りゆう々りゆうとした、野性味あふれる壮年の大男。ぼさぼさの蓬ほう髪はつが印象的だった。衣装はすりきれたマントに薄汚いボロ布、革かわの胸当てにサンダル。だが、粗末な身なりに反して、すさまじい『王』の威厳もまとう。

　そして巨大だった。メルカルトの背丈は一五メートル近くもあった。

『貴様がウルスラグナより奪った権けん能のう、なかなかに行きとどいておるな。だが、その小こ賢ざかしき力、当てにせぬ方がよいぞ。不ふ撓とう不ふ屈くつの竜狩人にして電光の化身たるメルカルトにくらべれば、千せん変ぺん万ばん化かの軍神ごとき、所しよ詮せんは小物！』

「それはどうかな。あんたはたしかに古い神様たちの『王』だったようだけど」

　陽光と共に降こう臨りんする巨人を見あげながら、護堂は言った。

「決して無敵でも、敗北を知らない存在でもなかった。だけど、あいつ——ウルスラグナは最強で無敵、無敗だって自じ称しようしていたぜ。まあ、自己申告ってところが微妙だけど、そう不利な勝負にはならないんじゃないか？」

『ほう。わしの全てを知り尽くしたような口を利きく……』

　巨大なメルカルトは海沿いの大通りに降り立ち、にやりと笑った。

『だが、いくさ場にて振るうべきは言葉に非あらず。矢と刀、そして拳こぶしよ。くくく、これより我が長き腕かいなを振りおろし、その身に教えてくれよう！』

「いいや。言葉は力になり、剣になる。もう忘れたのか、メルカルト」

　護堂の心に次々と言葉が浮かんでくる。

　もうわかっている。これらは言こと霊だまだった。軍神の権能を操るための聖句。草くさ薙なぎ護堂のなかに眠る力を呼び起こし、高めるための呪じゆ言ごんだった。

「あんたの力も、あいつの言葉で斬り裂かれただろう？　あれを俺が受け継いでないと思うのは、ちょっと早いんじゃないか!?　――我は最強なり！」

　護堂の言霊を聞き、メルカルトは『ぬ!?』と身がまえた。

『貴様、あやつの刃やいば――輝く黄金の剣まで、簒さん奪だつしおったか！』

「ああ！　これらの呪言は雄弁にして強力なり。我が敵を斬り裂く智ち慧えの剣つるぎなり。我は最強にして、全ての勝利を掴つかむもの。全ての障しよう碍がいを打ち砕くもの！」

　ウルスラグナ最後の化身『戦士』となった護堂は、黄金の剣を解き放つ。

　周囲に輝かしい光があふれだした。

「メルカルトは古代の中ちゆう東とうで生まれた神だ。真の名はバアル。彼はもともと、羊を飼い慣らして日々の糧かてとした原始的な遊牧民が崇あがめる神――《天》だった。原始、人々はどこまでも広がる天空そのものを神と見なしていたんだ！」

　言葉に応こたえて顕あらわれたのは、いくつもの小さな光の球だった。

　最初は一〇個ほどしかなかったが、すぐに数倍に増えた。全て黄金色に輝いている。

　これこそが『剣』。神を斬り裂く黄金の刃だった。

「中央アジアの遊牧民――たとえばモンゴル人も、同じように《天》を神格化した。でも、バアル＝メルカルトは中東……オリエントの地で生まれた神。只ただの天空神にはない、大きな特徴があった。それは『雨期』の神であることだ！」

　目の前にいる神が何者か。ささやくたびに周囲の光は増え――いつしか千を越す光の玉たちが、護堂のまわりできらめくようになった。

　それはさながら夜空を満たす星々の輝き、銀河のきらめきだった。

「乾期と雨期がはっきり分かれる中東の地では、雨期にのみ『嵐』は到来する。暴風と竜巻が荒れ狂い、大雨で地は沈み、稲妻も降る。でも、嵐がもたらす雨――水の恵みがなければ、植物も獣けものも、もちろん人も生きていくことはできない。あんたの『嵐』は多くのものを薙なぎ倒すけど、ひきかえに命の糧にもなってくれるんだ！」

『フ――左様。わしは雨期の嵐。天の恵みと天の滅びを共に具現する神！』

　メルカルトが叫ぶ。

『賢さかしげな口で鍛きたえた剣の出来映え、試してくれよう。風よ、雨よ、雷よ！』

　これも言霊だった。護堂が使うのと同じ、力持つ言葉だ。

『我メルカルトの本地たるバアル・ハダドの名において呼ぶ！　嵐よ、雲に乗る者の召し出しに応じ、疾とく来たれ！』

　メルカルトのたくましい巨体から、暴風がまき散らされた。さらに、幾百筋もの雷が三六〇度全方位に向けて放たれる。

「あんたは遊牧民の崇める嵐の天空神だった。この民はやがて、海や大地の神を信仰する農耕定住民と交わり、武力で圧倒し支配すらするようになった！」

『くくく。より強く、たくましき者が柔弱な輩やからを屈くつ服ぷくさせる。世の理ことわりよ！』

「村や街で生活する農耕民の崇めた海の神、大地の神を象しよう徴ちようする聖獣こそが『竜』。だから、バアル＝メルカルトは竜狩人なんだ！」

　ウルスラグナを真ま似ねして、護堂はうんちくを語った。『剣』

をより鋭く、あつかいやすくするためだった。

「定住文明の敵であるあんたは野や蛮ばんな大男として現れ、竜を討うつ。そして、粗末な身なりの野人でありながら『王』として君臨し、嵐のように荒ぶる——。これこそがバアル、すなわちメルカルトの本質なんだ！」

　目の前にいる天空神の来歴を叫び、護堂は『剣』を操った。

　黄金の光の一部が使い手の周囲でヒュンヒュンと飛びまわり、乱舞する。護堂を吹き飛ばすはずの暴風は斬きり裂かれ、一瞬にして無風となった。

　護堂を灼やき尽くすはずの雷も寸断され、イオンの異臭だけ残して消滅する。

「我は最強なる勝利者。障碍よ、我が前より退け！」

　今度は護堂の方から攻めるため、ウルスラグナの聖句を唱となえた。

　黄金の光が数十個ほど、メルカルトへ飛ぶ。神本体を直じかに斬り裂くためだ。

『ちぃっ！』

　身の丈たけ一五メートル近いメルカルトが跳躍する。この巨大さでも、さすが嵐の王。軽やかな風と俊しゅん敏びんな雷を統すべる者。みごとに数十の光球を避けてしまった。

　そのまま空中に浮かびながら、メルカルトは豪快に叫ぶ。

『よいだろう、神殺し！　わしも武器を呼び、剣を抜いた貴様につきあってくれるわ。ヤグルシよ、アイムールよ、雲に乗る者バアルがおまえたちを求めておるぞ！』

　号令に応こたえて虚こ空くうより飛来するのは、魔法の棍こん棒ぼうヤグルシ。そして、雷雲のなかより飛来するのは、もちろんアイムール。

　護堂を昨日葬ほうむり去った、メルカルトの聖なる武器であった。

「くそ……やっぱりかんたんには勝たせてくれないな！」

　護堂は舌打ちした。メルカルトは知っているのだ。敵の攻撃が脅威であればあるほど、防御に専念してはいけないことを。嵐の神がそうしてくれれば、護堂は余裕を持って『剣』で攻撃できる。そうして防御壁ごと敵を斬り捨てればいい。だから、逆なのだ。

　守るだけでなく攻撃に出て、護堂にも防御を意識させるべきなのだ。

「追いて駆ける者ヤグルシ・アイムール！　疾とく駆け、疾く飛び、薙なぎ払え！」

「邪じや悪あくなる者、我われを打つあたわず！　強力なる我を畏おそれよ！」

　神と神殺しは忠実な武器を操るために、同時に言霊を唱えた。

5

　エリカ・ブランデッリが見守るなか、決闘は白熱していった。

「獅し子しを狩かり、竜を狩る勇士の誉ほまれ、天あま翔かけよ！」

　メルカルトが言こと霊だまを唱となえ、武器を振るう。それは暴風と稲いな妻ずまだった。

　パレルモの海辺に、竜巻のような威力の風が吹き荒れる。石造り・鉄筋造りの建物が軋きしみ、路みちに停とまっていた自動車もひっくり返り、埠ふ頭とうに停泊していたヨットも海に流される。

　さらに稲妻が途切れることなく黒雲より放たれ、次々と地上を灼やく。

　暴風と雷が襲いかかる目標は、もちろん草くさ薙なぎ護ご堂どうだった。まるで星雲のような千の光をしたがえた少年に、怒ど濤とうのごとく風雷が押しよせる。

　しかし、護堂をぐるりと包囲する光球たちは、風にも雷にも負けない。

　光の玉——ウルスラグナの言霊が生んだ『剣』はヒュンヒュン軽快に飛びまわり、あざやかな軌き跡せきを空中に描いた。

　輝く球体で切られた暴風はすぐさま消滅し、凪ないだ。

　同じように切られた雷も消滅し、稲光の熱と衝撃は無に帰した。

　メルカルトの権けん能のうを、『剣』はよく封じこめていた。考えてみれば、あの光球たちは千以上もある。守備陣形をととのえれば、まさしく難なん攻こう不ふ落らくのはず。

　守備を万全とした剣士は、攻め手の隙すきにつけいるのが定じよう石せきだ。攻めあぐねて体勢を崩したり、攻め疲れるのを待つ。だが、ヤグルシ・アイムールが護堂にそれを許さない。

　第一の棍こん棒ぼうヤグルシは疾しつ風ぷうをまとう。

　左右上下・東西南北と自由自在に飛びまわり、あらゆる方向と角度から風となって襲来し、光の剣陣が守りきれない箇所から、護堂を狙ねらう。

　第二の棍棒アイムールは稲妻をまとう。

　一直線に護堂へ降りかかり、消けし炭ずみに変えるべく熱をまき散らす。その軌道はシンプルだが、とにかく速い。何しろ電光の速度なのだ。

「我は真しん言ごんをもって我が身を守護する……！　我を討うつこと、かなわぬと知れ！」

　多少たどたどしくはあったが護堂も言霊をつむぎ、必死にしのぐ。

　真後ろから降ってきた疾風とヤグルシを、数十の『剣』で受け止めた。そのまま押しつつんで切り刻もうとする。しかし、あとすこしのところで風と棍棒は光の刃たちをすり抜け、空へ舞いもどっていった。

　直後、アイムールが稲妻となって飛んできたので、これはカウン

ターで斬り払った。

　しかし、切り裂くまでには至らない。アイムールは『剣』で払われて、ラケットで打たれたテニスボールのように明後日あさつての方向へ飛ぶ。

「く――！」

　只の風雷を凌りよう駕がする攻撃力のヤグルシ・アイムール。

　これらを護堂はよくしのいでいた。あつかう武器が本物の剣ではなく、言霊でつむいだ呪術の刃であるおかげだろう。

「……もしかしたらカンピオーネの権能は、身につけた当人が自然な形で操あやつれるように顕あらわれるのかもしれないわね」

　エリカはぼそりとつぶやいた。東とう欧おうの魔王ヴォバン侯こう爵しやくはカンピオーネとなった当時、護堂と同じく武芸も魔術もまったく知らなかった。だが、彼は権能『貪むさぼる群ぐん狼ろう』で魔狼の群れを呼び、自みずからも狼に化身して、野獣のごとく戦った。

　当時は一九世紀の前半。

　最新の銃火器と焔ほのおの魔術で大火力を得た傭よう兵へい魔術師団がいた。列強諸国の特殊部隊として活躍した兵たちである。これを殲せん滅めつしたのは、若き日のヴォバン侯爵だった。

　また、欧おう州しゆうの片隅に謎なぞの軍神が降こう臨りんしたとき。

　侯爵は神の聖なる軍勢を葬ほうむるため、己おのれの手足となる魔軍を結成した。

『智ち慧えの王』と呼ばれる老カンピオーネとも、同族同士の熾し烈れつな血闘を繰りかえした。ただの浮浪児だった少年が、ほんの数年で打ちたてた伝説である。

　エリカは今、それに似た物語の第一章を目撃しているのかもしれない。

　その主役である護堂は、メルカルトの猛攻を必死に防いでいる。

しかし、横顔にわずかなあせりの色が見える。顔色でわかった。

　公言したくはないが、彼との間に絆きずなめいた何かが生まれつつあるせいかもしれない。

　だから、だろうか？

　心ならずも彼と行った『教授』の儀式。エリカは護堂の求めに応えて、必要以上に行為にふけってしまった。思い出すだけで顔が熱くなる。

「あれはあくまでその場の勢い、単なる気の迷いだわ。いくら七人目のカンピオーネになった子だからって、エリカ・ブランデッリにふさわしい男性じゃないもの……」

　つぶやきながら、エリカは決闘の方に集中した。

　護堂はあいかわらず、メルカルトが操る暴風と雷らい霆てい、そしてヤグルシ・アイムールをぎりぎりのところで防いでいる。しかし、エリカは確信した。

　やはり彼はあせっている。そして、何かを躊ちゆう躇ちよしている——！

　悟さとった瞬間、エリカは魔剣クオレ・ディ・レオーネを右手に呼び出した。

　いっしょに戦衣サーコートも呼んで、その身にまとう。紅と黒ロッソネロの縦たて縞じまで彩られた守護聖衣は《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》の大騎士にのみ許される装いだ。

「神殺しになったというのに、あいかわらず世話の焼ける人なんだから！」

　そのことを、なぜかエリカはうれしく思った。

　戦場では暴風と雷霆が奔ほん流りゆうのように荒れ狂っている。だが、中心にいる少年めざして歩きだす。そばに行けずとも、声の届く距離まで近づくつもりだった。

　雄お々おしい雌めす獅じ子しの微笑を、華麗にひらめかせながら。

「さすが神様、かんたんに攻略させちゃくれないな……」

　護堂は口のなかでつぶやいた。

　メルカルトの攻撃が風と稲妻だけなら、防ぐのはそうむずかしくない。しかし、真に恐るべきは嵐にまぎれたヤグルシ・アイムール。いつ、どの角度から飛んでくるのか読めない、魔法の棍棒たちだった。

「追う者たちよ！　追いて駆け、海を追い出せ！　海流をも逃さず砕け！」

　メルカルトは嵐吹きすさぶ空中で仁に王おう立だちになり、言霊をつむぐ。

　それに応えて風と雷は躍動し、ヤグルシとアイムールも天あま翔かける。護堂はふたつの棍棒から我が身を守るため、ひたすら『剣』を守備に走らせた。

　あつかう方法は完かん璧ぺきに自己流である。疾風のヤグルシが円えん弧こを描いて飛来する——。これは自分めがけて飛んでくる『ボール』と見立てる。光の刃たちは『グラブ』だ。

　そして、鋭い打球をあざやかにキャッチするイメージ。

　すると『剣』たちはヒュンヒュンと軽快に動き、みごとヤグルシを止めてくれる。

　次いで、稲妻のアイムールがすさまじい速さで飛びこんでくる。

　これはもう、剛速球をバットで打ち返すイメージ。やはり『剣』たちは雷速の棍棒をみごと真ま芯しんでとらえて、カキンと跳ね飛ばしてくれた。

「まあ、球をあつかうところは似てるっちゃ似てるしな……」

　我ながら無理矢理すぎる連想だと思うのだが、意外と上う手まくいっていた。しかし、無視できない問題があった。言霊の刃がすこしずつ減っていくのだ。

まるで、使えば切れ味が鈍にぶる刃物のように——！

はじめ千ほどあった光の玉たち。だが、もう半分ほどになっただろうか。全てなくなる前に、攻勢に転じなくてはいけない。

しかし、メルカルトもそうはさせじと猛攻を仕掛けてくる。暴風と稲妻の乱舞。そして、ヤグルシ・アイムールも護堂を抹まつ殺さつするため、ますます勢いを増す。

「このままじゃジリ貧か……」

すこしずつ追いつめられていることを護堂は悟った。

あせるな。まだ余裕はある。今のうちに反撃の方法を考えろ。焦しよう燥そうを押し殺して、自分に言い聞かせる。だが、問題はもうひとつあった。

護堂がウルスラグナから奪った権能は、おそらく『十の化身』。

しかし、一度使った化身はしばらく再使用できない。ほかの化身で局面の打開を図るなら、鉄壁の楯たてとなっている『剣』を捨てなければならないのだ！

「くくく。たしかに貴様の『剣』は厄やつ介かいだが！」

さらに、メルカルトが哄こう笑しようしながら告げてきた。

「ヤグルシとアイムールは匠たくみの神コシャル・ハシスが造りし神具。わしの武器ではあるが、かの匠の神性も宿しておるのだ！　だから貴様が用意した言霊——メルカルトを斬り裂く言霊だけでは断ち切れぬと知れ！」

そうだったのか！　護堂は愕がく然ぜんとし、そしてうなずいた。

実は不思議だったのだ。風や稲妻は『剣』で消滅させられるのに、なぜヤグルシ・アイムールは打ち返すので精一杯なのだろう、と。

「真の使い手たるウルスラグナであれば、コシャル・ハシスを斬り裂く言霊も合わせ、先の戦いのように我が武具を両断したであろうがな。ふふ——ここが貴様の限界よ！」

　メルカルトに未熟を指摘され、護堂の心はあせりで蝕むしばまれた。

　まだ逆転するための手はある。だが、『剣』を手放すのは正直怖い。これなしで戦いつづけるのは、かなりむずかしいはず。どうすればいい!?

　エリカの叫びを聞いたのは、このときだった。

「護堂！　何を躊ちゆう躇ちよしているのか知らないけれど、前に進みなさい！」

　彼女はいつかも見た紅と黒のケープをまとい、魔剣を手にしていた。

「決闘では前に踏みこんだ騎士が勝利するものよ！　敵を恐れるのはかまわない。でも、恐怖に負けて前進をためらったら、斬り捨てられるのを待つしかないわ！」

　暴風にかき消されないよう、エリカは懸けん命めいに叫んでいた。

「大丈夫。あなたにはエリカ・ブランデッリがついているわ！　相手が『まつろわぬ神』でも、力尽きて倒れる寸前まで、あなたを守ってみせる。だから前へ進んで！　あなたは——絶対に負けないんでしょう!?」

　護堂の全身に、エリカと唇を合わせたときの熱さが甦よみがえった。

　そうだった。ここで怯ひるんだら、約束を果たすことはできない。それに忘れていた。敵が神様でも、俺には勝利の女神さまとタメをはれそうな〝相棒〟がいる！

「我は最強にして、全ての障しよう碍がいを打ち破るもの！」

　護堂は言霊を叫び、『剣』に呪力を注ぎこむ。この戦いを通して、なんとなく呪力とやらの使い方がわかってきた。

「輝く勝利ウルスラグナのため、剣よ、悪あしき者を斬り刻め！」

　黄金に輝く『剣』たちの残りを加速させる。どうせジリ貧なら、

切れ味が十分なうちに有効活用すべきだろう。エリカのおかげで決断できた。

「ヤグルシとアイムールは無視していい！　メルカルトの嵐を――たたっ切れ！」

　これまで『剣』たちは、星雲のように護堂のまわりできらめいていた。

　その数百の輝きがいっせいに動きだす。夜空にアーチをかける彗ほうき星ぼしのように天翔け、巨大なメルカルトの腹部を思いきり斬り裂いた。

『ぐ――ぬおおっ！』

　メルカルトが叫び、嵐の空から地上にふたたび墜おちてくる。

　だが、この一ひと太た刀ちは致ち命めい傷しようには程遠い。荒ぶる巨神は無様に倒れこんだりはせず、どうにか両足で着地した。しかし、護堂は落胆しなかった。

　すでに悟っていたのだ。この『剣』に必殺というほどの威力はなさそうだと。

　むしろ攻防一体・臨りん機き応おう変へんに使えるところにこそ真価がある。たとえばメルカルトを両断できずとも、彼が持つ『嵐』の権能を斬り裂き、一時的に無力化させるような――。

　この斬撃で、護堂が生み出した『剣』は全て消滅した。

　ひきかえに、風と稲妻もようやく収まる。雷雲が一気に晴れ、青空が姿を現した。

　メルカルトは一時的に『嵐の神』ではなくなったのだ。おそらく半日か数時間で回復するだろうが、しばらくの間、厄やっ介かいな『嵐』は封じこめるはず。

『小こ癪しやくな真ま似ねをする！　だが、わしにはまだこやつらが残っておるぞ。ヤグルシよ、アイムールよ、神殺しめを――』

　メルカルトが態勢を立て直そうと叫ぶ。だが、護堂は次の手に移っていた。

「主は仰おおせられる。咎とが人びとには裁さばきをくだせ。背を砕き、骨、髪、脳のう髄ずいを抉えぐり出し、血と泥と共に踏みつぶせと」

　この場にふさわしい言霊が、自然と口をついて出てくる。

　そして、心にひそむ黒い獣が歓喜の叫びをあげた。

「我は鋭く近よりがたき者。主の命により、汝なんじに破滅をあたえる獣なり！」

　滅びの聖句で護堂が締めくくった直後。

　メルカルトのすぐそばに漆しつ黒こくの闇やみが忽こつ然ぜんと発生した。

　その闇は紅ぐ蓮れんの焔ほのおを吐き出しながら、あっという間に『猪』の形に変化する。

　巨大な対象物を粉砕したいときだけ使える、『猪』の化身。体長は約二〇メートル。漆黒の毛皮に、魁かい偉いなほどたくましい肉体。そして、槍やりかと見まごうほど鋭い二本の牙。

　護堂は巨神メルカルトを蹴け散ちらすため、猛たけき神獣を呼び出したのである！

6

　かくして、戦いの様相は一変した。

　これまでは風雷と光の刃やいばが乱舞する、超常の射撃戦。しかし今は、雄お々おしき巨人と黒き巨獣が真っ向からぶつかり合う、特撮めいた格闘戦となっていた。

『ヤグルシよ、アイムールよ、我が手に戻れ！』

　オオオオォォォォォンンンンンンッ！

　叫ぶ巨人と猛たける巨獣が激突する。

背景となるのはシチリアの古都、それも美しい海辺の街並みだ。

メルカルトは右手にヤグルシ、左手にアイムールを持ち、勇士の本領を発揮していた。太く重い棍こん棒ぼうふたつを風のごとく振りまわし、稲いな妻ずまのごとく打ちこむ。

それを俊しゆん敏びんな動きで『猪いのしし』はかわす。

こちらも巨体に似合わぬスピードだった。まさしく野生の獣けもののみが持ちうる速さ、しなやかさで敵襲を避け、そして突撃する。

さすが『猪』。すさまじい猪ちよ突とつ猛もう進しんだった。

ざっ、ざっと後ろ肢あしで地面（正確には道路だが）をかいたら、爆発的なスピードで猛ダッシュ。長い二本の牙を槍やりのように突き出し、メルカルトに体ごとぶつかっていく。

しかし、これをメルカルトは迎え撃つ。

魔法の棍棒でカウンターの一撃をねじこんだり。横に跳びのきざま『猪』の太い首に己のたくましい腕を巻きつけ、レスリング風の絞しめ技を喰くらわせたりして――。

だが、『猪』も負けない。

カウンターの棍棒が、神獣の黒い頭部をガツンと強打する。

その衝撃を『猪』は頑がん丈じような猪い首くびと巨体で持ちこたえ、猪突を続けるのである。すると、メルカルトの棍棒は砕け散りはしないが、空に跳ね飛ばされる。空飛ぶ武器なので、すぐ持ち主の手もとに返ってくるが。

メルカルトにレスリングを仕掛けられても、『猪』は黒い巨体をめいっぱいよじり、全力でイヤイヤをして振り払ってしまう。

一進一退の格闘戦。しかも、当事者たちはどちらもノリノリだった。

『くくく、よいぞ。ひさしぶりに血ち湧わき肉にく躍おどるというものだ！　やはり、こうでなくては戦いとはいえぬ！　存分にかかってまいれ！』

古代フェニキアの神王は痛快そうに笑い、唯ゆい一いつのまともな着衣であるマントを脱ぎ捨てた。革かわの胸むね当あてと短い腰布、サンダルの格好で、王というより野人のごとく暴れる。

対する『猪』も、あからさまにうれしそうな声で吠ほえた。

オオオオオォォォンンンンンッ！

『ふぬああああああッ！』

咆ほう哮こうとかけ声がこだまするたび、まわりは甚じん大だいな被害を受けた。

メルカルトがヤグルシとアイムールを同時に投げる。それを避けるため、『猪』は天空神の巨体に猪突猛進する。

目標を見失った魔法の棍棒たちは、代わりにいくつかのビルを粉砕。

また『猪』の突進を、メルカルトはたくましい筋肉を隆起させて『ふぬうっ！』とガッチリ受け止めるが、その勢いを止めきれずに後ろへ吹っとぶ。そこにあった石造りの瀟しよう洒しやな家がバラバラに砕け散る。

しかしメルカルトは、抱きかかえた『猪』の巨体を道路にたたきつけた。

停車していた車やトラックが巻きこまれ、吹っとんでいく。

「ま、街がめちゃくちゃだ。とんでもないことだぞ、これ」

「住人の避難が終わっていて、本当に幸運だったわね」

護ご堂どうとエリカの前で、海に面したシチリアの美しい街並みが崩壊していく。

ふたりは格闘戦が白熱する大通りを離れて、より海に近いヨットハーバーの方へ移動していた。ちなみに、いつもここに停泊している数十艘そうのヨットは、さっきまでの風と雨でほとんど流されてしまっていた。

だが、格闘戦から距離を取っても安全圏にいるわけではない。

「海を見て、護堂！」

　エリカの警告でそちらを見て、護堂は絶句した。水平線いっぱいに、黒い霧きりが立ちこめている。しかも、この霧は沖の方からすさまじい速さで陸に迫ってくる！

『神殺しよ。貴様の下げ僕ぼくとの戦い、愉たのしませてもらっているが！』

　大通りの方からメルカルトの声が轟とどろく。

『貴様のことも忘れてはおらぬ。そちらが神獣を解き放ったのだ。わしも眷けん属ぞくを呼ばねば、釣り合いが取れぬであろう！』

　黒い霧は、もう埠ふ頭とうの十数メートル手前まで到達していた。

　ブーンという不快な音が耳をつく。これは羽音か？　護堂は理解した。こいつらは霧ではない――イナゴの群れだ！

　霧と見まごうほど大量に集まった、数十万匹はいそうなイナゴの大群だった。

「そうか。イナゴはメルカルトの使いだって、そういえばサルデーニャでも！」

　異常な量のイナゴの群れが農作物を喰くい荒らし、飢き饉きんをもたらす――。

　近代以前、この害虫はしばしば一〇〇億単位で大量発生した。このままでは数十万の蟲むしどもに喰いつかれて、自分たちは死ぬ。『剣』がない今、身を守る武器はない。

　だったら、やつらが来る前にメルカルトを倒す！

「鋭き牙きばを持つものよ。一撃にて撃ち殺し、粉々に踏みつぶせ！」

　護堂は『猪』に渾こん身しんの呪じゅ力りよくを注ぎこんだ。

　神獣の巨体が青い焔ほのおにつつまれて、盛大に燃焼をはじめた。

『ほう、勝負に出るつもりか！　面白い！』

　対するメルカルトも、屈強な筋肉を大きく隆起させた。

　魔法の棍棒ヤグルシとアイムールを『Ｘ』の形に交差させ、迎撃のかまえ。そこに向けて、青く燃える『猪』が全速力で突っこんでいく。

　目にも止まらぬ速さだった。

　しかも、駆ける巨体からは衝撃波ソニツクウエーブがほとばしり、まわりの建物や車を吹っとばす。ここに来て『猪』は今日最大の力を発揮した。

　だが、護堂は自みずからの甘さを痛感することになった。

　なんとメルカルトは、デタラメに速い『猪』の突進をきっちりと見切り、ふわりと宙に跳びあがって回避したのだ。

　今まで『力には力』で応こたえてきたメルカルト。

　それは野や卑ひで粗暴な勇士の姿に似つかわしく、今度もてっきり同じ戦法で応じてくるものと、いつのまにか護堂は先入観を抱いていた。

　しかし、この勝負所でメルカルトは風のような身ごなしで『猪』をいなした。

　黒き神獣はそのまま突進し、獲え物ものの背後にあった門に激突する。

　これはフェリーチェ門。

　精せい緻ちな彫刻をほどこされた、石造りの大門である。門といっても、実際は道をはさんで向かい合う一対ついの塔——そう呼ぶ方がふさわしい一六世紀の建物だった。

　かつては、港からパレルモ市街へ入るための出入り口と見なされていたそうだ。

　巨体の突進を受け止めて、門はもちろん粉々に砕け散ってしまった。

『ははははは！　やはり未熟だな、神殺しよ。戦う相手の力量も見きわめきれず、そのように頸くびを差し出すとは！』

　嘲ちよう笑しようしながら、空中のメルカルトがヤグルシとアイムールを投げる。

　ォォォォォオオオオンンンンンッ。

　はじめて聞く『猪』の苦しそうな声。第一の棍棒で頭を、第二の棍棒で背中を強打され、神獣は大地にへたりこんでしまった。

　その横にメルカルトが華麗に降り立つ。巨体がウソのような軽やかさだ。

　一方、『猪』は必死に起きあがろうとするが、かなわない。黒い前まえ肢あしはガリガリと道路をひっかくばかりで、踏んばりが利きかないようだ。今のヤグルシ・アイムールがかなりのダメージだったのだ。

　さらに、護堂とエリカがいる埠ふ頭とうに、数十万匹のイナゴが到来してしまった。

　この害虫が大量発生すると、国が傾くほどの大災害となる。小さくとも鋭い顎あごで、肥ひ沃よくな田畑を根こそぎ食い荒らし、人も獣も食い散らかすのだ。

　しかも、この大群はメルカルトの使いだった。

　彼の破壊神としての相を体現する、死の蟲たちなのだ。標的が鉄だろうとコンクリートだろうと、きれいにむさぼり尽くしそうだ。

　どう切り抜ける⁉　冷や汗が護堂の背を濡らしたときだった。

「エリ、エリ、レマ・サバクタニ！　主よ、何ゆえ我を見捨て給たまう！」

　高らかにエリカが唱えた。

　彼女の切り札だという、ウルスラグナ戦でも使った言霊だ。

「主よ、真昼に我が呼べど、御身は応え給わず。夜もまた沈黙のみ。されど御身は聖なる御方、イスラエルにて諸もろ々もろの賛歌

をうたわれし者なり！」

　たしかゴルゴタの言霊だったか。処刑される間ま際ぎわのイエス・キリストも、この禍まが歌うたで父なる神への絶望と賛美を謡うたったのだという。

　周囲にすさまじい憎悪と絶望の『気』が満ちるのを、護堂は察知した。

「我を助け給え、急ぎ給え！　我は世界の中心にて御身を讃たたえ、帰き依えし奉たてまつる！」

　ゴルゴタの言霊を宿らせた武器なら、神を傷つけることもかなう――。

　ウルスラグナと戦う前、エリカはそう語った。

　すると、やはり。護堂が予想したとおり、彼女は魔剣クオレ・ディ・レオーネを天にかざした。芸術品めいた細さと美しさを持つ銀の刃が、ゴルゴタの言霊を吸いこむ。

　しかも、エリカの言霊は終わらない。

「ローマの秩ちつ序じよを維い持じするため、元げん老ろう院いんは全軍指揮権インペリウムの剥はく奪だつを勧かん告こくする。元老院最終勧告セナトウス・コンスルトウム・ウルテイムム、発令！」

　最強の防御魔術を続けて使った。

　ゴルゴタの言霊を宿すクオレ・ディ・レオーネは魔剣から鎖くさりへ変形し、まるで大だい蛇じやがとぐろを巻くようにして、護堂とエリカのまわりで螺ら旋せんを描く。

　螺旋となった魔術の鎖は、堅けん牢ろうにそびえる鉄くろがねの城さながらだった。

　これでイナゴの大群から身を守るのか！

　鎖は螺旋を描きながら、青白い電光を帯びる。喰いついてきたイナゴたちをバチバチとはじき飛ばしてくれた。

「しばらくの間、これでしのいでみせるわ。でも、そう長くは保たないはず。護堂、わたしの結界が破れる前にメルカルトを倒して頂ちよう戴だい！」

「あ、ああ」

　こんな劣れつ勢せいなのに、逆転しろとエリカは言う。

　だが、護堂はうなずいた。それ以外に選択肢がないのだから仕方ない。

「それで、どれくらい保もちそうなんだ……？」

「いつまでも、と言いたいところだけど。神が直じき々じきに呼んだ眷けん属ぞくで、これだけの数——二分が限界かしらね？　さすがにビアンキあたりの切り札とは、格がちがいすぎるわ」

　エリカは冷静な口調だった。

　だが、そう装っているだけだろう。あと数分で、しかも生死を他人まかせにしなければいけない状況で、平静でいられるはずない。

　護堂がじっと見つめると、エリカは不敵に微笑んでみせた。

　しかし案あんの定じよう、いつもより華麗さがすくなく、すこしだけぎこちなかった。

「わたし、あまり綿密に人生設計する性格じゃないの。でも、この若さで朽くち果てるのは、さすがに予定外よ。エリカ・ブランデッリの未来、あなたに託してかまわないかしら？」

　家族をのぞけば、もはや誰よりも深い仲といえそうな美少女に言われて。

　護堂は己を無理矢理に奮ふるい立たせた。こうなったら、やるしかない。このパレルモ市の運命もそうだが、エリカの命まで自分次第なのだ。

　だから、心を折るな。あれこれ躊ちゆう躇ちよせず、勢いで突っ走れ！

「ああ。墓場までつきあってやってもいいぞ。まかせとけ」

「珍しく頼もしい発言ね。じゃあ信じてあげる。――あ、念のため言っておくわ！」

　不意にエリカが、何かに気づいたように叫んだ。

「未来を託すという言葉には、何のふくみもないから注意しなさいっ。『あなたと生しよう涯がい添そい遂とげてもかまわない』なんて喩たとえじゃ断じてないわ！　いい!?」

「あ、あたりまえだっ。そんな勘かんちがい、するわけないだろ！」

　言い合うふたりを襲おうと、霧かと見まごうほどのイナゴたちが集まってくる。

　これを阻はばむ結界の鎖は螺旋を描き、電熱を放つ。

　一方、大通りの方にはダウンを取ったメルカルトと、取られた『猪』がいた。余裕の神王は横たわる巨獣の背に、豪快な蹴けり。

　ルアアアアアアアンンン！　『猪』の悲痛な咆ほう哮こうがこだました。

『ふ――往おう生じよう際ぎわが悪いな、神獣よ！　おとなしく滅せよ！』

　メルカルトは宣告しながら、『猪』を拳こぶしや蹴りでさんざん打ちのめす。

　黒き神獣は四し肢しを折って地に伏ふせ、這はいつくばった。やわらかな腹部をそうやって守り、背中でメルカルトの攻撃を受けとめる。

　すると、神王は天翔ける二本の棍棒を呼んだ。

　右手でヤグルシ、左手でアイムールを振りおろし、『猪』の背を強打しはじめた。

　筋骨隆々たる半裸の男が、獰どう猛もうな野獣をさいなむ――。

　なんとも野蛮で、石器時代の狩しゆ猟りようとはかくなるものかと教えてくれる光景だった。

　メルカルトが護堂をまったく見ないのは、油断ではないだろう。なにしろイナゴたちに包囲されて、こちらの方こそ絶体絶命なのだから。

　この状況で、どうやってメルカルトを倒せばいい!?

　護堂は必死に考える。だが、思いつかないまま時間が無む為いに失われていく。

「あと三〇秒で、たぶん限界だわ。そのつもりでいて、護堂！」

　ついにエリカがタイムリミットを告げた。

　雲うん霞かのごときイナゴの大群から、ふたりを守る螺旋の鎖たち。だが、その鎖には無数のひびが走り、砕け散る寸前なのは一いち目もく瞭りよう然ぜんだった。

　ここで護堂は、我ながらいいかげんな——と思う行為をした。

　ふぅと深呼吸して、肩の力を抜いたのである。あせってもいいことはない。最後の最後まで考え抜くために、すこし目先を変えてみろ、と。

　静かに天を見あげる。螺旋の鎖とイナゴの群れにさえぎられて、空は見えない。

　数日ぶりに太陽が燦さん々さんと輝いているはずなのに……。太陽？

　そういえば——。

　軍神ウルスラグナは太陽の申し子。すっかり忘れていたが、護堂は『プロメテウス秘ひ笈きゆう』で彼の焔ほのおを盗み、神を倒す決め手とした……。

「だったら当然、十の化身のなかにもあるはずじゃないか！」

　気づいた瞬間に悟った。輝ける太陽を運ぶ聖獣のことを。

　しかも、使用条件も問題ない。護堂はうなずいた。

「さすが正義の神様……。『白馬』を使える相手は、民衆を苦しま

せる大罪人だけなんだ」

「え？　どういうこと？」

「あとでくわしく説明するよ。でも、その前に」

　螺旋の鎖を支えるエリカがつぶやきを聞きとがめる。

　答えを保留してから、護堂は巨体同士の戦いをにらんだ。メルカルトに殴られ、蹴られまくるだけでサンドバッグ状態の『猪』へ、心を鬼にして念を送る。

　――殴られっぱなしのままで、おまえはいいのか？

　最後に意地を見せてみろと。それができたら、仇かたきは必ず討ってやるぞと。

　その瞬間、護堂にはわかった。

『猪』の瞳ひとみが「バカにするな」とばかりに輝いたのだ。そして、黒き神獣は青あお息いき吐と息いきで這いつくばったままであったが、ガブリとメルカルトの足首に齧かじりつく！

『ははははは！　ずいぶんと弱々しいな。さっきまでの威勢はどうした!?』

　しっぺ返しを喰らったメルカルトだが、痛がりもせずに笑った。

　そのうえ噛まれてない方の足で、『猪』の横っ面つらを蹴りつける。黒き神獣もこれにはたまらず、のけぞった。齧りついた足首も放してしまう。

『誉ほめてやろう、獣よ！　このメルカルトを相手によく戦った。くくく、ひさかたぶりの狩り、存分に汗を流せて爽そう快かいであったぞ！』

　メルカルトがヤグルシとアイムールを投げ捨てた。

　たくましい両腕を『猪』の胴に巻きつけ、樽たるでもかかえるようにして持ちあげ――力をこめる。腕力で敵の背骨を折りにかかる。レスリングでいうベアハッグ、相撲すもうでいうところのさばおりだった。

ルアアアァァァァァァァンンッ！　『猪』が絶叫する。

護堂が待っていた瞬間だった。ついに渾こん身しんの力で神獣を葬りにかかったメルカルト。このタイミングで攻撃すれば、さっきのように避けられたりはしない！

「我わがもとに来たれ、勝利のために……。不死の太陽よ、輝ける駿しゅん馬めを遣つかわし給え。駿足にして霊妙なる馬よ、汝なんじの主たる光輪を疾とく運べ――！」

最初は口のなかでつぶやくように。

最後は隠れてしまった太陽を呼び出すように、高らかに。

唱えた護堂が見守るなか、『猪』は形を失い、雲うん散さん霧む消しようしてしまった。使用する化身を『白馬』に変えたため、維持できなくなったのだ。

太陽の運び手たる『白馬』は、ウルスラグナ第三の化身。

護堂とエリカは東の方角――海の彼方かなたの水平線に、黄金の輝きが顕あらわれるのを見た。

それは第二の太陽だった。

明け方、東の空から昇る太陽が地上を薔ば薇ら色いろに染めあげる。それと同じ輝きが、今、パレルモから見る地中海を煌こう々こうと照らしていた。

そして、第二の太陽は『白き光の槍やり』を放つ。

恒こう星せいの大気中では、時折フレアと呼ばれる爆発が発生する。『白馬』の化身は、この太陽フレアに等しい白き焔を東天より射出させる荒技なのだ。

ターゲットはもちろん、大嵐で民衆をさんざん苦しめたメルカルト！

「ぬ、ぐおおおおおお！」

東の空よりフレアの槍が天翔ける。

　白き劫ごう火かにつつまれて、今度は天空神が苦く悶もんの叫びをあげた。もしかしたら万全の状態のメルカルトなら、この焔すら防いだかもしれない。

　だが、やはりベアハッグの態勢からは無理だったか——。

　うなずく護堂の頭上に、火の粉が降ってくる。メルカルトを灼やく白い劫火からただよってきたのだ。これは護堂が『来い』と命じたものだった。

「エリカ、鎖を解け。海に飛びこむぞ！」

「——ええ、わかったわ！」

　いきなりの指示にも、すぐ〝相棒〟は答えてくれた。

　降ってくる火の粉こはいずれも小さなものばかりだが、これに接触したメルカルトのイナゴは一瞬にして灼き尽くされ、蒸発する。

　それを見ながら、エリカは螺旋の鎖を消し去った。

　同時に、彼女と護堂は全力で海に向けてダッシュする。イナゴどもの一部は追いかけてこようとしたが、火の粉に邪魔され、燃えてしまう。

　ふたりが埠ふ頭とうからパレルモの海に飛びこんだ直後——。

　焼却炉のごとくメルカルトを灼いていた『白馬』の劫火は、今まで護堂たちがいたヨットハーバーの桟さん橋ばしにまで燃え広がり、そこに万単位で集まっていたイナゴも一瞬にして蒸発させてしまった。

7

　焔ほのおが収まるまで数時間かかるかも——と、ひそかに護ご堂どうは危き惧ぐしたのだが。

　さすが権けん能のうで生み出したもの。デタラメなことに、ほん

の十数分で消え去った。しかも、灼やかれた一角には余熱も残ってないようだ。

　ヨットハーバーの近くで、護堂はぷかぷか海に浮かんでいた。

　しかし、頬ほおを撫なでる風は地ち中ちゆう海かいの春らしく、やさしげな感触だった。溶よう鉱こう炉ろ同然の火事場に吹く熱風とは程遠い。

　隣で浮いているエリカに目くばせすると、うなずきが返ってきた。

　ふたりは意を決して陸へ戻った。

「なんていうか、ちょっとすさまじすぎるな……」

「断っておくけど、ほとんどあなたひとりでしでかしたことよ」

　感かん嘆たんする護堂にエリカがコメントする。

　ここは地中海の海沿いを走る大通り。シチリアの古都にふさわしい海辺のおだやかな街並みは、空と海の青さと共に、長く人々を楽しませてきたはずだ。

　だというのに——。

　フレアで灼やかれたのは鉄筋や石造りの建物、アスファルトの道路などが多い。それらはどうにか原型をとどめている。しかし、どろどろに溶けてから固まったガラスのように、やたら輪りん郭かくがぐにゃぐにゃしていた。

　当然、街路樹など燃えやすいものはきれいさっぱり消滅。

　さっき『猪いのしし』が破壊した観光名所ヴィットリオ・エマヌエーレ通り入り口にあたるフェリーチェ門も、どろどろでぐにゃぐにゃだった。

「ここに一〇〇年前、太陽のかけらが落ちてきたとか言っても、うっかり信用されちまうかもしれないぞ……」

　神様の力を使ったあとのありさまを見て、護堂は頭をかかえた。

　俺はなんてことをしでかしたのだ。忸じく怩じたる後悔が荒波のように押しよせてくる。唯ゆい一いつよかったのは、メルカルトとイナゴの大群も消滅したことくらい――

　その瞬間、強烈な熱と衝撃を全身に浴びて、護堂は吹っとばされた。

　戦車の砲弾を撃ちこまれたようなダメージ。ダメだ、立ちあがれない。指一本動かせない。ゆっくりと意識がうすれていく。

　せめて死なないよう、『雄お羊ひつじ』に頼っておこう……。

　カンピオーネになってから、たった数日。だが何度も実戦をくぐりぬけたことで、権能の使い方をかなり学べてきた護堂だった。

「まさかメルカルト王――御おん身みなのですか!?」

　今、護堂を打ちのめしたのは、忽こつ然ぜんと飛来した棍こん棒ぼうアイムール。

　さっきまでは巨人化したメルカルトに釣り合う大きさだったのが、今はふつうの人間でも使えそうなサイズに縮んではいたが――。

　エリカは驚きよう愕がくしながら、棍棒の飛んできた方角を見た。

　白きフレアによって、なかば溶解させられたカーラ通りに球きゅう雷らいが浮かんでいた。青白い小さな電光をバチバチと放つ、球状のプラズマ体だ。

　エリカは悟った。さっきの『白馬』で、メルカルトを倒しきれなかったのだ！

　肉体は失ったようだが、その霊体はいまだ健在――。

「左さ様よう……いかにもわしだ。此こ度たびはその若僧めにしてやられたわ！」

　メルカルトの声と威い厳げんで、雷は答えた。

「ふん。小こ賢ざかしき軍神が消え、気が抜けていたのかもしれぬな。度しがたい隙すきを見せてしまったわ。まあ、そこを見逃さぬあたり、よくやったと言ってやってもかまわぬが……」

「御身はこのまま、草くさ薙なぎ護ご堂どうを打ち倒すおつもりなのですか？」

　エリカは偉大なる神に問いかけた。

　獅し子しの鋼はがねクオレ・ディ・レオーネをふたたび魔剣の姿で呼びながら。もし嵐の神王にそのつもりがあるなら、命を懸かけるしかない……。

「そうしてやりたいところだがな。口くち惜おしいが、今の一撃でわしの余力も尽きた。しばらくは、このまま空をただよう以外に芸はない！」

　もし雷に肉体があれば、フンと鼻を鳴らしたかもしれない。

　そんな腹立たしい雰ふん囲い気きがにじんでいた。

「いずれ我が身を甦よみがえらせたあとに再戦するほどの逆ぎやく縁えんも、そやつとの間にはない。まあ、此度はわしの負け——否いな、引き分けとしてやろう」

　言い直すあたりに負けず嫌いの性分が表れてはいたが。

　それがメルカルトの通告だった。エリカは肩の力を抜き、安あん堵どした。

　実体を失ったとはいえ、相手は神。戦うにしても逃げるにしても、かなりの苦難となるだろう。余力がないのは護堂とエリカも同じ。休戦になるなら否やはなかった。

「では、わしは往ゆく。その若僧といつの日かふたたび巡り会い、新たな縁が生まれるやもしれぬが——それはそのときだ。未来のわしが片づけるべきことよ！」

　風が吹き、物言う雷も飛び去った。

　残されたのは、意識のない若き神殺しとエリカ・ブランデッリ。

　それは数日前の情景によく似ていた。復活を遂とげるために眠る草薙護堂。彼を守る者は彼女以外にいない。

　その符合に気づいて、エリカは眠る少年の頭をかかえ起こしてやった。

「……よく戦ったわね、護堂。これはわたしからのごほうび。もう二度と、特にあなたの意識がある間にやってあげるつもりはないんだから、心して休みなさい」

　少年に膝ひざ枕まくらをしながら、彼の眠りをさまたげないよう、エリカはやさしくささやいた。

第４章　春眠は短し

1

　新学期がはじまって、すでに二週間がすぎていた。

「平和だなァ……」

　護ご堂どうはのんきにあくびした。

　私立城じよう楠なん学がく院いんの高等部、その校舎の屋上である。今は昼休み。ほかにも生徒は何人かいるものの、混雑には程ほど遠とおい。

　そのうえ今日は快晴。屋上に注ぐ日ざしと吹き抜ける風が心地よかった。

「こうしてると、春休みのムチャクチャがウソみたいだな……」

　幼い頃から体育会系だったせいか、護堂はきびきび動く方である。

　だが、今は珍しくだらけていた。屋上のフェンスにもたれかかり、ぼんやり紙パックのコーヒー牛乳をすすっている。イタリアから帰国して以来、ずっとこんな調子だった。

　異国の地での強烈すぎる体験のせいで、今ひとつ新生活になじめないというか……。

　そう、新生活。この四月から、草くさ薙なぎ護堂は高校一年生になったのだ。

城楠学院高等部は一応、進学校の部類に入る。だが、割とゆるい。

自由リベラルな校風なので勉強を強しいられることもないし、校則も厳しくない。部活などで大学部と交流する機会もあるから、そちらの〝先輩〟によくも悪くも遊びを教えられたりもする。スポーツを奨しよう励れいしたりもしない。

生徒の自主性まかせの自由さは、むしろ大学に近いかもしれない。

クラブ活動は体育会系より、文化系の方がさかんだ。

去年チアリーディング部が全国大会に行ったとき、『運動部が一〇年ぶりに全国区へ！』と祝福されたそうだから、ほかは推おして知るべしだろう。

そんな学校で、護堂はいまだ帰宅部のままだった。

ぼーっと昼休みをすごしたあとはぼんやり午後の授業を受け、放課後はすぐに帰宅。

「お兄ちゃん、まだ部活決めてないの？」

居間で緑茶をすすっていたら、帰ってきた静しず花かに訊きかれた。

小こ柄がらでかわいらしい顔立ちなのに、妙に勝ち気なところが微笑ほほえましい妹だ。

「ああ。あんまりピンとくる部もないしなー」

「ま、お兄ちゃんが本気でやって楽しめそうな運動部、うちの学校にはないしね……。チアリーディング部と社交ダンス部は結構すごいらしいけど」

静花がうなずきながら言った。中学受験で同じ城楠学院に入った妹は、中等部二年生。なので、学院の生徒としては先輩である。

「ちなみに、野球部はめちゃくちゃ弱いよ」

「あれはあれで楽しそうだから、いいんじゃないか？」

「それもそっか。あたしのオススメはやっぱり文化部かな。なかには変なクラブもあって、結構面白いよ。とにかく、何でもいいから部活入っておいた方がいいって。人間、ヒマだとロクなことしないもん」

「そうか？」

　静花に意見されても、護堂はあまり心を動かされなかった。

「どうしても入らなきゃいけないもんでもないし、あせる必要ないだろ。うちのクラス、まだ帰宅部ってやつ多いぞ」

「人は人、お兄ちゃんはお兄ちゃん」

　兄に人差し指を突きつけながら、静花はきっぱり言った。

「これはお兄ちゃんの将来を思っての忠告なの。おじいちゃんだって大学の仕事を辞やめてから、前にも増してひどくなったわけだし。ここでヒマを持て余すと、正しよう真しん正しよう銘めいのろくでなしになるかもしれないでしょ！」

「いや、だから、俺をじいちゃんの同類みたいに言うなよ……」

　祖そ父ふ・草薙一いち朗ろうはかつて大学で民俗学を教えていた。

　専門はたしか、世界と日本の伝統芸能だったか。いそがしい両親に代わって、護堂と静花の兄妹をマメに世話してくれた保護者でもある。そして、稀き代たいの遊び上手。

　遊び人では、ない。

　だが、遊ぶのがやたらと上う手まい。達人、名人と賞しよう賛さんする声も多い。尚なお、ここでいう『遊び』とは、酒であり宴うたげであり、旅であり人づきあいであり、風流な芸事であり、何より特定多数（不特定ではなく）の女性との交流だった。

　一方、兄に意見した妹は茶道部員である。

　学院高等部の敷地内で、静花の姿を見かけたことがあった。放課

後だったから、部活の途中だったのだろう。高等部の女子と中等部の女子数人で連れ立ち、ダンボールの箱をかかえながら歩いていた。

　すれちがったとき、護堂は手をあげて「よう」と挨あい拶さつした。

　静花も軽く手を振って応こたえた。……そういえばあのとき。びっくりするほどきれいな高等部の女子――やや茶色味の強い髪が印象的な美少女もいて、しとやかに会え釈しやくしてくれた。その美しさに気き後おくれして、まともに顔を見ることもできなかったが……。

　ともあれ、入学から二週間。草薙護堂は帰宅部のままである。

「オレはここに『脳内デートクラブ』の設立を宣言したい。同志たちよ、集まれ！」

「バカ言うな！　萌もえとはＤＶＤ－ＲＯＭとハードディスクより生まれるもの。脳内妄もう想そうによる補完のみではおのずと限界がある！」

　護堂の一年五組では、名な波なみと反そり町まちという男子生徒が妙な部活を作る・作らないで揉もめていたが、その騒ぎも聞き流してしまった。

　不思議だった。イタリアから帰国して以来、身のまわりのことに現実感がないのだ。

　気づけば、なんとなく右肩をまわしていたりもする。

　中三の夏に壊してしまい、野球をやめるきっかけとなった肩は、ひょんなことから治ってしまった。だから、もう一度そちらに復帰する道はあるのだ。

　だが、その選択肢を護堂から奪う出来事が、しばらく前に起きていた。

　春休みもほとんど終わりかけていた日の夜。

「新学期がはじまると、こういう機会もなかなか作れないからな」

　中学時代のライバル兼野球仲間、三み浦うらは言ったものだ。

　東とう京きよう都と北きた区くにある中学校のグラウンドでの出来事だった。昼間、三浦が電話をかけてきたのだ。いわく「オレの門かど出でを祝うために、おまえらちょっと来い」である。

　三浦は剛ごう腕わんというに足る速球投手で、そして、強引なお調子者だった。

　長年捕手をやってきた護堂の経験上、投手には『オレ様』が多い。で、意外と繊せん細さいな面があるやつも多い。しかし三浦は、前者一〇〇％の純粋なオレ様である。

　まあ、こういうこともあるさと出かけていった。

　三浦の出身中学の前に集まり、フェンスを乗り越えて校庭へ不法侵入。

　メンバーは護堂、瑠る偉い、中なか山やま、そして三浦である。みんな北東京在住で、都選抜や世界大会でも戦った硬式野球の猛も者さである。所属チームがちがう割りに共闘することが多く、不思議な連帯感を分かち合う同士だった。

「……で、今日はどうして僕たちを？」

　訊たずねたのは瑠偉だった。小柄だがセンス抜群の内野手にして先頭打者だ。

　男のくせにかわいらしい、ととのった顔立ちをしている。

「いや、なに。オレは今年から、甲子園へのビクトリーロードを突き進む身だ。新学期を前にして、おまえたちからのエールを受け取ってやってもいいと思ってだな」

「……俺、帰ってもいいか？　見たいテレビがあるんだ」

　身勝手な招待者に、ぼそぼそ中山が言う。無口で野の武ぶ士しめいた風ふう貌ぼうの男で、背が高い割りにやせている。しかし、か

なりの長距離打者だった。

「そうだね。僕、明日は草野球の助っ人を頼まれてるんだ。早く寝ておきたいし」

「おまえらが抜けるなら、俺もいいかな」

　瑠偉も淡々と言うので、護堂も合わせた。すると案あんの定じょう、

「つ、冷たいこと言うなよ！　おまえら、野球をやめちまうだろ!?　だから、ヒマがあるうちにいっしょにツルもうかなって思ったんだよ！　もうすこしオレにやさしくしろよ！」

　三浦がわめき散らす。オレ様で、かまって欲しがりなのだ。

　こういうことを自分で言うので憎めない。意外といじられキャラだった。

　立ち去りかけていた中山が戻ってきて、瑠偉も苦笑する。護堂も肩をすくめた。この三人はそれぞれの理由があって、高校では野球をやらない予定だった。

　三浦だけが野球の強豪校へ進学する。おそらく一年中練習漬けで、土日休日も汗を流しつづけるはずだ。たしかに、集まるなら今しかないのだ。

　というわけで、四人は夜遊びをはじめた。

　三浦が勝手知ったる様子で、母校の体育用具倉庫の鍵かぎを開けた。どこからともなく合い鍵を取り出したのだ。なんでも運動部の生徒たちが校庭に隠しているらしい……。

　四人はバットにボール、グラブなどを持ち出した。

　あとは投げたり打ったり捕とったりと、気ままな球遊びに興きようじる。

　途中、護堂がバットを手に何気なくバッターボックスに立ったら、マウンドに三浦が来た。それを見て、瑠偉も護堂のうしろ——捕手のポジションに着く。

「軽く一勝負……してみるか？」

　三浦に言われて、護堂は無言のままバットをかまえた。

　あとはもう、水が高きから低きに落ちるように。三浦が投げ、護堂がスイング。その繰りかえしがはじまった。ストライクやボールについては審判の代わりに捕手が判定した。

　最初の一〇球ほどは護堂の空振り、そして詰まった打球が多かった。

　やはり、より上をめざす才能ある投手と、半年のブランクがある男では格がちがう。それでも護堂は勝負をやめず、次の打席こそと闘志を燃やす。

　そして、いよいよその時が来た。

　三浦が得意のストレートを外角高めに放ってきた。並の中学生捕手なら、捕るのもままならない球威とスピードだ。本職ではないがセンス抜群の瑠偉が相方でなければ、三浦もこんな本気のボールを投げられまい。

「俺が受けてたときより速いじゃないか！」

　獰どう猛もうに笑いながら護堂は叫び、バットを振ろうとした刹せつ那な。

　——止まって見えた。選手時代も絶好調だったときは三浦の速球を見切り、快打してのけたが、その比ではない。剛速球が本当に止まって見えたのだ。

　そして振る。バットの真ま芯しんで捉とらえる。

　カキンと快音が響き、ライナー性の打球が遥はるか彼方かなたへ飛んでいく。

「往おう生じよう際ぎわが悪いな草薙！　観念して三振しちまいやがれ！」

　またも投げる三浦。だが、そこからは全て同じ結果だった。

　すばらしい速球やカーブたち。だが、護堂には全て止まって見え

た。当然打つ。打つ。打つ。打つ。打つ。ホームランが出なかったのは『校舎の外に出したらまずい』と、三球目から気をつけたからだ。

「すごいね、草薙くん……。絶好調、なんてもんじゃない。神様か悪魔でも取とり憑ついてるんじゃないの？」

　物に動じない方の瑠偉が目を丸くし、中山がパチパチかわいた拍手をする。完全に打ち崩された三浦は、愕がく然ぜんと頭をかかえていた……。

「たぶん俺が勝負事に集中したら、あの体質が自然と表に出てくるんだろうな……」

　ぼんやりすごした一日の放課後、学校からの帰り道。

　春休みを思い出して、護堂はつぶやいた。イタリアで戦っていたときも、妙に勘かんと反射神経が冴さえわたり、ぎりぎり敵の攻撃を避けたりできた。おそらく鍵になるのは闘争心。どれだけ本気で戦い、アドレナリンをたぎらせているか……。

　もしかしたら、今の自分なら――護堂は暗い気分で想像した。

　一〇〇マイルを超すメジャーリーガーの剛速球ですら、本気で戦う気になれば、見えてしまうのではないか。真芯で捉えられるかはともかく、その速さを見きわめ、バットに当てるくらいなら何とかなってしまうのでは？

「それにあのとき、やたらと体が切れてたような……」

　三浦との対決中、いつのまにか手足が軽くなっていた。あの勝負のためになまった体を念入りに手入れして、最高のコンディションで迎えるよう調整したかのように……。

「反則みたいなものだぞ、この体。すくなくとも真剣勝負のスポーツをやるのはフェアじゃないよな……。ちょっとズルすぎる」

　闘争心に正比例して、集中力とコンディションが非常識に高まっていく。

　地味だが、かなり大きなアドバンテージだ。高校に入ったら野球以外のスポーツをやってみるつもりだった護堂だが、これでは中止せざるをえない。他の競技者に悪すぎる。

　とはいえ、他にどんなことをやったらいいのか。

「文化系の部活もピンとこないし、バイトでもするかな……」

　思案していたら、金髪の外人女性とすれちがった。——まさか。

　護堂はあわてて振りかえる。二〇代後半の、大柄な白人女性だった。イタリアで知り合った美少女とはまるでちがう。

　あいつのわけないか。安心した直後、声をかけられた。

「どうしたの、護堂？　アイスの当たり棒を落としたみたいな顔しちゃって」

　同じ商店街の住人で幼なじみ、徳とく永なが明あ日す香かだった。

　都立高校の制服を着ている。幼稚園から中学までは同じだったが、ついに高校で袂たもとを分かったのだ。長い髪を頭の左右でツインテールにしている。昔から変わらない、明日香のトレードマークだった。

「どんな顔だよ、それ？」

「微妙に残念そうな顔。せっかくアイスもう一本食べられたのにって」

　気心を知り尽くした同士なので、挨拶もなしにしゃべりはじめる。

　長いつきあいの明日香が指摘することは、たいてい当たっているはずだった。だが、護堂はわずかに眉まゆをひそめて言った。

「いいや。決してそんな顔はしてないはずだ。妙なこと言うなよ」

「そう？　ま、あんたがちがうって言うなら、そこで張り合う気はないけど。ところで護堂、ちょっと確認しておきたいことがあるの。正直に答えてよ」

「なんだよ、急に改まって？」

「あんたさ……あたしや静しず花かちゃんに隠れて、カノジョ作ったりしてないでしょうね？」

　幼なじみは重要参考人を取り調べる刑事のような目つきだった。

「そんなことあるか！　何、変な勘ぐりしてんだよ⁉」

「疑惑その一。春休みにどっかへ旅行に行ったと思ったら、一〇日間も戻ってこなかった。その間、どこで何をしてたのか訊いても、はっきり答えようとしない」

「……べつに報告する義務はないんだし、いいだろ」

「疑惑その二。帰ってきたら変にボーッとしてて、しゃっきりしない。で、たまに茶髪とか金髪の女の人、目で追いかけたりしてる」

　護堂は驚いた。そんな行動をしていた自覚、皆かい無むだったのだ。

　だが、言われてみれば思い当たる節もある。認めるわけにはいかないが……。

「事実無根だ。おまえな、ひさしぶりに話をしたら、いきなりそれかよ」

「うるさいっ。女関係じゃ何かとお騒がせなあんたが変なことになってんじゃないかって心配してんの。感謝すべきであって、文句言うところじゃないわよ」

　勝手なことを言ってから、明日香は肩をすくめた。

「ま、あんたみたいな変人をどうこうできる女の子、そんじょそこらにいるはずないか。いいわ。これ以上の詮せん索さくは、新たな物証が出てきたときにしてあげる」

「おまえが言うほど、俺は変わり者じゃないぞ」

「そういう寝言は四月一日だけにしてよね。説得力ゼロ。全然信用できないの」

　このとき護堂は平静を装ったが、実はかなり驚いていた。

　無論、カノジョなどできてはいない。だが、遠い異国の地に奇妙な縁で結ばれた仲間がいるのも事実だった。さすが幼稚園の頃からの幼なじみ、と感心させられた。

2

　護ご堂どうが知るかぎり最も華麗で美しい少女、エリカ・ブランデッリ。

　彼女はメルカルト戦のあとで意識を取りもどしたときも、枕まくら元もとにいてくれた。

「今度の睡眠時間は五時間半。瀕ひん死しの状態から回復する時間、すこし短縮されているわね」

　護堂が目を覚ますなり、エリカはすらすらと言った。

「……俺、どうして死にかけたんだ？」

「メルカルトは完全に滅んでいなかったの。最後の力であなたに一撃を加えて、それで力尽きたけど……。要するに、ダブルノックダウンになったのよ」

　音楽的な声による説明を聞きながら、護堂は部屋を見まわした。

　ザンパリーニ邸ていの寝室。エリカといっしょに寝たベッドの上だった。窓からは西日が差しこみ、室内をオレンジ色に染めていた。

「まあ、『まつろわぬ神』とカンピオーネはどちらも不死に近いほどの生命力を持つ同士。戦いの決着がどちらかの死で終わるケースはむしろ珍しいと聞いているわ」

「不死に近い……あー、言われてみればなァ……」

　護堂は心からうなずいた。身に覚えがありすぎる。

　ふつうなら絶体絶命のピンチでも、『死ぬかと思った』で何度となくギリギリ切り抜けてしまう。自分たちはそういう非常識な生き物なのだろう。

「どうせ復活するのに病院をわずらわせるのも無駄だから、こっちに運んでもらったの。予想どおり、必要なかったわね」

「そうか。迷惑かけたな、悪い」

　護堂はベッドの上で身を起こし、体をチェックした。傷ひとつない完かん璧ぺきな健康体だ。

「べつにかまわないわ。神殺しに転生してすぐ神王クラスの『まつろわぬ神』と戦って、相打ちにまで持ちこんだのですもの。このくらいの手間、殊しゆ勲くん賞しようとしては安いものよ」

　エリカらしい上から目線の賛さん辞じ。だが、護堂はかぶりを振った。

「いや、それほどすごくもないだろ。半分以上ウルスラグナのおかげだと思うし」

「どういうこと？」

「ウルスラグナがサルデーニャ島をうろついてたとき、あいつは自分にふさわしい対戦相手を求めていた。だから、あの島でいちばん強い神様——メルカルトが復活した」

　我、敗北を求めたり。ゆえに大敵の到来を求む。

　ウルスラグナの傲ごう岸がんで、しかし快活な言いぐさを護堂は思いだした。

「メルカルトは俺じゃなくて、ウルスラグナと戦うために顕れたんだ。でも本来の対戦相手が消えたせいで、闘志とか勝利への執念とかがガクッと落ちたんじゃないか？　不慣れな俺でも隙すきをつけたのは、そのおかげだって気がする。なんとなくだけどな」

　分不相応に持ちあげられたら、かなわない。そう思っての発言だった。

　だが、エリカは興味深げに護堂を見つめ、それから言った。

「たった数回の実戦で、よくそこまで勘がはたらくようになったわね……。あなたのその感覚、明らかに死すべき人間のレベルを逸いつ脱だつしているわよ」

「な、何だよ、それ？」

「わたしたち定じよう命みようの人間からすれば、あのクラスの神が多少強かろうと弱かろうと関係ないもの。だって、向こうがどんなコンディションでも、戦えば死ぬだけよ」

「…………」

「カンピオーネとなったことで、そういう資質が身についたのか。それとも、そういう資質があったからこそ神を弑しい逆ぎやくできたのか。こうなると『卵と鶏にわとりどちらが先か』といっしょね。解答のない問題だわ」

　と、エリカは感心したようにうなずいてしまった。

「ま、まあ、とにかくこれで本当に一件落着だ。俺も安心して日本に帰れるよ」

「え？　もう帰国するつもりなの、護堂!?」

「そりゃそうだろ。前から言ってたじゃないか」

「え、ええ。でも、せっかくカンピオーネになって、神との実戦まで経験したのよ。魔術の本場である欧州に残って、魔王として生きる選択肢だって――」

　エリカにしては珍しく、あせった感じの物言いだった。まるで、草薙護堂との別れが名なごり残惜おしいとでもいうように。そんな彼女に護堂は答えた。

「ないない。こんな訳のわからない力、もう放り出したっていいくらいだ」

「……あなたって不思議ね。神殺しの権能をよろこびもしなければ、執着もしないだなんて。何ていうべきかしら？　力に対して、すごく自由というか」

「戦うための力なんて、どれだけたくさん持ってるかじゃないだ

ろ」

　四番打者ばかりが集まったプロ野球チームより、適材適所で戦術的に戦う球団を愛する護堂はあっさりと言った。

「大切なのは、どれをどう使うかで。そういう意味では、そもそも俺には神様と戦うための力なんて必要ですらない。使いようがないから、要いらないんだよ」

「そう……。なるほどね。だからあなたは十の化身を得たのかもしれないわね……」

　何やら納得顔のエリカに、護堂は言った。

「妙に長いつきあいになったけど、そういうわけだからそろそろお別れだ。エリカには世話になった。何か機会があったら、礼をさせてくれ」

「ええ、期待しているわ。でも護堂、日本に帰るのに、わたしと再会するつもりなの？」

　どこか面白そうな顔でエリカは微笑した。

「東とう方ほうの日ひ出いずる国からヨーロッパまでは、すごく遠いわよ？」

「遠くても、半日かければ飛んでこられるんだ。遠すぎるって程じゃないだろ。友達に何か困ったことがあって、俺に手伝ってやれることがあるなら、旅費と時間を使っても来る価値はあると思うぞ」

「そう。それがあなたの考え方なのね！」

　ここで護堂は貴重なものを見た。エリカが無む邪じゃ気きに笑ったのだ。

　いつもの気取った笑顔でも、妙に悪魔的な微笑でも、雌めす獅じ子しの猛たけ々だけしい笑みでもない。歳とし相応に無邪気で明るい、かわいらしい笑い方だった。

　護堂はひどくドキリとした。不意を突かれたと言ってもいい。

「ああ、そういえば。ザンパリーニのことだけど、あの人、すこし前に発見されたわよ。メルカルトに吹きとばされたあと、海を漂流していたんですって」

「本当か!?　よく生きてられたな！」

　今のときめきを悟られてはいけないと、護堂は大声で言った。

　もっとも、芝居したわけではない。あの老人の生存は、たしかにうれしい報しらせなのだ。

「使えるかぎりの魔術を駆使して、嵐の海を丸一日もただよっていたそうよ。今日になって嵐が収まったから、この館やかたに使い魔の鳩はとを飛ばして、生存を報せてきたの。今、船が迎えにいっているわ。今夜はそのまま入院でしょうね」

「そりゃよかった。あとで見舞いにいかないとな」

　その夜、護堂とエリカは一昨日同様、ひとつの部屋に泊まった。例によってベッドに見えない境界線を張り、寝床も共有した。

　厄やつ介かいだったザンパリーニ老人は港から病院に運ばれ、今夜も不在だった。

　だから、何のかんのと理由をつけて、別室に泊まってもよかったのだ。だが、エリカはそのために動こうとせず、なぜか護堂も異い議ぎを唱となえなかった。

　死闘を終えたあとのせいか、ふたりともすこしテンションが高かった。ベッドに横になりはしたが、すぐには眠らず、ぽつぽつとおしゃべりし、軽口をたたき合ったりした。

　そして一夜が明け、草くさ薙なぎ護堂の帰国日を迎えた。

　ふたりは《パノルモス》の車でパレルモ市内の総合病院に送ってもらい、無事に救出されたワルテル・ザンパリーニと再会した。

「いや。今回は不覚を取りましたが、もし機会があれば、またお声をおかけください。次こそはお役に立ってみせましょう！」

　昨夜はだいぶ憔しよう悴すいしていたと聞いたのだが。

　他の病室よりも豪華な個室に入院中の老人は、禁煙など知ったことかと火のついた葉巻を吹かし、リベンジを願い出る始末だった。外傷もないし顔色もよい。

　入院の理由は単なる過労だという。しかし、そちらの心配ももうなさそうだった。

　とんでもなく元気なじいさんだと、護堂は苦笑したものだ。

　その後、エリカと共にパレルモ空港へ。

　ここではなんと、サルデーニャ島から飛んできたルクレチア・ゾラが迎えてくれた。

「命いのち冥みよう加がに生きのび、地ち中ちゆう海かいに平穏を取りもどした君の顔を見てやろうと思ってな。……まあ、あちこちでとんでもないことをやらかしたみたいだが」

　意外と俗ぞくっぽいくせに超然たる美び貌ぼうのルクレチアは、あきれた感じで言った。

　空港のロビーで〝やらかした〟数々を思い出して、護堂は「うっ」と硬直した。

「そうね。この人ったら、ものすごい速さで状況の変化に対応していったのよ。もうどこに出しても恥ずかしくない魔王さまだって言えるわね」

　と言ったエリカが急に顔をこわばらせた。ルクレチアも「ほう」とつぶやく。

　彼女たちの視線の先に、ひとりの青年がいた。金髪の美男子で、背は高く、すらりと鞭むちのように引きしまった体つきだった。

　着ているのは明るい赤色のシャツに、白いコットンパンツ。そして、ラテンのお気楽かつ能天気なノリ。彼は夏の地中海を照らす太陽のような（言いかえれば、ちょっとアホっぽい）陽性の笑顔で近づいてくる。

「君か。君が七人目なんだ。すごいな、僕がそうなったときよりも若いんだねェ！」

　彼はいきなり護堂に言った。美男子の容姿に似合う、甘い美声だった。

　だが、ノリの軽さがいけないのか、あまり色男らしく見えない。

「おひさしぶりです、サルバトーレ卿きよう……今日はなぜシチリアへ？」

　聞き覚えのある名前で、エリカが青年に呼びかけた。

「ああ、ひさしぶり。君はエレン・イバノヴィッチだっけ？　いや、実は何日か前までアルゼンチンにいたんだけどさ」

　豪快に名前をまちがえながら、青年はあっけらかんと語りはじめた。

「急に『まつろわぬ神』が出たって報せがあって、あわててヨーロッパに帰ってきたんだ。そしたら、すごい嵐のせいでサルデーニャ方面に飛ぶ飛行機は全部欠便になってて」

　サルバトーレ青年は、おそらく二〇代前半。

　彼が肩からさげる円筒型のケースに、護堂は気づいた。野球のバットでも入れるような長さと形だ。理由もなくゾッとした。これの中身が、とてつもなく危険な品に思えたのだ。

　ザンパリーニのサブマシンガンなど、まったく比較にならないような……。



「嵐が収まったところでサルデーニャ入りしてさ。現地の結社にいろいろ訊きいたら、あちらに出た神様も、もう一体いた神様も、七人目が倒したって言うんだ。このまま帰るのもなんだから、新しい同族の顔を見に来たんだよ」

　七人目。同族。それらの言葉が意味するところはひとつ。

　護堂が思い至った瞬間、ルクレチア・ゾラがうやうやしく青年に一礼した。

「左さ様ようでしたか。では、改めてご紹介しましょう。こちらの少年、草薙護堂こそ六番目の御おん身みに次ぐ七人目のカンピオーネ。軍神ウルスラグナを殺あやめ、そしてフェニキアの神王メルカルトをシチリアより撃退した神殺しです」

「そうか。僕はサルバトーレ・ドニ。これからよろしく！」

　ルクレチアの紹介を適当に聞き流しながら、ドニが挨あい拶さつしてきた。何と応じたらいいのか迷っていると、いきなり予想外のことを言われた。

「ねえ君。ちょっと提案なんだけど、僕と決闘してみない？」

「へ？」

「僕たちカンピオーネは神様か同族以外、まともな勝負をできる相手がいないんだよ。君もこれから、そこで困ると思うよ。だからさ、出会った記念にひとつどうかな？」

　バカげた提案に、護堂は反射的に答えた。

「すいません。俺、そういう冗談はよくわからないんです。もう時間もないですし、お話はまた今度聞くってことにしてください」

　と。のちに護堂は、この行為をたっぷり後悔する。

　何であのとき、あのアホ相手に敬語を使ってしまったのかと……。幼少の頃から体育会系のしつけを受けてきたから、年長者に敬語を使うのは当然だと思っている。だが、それでもやはり、相手によりけりだろうと……。

　ともあれ、最後に思わぬ出会いはあったが、フライトの時間が来た。

　エリカとルクレチア、そしてドニ青年に見送られて、護堂は日本への帰き途とについた。

　イタリアでの滞在日数、実に一〇日間。

　最初に想定していたよりも、倍以上の日々を過ごしたのであった。

3

　イタリアで体験した波は瀾らん万ばん丈じようの一〇日間。

　その後、帰国した護ご堂どうは春休みの残りを漫まん然ぜんと消化し、そして、高校生として四月を迎えたのである。そのまま、しばらくボーッとすごしてしまった。

　とはいえ、何もしていなかったわけではない。

　受験が終わってからは体のなまりが気になったので、ほぼ毎日ジョギングやストレッチ、器具を使わない筋トレなどもやっていた。こちらに関しては、イタリアから帰国したあと、しゃきっとしない精神状態でもなんとなく続けていた。

　また新学期開始から二週間も経たつと、ヒマを持てあましてきた。

　無気力にすごしていても腹は減るし、贅ぜい肉にくもつく。いいかげん退屈だったので、「そろそろバイトでもするか」と唐とう突とつに出来心を起こした。

　要するに草くさ薙なぎ護堂という男は、

『人間性の根本が動物的で大おお雑ざつ把ぱなため、ナーバスな精神状態が長続きしない』のだ。

　というわけで、四月下旬の木曜日。

　放課後、護堂は祖そ父ふの知り合いに紹介してもらった『古い土蔵に眠っていたガラクタ類をまとめて買いあげる骨こつ董とう屋やの手伝い』というバイトで荷造りや荷物運びに励はげむため、東とう京きよう都と足あ立だち区くの小こ菅すげに出かけていった。

　仕事が終わったのは午後一〇時半。だいぶ遅くなってしまった。

　その帰り道、護堂はトラブルに巻きこまれた。夜道を歩いていたら、七人もいる外人男の一団に取り囲まれたのである。

　住宅地を流れる川に架かけられた橋の上だった。

　お世せ辞じにもきれいとはいえないドブ川と、雑草が茂り放題の川原を見おろせる、鉄筋造りの橋だ。ここに足を踏み入れたら、前から四人、うしろから三人やってきた。

　行く手も後方もふさがれてしまった。他に通行人もおらず、車も走っていなかった。

「えーと……何の用でしょう？　俺たち、今日が初対面ですよね？」

　あまり友好的な雰ふん囲い気きではなかったが、護堂はおだやかに訊たずねてみた。

　七人の男たちはみんな背が高く、体格もよかった。

　そして、バカバカしいことに全員が仮面を着用していた。目元と鼻筋を隠すタイプで、仮面舞ぶ踏とう会かいを連想してしまう。だが、服装はまばらだ。

　背広を着た男もいれば、Ｔシャツにジーンズというラフな男、ジャケット姿の男もいる。

　肌の色から類るい推すいするにひとりは黒人、残りは白人だった。

　いちばん目立つ黒人は、見るからに剣けん呑のんだった。身長一

九〇センチ前後、体重は推定一〇〇キロ超。ヘビー級の格闘家といわれたら、即座に信用するだろう。

　彼はタンクトップ姿で、両肩に毒々しい蜘く蛛ものタトゥーを彫ほっていた……。

「すいません。ちょっとこういうことをされる理由がわからないんですが」

　まともな連中ではない。イタリアの魔術師たちの仲間だろうか？

　ひとりを大勢で取り囲む手口に、護堂はムカツキを覚えたが、丁てい寧ねいに話しかける。

　喧けん嘩か腰ごしの相手に同じ調子で応こたえたら、ロクなことにならない。穏便かつ平和的に切り抜けなくては。しかし、男たちは無言のまま行動を開始した。

「…………」

　前から例の黒人が近づいてきた。いきなり右みぎ拳こぶしで殴なぐりかかってくる。明らかに素しろ人うとのパンチではない。さっきの感想は当たっていたらしい。

　鋭く、重く、最短距離の軌き道どうで顔面に飛んでくる拳。

　避けられたのは、例の体質のおかげだろう。男が拳をにぎった瞬間、護堂のなかの〝スイッチ〟がオンになった。直後、集中力が研ぎすまされた。パンチもよく見える——。

　とりあえず、左に動いて避けた。

　だが、黒人男はやはり素人ではない。パンチで突き出した手を戻さず、そのまま護堂の肩をつかむ。パンチをかわしたときに体勢が崩れていたので、避よけきれない。

　完全につかまってしまった。

　黒人男はぐいと護堂を引きよせ、強烈な膝ひざ蹴げりを叩たたきこんでくる！

「ぐはっ！」

　すさまじい衝撃を腹に突き立てられ、護堂はうめいた。

　たまらず体を『く』の字に折り、膝をついてしまう。しかも、それを皮切りに他の男たちまで襲いかかってくる。凄せい惨さんなリンチのはじまりだった。

　相手は格闘技の心得を持つ屈強な七人。こいつらにさんざん拳や蹴りをたたきつけられるのだ。アスファルトの歩道にも投げつけられたりして、激痛を味わった。

　それでも、抵抗しようとはした。

　護堂は『雄お牛うし』に頼ろうとした。自分よりも敵の方が力で勝るときに使える化け身しん。だが、ダメだった。この連中――人間の大男程度では、パワーが足りないのだ。

　もっと強い『力』の持ち主が敵でなければダメなのだと、まさしく痛感させられた。

　そのまま数分が経過。

　深夜のせいか、ひとりの通行人も一台の車も来なかった。もしかしたら、人払いの魔術を使っていたのかもしれない。そして、おもむろに護堂は叫んだ。

「ひ、人をサンドバッグあつかいしやがって……。あんたらな、やっていいことと悪いことの区別もつかないのかよ！」

　この怒声を聞く七人組の男たちは、肩でハァハァ息しながら、うなだれていた。

「畜ちく生しよう、バケモノめ……」

「や、やはり俺たち程度でどうこうできる相手じゃないということか……」

「みんな、くじけるな。この任務に失敗したら、オレたちに帰る場所はないぞ！」

　とか言っている。彼らの方が被害者のようだった。

　だが、仕方ないのかもしれない。たしかに護堂は満まん身しん創

そう痍い。しかし、なんだかんだで割と元気なのも事実だった。むしろ襲撃側の方が手足を痛めて苦しんでいた。

　護堂の顔面に左フックを喰くらわせた男は、手首が妙な角度で曲がっている。拳も砕けたようだ。護堂のすねにローキックを浴びせた男は、逆に自分の足を押さえてうずくまっている。

　……カンピオーネの骨は鉄より硬いとエリカは言った。

　だとしたら、うっかり素手でぶん殴って各部の骨——頭ず蓋がい骨こつや頬ほお骨ぼね、下か顎がく骨こつ、肋ろつ骨こつ、大だい腿たい骨こつ、脛けい骨こつなどを強打すれば、こうもなるだろう。

　いや、護堂の打ち身・擦り傷・内出血も数え切れないほどだったが。

　だが骨は折れず、砕けず。筋肉も靭じん帯たいも無傷。脳や内臓もなんともない。そして何より、護堂が重傷のときだけ使える『駱らく駝だ』もまだ使用不能だった。

　要するに、その程度のダメージなのである。

「もはや決死の覚悟で臨のぞむ以外に手はないようだな……。全員、武器を取れ！」

　七人組のリーダーらしき男の手に、忽こつ然ぜんと両刃の斧おのが顕あらわれた！

　他の男たちの手にも次々と物騒な道具——細身の剣だったり、拳けん銃じゆうだったり、籠こ手て付きの短剣だったり、ハンマーだったりが顕れる。

　エリカも使っていた武器を呼ぶ魔術。こいつら、やっぱり魔術師！

　護堂は慄りつ然ぜんとした。相手が素手ならともかく、刃物や飛び道具まで持ち出されたら「痛いだろう！」ですむとも思えない——否、結構すみそうな気もするが、試ためしたくない。

　ここを切り抜けるために、どうする!?　思いついた瞬間、つい護堂はやってしまった。

「鋭く近より難がたき者よ、契けい約やくを破りし罪ざい科かに鉄てつ槌ついを下せ！」

　これなら使える——と思いついた化身を、とっさに呼んだのだ。

　言こと霊だまに応こたえて、下を流れる川の水面にもやもやと闇やみが顕れる。その闇は蒼あお黒ぐろい火花を散らしながら、ひとつの形に変わっていった。

　ウルスラグナ第五の化身『猪いのしし』。

　巨大な何かを破壊したいときだけ呼び出せる、全長二〇メートルの黒い神獣。とりあえず、今回はこの橋をふっ飛ばせという指定で召しよう喚かんした。

「う、うわあああああああっ!?」

　眼がん下かに出現した神獣を見るなり、七人組のひとりが絶叫した。

　その直後、『猪』は例によって咆ほう哮こうした。

　オオオオオオオオオオォォォォォォォンンンンンンッ！

　吠ほえながら『猪』は垂直方向にジャンプ。

　頭突き＆体当たりでやすやすと——それこそ紙細工でも壊すように、鉄筋造りの橋を粉砕した。しかも勢いあまって、数十メートルも真上に飛びあがり、東京都足立区の夜空に魁かい偉いなシルエットをくっきりさらけだしてくれた。

　また、『猪』の吠え声には超音波じみた何かがふくまれているらしい。

　咆哮が轟とどろいた住宅街のガラスは、パリンパリンと割れたり、ひびが入ったりした。

　間近でこれを受けた七人組は、衝撃波ソニツクウエーブを喰くらったように吹き飛んだ。さらに橋の崩壊に巻きこまれて下へ——川原や、運の悪い数人は汚い水のなかに落ちた。

　ちなみに、召喚者の護堂はいち早く川原に避難していた。

『猪』がジャンプする直前、とっさに橋ゲタから飛び降りたのである。

「どうもすいませんでしたァ！」

「申し訳ございませんでしたァ！」

「今回の不始末、自分たちの頸くびだけで勘弁していただきたく！」

「郷く里にの家族や親族は、どうかご容よう赦しやくださいっ！」

　橋での戦い（？）が終わったあと。

　近隣住民や消防、警察が次々と集まる事件現場から護堂と七人組は逃げ出して、とある公園までやってきた。そして、七人組はいきなり『土ど下げ座ざ』したのである。

　どうやら〝DOGEZA〟＝最上級の謝罪という認識らしい。

　ちなみにこの連中、話す言葉はイタリア語だった。あのバカげた仮面を取ると、意外と若い顔ばかりで護堂は驚いた。一〇代後半から二〇代前半とおぼしき連中なのだ。魔術師というより不良少年の集まりのような……。

「最後は俺も手（？）を出したし、おあいこってことでもういいんだけどさ。あんたたち、どうしてあんな真ま似ねをしたんだよ？」

　大きな体を精一杯縮めて『土下座』する彼らに、護堂は訊ねた。

「俺を誘ゆう拐かいして身みの代しろ金きんを請求しても、うちに金はな——くはないけど。たぶん、おふくろは素直に出さないと思う。人質になった俺に『金が惜しいから自力で脱出しろ』ぐらい言いそうな母親だし……」

「あ、いえ。そんなことが目的ではなく」

「ええ。実はわれわれ、ミラノから来たのですが。向こうでは今、草薙さまのことがちょっとうわさになっておりまして」

「う、うわさ？　どういうのだよ？」

　腰の低い感じのイタリア語で教えられて、護堂は眉まゆをひそめた。

「まだ未確認情報という形ですが……。最近、南イタリアに『カンピオーネ』らしい日本人が出没して、神と戦った——と。で、われわれの盟めい主しゅサルバトーレ卿きようが『なわばりを荒らされた』と、ずいぶんお怒りになりまして」

「サルバトーレ卿……ああ、あの人か。でも、何で怒ったりするんだ？」

　空港で会った青年のヘラヘラした笑顔。怒っているようには見えなかったが。

「卿は戦士のなかの戦士でいらっしゃいますからね。『まつろわぬ神』が顕れたら、戦わずにはいられない御方なのです。そのため、自分が倒すべき敵を草薙さまが横取りされたと激怒されたらしく」

「戦士のなかの戦士!?」

　サルバトーレ・ドニなる人物の印象に、これほどそぐわない言葉はない。

　護堂はつい『ウソだ！』と返しそうになった。しかし、あの円筒型ケース——あそこから感じた剣けん呑のんそうな印象を思い出した。

　カンピオーネとやらの直感が彼の本性を察知し、警告したとか……？

「じゃあ、あんたらはその男の命令で俺を襲ったのか？」

「あー……そのようなものです」

　微妙な返答にピンときたので、護堂は七人組の顔を次々とにらみつけた。『それで？』と言わんばかりに仏ぶつ頂ちよう面づらもする。その効果はてきめんだった。

「さ、サルバトーレ卿は、草薙さまを現地でお助けした《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》——つまり、われわれの上に命じられ

たのですっ。日本のカンピオーネ草薙護堂を力ずくで自分のところに連れてこいと」

　護堂にすごみがあったからではなく、魔王の悪名とやらが効いたのだろう。

　七人組のリーダーは、あわてながら意外な告白をした。

「え？　ってことはあんたら、エリカの仲間だったのか⁉」

「仲間ではなく傘さん下か、下部組織ですな。上の指示にしたがって、雑用や汚れ仕事を請うけ負おうグループといいますか」

「ヤクザの上下関係みたいな感じか……」

　○○組系暴力団、△△組というような組織を想像して、護堂はうなずいた。

「魔王カンピオーネ相手に〝力ずく〟という暴挙を行うわけですから、さすがに上――《赤銅黒十字》そのものに所属する者を派は遣けんするのもためらわれる……というわけで、われわれが送りこまれた次第です」

「だけど、何で力ずくなんだ？　言葉や文書でクレームを入れればいいじゃないか」

　護堂としては、まっとうな指摘をしたつもりだったのだが。

　しかし、七人組は暗い面おも持もちになってしまった。

「そこはなんといいますか、魔王方のやられることですから」

「神すら殺あやめられた方々です。その魂たましいがひとたび荒あらぶれば、われらの理解がおよばぬほどの烈はげしさにもなるでしょう。現に草薙さまも――」

「え、俺？　俺は温厚というか、割とおだやかな人間だと思うけど……」

「何をおっしゃいます。われらごときを打ち倒すために、神獣まで解き放つ苛か烈れつさ――さすがお若くともカンピオーネ。サルバトーレ卿と並び立つ荒武者よと、われら一同感服いたしておりま

す」

「……それはそうと、エリカのことなんだけど」

　シチリア以来の、畏い怖ふと恐怖のまなざしで見られるという体験。

　護堂は居心地が悪くなり、話題を変えた。

「あいつなら、もっと穏便なやりかたを思いつきそうなものだけど、何をやってんだ？　それこそ電話の一本もよこせばいいだろうに」

　別れる前に一応、連絡先を交換してあったのだ。

　自分から女子に電話やメールをするのも気恥ずかしかったので、護堂からはまだ連絡を取っていなかったが、エリカがそんな躊ちゅう躇ちょを覚えるとは考えづらい。

「姫——ブランデッリ卿は草薙さまをお助けした責任を問われて、ひとまずサルバトーレ卿のお怒りが解けるまで謹きん慎しん処分となっております」

「謹慎!?」

　土下座しながら謝罪と説明をする若者たちを前にして、護堂は思った。

　これは、かなり厄やっ介かいな状況なのではと——。

第５章　ミラノ狂想曲

1

　四月中旬の夜、七人組の襲撃を受けた護ご堂どうはイタリアでの一ひと悶もん着ちやくを知った。

　尚、襲撃グループの面々は任務にも失敗したことだし、ひとまず東南アジアか南米方面に逃れるつもりらしい。ほとぼりを冷さますとか何とか。

「……なんだか犯罪者みたいだな」

「……まあ、境遇としては似たようなものです」

　さんざん痛めつけられた護堂だが、話している間に傷は治っていた。

　打ち身も内出血も、全部きれいに完治。痛みもない。むしろ『猪いのしし』の破壊行為に巻きこまれた七人組の方が傷だらけだった。

　連中と別れたあと、護堂はメモを取りだした。

　国際電話のかけ方を調べたときのメモだった。日本からイタリアへかける手順を見ながら、護堂は携帯電話を操作した。通話料は高くつくが、仕方ない。なんとしてもエリカと話をしなければ――。そのまま携帯を耳に当て、しばらく待つ。

　コール音がやたらと耳にひびく。なかなか出ない。あきらめかけたときだった。

『このタイミングで電話をかけてくるということは、事情を知ったようね』

　聞こえてきたのは、もちろんエリカの声だった。

『はじめに、これだけは言わせてちょうだい。護堂、あなたが平和主義者だなんてウソもいいところだわ』

「どういうことだよ？」

『いくら下部組織の人材でも、任務に失敗したあげく、わたしや組織の名を明かすような不ふ手て際ぎわ、するはずないもの。なのに、あなたは電話をかけてきた。よほど絶対的な力の差を見せつけて、彼らを畏い怖ふさせたに決まっているわ』

「……それより本題に入らせてくれ。何とかってヤツが変な命令を出したって聞いたぞ」

　まさか電話一本で、そこまで読まれるとは。

　エリカの聡そう明めいさに陰かげりはないらしい。護堂はちょっと強引に話題を変えた。

『サルバトーレ・ドニさまよ。イタリアが生んだ六人目のカンピオーネ。南ヨーロッパの魔術社会に君くん臨りんする盟めい主しゅ』

「盟主……つまり大ボスみたいな？」

『優雅さに欠ける表現だけど、まちがいではないわ。ただし、サルバトーレ卿きようは君臨すれども統治せず。わずらわしい支配という業務にしばられず、わたしたち南なん欧おうの魔術師全ての畏怖と奉仕をほしいままにする御方よ』

「パレルモの空港で会った人だよな？　何でそんなこと言い出したんだよ？」

　いちばんの疑問をぶつけると、エリカはひどく憂ゆう鬱うつそうに言った。

『あのとき卿から〝決闘しよう〟って言われたでしょう？　あれは冗談でも何でもなくて、本気のお言葉だったの。でも護堂は断っ

た。それが理由よ』

　予想外すぎる答えに、護堂は「へ？」と絶句した。

『卿は草くさ薙なぎ護堂というカンピオーネに興味を持たれて、刃やいばを交まじえてみたいと思われたのでしょうね。でも、あなたはとりつくしまもない感じで断ったから……』

「待てエリカ。おまえの言ってることはちょっとおかしい」

『わたしはおかしくないわ。おかしいのはサルバトーレ卿の頭の中身ですもの』

「おまえ今、さらりとすごいことを言ったな……」

　護堂はビアンキと揉もめた一幕を思い出した。

　あのときエリカは遠まわしに宣言した。サルバトーレ某なにがしはバカ者だと。

「つまり、そいつは常識が通用しないバカなのか？」

『修しゅう辞じ学がく的な形容を使わずに言えば、まさにそうなるわ。勇気と正直さを併あわせ持つ人間は、あの方の人となりをためらわずに〝バカ〟とか〝阿あ呆ほう〟と表現するわね』

「そんなヤツを何だってボスに祭りあげるんだよ⁉」

『仕方ないじゃない、カンピオーネなのですものっ。あんな方でも、まちがいなく神を殺あやめた勇士なのよ！　それに、愚おろかであることと器量の大きさは矛む盾じゅんしないわ』

　エリカの声こわ音ねが真剣になったので、護堂は黙った。

『あの方はたしかに常識の通用しない愚か者よ。だけど、稀き代たいの英えい傑けつでもあるの。地上の全ての魔術師、全ての武力が挑いどみかかったとしても、あの方に勝つことはきっとできない。サルバトーレ・ドニとは、それほどの怪物よ』

　破格の評価を口にしてから、さらにエリカは言った。

『ねえ護堂、この件に深入りするのは――いいえ、わたしたちと関

かかわり合うのは、もうやめておきなさい。そのまま静かに東とう京きようで暮らすといいわ』

　唐突にさとされて、護堂は眉まゆをひそめた。

『今回のような訪問がもう何回かあるかもしれないけど、適当にいなしておけばいいから。あなたの力なら、面倒ではあっても、むずかしくはないでしょう？』

「おいおい……」

　エリカたちにも思おも惑わくがありそうだと察して、護堂はあきれた。

『いい、ここが生死を分かつ分ぶん岐き点てんよ。イタリアでの出来事は全て夢。頭からきれいに消し去って、平穏に生きることだけ考えなさい』

「メルカルトのときは、戦うしかないみたいに言ったじゃないか！」

『あのときは選択の余地がなかったもの。でも、サルバトーレ卿からはまだ逃げられるわ。そして、これが最大の忠告。もう二度とイタリア——いいえ、欧州の土を踏まないこと』

　厳げん粛しゆくな口調から、エリカの本気がうかがえた。

『そんなことしたら、今度こそサルバトーレ卿は舌なめずりして剣を抜くわよ。それに、わたしが所属する《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》には、あなたを力ずくで拘こう束そくして卿のもとにお連れせよと厳命が下されている。この意味がわかる？』

「……エリカも俺の敵になるってことか？」

『そうせざるを得ないわね。あなたもカンピオーネだし、立場の上ではサルバトーレ卿と同格だけど……。でも、わたしたちはイタリアの結社。盟主である卿の、しかも厳命とあらば、そちらを優先せざるを得ないもの』

　エリカは淡々と、感情のこもらない声で言った。

『だから、わたしたちの関係もこれでおしまい。本当なら、こうし

て事情を教えてあげることも問題行為なのだけど……。まあ、お別れの言葉もなしというのも味気ないしね』

「おしまいって、待てよエリカ！」

『さようなら、草薙護堂。あなたといっしょにいた日々は短かったけど、それなりに印象的で、思い出深いものだったわ』

　電話が切れた。かけ直しても、どうせ出ないだろう。護堂はため息をついた。

　自分はどうしたらいい？　言われたとおりに逃げて、隠れて暮らすか？　たしかにそうする方が賢い選択だと思う。安全で無難、そして堅実。だが。

「冗談じゃないっ。こんな状況のまま、成り行きまかせにできるもんか！」

　何より、エリカにどういうつもりだと問いただしたい。

　護堂の頭のなかで、大まかな計画ができあがりつつあった。あとで事情にくわしい人々の意見も聞き、修正を加えるべきだろう。イタリアで作ることができた仲間は、エリカだけではないのだから──。

　計画を実行に移したのは、四月の最終週であった。

　日本では黄金連休ゴールデンウイークがはじまったばかり。高校生である草薙護堂も、ひさしぶりの長期休暇を手にしていた。それを利用してやってきたのは、東京から遥はるか西方の地だ。ここまで来るのに、飛行機でなんと一二時間もかかる。

　時差は八時間。マルペンサ空港に着いたのは昼すぎだった。

　時差ボケのせいでだるい体に鞭むち打うって、護堂は電車に乗りこんだ。この都市の路線は三つと、東京に比べれば圧倒的にすくないが、それでも路線はだいぶ複雑に入り組んでいた。

　だが、今の護堂は言葉に不自由していない。

　通りすがりの人や駅員にあれこれ訊ねながら電車を乗りつぎ、一時間ほどで目的地の中央チエントラーレ駅に到着した。護堂が利用したのは地下鉄だが、それ以外にもほぼ全ての国内路線、国際列車まで発着するという。二四番ホームまであるらしい。

「さすがにサルデーニャやシチリアよりも都会だな……」

　しみじみと護堂はつぶやいた。

　東京在住だから、ただの都会など珍しくもない。だが、ここでは近代的な都会の景色と、欧州の古都らしいゴシックやロマネスク様式の街並みが違和感なく共存している。

　また、この街ではなつかしい路面電車が健在だった。

　灰色の街を、一両ないし二両だけのオレンジ色の列車がのんびり進んでいく。

　日本では見られない風景のなか、護堂はお目当てのビルを探す。タクシーを使う手もあるが、先のわからない旅だ。節約するに越したことはない。

　……ちなみに、旅費は自腹を切るつもりだったのだが。

　相談相手のひとり、ザンパリーニ老人が航空券（それもファーストクラス！）を手配して、プレゼントしてくれたのには恐れ入った。あわてて電話で断ったら、

『ご遠慮は無用です。ご存じでしょうが、金はいくらでもありますからな！』

　と、豪快かつヤクザくさく拒絶された。護堂は厚意をありがたく受けることにしたが、必死に頼みこんで、ようやく席をエコノミーに変えてもらった……。

　彼はイタリアにおける『草薙護堂』情報の浸透度も教えてくれた。

『御身のことをいたずらに喧けん伝でんするなと、シチリアとサルデーニャの魔術師は勅ちよく命めいを受けましたからな。われらはその仰おおせを忠実に守っております。このため本土では、草薙護堂の情報はあくまで未確認情報としてしか広まっておりません。例

外はエリカ・ブランデッリの《赤銅黒十字》のみですな』

　尚、『なんでしたら私も加勢に……』という申し出の方は、丁てい寧ねいに固こ辞じさせてもらったが。

　また、今探しているビルを教えてくれたのは、もうひとりの相談相手である。

　自宅に常時接続のネット環境とＰＣを完備しているルクレチア・ゾラと、護堂はビデオチャットで〝作戦会議〟を行った。

『エリカ嬢の結社《赤銅黒十字》とコンタクトを取りたいのなら、いちばん真正直な方法は本部ビルに乗りこむことだな』

「秘密結社にそんなものがあるんですか？」

『あそこはテンプル騎士団の系けい譜ふに連つらなる、由ゆい緒しょ正しい結社だぞ。あの騎士団は単なる武装集団ではない。金融業を営んだ世界初の組織で、銀行の元祖だ。彼らが築いた巨万の富を奪うために、フランス王フィリップ四世は騎士団を壊滅させたほどだからな』

「そうでしたか……」

『その末まつ裔えいのひとつ《赤銅黒十字》も、表向きは財団の形を取っている。実際、いくつもの事業を営む優良企業だぞ。で、その代表がパオロ・ブランデッリ氏——エリカ嬢の叔お父じにして親代わり、《赤銅黒十字》総そう帥すいで伝説の騎士という御ご仁じんだ』

　と、気けだるそうな雰ふん囲い気きと官能的な肢し体たいを持つ美女は教えてくれた。

　ルクレチアの教えを胸に刻んだ護堂は、地図を見ながら中央駅周辺のオフィス街をさまよい、ようやくお目当てのビルを見つけ出すことができた。

　一五階建ての立派なビル。出入りするのは、ほとんどスーツ姿の男女のみ。

　高校生、しかもあからさまに人種のちがう日本人の身で、そこに入る。すこし度胸が要いる行為だったが、護堂はためらわず実行に

移した。

　おそろしく清潔なビルのエントランスをくぐると、まっすぐ受付に向かう。

　そこにすわっていた中年女性に、護堂はにこやかに告げた。

「パオロ・ブランデッリに大至急伝えてもらえますか。草薙護堂がミラノに来た。この街でしばらく遊んでいるから、おまえの役目とやらを果たしてみせろって。俺をサルバトーレ・ドニのところに連れていくなら、命がけでかかってこい。そんな感じで伝えてください」

　ルクレチアのアドバイスを参考にした、挑発の文句。

　伝え終わると、護堂はおばさんの返事も待たずに受付を離れた。途中、防犯用のカメラを見つけたので、そのレンズをなんとなくにらんでからビルを出る。

　ここから先はアドリブで行くしかない。

　ひとまず、せっかく来たことだし本当に観光でもするかと、護堂は歩きだした。

2

　護ご堂どうはミラノ中央駅から四つ目のドゥオモ駅で、地下鉄を降りた。

　ドゥオモ――すなわち、カトリックの聖堂である。

　主への祈りと賛歌を捧ささげるための聖域。たいていは壮そう麗れいで美しい宗教建築物だ。なかでも、ここミラノの大聖堂は群を抜くみごとさらしい。

「まあ、基本を無視して応用編に進んでも、あんまり意味はないしな」

　というわけで、ミラノ観光の定番・大聖堂見物に行った。

　世界最大のゴシック建築である。敷地内には一五〇基近く（！）の尖せん塔とうが並び、最も高い塔は一〇〇メートルを越す。さらに二〇〇体以上の彫刻が彩いろどりを加える。五〇〇年の歳さい月げつをかけて完成したというのも納得の壮麗さである。

　サルデーニャ島やシチリア島で、護堂もドゥオモを見る機会があった。

　だが、それらと比べても、たしかに別格だと思われる。

　ひとしきり見物したあと、護堂は昼食がまだだったのを思いだした。どこかで腹ごしらえでもと考えながら街を歩いていると、チーズのいい匂においが鼻に飛びこんでくる。

　見れば総菜屋らしき店の前で、パンか何かを立ち食いしている人たちがいた。きちんとした店に入るのも、面倒だったところだ。そこで人気商品だという揚あげたピザを買いこんだ。みんなが立ち食いしていたのはこれだったのだ。

　半月型のもちもちしたパン生地に、溶けたチーズとトマトソースがたっぷり入っていた。

　只ただならぬ雰ふん囲い気きを感じたのは、熱々のジャンクフードを食べ終えた頃だった。

　首筋がチリチリするような、やや不快な感覚。

　誰かに狙ねらわれているのかもしれない。まさか街中で襲ってくるつもりなのか？　護堂はまわりを見まわした。人通りの多い、にぎやかな界かい隈わいだ。

　草くさ薙なぎ護堂の権けん能のうとやらは、どれも傍はた迷めい惑わくなものばかり。

　もっと広い——暴れやすい場所に動くべきかもしれない。護堂はふたたび歩きだした。幸いにも当てはある。ちょうど、次に行こうと考えていた場所が理想的だったのだ。

　地図を片手に二〇分ほど歩くと、赤茶けたレンガ造りの城が見えてきた。

　これがスフォルツェスコ城。

　一五世紀にミラノを支配した、スフォルツァ家の城である。ルネッサンス期にはレオナルド・ダ・ヴィンチも内装を手がけたという。この城の前には広場があり、さらにミラノ一の広さを誇るセンピオーネ公園と隣接している。

　護堂は城を素通りして、公園に入るつもりだった。

　城のすぐ前の交差点で信号待ち。大都市らしく交通量はそれなりに多く、目の前をビュンビュン車が走り抜けていく。このとき、向こうから走ってくる大型のＲＶ車がいきなりスピードを上げ、護堂めがけて一直線に突っこんできた！

「げ!?」

　アクセル全開で向かってくる大型車両を見て、護堂は驚いた。

　そして、納得もしてしまった。欧州の魔術関係者はカンピオーネのことを怪獣同然のバケモノと認識しているらしい。しかも、彼らお得意の魔術とやらは、ほとんど無効化される。

　そんなのを相手に『力ずく』なら、当然これもアリだよなと。

　とにかく、身を守らなくては。

　避ける——いや、迎え撃つ。護堂はとっさに決断した。いつのまにか『雄牛』が使用可能になっていたのだ。ヘビー級の格闘家は対象外で、人ひと喰くい虎とらやＲＶ車なら大丈夫——とんでもなくシビアな使用条件だったらしい。

　ともあれ、護堂は底抜けの怪力を全身にみなぎらせて、両手を突き出す。

　二本の手で突進してくるＲＶ車のボンネットをへこませながら、その車体をまるごと受け止め、四し肢しと全身の力を振りしぼり——。

「だあああああっ！」

　重量二トンはあろうＲＶ車を、両手で高々と持ちあげた。

空中に浮いた四つのタイヤはぎゅるぎゅると回転し、動力を無む駄だ遣づかい。運転席にすわる中年男は、恐怖で顔をひきつらせていた。

護堂はＲＶ車を逆さにして歩道に置いた。

地面につくのは天てん井じようなので、四輪はあいかわらず空転中だった。車内の運転手はひっくり返った態勢のまま十字を切り、何やら覚悟を決めている。

近くにいた人々は、おおむね『ポカン』という表情だ。デタラメすぎる光景のため、現実と認識できないのだろう。老いも若きも、白人も黒人も東洋系も、みんな呆ぼう然ぜんとしている。唯ゆい一いつ、近くにいた男の子が「すげー……」とつぶやいてくれた。

しかし、さほど驚いてない様子の人々もいた。スフォルツェスコ城前の広場や交差点、道端などに、護堂のバカ力を鋭く見つめる男たちがたしかにいたのだ。

だったら——。護堂はＲＶ車運転席のドアを『べきっ』と引きはがした。

「ええと、すいません。赤しやく銅どうなんとかって会の人ですか？」

ひっくり返った運転手に問いかける。相手は年長者なので、自然と敬語になった。

「俺はとりあえず、あの城に行きます。みなさんの相手はそっちでやりますから、ほかのお仲間にもそのことを伝えてください」

相手が大勢なら、予定どおり公園に入るのは上う手まくない。ひとりを多数で押しつつむのは、開けた場所の方がやりやすいのだ。

「あと、城とかにいる人の避ひ難なん誘ゆう導どうなんかは、そっちにお願いして大丈夫ですよね？」

パレルモのザンパリーニたちにできたことだ。

より大手だというエリカの仲間にも可能なはずだった。まあ、あちらとミラノでは事情がちがうのではとか、急に頼んだら根まわしの時間が足りないのではとか、ちらりと護堂も思ったのだが、そこ

は目をつぶる。

　この要請に、ＲＶ車を運転していた中年男性はこくこくうなずいた。

『魔王カンピオーネに挑いどむ勇者』というよりは、『上からの指示で無謀な戦いに駆り出された苦労人』という風ふ情ぜいなのが、気の毒かつ申し訳ない。

　ともあれ護堂は車から離れ、数十メートル先のスフォルツェスコ城に走りだした。

　遠方で起きている出来事を、部屋に居いながら魔術で観じる。

　童話などでは、割とポピュラーな光景だろう。たとえば、遠くで進行中の事件を魔女の水晶球が映し出す、みたいな……。

　今、エリカたちが観ている映像は、まさにそれと同じだった。

　ただし、これを映すのは薄型の大型液晶テレビである。

　懐かい古こ趣味な水晶球の方があつかいはむずかしいものの、エリカ好みだった。しかし、仲間の大騎士たちは賛同せず、より簡便な道具を使いたがるのだ。

　——ここは《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》本部ビル一〇階の、幹部専用『待機室』。

　大騎士の位階者だけが利用できる部屋だった。ビリヤード台やダーツ、チェスなどの娯楽設備のほか、プライベートバーまで用意されている。

『だああああああっ！』

　画面のなかで、エリカのよく知る少年が活いき活いきと躍動していた。

　大型自動車を持ちあげ、ドアを引っぺがし、『スフォルツェスコ城で戦う』と宣言して走りだす。おそらく、周囲に迷惑をかけまいと考えているにちがいない。

　だったら戦闘しないという選択肢もあるのに――。

　それに気づかない少年の迂う闊かつさに、内心あきれるエリカだった。

「サルバトーレ卿きようの無茶ぶりに悩まされていたら、もうひとりのカンピオーネ殿がついに自みずから乗りこんできたか。まるで悪夢のような現実だな……」

　嘆なげいたのは、大騎士のひとりクラレンスである。

　ととのった面おも差ざしとスキンヘッドが目を惹ひく、オランダ出身の黒人だ。

　三一歳。実力・経験・見識を全て備える、《赤銅黒十字》の実質的な筆頭騎士だった。ただしイタリア国籍ではないため、彼が筆頭の称号『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』を名乗ることはない。

「しようがねえだろ。相手は神殺し、カンピオーネの魔王さまなんだぜ」

　乱暴な口調で愚ぐ痴ちったのは、ジェンナーロ・ガンツだった。

　二〇代前半の粗野な男だが、剣と魔術のどちらにも長たけた大騎士だ。南イタリア出身で、エリカと『紅き悪魔』の座を争うライバルでもある。

　まだ若いくせに三〇代と言っても通用する、ひげ面づらの老ふけ顔だった。

「殴なぐられたら最低でも五倍増しで殴りかえす性格じゃなきゃ、神様と戦おうなんざ思うはずねえんだからよ……」

「サルバトーレ卿の勅ちよく命めい、『汝なんじら、力を以もつて草薙護堂を我のもとに引きずり出せ』」

　沈ちん鬱うつな顔つきで、クラレンスはつぶやいた。

「こんな御指示をバカ正直に遂すい行こうして、七人目のカンピオーネと戦うなど言ごん語ご道どう断だんだ。遂すい行こうするふりをしながら、あの男を捜索する予定が……」

「今、ミラノには卿が居いすわったままだ。そんなところに殴りこまれちゃ、もうダラダラごまかすわけにもいかねえ。『王』の御前だからな……それでクラレンスよう」

　大騎士にふさわしからぬ伝法さで、ガンツは言った。

　彼のこういう面をエリカはあまり気に入らないのだが、おたがいさまらしい。常に優美でありたいエリカの態度に、ガンツもよく文句を言う。

「捜索の方はどんな案あん配ばいだよ？」

「サルバトーレ卿の監視役……いや、執事のアンドレア・リベラは行方ゆくえ不明のままだ」

　監視役と言いかけて、クラレンスはさりげなく修正した。

「最後に目撃されたのは、ちょうど二週間前。われわれ《赤銅黒十字》に例の勅命がくだされる、まさに前日だな」

「だったら、真相は明白じゃねえか！」

　ガンツは粗野に吐き捨てた。

「あのまじめ男がいなけりゃ、羽根をのばせると卿は考えたに決まってやがる！」

「ああ。リベラの消息は、サルバトーレ卿の指示で向かったボローニャのエトルリア遺い跡せきで途絶えている……。おそらく、そこで事件が起きたにちがいない。卿の差し金で待ちかまえていた一団がリベラを誘ゆう拐かい・監かん禁きんした、というような——」

　ふたりの嘆なげき節ぶしを聞きながら、エリカはおもむろに口を開いた。

「こうなったら、卿は目的を果たされたも同然。近日中にアンドレア卿はどこかで無事な姿を発見されるかもしれないわね」

　この席では、はじめての発言である。一応『謹きん慎しん中ちゅう』であるため、あえて無言を通していたのだ。するとクラレンスは眉まゆをひそめた。

「このまま、魔王同士の決闘がはじまるわけか」

「サルバトーレ卿は思し慮りよの足りない方だけど、不思議と抜け目ない方でもあるわ。現に今も、何か動きがあったときに備えてミラノに滞在中ですし」

　サルバトーレ・ドニの本拠地は、イタリア中部のトスカーナ州である。

　彼は配下の軍団など持たず、わずかな側近と孤こ剣けんのみをしたがえて、悠ゆう々ゆう自じ適てきの日々を送っている。部下が必要なときは適当な結社に声をかけ、一時的に仕つかえさせる。

　今回は、《赤銅黒十字》がその役となった。

『ブランデッリ家の令嬢が草薙護堂の介かい添ぞえ役をつとめたため』という理由まであげられたため、断ることは不可能だった。

　ちなみに、愛人云うん々ぬんのもろもろは、仲間たちには伝わっていない。護堂の命令があったため、サルデーニャとシチリアの魔術師は事の詳細を公表していないからだった。

　だから、エリカも〝愛人関係〟のことはしっかり口をつぐんでいた。

「しかし姫。君は言ったな、七人目の魔王殿は戦うために理由を必要とするご気性だと」

　クラレンスはブランデッリ家の令嬢でもあるエリカを『姫』と呼ぶ。この禿とく頭とうのオランダ人は彼女にとって、戦術・戦略・政治の師でもあった。

「ええ。受け身で戦うときはいいのだけど、なかなか自分から攻めこもうとしない人なの」

「……攻めこんできてるじゃねえか」

　テレビに映る若き魔王を、ガンツが指さした。

「そこが彼のいびつさよ。基本的に自分を抑おさえようとはするんだけど、ちょっとでも戦いを正当化できる理由を見つけたら、すぐ戦闘態勢にシフトするの」

「だとしたら、本当にろくでもない未来しか予想できないな……」

　ここで携帯電話が着信音を鳴らしたので、クラレンスは数十秒だけ携帯と会話した。

「悪い報せだ。サルバトーレ卿が宿泊先のホテルから姿を消された」

「こちらもすこしよくない感じだわ。ねえ、スフォルツェスコ城内部と周辺の避難状況はどんな具合かしら？」

　大画面液晶はスフォルツェスコ城の内部を映していた。

　かつて貴族の住居だった城内は、現在、美術館として生まれ変わっている。ここに駆けこんだ草薙護堂を追って、《赤銅黒十字》の騎士四〇名が突入していた。

『汝ら、力を以もつて草薙護堂を我のもとに引きずり出せ』

　その勅命を果たすため、クラレンスが送りこんだ決死隊だった。

　尚、彼らには『命を懸かける必要はないが、懸けているように見せろ』と密命も通達されているのは極秘事項である。

「あちらで待つと指定された時点で、各方面に連絡した。現在、警察の手で城の近辺と、隣接するセンピオーネ公園の封ふう鎖さがはじまっている。あと、城内の方は——」

　クラレンスはテレビのなかの乱戦を見て、つぶやいた。

「閉館時間が近かったおかげで、一般客はさほどいなかったようだ。避難の誘導は比較的たやすかったはずだ。あちらにはそれなりに気の利く連中を派遣したから、その辺は上手くやっている……と思いたいな」

　護堂の暴れっぷりは無茶苦茶もいいところだった。

　自分を力ずくで拘束しようとする屈強の戦闘集団に対して、『雄牛』の怪力でゴシック建築の柱をひっこぬき、扇風機よろしく振りまわしたり。人の背よりも大きな大理石像を片手で投げつけたり。敵が飛び道具——銃火器も所持していると見るや、厚さ二メートルはあろう石版をやすやすと抱えあげて楯たてにしたり……。

　しかし、それでも戦闘の素しろ人うとと鍛きたえ抜かれたプロフェッショナルたち。

　こういうフィールドでの対決になれば、プロ側が圧倒的に有利なはずだった。しかし、その事実が逆に、エリカにある予想をさせるのである。

「つまり姫……そろそろカンピオーネ殿が本領を発揮する頃合いだと？」

「でしょうね。彼がこのままおとなしくしているはずないわ。現状のままだと埒らちがあかないと見たら、すぐに次の手を打てる人なのよ。『戦闘』は素人かもしれないけど、『戦術』の方は意外なほど達者で――」

　言いかけたところで、不吉な予想は的中してしまった。

　テレビのなかで、スフォルツェスコ城上空に漆しつ黒こくの巨獣が出現したのである。

3

　スフォルツェスコ城に駆けこんだ護ご堂どうは、怪力を頼りにデタラメに暴れた。

　だが、それで持ち堪こたえるのにも限界がある。徐々に追いつめられていった。

　しかし、怪力で粘ねばっている間に城内の一般人、スタッフらしき人々はいつのまにか姿を消していた。……だから、ついやってしまった。「そろそろヤバイか!?」というところまで追いつめられたとき、とっさに『猪いのしし』を呼んだのだ。

　この城を（ついでに邪じや魔まな連中も）吹っとばせと、ちゃぶ台をひっくり返すように。

　というわけで、スフォルツェスコ城の上空に、『猪』がいきなり顕けん現げん。

　体長二〇メートルの黒き神獣はそのまま自由落下。城の中心であるフィレーテ塔の屋根に腹から激突。この一撃で、城全体がゴオオンと大きく揺れた。

　地面に降りた『猪』は、城の壁面に頭突きや体当たりを気ままに敢かん行こう。

　当然、激しく揺れる。スフォルツェスコ城の石材やレンガは次々と粉砕され、吹き飛び、やがて城全体が崩れはじめる。しかも、例の咆ほう哮こう。

　オオオオオォォォォォンンンンンッ！

　衝撃波をともなう脅きよう威いの吠ほえ声だった。これで『猪』がふれてもいないところまで、豪快に吹っとぶ。城の崩壊は、もはや時間の問題であった。

「あんたら、命が惜おしかったら、とっとと逃げろ！」

　城内の襲撃者たちに、護堂は叫んだ。

　しかし、必要なかったかもしれない。すでに整然と退たい避ひをはじめていたからだ。実に統とう率そつの取れた避難ぶりだった。まあ、逃げていく連中の顔つきはどれも必死そうで、まちがっても余裕の退場という雰ふん囲い気きではなかったが……。

　彼らに続いて、護堂の方も城外めざして駆けだした。

　さっきから『猪』に「まだ本気で壊すなよ！」と念を送っている。意外と効果があるようで、今までよりも若じやつ干かんおとなしい暴れぶりに思える。その間に護堂はどうにか脱出を遂とげた。天てん井じようから落ちてくる石材、倒れてくる柱や壁などにたっぷり悩まされながら。

「死ぬかと思ったぞ、ほんと……」

　城外に出た護堂は、ふぅと息を吐き出した。

　その背後では、ついにパワーを全開にした『猪』が嬉き々きとし

て躍やく動どう。赤茶けたスフォルツェスコ城が、どんどんガレキの山と化していく。

　オオオォォンンンンッ！　咆ほう哮こうが轟とどろく。

　まさに勝利の雄お叫たけびというところで、『猪』は満足そうに消え失せていった。

　残されたのは、破壊の限りを尽くされた中世の古城。

　護堂は「なんてことをさせちまったんだ」と頭をかかえようとして――やめた。

　金髪の青年が近づいてきたからだ。見覚えのあるハンサム顔。細身だが、鍛きたえ抜かれたアスリート風の肉体。ラフなシャツにカーゴパンツ、スニーカーといういでたち。肩にかけるのは細長い円筒型のケース。

　魔王サルバトーレ・ドニとの、二度目の対面だった。

「ひさしぶりだね。すごい暴れっぷりじゃないか。草くさ薙なぎ護堂、君はやっぱり、僕が思ったとおりの男だよ！」

　目が合うなりドニはにへらと笑い、ウインクまでしてきた。

　一度しか会っていない相手のフルネームを正確に覚え、まちがえずに言う。『剣の王』にとって、これがどれほど異例なことか、護堂は知らない。だが、ある事実については教えられずとも察することができた。

　この男、どうやら本気で草薙護堂を気に入っているらしい、と。

「あんたは俺が勝負から逃げたとか言って、怒ってたんじゃないのかよ？」

　自然と敬語ではなく、タメ口になった。

　相手は歳とし上うえ。だが、なぜか『同格』という気がする。どちらが上でも下でもない。この男と自分は、完かん璧ぺきに対等同士の関係――。

「あんなのはウソだよ。怒ったふりをしただけさ。その方がみん

な、僕の希望どおりに動いてくれるからね」

　と、ドニは城外で待機していた《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》の連中を眺ながめた。

　彼らはドニの目くばせだけで、足早に撤てつ収しゆうをはじめる。バカだアホだと、さんざんな人物評ばかりだが、意外にも堂の入った王様ぶりだった。

　やはり、エリカたちを畏い怖ふさせる男。ただのバカではないのだ。

「でも、よかったよ。前に会ったとき、僕はピンときたんだ。君はたぶん、こっちが追いかけたら、ツレなく逃げそうな男だなって」

「追いかける？　何だよ、そりゃ？」

「ほら、決闘の誘いをしたじゃないか。なのに、君はあっさり断って。僕としては『ちょっとその辺でどうよ？』『いいね、やっちゃう？』くらいのノリを期待したのにさ」

「囲い碁ごか将しよう棋ぎでも誘うみたいに、決闘とか言うな！」

「ああ、ジャパニーズボードゲームだね。似たようなものだと思うよ。僕にとっては、剣を抜いての決闘は金曜の夜のチェスとそんなに変わらないノリだし」

　護堂の糾きゆう弾だんを、平然とドニは受け流す。

　ツッコミがツッコミにならないボケっぷりだった。

「でも、君の方からイタリアに来てくれてよかったよ。僕が直接日本に行っても、どうせ君は取り合わないだろうし」

「ちょっと待て。場所がイタリアだって、決闘の誘いなんかには乗らないぞ」

「どうかなァ？　わざわざ海を渡ってくるくらいだ。かなりその気に――殴られたら殴りかえす、決闘状には決闘状を送りかえす……そんな気分になってるんじゃない？」

　さりげなく図星を突くあたり、なんとも厄やつ介かいなバカだっ

た。

　思わず、護堂は天を仰あおぎたくなった。

「現にシチリアのときとちがってさ、ちゃんと僕の話を聞いてくれてるし。いろいろ悪だくみをした甲か斐いがあったよ」

　ドニは奇妙な目つきになった。ある種の仲間意識――めったに遭そう遇ぐうできない同朋でも見るようなまなざしで、護堂を見つめたのである。

「ねえ、もっと素直になりなよ。君はもっとケンカ腰になっていいんだ。で、ひとつ僕と決闘でもしてみよう。きっと楽しいよ？」

　と、ドニは円筒型ケースを開け、なかから『剣』を取り出す。

　――剣!?　護堂は目をみはった。まちがいなく鞘さや入いりの長剣だった。エリカたちはよく魔術で呼び出しているが、ドニはわざわざ持ち歩いていたらしい。

「口くち下べ手たな僕が言葉で求愛しても仕方ない。ここからは僕がどういう男か、体でわかってもらおう。護堂、僕は誓うよ。必ず君の心に火をつけ、僕と戦わせてみせると！」

「さんざんしゃべっておいて、口下手とか言うな！」

「いいや、下手だよ？　僕はこっちに比べると、どうも舌を動かすのが苦手でね。やっぱり、剣を振りまわす方が気楽でいいや」

　ドニはすらりと長剣を抜き放った。

　刃渡りは八〇センチ前後。両刃で、がっしりした造りだった。だが、たとえばエリカの魔剣クオレ・ディ・レオーネと比べると、ずいぶんと格が落ちる品に思えた。素しろ人うと目めにもわかるほど、粗そ雑ざつな大量生産品という雰囲気なのだ。

　だが、剣を持つドニを見て、護堂はゾッとした。

　かまえていない。ただ、だらりと下げた右腕で剣を持っているだけ。攻撃する気も防御する気もなさそうな、自じ堕だ落らくとさえいえる姿。

　なのに、理屈抜きにおそろしい。背筋がゾッとした。

　護堂はとっさに腰を落とし、両足を大きく開いた。三遊間を機き敏びんに守る内野手のような体勢だった。考えた結果の行動ではない。こうしなければまずいぞと、本能に導みちびかれるまま、自分の知る最も守備的な構えを取ったのだ。

「さすがだなァ。すごくいい勘かんしている。僕らみたいにカンピオーネになるような人間は、多かれ少なかれ『獣けもの』みたいなものだけど……君はそういうところが特に鋭いみたいだ。あのバルカンのじいさまに似てるよ、うん」

　ドニは勝手に感心しているが、護堂はそれどころではない。

　イタリアへ来る前に、この男のことをルクレチアから教わっていた。いわく、『剣の王』と呼ばれるほどの剣術家で、代表的な権けん能のうは〝全てを斬きり裂さく魔剣〟と〝鋼はがねの肉体〟。そのすさまじさを今、護堂は体験しようとしているのだ！

　――ついに来た。ドニは剣で斬りかかってきた……はずだ。

　しかし、護堂には見えなかった。

　ドニの腕が、剣が、陽かげ炎ろうのようにゆらめき、姿を消したのだ。

　カンピオーネになって以来、バカバカしいほどの集中力に助けられ、さまざまな猛スピードを見切ってきた動体視力が役に立たなかった。

　剣が消えた――いや、消えたように見えた瞬間、護堂は斜めうしろに跳びのいた。

　そうしなければ、俺は死ぬ。理屈抜きにそう悟り、助走なしで跳べる最大限後方へ、とっさにジャンプしたのだ。

　直後。おそらくコンマ一秒にも満たないほどの直後。

　今まで護堂がいた空間を、横よこ薙なぎの剣が真一文字に斬り裂いた――ように思える。太た刀ち筋すじも剣もおぼろにしか見えなかったので、断言はできない。

「ははは！　いいな。僕の剣を初見で喰くらわせたら、『三〇年も剣の鍛たん錬れんを続けてる♪』なんて感じのおじさんも大体まっぷたつにできるんだけど、やっぱり君には通じない。それでこそ僕の同類だよ」

　標的を逃したのに、ドニは陽気に笑っていた。

　だが、笑う瞳ひとみにひとつまみの翳かげがあることに、ようやく護堂は気づいた。この金髪の優やさ男おとこが単なる能天気なバカではないという証あかしに。

「何十年修行したって、どれだけ才能があったって、弱い人間はたいてい弱いままさ。生まれつき強い生き物は、わざわざ何か学ばなくても強い。うんうん、そういうデタラメな敵と戦ってこそ、鍛錬になるってもんだよ！」

「なあサルバトーレ・ドニ、ひとつ教えてくれ。今の、魔法か何かか？」

　おそらくちがうと直感しながら、護堂は訊きいた。

「つまり、魔法を使った目くらましで、剣を見えにくくしたのかって意味だけど」

「まさか。自慢じゃないけど、僕は超初級の魔術も使えない。才能なくってさ、なんにも覚えられなかったんだ」

　ドニは剣をだらりと下げる、自堕落な格好に戻っていた。

　まちがいない。これが剣士サルバトーレ・ドニの構え。たぶん、振り子打法とかトルネード投法と同じだ。気の遠くなるような鍛練を積みかさねた天才のみが到達できる、独特のオリジナルフォーム。

　あれを避けつづけるのは無理だ——。護堂は確信した。

　一方、ドニはつかつかとスフォルツェスコ城の跡に向かって歩いていった。

　さっき『猪』が粉砕した歴史的建造物。ただ原型はとどめていないものの、文字どおりに粉砕したわけではない。城壁のあちこちが崩れ、中央部の塔などは盛大に突き崩されていたが、往おう事じの

姿を偲しのべる程度には形を保っている。

　つまり『半壊』という感じの城跡を前にして、ドニは言った。

「君の権けん能のうは見せてもらったからね。僕も披ひ露ろうしておくよ。——ここに誓おう。僕は、僕に斬れぬ物の存在を許さない」

　静かなつぶやき。同時に、すさまじい呪じゅ力りょくがドニの右腕からほとばしる。

　護堂は目をみはった。金髪の優男は半袖のシャツを着ていたのだが、袖に隠されていない右腕が『銀』に変わったのだ。

　輝く白銀。染料を塗ったわけではない。

　なんとドニの腕は、銀を素材にする彫像のそれと化していた。

「この剣は地上の全てを斬り裂く刃。すなわち無敵の剣！　護堂、これが僕の権能さ！」

　ただの宣言ではない。呪力を操るための言こと霊だまと共に。

　ドニは銀の右腕で、長剣をスフォルツェスコ城跡の城壁に突き立てた。

　刹せつ那な、サルバトーレ・ドニの権能が発動した。呪力がドニの右腕から剣の刀身に移り、それから半壊した城の壁に伝わる。

　斬ざん。斬斬。斬斬斬。斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬。

　それは異様な光景だった。剣の切っ先でチョンと突かれただけなのに、半壊状態だった城の建物に無数の切り傷が一瞬にして刻まれたのである。

　傷を全て数えれば、数百に達したかもしれない。

　だが、そうする機会はすぐに失われた。無数の切り傷を刻まれた半壊状態のスフォルツェスコ城は、そのままバラバラになったからである。

　粉砕されたのではない。

細かな――それこそ小石程度の断片になるまで、ズタズタに寸断されたのだ。

『サルバトーレ・ドニは、魔剣の権能で全てを斬り裂く』

こういうことかと理解して、護堂はごくりと息を呑のんだ。

ただの一太刀で、城壁をも細切れにする斬撃。こんなものを喰らったら、カンピオーネのデタラメに頑がん丈じような肉体ですら一刀両断、あるいは八つ裂きにされておしまいだ。

そして護堂の場合、さらに悩ましい問題も生じる。

実はドニの剣技を見て、ひそかに思ったのだ。――でも、『駱らく駝だ』の化身ってやつなら、なんとか対抗できそうだなと。

人喰い虎とさえ格闘戦をして勝つ、バカげた戦闘能力。

あれを使うには、深ふか傷でを負ってなくてはならない。だが、ドニの魔剣はまさに一剣即必ひつ滅めつの領域。受ければ『駱駝』を使う間もなく、護堂は即死だろう。それはつまり、『雄羊』による超回復もできないという意味で――。

ゾッとした護堂に、スッとドニが歩みよってきた。なんとも軽い足取りだった。

まるで、雲の上を歩む仙せん人にんのように軽妙かつ玄げん妙みような足さばきで、護堂の――警戒中の敵へ接近する。あまりに軽い歩みだったせいで、反応するのが一瞬遅れてしまった。

気づいたときには、ドニはもう剣の間合いに踏みこんでいた。

そして、剣が消える。あの陽炎の太刀だ。

これをかわす時間も余裕も、護堂にはもうない――万事休すか。否。まだメルカルトの稲妻をしのいだときの『鳳おおとり』があった。

超高速の攻撃にさらされたときに使える、神速の化身。

護堂の視覚・感覚・思考が超加速するのに反して、周囲の全てが減速する。おかげで、ようやくドニの太刀筋が見えた。金髪の剣士

は下から逆ぎやく袈け裟さに斬りあげてくるところだった。

　護堂は『鳳』の神速で横に動き、これをかわす。

　さすが超加速状態。あぶなげなく避けることができた。護堂はそのまま、ドニのみぞおちに右拳をねじこもうとした。こちらは素人、あちらは剣の達人だが、これだけスピード差があれば、一方的に攻撃できるはず。

　そう思っての攻撃だった。だが護堂はギョッとした。

　みぞおちを殴るはずの拳は右に大きくズレ、虚こ空くうを突いたのだ。完かん璧ぺきに目測があやまっていた。しかも、驚く護堂にドニが話しかけてくる！

『へえ……君の権能、なんか面白いなァ。神獣を呼ぶだけでなく、アレクみたいに加速の力まで使えるんだ。制限付きだけどいろいろできるってヤツなのかな』

　護堂のやったことがドニにはわかるらしい。能天気に笑いながら言われた。

　その声は遠くから呼びかけられるような、不思議な響きだった。

『でも残念。実は、速いだけなら全部視みえちゃうんだ』

　なに!?　あっけらかんと言われて、護堂は戦せん慄りつした。

『ちょっと特別な目の鍛え方があってね……。降りしきる雨をじーっと見つめてさ、そのなかの一滴だけを見切れるようにするんだよ。それができたら、次は斬る番だ。その一滴を狙って一刀両断できるようになれば合格ってね』

　どこの剣豪小説のエピソードだと、護堂は文句を言いたくなった。

　だが直感した。ウソじゃない。この怪物なら、きっとできる。気をつけろ！

『この目をたしか、中華の武ぶ侠きようたちは心しん眼がん之の法ほう訣けつとか言ったかな？　僕は独学で覚えたから、くわしくないんだけど。で、斬りたい相手に最短最小の太刀筋で打ちこむコツ

を知ってると、こういう感じでいけるのさ！』

　陽気に笑いながら、ドニは一直線に剣を突きこんできた。

　この突きが、護堂にはひどく不思議な見え方をした。

　突きのモーションに入ったと思ったら、次の瞬間にはもう、ドニは剣を突き終えた体勢だったのだ。まるでコマ送りだった。

　それは、護堂の体のどまんなか——みぞおちを狙う突きだった。

　神速でサイドステップし、全速力で避けようとする。だが、わずかに間に合わなかった。長剣の切っ先は護堂の脇腹にとどき、わずかに刺さった。

　ふつうなら、かすり傷ですむ。

　だが、剣の切っ先に宿る『魔剣』の力が護堂の右脇腹を貫通した。

「く——！」

　びゅっ！　鮮血がほとばしり、激痛が脇腹に走る。

　苦痛にあえぐ護堂を前に、ドニはあっけらかんと言った。

『もうすこしちゃんと斬れていれば、そのまま八つ裂きとか一刀両断もできたんだけど、ちょっと惜おしかったな。でも、次ははずさないよ』

　言いかえれば、はずさない自信——神速を斬り裂く自信があるのだ。

　そうと悟った瞬間、護堂は決断した。

　このまま戦っても斬り刻まれるだけだ。神速の利をほかの形で活いかすしかない。

　痛みを堪こらえて、全力で駆けだした。

　敵に背中を見せて、なりふりかまわずに全力疾しつ走そう。ドニの追撃はおそろしかったが、あえて振りかえらない。そんなことをしたら、スピードが落ちる……。生きのびるために、護堂はうしろ

も見ずに駆けつづけた。

「まだ逃げ道があるなら、追いこまれる前に退却して態勢を立て直す……。いい勘してるなァ。勝負どころの匂においをかぎ当てて、きちんと考えてくるじゃないか」

　敵の勝負勘を誉ほめそやしてから、ドニは剣を地面に突き刺した。

　すぐに追いかける気はなかった。稲妻にも等しいスピードに至る神速は、その過剰な速さゆえ長続きしないのだ。どうせ、直に動きがにぶる。

　ひとまず、《赤銅黒十字》の連中に追いかけさせればいいだろう……。

　今のはあくまで第一ラウンド。まだまだ勝負を愉たのしめそうだ。いや、むしろここからが本番か——。ドニの口元が自然とほころんできた。

4

「第一戦はサルバトーレ卿きようの貫かん禄ろく勝ちというところか」

　テレビで二王の立ち合いを見終えたクラレンスは、携帯電話を取り出した。メールが届いたらしい。彼は小さな液晶を眺めて「ふむ」とつぶやく。

「なんかあったのかよ？」

「あちらの公園にいる騎士たちからの報告だ。サルバトーレ卿はわれらに『草くさ薙なぎ護ご堂どうを追つい跡せきせよ』と指示されたそうだ」

「ったく、好き勝手にこき使ってくれる王様だぜ……」

　事情を聞いて、ガンツがぼやく。

「そろそろオレらも現場に出る頃合いかね？　手負いの魔王さまを追跡ってのは、ちょっと危険だぜ。獣けものといっしょで、傷ついて追いつめられているときの方がヤバイ方々だからな。平ひらの騎士たちじゃあ、いいかげん手に余るだろ」

　同僚ふたりが会話している。しかしエリカは参加せず、ひとり物思いにふけっていた。

（護堂ったら、あんなにひどい目に遭あって——いい気味だわ！）

　などと手厳しく。ただし、エリカの表情は平静そのものだった。

　こんな不作法な想おもいを顔に出したりしたら、貴婦人の面めん目ぼくが丸つぶれだ。

（あの人ったら、せっかく忠告したのに。無視してミラノまで来て——今度こそ愛あい想そを尽かしてもいい失態よね）

　毒のある、しかも華か麗れいとは言いがたい言葉がエリカの心にうずまく。

　完かん璧ぺきな自制心で音声化を阻そ止ししながら思う。護堂がミラノに来たせいで、《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》は大迷惑をこうむった。実際、あとすこし時間稼ぎができていれば——。

　アンドレア・リベラの所在を突きとめ、救出し、サルバトーレ・ドニの監視役に復帰してもらえただろう。そこでドニのお遊びにも待ったがかかり、エリカたちは自由の身となるはずだった。その目もく論ろ見みを、護堂がぶち壊してくれたのだ。

（本当に気が利きかない人なんだから！）

（カンピオーネの箝かん口こう令れいが効いて、幸いシチリアでのことは外にもれていないことだし、ちょうどいいわ。彼との縁も今日でおしまい。あんなバカな人とはつきあいきれないもの。サルバトーレ卿に斬きられたんだから、どうせ命はないも同然だし）

（ええ。ああなったらもう、死ぬしかないわよね）

サルバトーレ・ドニが振るう刃やいばは、まさしく魔剣。

一刀両断にできなくとも、かんたんには癒いえない魔性の傷をあたえる。しかも、『鳳おおとり』の化身を使った以上、前回のように反動が返ってくるはずだ。だったらもう、あとは犬のように野の垂たれ死ぬだけ……。

そう、死ぬ。草薙護堂が生きのびる目はない。

確信した瞬間、エリカは驚いた。胸がきゅっと締めつけられ、胃に冷たい何かを差しこまれたような——。不思議な感覚を味わったからだ。

胸の鼓動が速まる。早はや鐘がねのようにトクトクと脈打つ。

彼は死ぬだろう。『雄お羊ひつじ』の化け身しんで窮きゆう地ちを切り抜けたとしても、そのまま何時間も昏こん倒とうしたままになる。そこを発見されたら、もう——。

「エリカよう。おまえ、日本の王様としばらくいっしょにいたんだろ？」

ガンツの声に、エリカはどきりとした。無論、誇ほこりにかけて悟さとらせはしない。

ただ優美に眉まゆをつりあげ、「それが何？」という表情を作るのみだった。

「その割りに薄情だな。べつにあっちの味方しろたァ言わねえけど、もうすこし応援してやってもいいんじゃねえか？」

「バカを言うな、ジェンナーロ」

クラレンスが静かにたしなめた。

「姫がサルデーニャとシチリアで草薙護堂をお助けしたことで、われわれはサルバトーレ卿に都合のいい口実をあたえてしまったんだぞ」

「そりゃそうだけどよ」

「卿が彼を悪い意味で気に入られた以上、あの七人目殿にはもうご

協力できん。われわれ《赤銅黒十字》にとって、最も都合のいい展開は——」

　と、クラレンスは自分の頸くびに手刀を当てた。

「草薙護堂がこのまま、サルバトーレ卿の一剣によって命を絶たれることだ。これ以上の揉めごとを生み出す前に、つつがなく亡くなってくだされば何も文句はない」

　チェス盤の展開を読むように言う。エリカも同じ読みであった。

　そうなのだ。それがいちばん都合がいいのだ。エリカと《赤銅黒十字》にとって、草薙護堂の存在は邪じや魔までしかない。

　いくら『王』とはいえ、イタリアから遥はるかに遠い日本に住む身。

　しかも、他者からの奉仕や忠誠を受け容いれる準備がまったくできていない。あれではどんなに尽くしても、返ってくる利はわずかだろう。

　まして、彼よりも身近に『剣の王』が君臨するとあっては……。

　クラレンスの発言はまったく正しく、合理的で、なにより説得力があった。

　——だというのに。

　なぜだろう？　エリカは自分が不思議でならなかった。また胸を締めつけられるように感じたのだ。何か耐えがたい悲劇に直面したかのように。

「でもよ、あの王様は日本人なんだぜ！」

　一方、ガンツは妙な反論をした。

「オレにとって、あの国は聖域なんだ。なあ、実は今たまたまＤＶＤを持ってんだけどよ。ちょっと見てみるか？　本当の魔法ってのはな、いつだってほんのすこしの勇気とやさしさだって大人のオレたちにも教えてくれる名作なんだ。損はさせねえ」

「幼児向け日本製アニメを見る気なら、おれにはまったくない

ぞ……」

「……ええ。わたしもだわ」

　エリカは冷たく言って、席を立った。

「どこに行くんだ、姫？」

「ちょっと気分が悪いから、屋敷に戻って『謹きん慎しん』の続きをさせてもらうわ。わたしの出番が必要な事態にはならないようだし」

「謹慎が聞いてあきれるワガママっぷりだな」

　ガンツは眉まゆをひそめ、クラレンスは鷹おう揚ように肩をすくめただけだった。待機室を出ていくエリカに、制止の声などかけはしない。

　……本来なら、エリカは監視されて然しかるべき立場である。

　何しろ草薙護堂のそばに最も長くとどまり、彼を補佐した介かい添ぞえ役なのだ。窮きゆう地ちに立った護堂のために、助けの手をさしのべようとするかもしれない——。そう思われても、仕方のない立場だった。しかし、同僚たちはエリカを放置している。

　そうだろう。ここでサルバトーレ・ドニではなく、草薙護堂につく利はない。エリカにそれがわからないはずない——と思われているためだ。

　気の向くままエリカは歩き、なんとなく本部ビルの一階ロビーへ向かった。

　帰宅するときはいつも車を呼ぶ。だが、なぜか今日はそうしなかった。ビルを出て、中央ミラノのオフィス街を歩きはじめる。

　途中、エリカは何度かドキリとした。黒髪の東洋人とすれちがったときである。旧知の少年のはずはない。だが、そのたびに顔を確認してしまった。

　——気づけばエリカは、ある品物を取り出していた。

　万一に備えて、ザンパリーニの館やかたで採取したものだ。小さ

なガラス壜びんに入れて、保管してあった。これさえあれば、居場所を突きとめることができる……。

「どこにいくつもりだ、エリカ・ブランデッリ？」

　聞き慣れた声だった。振りかえると長身の人物がいた。

　彫ほりの深い美男子で、ダヴィデ像を思わせるたくましさだった。仕立てのよい背広を伊だ達てに着崩している。彼の名はパオロ・ブランデッリ。

　エリカの叔お父じにして親代わり、《赤銅黒十字》の総そう帥すいだった。

「前にも言ったな。おまえはわれらの宝……いずれ結社の頂点に立つべき者だと」

「ええ。覚えておりますわ、叔お父じさま」

　叔父と姪めいの談笑というには、やや気取りの入ったやりとり。

　もう長いこと、エリカと叔父の間で日常の一コマとなってきた習慣だ。騒がしいミラノの大通りをはなれ、近くにあった公園に入っての会話だった。

「もうひとつ。言うまでもないことだが、私にとっておまえは娘も同然だ。……父親を名乗るには、すこし若すぎるという問題はあるにせよ、な」

　あと数年で四〇の大台に乗るパオロが、さりげなく若さをアピールする。人格者のくせに、こういうところは往おう生じよう際ぎわが悪いのだ。

　しかし、英雄的な叔父のこういう一面がエリカには微笑ほほえましい。

「ええ。叔父さまの慈じ愛あいと薫くん陶とうが、今のわたしを築いてくれたと思っています」

「そう言ってもらえると、私としても誇らしいな。ところでエリ

カ、今のおまえを見ていると、一〇年以上前の自分を思い出す」

「まあ。叔父さまの若かりし頃、青年時代というわけですわね」

「……今の私くらいの歳としでも十分若いし、青年と呼ぶのに何の支障もないだろう。おまえにもいずれわかる日が来ると思うが。まあ、それはともかく」

エリカの相づちにすこしだけ憮ぶ然ぜんとしてから、パオロは言った。

「あの頃、私は多少の腕を過信する向こう見ずな若僧だった。その報むくいとして、たまたま訪ねたイングランドで要いらぬ苦労を背負いこむ羽目になった……」

「あちらでの御苦労——とおっしゃいますと、やはりアレク王子との？」

若きパオロ・ブランデッリの経験した、伝説的な死闘の数々。

その多くが一六歳という若さで『魔王デビュー』をはたしたイングランドの黒王子、アレクサンドル・ガスコインがらみの事件である。

ときにアレク王子その人に刃やいばを向け、ときにその腹ふく心しんサー・アイスマンと剣を交まじえる。

またあるときはアレク王子が甦よみがえらせた太たい古この魔獣と戦い、あるときはアレク王子の身代わりとなって、かの魔王を狙ねらう女悪魔につけ狙われたという。

その死闘の数々を生きのびて、今の叔父パオロの栄光があるのだ。

「ああ、そうだ。……実をいえば、ああいう世界に混こん沌とんをもたらすために生まれたような男とかかわるのは、金こん輪りん際ざいごめんだと常々思っていたのだが。気がつけばいつも、アレクサンドルの起こす騒動に巻きこまれていた……。いや、あのプリンセスにハメられたことも結構多かったが——」

遠い目をしての昔語り。叔父はなぜか昔から、最高の貴婦人と呼ばれる姫君への敬意をほんのすこし忘れるときがあるのだ。

「あの数年間で私は思い知ったよ。カンピオーネの方々にはよくも悪くも、人を惑まどわせ、暴走させる何かがあると。……もしかすると、埒らち外がいすぎる存在に接近遭そう遇ぐうしたことで、真っ当な判断力が失われるのかもしれないな」

　珍しい『青春時代』の話に、エリカは目を丸くした。

　叔父は自身の栄光を語りたがらない人間だった。特にアレク王子との対決の日々については、一いつ貫かんして沈黙を保ってきた。それは謙けん虚きよさの現れだとエリカは思っていたのだが、理由はほかにもあったらしい。

「エリカ。そのあたりを全すべて踏まえて言おう。私は公私どちらの面でも大切なおまえに、理屈の通用しないバケモノ方のそばで苦労して欲しいとは思わない。……ああいう苦労をするのは、私ひとりで十分だろうさ」

　まっすぐこちらの目を見て、叔父は言った。

「何なら、物わかりの悪い頑がん固こオヤジになって、腕ずくで止めてもいいのだがね」

「あら。わたしがまるで、叔父さまのもとをはなれるみたいにおっしゃいますのね？」

「勘ちがいなら、今のはただの笑い話だ。だが、どうもそういうオチがつきそうな雰囲気には思えないのでね。——実際のところ、どうなんだ？」

　あろうことか、エリカは答えに窮きゆうした。

　なんと、エリカ・ブランデッリが。優美な言いまわしと流りゆう麗れいな話術のどちらも完かん璧ぺきにきわめた、才さい気き煥かん発ぱつの申し子のような彼女が。

　口にすべき言葉を見失い、何も言えずに押し黙ってしまった！

「賢かしこいおまえには、何が正しい振る舞いか、かんたんにわかるはずなんだがな……」

　ふぅ。叔父がため息をついた。

　そのとおりだった。かんたんすぎる理屈だ。エリカが選ぶべきは《赤銅黒十字》であり、より近い『王』であるサルバトーレ・ドニ。捨てるべきは器量も未来も定かでない、東アジアの端はしっこで暮らしている若じゃく輩はいの『王』。

　しかし。だというのに。

　あの少年との短くも花火のように華はなゞばなしい日々を、まざまざと思い出せる。

　出会った日からの全て。東方の軍神を追い、フェニキアの神王と争い、今日このときに至るまでの全てがそれこそ走そう馬ま燈とうとやらのように。

　エリカは大きく息を吸い、そして吐き出した。

　本来、彼女が持っていた覇は気きと華やかさを甦よみがえらせるために。

　顔を上げる。赤みがかった金髪を、誇りと共に王冠のごとくかかげる。エリカ・ブランデッリは誰よりもみごとで、鮮せん烈れつでなければならない。自分自身のために。そして認めたくはないが、あの少年のためにも！

「ええ。己おのが為なすべき全てを承知しています。でも——仕方ないわ。それでもわたしは、あの人のところに行かなくちゃいけないのですもの！」

　決然と言いはなつ。彼女を彼女たらしめる鋭気と共に。

「理由はわからないけど、あの人を助けてあげたいって思うの。こういうもやもやした気持ちが腹立たしくはあるけど、それでも、わたしの願いであることにまちがいないわ。叔父さまのご命令でも、この想おもいを捨てることはできません」

「理由は……かなり明白だと思うがね」

「わかったふうなことをおっしゃらないで、叔父さま！」

　語気荒く言うエリカに対して、パオロ叔父は困ったようにつぶやく。

「だから、その態度が全てを雄弁に語っているということさ。……考えてみたら、こういう方面での『家族の会話』というやつを、一度もしたことはなかったな。もうすこし免めん疫えきをつけさせておくべきだったか」

「わたしが病気にでもかかったみたいなことをおっしゃるのね。そういう失礼な発言、騎士としても紳士としてもひかえられるべきだと思うわ」

　エリカはツンと顔を背そむけて、皮肉と共に告げる。

　――まあ、実をいえば。叔父の言わんとするところは理解できなくもない。思い当たる節はさまざまにある。だが、認めるのはどうも気恥ずかしい。

　だから、エリカはわざと気づかないふりをした。

「とにかく、わたしは草薙護堂の陣に馳はせ参じます。こんなことをする以上、もう《赤銅黒十字》に籍を置くわけにはいかないでしょう」

　召しよう喚かんの術を使い、エリカは愛用の着衣を呼び出した。

　それは黒地の布に紅あかい縦たて縞じまを入れた、短いケープだった。《赤銅黒十字》の大騎士にのみ贈られる戦衣サーコートである。

　守護の魔術を付与してあるので、いざとなれば甲かつ冑ちゆう並なみの防御力を発揮する。

　だが、何より重要なのは『紅と黒ロツソネロ』の二色だった。結社の〝色〟をまとうことで、所属を明らかにする――。このケープは大騎士にとって、戦場でかかげる旗バンデイエラも同然なのだ。

「手ずから授けていただいた紅と黒ロツソネロの印ですが、お返し申し上げます。どうぞお受け取りくださいませ、叔父さま。これが今こん生じようの別れとなるかもしれないけど、わたし、もう往ゆくわ！」

　長年まとってきたケープを、颯さつ爽そうとした手つきで投げる。

　それを叔父の手がつかむのを見届けてから、エリカはくるりときびすを返した。そのまま足早に歩み去る。振りかえらない。

　さっきは『腕ずくで～』と言った叔父だが、実行はすまい。

　心のどこかで嫌気を覚えながら、幾度もイタリアからイングランドの地に渡り、プリンセス・アリスの要請を騎士として受け、黒王子アレク相手に奮戦しつづけたのは当のパオロ・ブランデッリなのだから！

　むしろ彼こそが、エリカの心を理解できるいちばんの人物のはずだった。

　歩みを続ける。やはり、制止の声はかからなかった。



第６章　同盟ふたたび

1

　サルバトーレ・ドニの前から、草くさ薙なぎ護ご堂どうは神しん速そくで駆け去った。

　第七の化け身しん『鳳おおとり』。使用中はただ速くなるだけでなく、身軽さとジャンプ力が飛ひ躍やく的に増す。鳥のようにとはいかないが、猫や猿さるとも対等以上に飛び跳ねることができた。

　護堂は建物の壁を駆けあがり、屋根から屋根へ飛びうつった。

　ときにはビルや一般家か屋おくではなく、車や路面電車の屋根まで足場にして、閃せん光こうじみたスピードでミラノの街を駆け抜けた。

　とにかく遠くへ。できればミラノ市内から出た方がいい。

　貫つらぬかれた脇わき腹ばらが激しく痛んだが、病院に行こうとは考えなかった。ドニの追撃を振り切ることが今の最優先事項なのだ。だから、護堂はひたすら走った。

　……身軽になった恩おん恵けいなのか、走るときの負担も大いに減っていた。

　とにかく疲れない。どれだけ全力疾しつ走そうしても息は切れず、スタミナにも影響ない。

　だから、脇腹の痛みを無視して走ることができたのだが。ミラノの都市部をはなれ、木々の緑や田園風景が増えてきたあたりでトラブルが生じた。

　いきなり心臓がズキンと痛んだのだ。

「な、なんだ、これ？」

　とまどいながらも護堂は足を動かしたが、痛みはさらにひどくなった。

　心臓を錐きりのような凶器で抉えぐられるかのような激痛。それも一度きりではなく、何度も何度もグサグサと抉ってくる。足と全身がどんどん動かなくなってきた。

「そういえば、シチリアでも胸が痛くなったよな？　もしかして、この速さを使ったときの副作用とかか!?」

　考えてみれば、こんなにデタラメなスピードなのだ。

　調子に乗って使いつづけたら不都合が出てくるのは、むしろ当然に思える。どこかで休まなければ。ちょうど大きな公園があったので、ふらつく足で入っていく。

　公園内にはたくさんの木々が生い茂り、ちょっとした森のようだった。

　護堂は木立のなかで立ち止まり、しばらく休んでいたのだが――ついに限界が来た。

「ああああああああっ！」

　心臓の痛みが最高潮に達し、護堂は身動きできなくなった。

　指一本動かせない。まさに金かな縛しばりの状態である。うしろに倒れこんでしまい、木の幹に背中をあずける格好になった。

　そのまま心臓の激痛に耐えながら、時がすぎるのを待つことしかできなかった。

　しかも、この間も脇腹の痛みと出血は続く。ここでドニのすさまじさをまたひとつ知ることになった。実のところ、カンピオーネの回復力が腹の傷を勝手に治してくれるのではと期待していたのだ。しかし甘かった。脇腹の傷は一向にふさがらない。

　これも『魔剣』の威力なのだろう。並の剣とはちがう、まさしく

魔性の斬ざん撃げき——。

　どんどん血は失われ、心臓と腹の激痛にさいなまれる。

　護堂はひどく消しよう耗もうし、意識は朦もう朧ろうとしていった。やがて心臓の痛みは消え、金縛りも解けたが、動けないままだった。出血多量で力尽きたのだ。

　そこに人影が近づいてくる。瀕ひん死しの護堂は残った力を総動員して言った。

「よう」

　余裕がないので、短い挨あい拶さつとなった。歩みよってきたのは、なんとエリカだった。

「いいざまね、護堂。ミラノの景観を破壊した報むくいだわ」

「それについては、申し開きのしようもないな……」

　怒りと共にエリカが言うので、護堂は力なく非を認めた。

「俺の居場所、どうしてわかったんだ？」

「前にビアンキが言ったでしょう？　あなたたちカンピオーネの気配をたどる形でなら、魔術的に捜そう索さくできるって。こういうこともあろうかと、ザンパリーニの館やかたで護堂の髪を一本拝はい借しやくしておいたの」

　捜索対象の体の一部があれば、居場所の目星をつけられる術がある——。

　そうエリカは語った。彼女の用意周到さは、あいかわらずらしい。

「今回の件だって、わたしたちの方で円満に事態を収拾する当てもあったのに……。あなたってば本当は、疫やく病びよう神がみか破壊神の権けん能のうを簒さん奪だつしたんじゃないかしら？」

「…………」

「絶対ヨーロッパ方面には来るなって忠告したでしょう？　なのに

わざわざやってきて、ミラノをかきまわして、あげくにサルバトーレ卿に斬きられてしまって」

「仕方ないだろ。おまえと話をしたかったんだからさ」

　護堂はぼそぼそと言った。失血のせいで頭がぼーっとするため、しゃっきり話せない。

「刺し客かくを差し向けたことに文句でも言いたかったのかしら？」

「それもあるけど、それだけじゃない。もしかしたら、おまえもいろいろ困ってるんじゃないかって、気になったんだ。ドニってバカに無理難題ふっかけられた感じだったしな……」

「もちろん困っていたわ。そして、あなたの襲来でもっと困ったことになったわ」

「そこは本当に申し訳ない……。でも、イヤだったんだよ」

「何が？」

「俺が原因の揉もめごとみたいなのに、当人の俺だけが蚊か帳やの外なのがさ。そのままおまえとの縁が切れちまうこともイヤだった」

「何それ？　わたしたち、イタリアと日本に離れているのよ。わたしとのつきあいがなくなったところで、護堂の生活にはたいして影響は出なさそうだけど」

「そんなことはないだろ。前にも言ったけど、半日も旅すれば会いに来られるんだぜ。それに、おまえが面倒そうな状況に追いこまれているって知ってるのに、知らないふりして日本でのんびり暮らすのはちょっと無理そうだったしな」

　お節せつ介かいなのか、義ぎ侠きょう心しんがすこし人より多すぎるのか。好奇心旺おう盛せいなのか、無む謀ぼうなのか。あるいは、天性のトラブルメーカーであるゆえなのか。

　何が原因かは、護堂にもわからない。もしかしたら、これらの全てなのかもしれない。

「それで話は変わるけど、俺をあのバカのところに連れていくのか？」

　エリカはすぐに答えず、あらぬ方向を向き、護堂の顔を正視しないまま言った。

「実はわたしね、あなたに電話で別れを告げたあと、こう思っていたの。草薙護堂がここでわざわざイタリアにまでやってくるような愚おろか者だったら、今度こそ見捨ててやろうって。騎士らしく慈じ悲ひの心を示すのも次はなしだって」

「まあ、無理もないな……」

「でも、なぜだかわからないけど、ダメだったわ。最悪の敵が待つ国にのこのこ自分の方から飛びこんできて、しかも売られたケンカを買って、勝ち目どころか生きのびる目さえなさそうな男の子を見捨てられそうになかったの」

　エリカはゆっくりと護堂の方へ向き直り、そして告げた。

「わたし、ここに来る前に結社と叔お父じさまに別れを告げてきたわ。もう騎士でも何でもないの。ふつうの女の子——とは口が裂さけても言えないけど、ただ魔術と剣術を使えるだけの女よ。そういうことだけど、かまわないかしら？」

「騎士をやめたって、どういうことだよ……？」

「どうもこうもないわ。あなたの——最も若きカンピオーネの陣に馳はせ参じるには、そうするしかなかったのですもの。だから護堂、ちゃんと責任取って頂ちよう戴だいね」

「責任!?」

「へ、変なふうに受け取らないで。これはただ、責任を持ってサルバトーレ卿と対決して、然しかるべき決着をつけてみせなさいという意味よ！」

　そうだったのか。いや、そうに決まっている。俺は何を勘かんちがいしかけたのだ……。

　護堂は自みずからの迂う闊かつさを恥ずかしく思いながら、あわてて請うけあった。

「そ、それくらいわかってるよ。ドニのことだって大丈夫だ。今回の件では、俺も頭にきてるんだ。あの調子乗りすぎのバカに、目にもの見せてやる」

「あら、珍しく頼もしいことを言うのね。平和主義者の看板が泣くわよ」

　ようやく調子が出てきたのか、エリカらしい気取った軽口が出た。

　護堂はそれをうれしく思ったが、顔の方はあえて仏ぶつ頂ちよう面づらをしてみせた。

「仕方ないだろ。とんでもない大バカが相手なんだから。敵がただのバカなら、話し合う余地はあるかもしれないけどさ。大バカにはそんなもの、最初からないに決まってる。だったら思い切ってガツンとぶつかる方が、手っとり早くていい」

　護堂が言い切ると、エリカはあきれたように肩をすくめた。

「本当の平和主義者にそういう例外事項はないものだけど……。つっこむのも野や暮ぼだから、不問にしてあげる。じゃあ護堂、わたしたちはまた同盟を組む。それでかまわないのね？」

「そいつは、俺の方から頼むことだよ」

　護堂はへばった体に鞭むち打って、右手を弱々しくエリカへ差し出した。

「しばらくの間、また俺を助けてくれるか？　ひとりでも何とかなるだろうってイタリアまで来たけど、どうもここらが限界みたいだ」

「仕方ないわね。泥どろ舟ぶねとはいえ、一度乗ってしまったのも何かの縁。わたし自身が納得いくまで乗りつづけてあげる。……ああ、わたしの助すけ太だ刀ちは高くつくから覚悟しておくことね。気が向いたときに、まとめて請求してあげるから」

　エリカも華きゃ奢しゃな右手をのばし、護堂の手を取ってくれた。

　抱き合ったり、肌を合わせたり、キスしたりもしたが、握手はこ

れがはじめてだった。いろいろ順番がおかしいなと護堂は苦笑し、それから言った。

「ところで、もうわかってるかもしれないけど……。俺はそろそろ限界だ。あとは頼む。いつもみたいに上う手まくやってくれ」

「ええ。幸いというか不幸というか、ここに鏡はないのだけど」

　あきれた感じで護堂の顔を眺めてから、エリカはため息をついた。

「もしあったら、自分の死相を確認できるわよ。顔は病的に蒼あお白じろいし、目の下にはすごい隈くま……出血死寸前というところね」

　やはりそうか。護堂は意識が遠くなるのを自覚した。

　すでに二度やったように黄金の羊ひつじをイメージして、『雄お羊ひつじ』の化身を使う。寝ている間は無防備になるが、そこは〝相棒〟を信じるしかない……。

「もう！　本当に世話の焼ける人なんだから！」

　眠りこんだ護堂を見おろしながら、エリカは愚ぐ痴ちった。しかし、なぜか自分が微笑んでいることにも気づいてしまった。

　彼の無防備さがエリカ・ブランデッリへの信頼の証あかしだとわかるからだろう。

「ま、いいわ。今はとにかく安全な避難場所を確保すべきね」

　つぶやいてから、思案する。現在位置はミラノ郊外の小都市、モンツァである。

　ミラノからは電車で二〇分というところだ。大都市圏に最も近いＦ１サーキットのある街として、モーターファンの間では有名だった。そういえば、この近くには——。

　解決策を思いついて、エリカは携帯電話を取り出した。

2

　待ちわびていた、週末の夜だった。

「今夜は何の予定もない。心ゆくまで作業に集中できるはず……」

　リリアナ・クラニチャールはひっそりとつぶやいた。

　彼女がいる場所はミラノのクラニチャール家邸宅の自室である。

「今夜は妙に頭が冴さえているような……。こういうときはいい作品ができるはずだ」

　リリアナは古風な書き物机に向かい、カリカリ万年筆を動かしていた。

　心の赴おもむくまま想像力を飛ひ翔しようさせ、文章を綴つづり、作品とする。それはときに小説となり、ときに散文詩となった。彼女のひそかな趣味である。

「う——っ。もしかして失敗したか？　予定とすこしちがってきたぞ……」

　恋愛小説を執筆中だった。地味だが心やさしいヒロインと、完かん璧ぺきな紳士である青年がおだやかに愛をつむぐ、やさしい物語——にする予定なのに。

　だが書きつづけるうち、青年のキャラが微妙に変わっていた。

　おだやかなはずの青年が、ふとした拍ひよう子しにワイルドな面を見せるのだ。

『君はいつも地味な格好ばかりだからね……。その服はぼくが君のために見立てたものさ。ほかの衣装はないから、観念して着替えてくれないか？』

『こ、こんなはしたない格好、わたし、できません！』

　なんて場面を、ついノリノリで書いてしまう。

　ときどきサディストっぽくなる青年に困惑するヒロイン。しかし、ひそかに胸を高鳴らせ、振りまわされることによろこびを見み出いだしている——。

　いつしかヒロインに感情移入していたリリアナは、筆を止めて一思案したのだが。

「まあ、作品は生き物というし……。これはこれで悪くない気がする」

　執筆続行とした。もしかして、自分にもこういう異性に翻ほん弄ろうされたいという欲求があるのだろうかと、ひそかにドキドキしながら……。

　そんなとき、机の端に置いていた携帯電話が鳴った。

　着信表示を見てハァとため息をつき、リリアナは電話に出た。

「わたしは今いそがしい。用件は手短に言ってくれ、エリカ」

『ごきげんよう、リリィ。わたしとあなたの仲なのに、そういう冷たい言葉を聞かされるのはすこし悲しいけど』

　幼い頃からのライバル、エリカ・ブランデッリの声だった。

「なれなれしく愛あい称しようで呼ぶな。わたしたちは同じミラノの結社に所属する、同い歳どしの知り合い同士というだけだ。敵同士と言ったっていい」

『幼なじみとして言わせてもらうけど、そのかたくなさはリリィの欠点よ。わたしとあなたが培つちかってきた絆きずなをそんなふうにまとめるべきではないと思うわ』

「幼なじみじゃなくて、腐くされ縁えんだっ。都合よく交友関係を捏ねつ造ぞうするな！」

　文句をつけてから、リリアナは鋭く言った。

「ところで、最近いそがしかったそうじゃないか？　『まつろわぬ神』を封印するため、サルデーニャ方面に派は遣けんされていたと聞いたぞ」

　エリカ・ブランデッリ、南下――。

　その報しらせはリリアナの耳にも届いていた。だが、具体的に何をしたのかはわからない。

　サルデーニャ島とシチリア島に顕けん現げんした神の詳細、事件の顛てん末まつ。それらが奇妙なほど不ふ詳しようなのだ。まるで、何者かが意図的に情報を遮しや断だんしたかのように。

「しばらく前からサルバトーレ卿きようがミラノに居いすわり、《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》によからぬ指令をあたえたことも知っている。今日、スフォルツェスコ城を卿が八つ裂きにされたことも。……ああ、ついに七人目が誕生したという胡う散さんくさい話もあったな」

　神の顕あらわれるところにカンピオーネあり。欧州魔術界では常識といってもいい。

　だから、そんな流言が生まれたのかもしれない。

「わたしたちが友人同士だというなら、そのあたりについても個人的にくわしく聞かせて欲しいところだ」

『リリィ、友情とビジネスは別物よ。そこを混同するなんて、あなたらしくないわね』

　予想どおり、エリカはとぼけてみせた。

『ま、わたしたちの仲に免めんじて教えられるのは、近日中に公開される情報が、全ヨーロッパを震しん撼かんさせることくらいよ。それより、今日は世間話がしたくて電話をかけたの』

　本当だろうか？　リリアナはいぶかしんだ。

　この悪魔のような女が、そんな用件で連絡してくるとは思えない。もしかしたら罠わなの第一歩かも――気を引きしめた矢先、エリカは唐とう突とつに言った。

『わたし最近、とある女流作家の恋愛小説を愛読しているのだけど』

「ウソをつくな。あなたがそんな趣味にめざめるものか」

　エリカの好みは知っている。やたらと優ゆう雅がぶるくせに、アクション・爆発・殺人のどれかが欠ける娯楽作品にはあまり興味を示さないのだ。

「あら、わたしも歳とし頃ごろの女ですもの。そういうお話を楽しんでもおかしくないはずよ。それで話というのはね。その小説家の作風、近頃マンネリな気がするのよね」

「マンネリだと？」

『ええ。毎回ヒロインが相手役の男に何かと振りまわされて、とまどったりするけど、最後は結局言いなりになってしまう、みたいな』

　リリアナはどきりとした。

　今、書いているのがまさしくそういうシーンだった。しかも思いかえしてみれば、ここ最近書いた四作品全てが同じパターン。まさかエリカは読んでいるのか!?

　携帯電話を持つ手があせりで震える。

　落ちつけ。書きためた作品は全て寝室に保管してある。エリカといえども読めるはずない——と思う。たぶん。リリアナはこほんとせき払いした。

「お、王道の展開というものは、しばしばワンパターンなものだ。そこにいちいち目くじらを立てるのは大人げないんじゃないか？」

『それもそうね。わたしとしたことが、すこし狭きよう量りようだったみたい。……でも、書いている本人に自覚があって同じ型を踏とう襲しゆうしているのならいいけど、内に秘めた願望をそのまま書き出しているように見えたから。つい言いたくなってしまったの』

「んくっ」

　我が事を言われたような気がして、リリアナはひそかに悶もん絶ぜつした。

「と、ところで、話というのはそれで全部か？」

『いいえ、もうひとつあるわ。わたし今、モンツァにいるのだけど。この近くにクラニチャール家のアトリエがあったはずでしょう？　あそこを今夜一晩、貸して頂ちよう戴だい。鍵かぎは投とう函かんの術で送ってくれればいいから』

　エリカが言ったアトリエとは、骨こつ董とう修復のための専用工房だった。

　魔術をなりわいにしていると、遺い跡せきからの出土品やら古い骨董品・美術品の類たぐいが自然と集まってきてしまう。そういう品を大学機関などに頼らず私的に修復するため、クラニチャール家では自前のアトリエを所有しているのだ。

「あなたのために便べん宜ぎをはかる理由など、わたしには――」

『ないとは言わないわよね？　わたしとリリィの仲ですもの♪』

　リリアナは軽くため息をついた。

　エリカ・ブランデッリはその悪あく辣らつさと、才気と、認めたくないがサロンの女主人めいた包容力で、さまざまにちょっかいを出してくる旧友でもあった。

　記憶を探ると、たしかに借りの四つや五つに思い当たってしまう。

「まあ、べつにかまわないが……。でも、どういうつもりなんだ？　その程度の設備、そちらにだってあるはずだろう？」

　家格も財力も、ブランデッリ家はクラニチャール家よりも数段上だ。

　エリカの目的はアトリエの設備ではないと悟り、リリアナはいぶかしんだ。

『ごめんなさい、ノーコメントとさせてもらうわ。それについても近日中に電撃発表があるはずだから、勘かん弁べんして。じゃあリリィ、ごきげんよう。わたしの方は当分バタバタしていそうだけど、落ち着いたらゆっくり逢あいたいものね！』

　それで電話は切れてしまった。まったく、あの女は何をやっているのだか。

　憤ふん然ぜんと携帯電話を置くリリアナだった。

　護堂が目覚めると、すっかり夜になっていた。

　もちろん枕まくら元もとにはエリカがいて、実験動物でも見るような目を向けてくる。

「ちなみに、今の時刻は深夜一一時すぎ。回を重ねるごとに、復活までの時間がすこしずつ短縮されていくわね」

「微妙にいやなパワーアップだな……。ところで、ここは？」

「友人のつてで借りたアトリエよ。古くからの友達だけど、表面的には敵対関係にある複雑な相手だから、追っ手がここに気づくまで余裕はあるはずよ。実際、護堂が復活するまで平和に過ごすことができたしね」

　そこは雑然としていて、どこかの作業場という雰ふん囲い気きだった。

　たくさんある棚たなには工具や薬品、砕けた土器やら石像やら、統一性のない品々が無む秩ちつ序じよにならんでいる。護堂が横たわっていたのもベッドではなく、細長い作業台だ。下に毛布を敷いてあるのは、エリカなりの気き遣づかいだったのだろう。

「じゃあ、護堂も元気になったことだし、改めて今後の方針を話し合いましょうか」

　エリカの言うとおり、脇わき腹ばらの傷はすっかりふさがっていた。

　血だらけになった服もぬがされ、カーキ色の作業着を護堂は身につけていた。このアトリエにあったものなのだろう。エリカが着替えさせてくれたようだ。

　彼女の意外な甲か斐い甲が斐いしさに感謝しながら、しかし、護堂は異論を唱となえた。

「その前に飯を食おう。俺はとにかく腹が減ったよ」

「あいかわらず、命の瀬せ戸と際ぎわではシンプルに動物的なことを言うわね。ま、わたしも夕食がまだだから、その意見に賛同したいところだけど——」

「けど？」

「こんな深夜に開いてそうな店、この辺にはなかったわよ」

　護堂は「うっ」とうなった。そういえば、ここはイタリアだった。

　日付が変わる頃合いまで営業するレストランもあるはずだが、エリカの物言いから察するに、この付近にはないらしい。スーパーや雑貨屋はとっくに営業を終了している。

「二四時間営業のコンビニなんて、この国で見たことないもんなァ……」

「ああ、香ホン港コンで入ったことあるわ。三六五日、二四時間休みなしに営業する店だなんて、何の冗談かと最初は思ったものだけど」

「だったら仕方ない。無断拝はい借しやくさせてもらうか」

　台所らしき奥まったスペースがあるのを見つけて、護堂はつぶやいた。

　……二〇分後。戸棚の奥でインスタントラーメンをいくつかと、鍋なべ、ヤカンも発見できたので、ガスコンロでお湯もわかしている。

　カップ麺めんと袋麺のどちらもあったので、両方いただくことにした。

「作業場みたいなところだから、何か買い置きの食い物がありそうだと思ったんだ。……日本製品に出くわすのは予想外だったけど」

　護堂が見つけたラーメンは全て日本からの輸入品だった。表記の文字こそイタリア語だが、パッケージのデザインは日本の同じ製品といっしょなので、すぐにわかった。

「やっぱり、こういう食い物の需要はどこにでもあるんだなァ」

　スローフード大国といっても、スーパーでは冷凍食品もインスタント食品も売っている。世界的なファストフードチェーンだって絶賛営業中なのである。

　しみじみつぶやく護堂の隣で、エリカが面白そうに言う。

「ふうん。熱湯を注そそぐだけで食べられるようになるのね？　うわさには聞いていたけど、この目で見るのははじめてだわ」

「インスタントものを食べたことないのか。さすがお嬢さまだな」

　ひさしぶりに、エリカとの育ちの差を実感する護堂だった。

　ちなみに、カップ麺にお湯を注ぐのも、鍋で袋麺をゆでるのも、護堂の担当だった。ほかに、やはり戸棚で発見したビスケットとキャンディもある。

　脈みやく絡らくのないメニューではあったが、いよいよ待望の食事となった。

「……意外と美お味いしいのね。ちょっと面白くないわ」

「おまえが面白がれるくらいまずかったら、ワールドワイドで普及しないだろ」

　カップ麺は、ヌードル入りコンソメスープという味わいだった。

　袋麺の方にはしょうゆ味の粉末スープがついていて、日本と同じ味だ。インスタントかつジャンクな旨うま味みにあれこれ言いつつ、護堂とエリカはどちらも分けへだてなく完食した。

　また、今後の方針についても、ふたりは食べながら相談した。

　といっても、たいしたやりとりにはならなかったが。

「それで護堂、サルバトーレ卿に反撃する話だけど。これからミラノに戻るつもり？」

「やめておこう。ちょっとせわしないし、あのバカが用意した土俵でそのまま戦いつづけるのは上う手まくない選択だと思う」

「どういう意味？」

「いいかげん、受け身が続いてるしさ。そろそろこっちから仕掛ける形にする方がいいと思うんだ。やっぱり、攻めなきゃ主導権を取りかえせないだろ？　まあ、気分の問題かもしれないけど、ここで仕切り直して、俺の方に流れをひきよせたい」

　昼間の対決で、護堂は圧倒されっぱなしだった。

　そのイメージを引きずりたくなかったのだ。まっさらな気持ちでリベンジするために、護堂はイニシアチブを握った状態で再戦に突入したかった。

「そういうことなら、わたしにアイデアがあるわ。食後に説明してあげる」

「ああ、頼む」

　この会話だけで相談は終わった。だが、それで十分だった。ふたりはいつのまにか、多くを語らずとも通じ合える間柄になっていたのである。

　　　　　3

　遅い夜食のあと、ふたりはアトリエで一晩すごした。

　仮眠用の毛布やシャワールームもあったので、問題なく宿泊できた。が、何よりひとつ屋根の下で眠ることに、護ご堂どうもエリカも抵抗を覚えなくなっていたのが大きい。

　翌日、護堂とエリカは店が開く時間になるのを待って、着替えを買いに行った。

　血まみれになった服は処分したし、作業着姿で街中をうろつくのもイヤだったからだ。

　訪れたのは、三階建てデパートの紳士服コーナー。護堂は特に悩まず、白いシャツとちょうどいいサイズのズボンを購入した。これで目的は果たされたのだが。

なぜか婦人服のコーナーで、エリカが服を吟ぎん味みしていた。

「昨日と同じ服のままというのもちょっと気分が悪いわ。わたし好みの品はあまりないみたいだけど、せっかくこういう場所に来たことだしね」

もう行こうぜと訴えた護堂への、エリカからの回答だった。

女子の買い物は長い。妹や明あ日す香かの買い物につきあわされた経験から、護堂はそのことを承知していた。下へ手たしたら一時間以上かかるな……と不安になったのだが。

エリカは一〇分ほどでショッピングを打ち切った。ただし、

「これを全部いただける？　あ、このひとそろいは今ここで着替えてしまうけど、残りは全てこちらの住所に送って欲しいの」

五、六日分の着替えになりそうな衣類を無造作に選んで、店員に告げる形で。

「なあ。おまえ、叔お父じさんのところを出てきたんだよな？」

フィッティングルームで着替えをすませてきたエリカに、護堂は訊たずねた。彼女の装いは黒の上品なジャケットに同色のボトムス、紅のロングＴシャツに改まっていた。

「家出中みたいなもんだろ？　あれだけの服、どこに送るつもりだよ？」

「大丈夫よ。配送先に指定した住所は、わたしが個人的に所有している物件だから。亡くなった両親から受け継いだ資産の一部なの」

「え、そうなのか!?」

「ええ。一応、未成年ということもあって、ミラノのブランデッリ家本邸で暮らしていたけど、わたし名義の家や部屋はいくつもあるし、よほど放ほう蕩とう三ざん昧まいの生活をしなければ、生きていくのに不自由しないだけの備えも十分だわ」

そういえば、今の支払いもカードによる銀行口座引き落としで明めい朗ろう会かい計けいだった。

　さすがエリカというべきか。護堂は感心した。

　インスタント食品も作れないお嬢さまのくせに、経済観念はしっかりしているのだ。家計簿をつける所帯くささは皆かい無むだが、資産の管理や運用は抜かりないのだろう。

「昨日話した、サルバトーレ卿きようと決着をつけるための舞台。あそこはわたしが所有している別荘の近くなの。服は別荘の方に送ったから、心配は御無用よ」

　身支度をととのえたあとで、駅へ向かう。ふたりは追われる身である。だが身を隠したりせず、こそこそもせず、堂々と公道を歩いていった。

「護堂が意識不明のところを卿に強襲されたくないから、ゆうべは隠れたけど。こうして完全回復した以上、こそこそ動く必要はないわ」

「そうか？　また街中で襲われたら、まずいだろ？」

　今朝、ふたりが交わした会話である。

「襲われないから安心して。《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》に連つらなる誰かがわたしたちを発見したとしても、もう変な手出しはしてこないわ」

　なぜ？　護堂が理由を訊きくと、エリカはくすりと微笑ほほえんだ。

「サルバトーレ卿はあなたを追えと命じたけど、捕とらえろとは命じてないの。なのに、わざわざカンピオーネを襲撃させるような愚ぐ行こう、クラレンス——わたしの元同僚や叔父さまは命じないわ。危険なだけで意味がないもの」

「そうか。俺の居場所をドニのバカに報告するだけなんだな」

「卿にはあの方好みの〝決闘状〟でも送りつけましょう。何日後のどこそこで待つ、みたいなのを。途中で襲われる可能性、ゼロに近くなると思うわよ」

　見つかっても監視がつくだけと、ふたりは堂々と駅に向かい、電車に乗りこんだ。

　乗車前にドニの泊まるホテルと《赤銅黒十字》本部に手紙を送った。

　エリカが『投とう函かん』の魔術とやらを使ったのだ。所在地が明らかであれば、遠方の指定場所に封書を届けられる魔法らしい。文面は『明日の日没後、ガルダ湖こ畔はんにて待つ』といった感じで、草くさ薙なぎ護堂のサインを入れておいた。

　電車での旅は、一時間半ほどで終わった。

　ガルダ湖はミラノが属するロンバルディア州と、ヴェネツィアやヴェローナなどの古都を擁ようするヴェネト州のちょうど境目に位置している。イタリア最大の湖みずうみで、縦長の形をしており、南北の長さはなんと約五〇キロもある。

　エリカと護堂がやってきたのは、ガルダ湖南岸の街だった。

　ふたりは昼食のあと、タクシーで目的地に送ってもらうことにした。

「なんだか、海に来たみたいだな……」

　湖畔を走るタクシーの後部座席で、護堂はつぶやいた。

　ガルダ湖の広さは琵び琶わ湖この半分近くというところらしい。湖に沿うように小さな街や村が点在し、保養地・観光地として旅行客を受けいれる。それらの街々には、どこか海辺の街の雰囲気があった。

　湖畔には港があり、波止場にはたくさんのヨットやフェリーが停泊している。

　さすがに砂浜はないが、小こ砂じや利りを敷きつめた浜辺もあったりする。

「泳げるし、ヨットも出せるし、ウインドサーフィンなんかもできるから、たいして変わらないともいえるわね」

　エリカに言われて、護堂はうなずいた。

　ここの湖水は驚くほど澄すんでいて、きれいだった。きっと気持ちよく泳げるだろう。

　しばらくすると、タクシーの外の風景が変わってきた。それまではいかにも湖畔の観光地という印象だったのが、湖を見おろすように緑たなびく山々がそびえ立つようになった。どうやら海と山のレジャーを両方とも楽しめる土地らしい。

　タクシーは三〇分ほどで目的地に到着した。

　ブランデッリ家——というよりエリカが所有する、湖畔の別荘。

　ふだんは管理会社が、掃除や点検をしている。ガルダ湖の美観を間近で見渡せる物件は、別荘にふさわしい瀟しよう洒しやなログハウスだった。

　駅前の不動産屋でもらいうけた鍵を使い、エリカがドアを開ける。

「なんて言うか……こういうの、地味に金持ちの別荘っぽいな」

　とりあえず、俗ぞくっぽいことを護堂はつぶやいた。

　ひととおり別荘を見せてもらい、最後にガレージをのぞいたときの感想だ。

　このログハウス自体はそれほど大きくもないし、豪華な仕様でもない。しかし、ガレージにはあたりまえのように自動車とバイクが二台ずつ置いてある。

　自動車はミニと４ＷＤ。バイクは四〇〇ＣＣの中型と原付のスクーター。

「湖の方には、ボートなんかもあったりするのか？」

「あら、よくわかったわね」

「ここまでそろってるんだから、あってもおかしくないと思ってな……。まあ、とりあえず泊まる準備をしようぜ。掃除は必要なさそうだから、食い物の調達か」

　野球選手時代、チームの合宿を仕切ったノリで護堂は言った。

　庶民であり、かつ放任主義の母に育てられた護堂は、身のまわりのことはたいてい自分でやってきた。食べ物らしきものをでっちあげられる程度には料理もできるのだ。

　尚、この件についてはもちろん〝相棒〟の援えん護ごなど期待していない。案あんの定じよう、朝からお嬢さまっぷりを見せつけてくれたエリカは不思議そうに訊ねてきた。

「食事なら、近くにレストランも食堂もあるわよ？」

「せっかくこういうところに来たんだし、自前で用意する方が気分出るだろ。明日は正念場だし、体によさそうなものを食っとこうぜ」

「そう……。わたし、たいていのことは器用にこなしてきた自負があるのだけど」

　シリアスな思案顔でエリカが言った。

「料理という分野は、完かん璧ぺきに未知なる領域なのよね。まあ、でも、この際だからエリカ・ブランデッリの可能性に挑戦してみるのも面白いかしら……。実は前々から、今まで世界に存在しなかった味覚を創造する行為に興味があったの」

「たかがキャンプ料理に、そういう危険な覚悟はいらない」

　無難な味より個性的なまずさを面白がる美少女に、護堂はダメ出しした。

「安心しろ、おまえは戦力にカウントしてないから。俺がひとりでどうにかするよ」

「なんだか微妙に腹が立つ言いぐさね……」

「ところでさ。ここにある車、誰も使ってないんだよな？　もしかして、エリカは運転できるのか？」

「いいえ。でも馬なら問題ないから、近くの牧場から連れてこさせましょうか？」

　バイクか自動車を使えれば、買い物も楽だ。試ためしに訊いてみたら、斜め上をいく答え。エリカはふざけた感じではないので、半

分近く本気なのかもしれない。

　公道を騎馬で走らせるのもまずいので、護堂はガレージの隅にある自転車を見た。

「なら、こっちを使うことにするか……」

　というわけで、護堂は自転車で近所の店へ出かけていった。

　買い出しのあとは夕食の下ごしらえ。一段落ついたところでテラスに向かう。ガルダ湖を一望できる場所だ。先客のエリカが水辺の景観を楽しんでいた。

「じゃあ、そろそろ明日の決闘に向けての話もしておきましょうか。かなり厳しい戦いになるはずだけど、あなたにプランはあるの？」

　そこで、いきなり問いかけられた。

4

「プランとは言えないけど、昨日の勝負でヤツに通用しそうにない力がわかった。そこは大きいと思ってるよ」

「最後に使った『鳳おおとり』の化け身しんのこと？」

「ああ。あれはダメだな。殴なぐり合いや斬きり合いにはちょっと使えそうにない。速いのはいいんだけどドニには見えるらしいし、結構ズレるんだよ」

　昨日のことを思い出しながら、エリカに説明をはじめた。

　ドニを殴るつもりで勝手にはずれた拳こぶし。おそらく護ご堂どうが速すぎたことが原因だ。あのあと神しん速そくで走りながら、すこし検証してみた。

　対象が静止しているか、ゆっくり動いている場合は問題ない。

　だが、それなりのスピードで動く物体にアクションを加えようと

したら、必ず目測をあやまった。たとえば空飛ぶハトを捕まえようと手をのばしても、数十センチ横の空気をつかんでしまう、みたいに……。

「そういえば、プリンセス・アリスもおっしゃっていたわね……。初期の黒王子アレクさまも、電光石火の速さを制御するのに苦心されていたって」

　何か思い出したらしいエリカの言葉に、護堂はうなずいた。

「反則みたいなスピードだもんな。あれで勝手気き儘ままに動きまわれるなら、その何とか王子がとっくに無敵のバケモノになってるはずだ。でも、そういう話は全然ないんだろ？　あの速さをあまり当てにできないっていう、何よりの証拠だよ」

「たしかにそうね。でも、アレク王子は稲いな妻ずまの速さをある程度は制御できるそうよ」

「俺の力はその人の力と別物だから、あっちにできることが俺にもできるとは限らないぞ。変に期待しない方がいいだろ」

　カンピオーネの権けん能のうとやらに、護堂は愛着も執しゆう着ちやくもない。

　そのせいか、自分の能力をかなり突き放して——言いかえれば冷静に分析していた。

「それよりもさ。暗くなる前に、『決闘場』の方に案内してくれよ」

　いちばんの懸けん案あんをかたづけるべく、護堂は訴えた。

　エリカの別荘は、湖畔に一軒だけぽつんと建っている。だが、すこし歩けば、よその家や別荘、小さな商店、たくさんのヨットを係けい留りゆうする波は止と場ばなどもある。

　また、すぐ裏手には、なだらかな稜りよう線せんの山があった。

　ガルダ湖はいわゆる氷河湖——山やま間あいの峡きよう谷こくに氷河期の氷が溶けだして誕生した湖みずうみなので、山々に取り囲

まれるような立地なのだ。

　護堂はエリカに案内されて、この山を登っていった。

「山歩きは気持ちいいけど……毎日はちょっとめんどくさいな」

　急なハイキングをそれなりに楽しみながら、護堂は言った。

　緑ゆたかで、比較的なだらかな山道だ。体力的にはまったく問題ないが、山登りに時間をかけるのがすこし億おつ劫くうだった。

「そういうところが問題になって、うちの親が放棄した別荘なのよ」

　護堂のすこし前を歩きながら、エリカは言う。

　彼女が提供すると申し出てくれた決闘場は、かつてブランデッリ家の所有だった別荘の廃はい屋おくだという。誰も使わないうえに、電気ガス水道のライフラインも撤去してあるから、好きに壊していいという御お墨すみ付つきで。

「古いうえにやたらと広いから、とにかく不便な物件よ。それで人里から遠くはなれた雰ふん囲い気きのある山荘とかなら、逆にわたし好みなのだけど。ここ、何だかんだで街に近いし」

「まあなァ」

　歩きなので時間がかかっているが、自動車ならすぐに踏とう破はできるだろう。

　護堂はあいづちを打ちながら、想像した。

　きっと絶海の孤こ島とうに建つ洋館だの、雪山の山荘だの、ミステリー小説風味な密室殺人の舞台になりそうな物件が、エリカ好みなのだろうと……。

「さっきの護堂じゃないけど、いっそガレージの車を出せばよかったかしら」

「運転できないと言ったやつが何を言う」

「大丈夫よ。鉄や金属のかたまりを、念じたとおりに動かす術があ

るから。あの程度のサイズなら全然問題ないわ。要するに、車輪付きの鉄の箱にふたりで乗るのよ。あとはわたしが術をかければ、勝手に進んでいくから。複雑な操作はできないけど、山道を往復するくらいなら大丈夫よ、きっと」

「運転手なしで動く自動車の都市伝説が生まれそうだから、やめとこうぜ……」

　三〇分かけて山道を登り、ついに目的地に着いた。

　山中に建てられた、石造りの広こう壮そうな館やかた。

　雑草が茂り放題とはいえ中庭があり、そのまわりには回かい廊ろう（！）がある。

　建物の壁が一メートル近いぶ厚さだったり、石柱の上部には凝こった彫刻が施ほどこされていたりして、築年数でいえば軽く八〇〇年以上は経過していそうな風格に満ちていた。

　特に一階中央部のロビー。

　吹き抜けになっていて、見あげると天てん井じようのステンドグラスを鑑かん賞しようできる。

　奥の方には祭さい壇だんらしき台があり、高さ七、八メートルはある聖せい母ぼ子し像ぞうが鎮ちん座ざしていた。赤ん坊のイエス・キリストを抱いだく聖母マリアの石像である。

　あからさまにふつうではない建物をひととおり見て、護堂は言った。

「ここ、もしかして、めちゃくちゃ古くて貴重な建物じゃないのか？」

「貴重ではないわね。古いのは当たりだけど。ここは中世に建てられた、修道院の跡地だったのよ。それを何代か前のブランデッリ家の先祖が購入したの」

「そんなものを個人の別荘にするなよ、罰ばち当あたりだな！」

「あら。この手の別荘って多くはないけど、稀き少しようでもないのよ。富ふ裕ゆうだった貴族の血をひくような一族なら、似たよう

な物件を所有していることは多いし」

「あー……貴族さまの使った別べつ邸ていなのな……」

　欧おう州しゆうセレブの暮らしぶりをかいま見て、護堂はうなった。

「今どきは改装してホテルか美術館にするくらいしか、現実的な使い道はないわね。ただ、ガルダ湖は観光地としては落ち目だから、投資分を回収できるかあやしいところだわ。そういう場所だから、好きに使ってちょうだい。いくら壊してもかまわないから」

　太っぱらなことをエリカに言われて、護堂は敷地内を見まわした。

　自分の権能とやらの傾向、ドニとの戦力差を考えると、見渡すかぎりの野原で戦うような真似はしたくない。隠れるものもない戦場ですぐに斬ざん殺さつされるのがオチだろう。

　せっかくの厚意、ありがたく使わせてもらうことにした。

　うなずきかけると、エリカは貴婦人めいた包容力あふれる微笑で応こたえた。

「護堂が望むなら、かんたんな剣の手ほどきとかもしてあげるわよ。一日学んだ程度では何の糧かてにもならないでしょうけど、気休め程度にはなるかもしれないし」

「そうだな……それはいいや」

　あっさり断る護堂を、エリカは面白そうに眺める。

「今おまえが言ったとおりだよ。一日かそこら、付け焼き刃で何かしても意味はないって。そんなことより、根本的な対策を考えとく方が建設的ってもんだ」

「たとえば、どんな？」

「そりゃいちばんいいのは、ヤツの剣が届くところにいないってことだろ。……まあ、それだけじゃどうせ攻略できないだろうけど」

　打者として、厄やつ介かいな投手を打ち砕くにはどうすべきか。

キャッチャーとして、いかに投手をリードして打者を打ち取るべきか。そういう感覚で考えてしまう護堂だった。

付け焼き刃の剣術だのではなく、あくまで自分のやり方であのバカと戦う。

これは高校生・草薙護堂と、怪物サルバトーレ・ドニの対決なのだ。だから、自然と昔のノリになった。だが、これで——オレ流でいいのだとも思う。

あとはメルカルト戦の失敗を繰りかえさないよう、狡こう猾かつさと抜け目なさも忘れずに……。

「剛ごう胆たんね！　欧州最高の剣士を相手に、剣のにぎり方も覚えようとしないだなんて！」

と、エリカが愉快そうに笑った。

「でも、あなたの場合はたしかにそれでいいのかもしれないわ。どうせ『駱らく駝だ』の化身を使えば、わたし以上の戦士になるわけだし。サルバトーレ卿とちがって、飛び道具みたいな化身もあるし。……それに言こと霊だまの『剣』」

「あれか。でも、ドニは俺と同じカンピなんとかだぞ」

「だけど、神の聖なる権能を持つことに変わりないわ。卿の権能で由来がはっきりしているのはふたつ。ケルトの神王ヌアダから簒さん奪だつした『斬り裂く銀の腕シルバーアーム・ザ・リッパー』と、北欧の英雄ジークフリートから簒奪した『鋼の加護マン・オブ・スチール』よ」

エリカがすらすら言いたてるので、護堂は仕方なくうなずいた。

「まあ……メルカルトのときは『嵐』の力だけを斬きり裂けたから、あんな感じでいけるかもしれないけどさ」

言霊の刃やいばを振るうのは、ウルスラグナ最後の化身『戦士』。しかし、使用条件は神についての知識だ。それを得るには、またエリカと——。

そこまで考えて、護堂は何も言えなくなった。

「そう……よね。期待感はたしかにあるわよね……」

　エリカもあの出来事を思い出したのか、急に歯切れ悪くなる。ふたりはしばらく見つめ合い、そして同時に頬ほおを赤らめてしまった。

「と、とりあえず夕飯の準備もあるし、そろそろ帰ろうぜ」

「え、ええ。あなたのお手並みを拝見させてもらうことにするわ」

　気まずさをかかえたまま、山道をおりるふたりだった。

　夕食に選んだのはカレーだった。

　売店の食材コーナーを眺めつつ、豊富とはいえないレパートリーを検討した結果、これがいいだろうと護堂は考えたのだ。しかし日本とちがい、カレーのルーは売ってない。

　護堂は小麦粉でとろみをつけ、香こう辛しん料りようのスパイス各種を鍋に放りこみ、味を調節した。

　前にキャンプでルーが切れたとき、誰かがやった作り方を覚えていたのだ。

　カレーの具材は鶏とり肉にくと、スーパーで見かけた春野菜。

　ほかに大皿いっぱいのサラダ。オリーブオイルとワインビネガー、塩しお胡こ椒しようをまぜた即席ドレッシング。妙に皮の固いパン。買ってきたチーズやサラミなど。

「……またしても意外とふつうに食べられるのね。やっぱり面白くないわ」

「そういうところで変な期待をするなよ……」

　沈みゆく夕陽を浴びて、ガルダ湖がオレンジ色に染まる頃。

　意見の食いちがいはあったが、完成した料理をふたりはきれいに平らげた。

　洗いものをエリカに期待するほどの挑戦者気質は、護堂にはな

い。なので、かたづけもひとりですませる。そうなると、もうやることがない。ふたりとも夕食前にシャワーを浴びていたので尚なお更さらだ（ちなみに別荘にはバスルームがふたつあり、交互に入る必要はなかった）。

　広い別荘のリビングで、ふたりは手持ちぶさたのまま同席していた。

　さっきメルカルト戦前の『儀式』を思い出したせいで、護堂はすこしエリカと距離を置いていた。近くにいると、妙なことを考えてしまう。

　テーブルにすわる彼女から距離を取り、護堂はひとりソファにすわっていた。

「サルバトーレ卿が最初に倒された神はアイルランドのヌアダ。ダーナ神族の王で、切り落とされた生身の腕の代わりに、銀製の腕を持つ神よ。全てを断ち切るという光の剣をたずさえる軍神でもあるわ」

　唐突にエリカがうんちくを語りだした。

「そして、二番目に倒されたのが英雄ジークフリート。悪竜ファーヴニルを倒したときに竜の血を浴び、彼は不死身の勇者となった。リヒャルト・ワーグナーのオペラで有名だから、こちらは護堂も知っているんじゃない？」

　あくまで名前くらいは、だが。黙って聞いていると、さらにエリカは言う。

「それ以外にも、サルバトーレ卿はあと一、二柱の神を弑しい逆ぎゃくされたらしいけど、詳細は定かではないわ。ただ戦闘時に好んで使われる権能は、『魔剣』と『鋼の加護』のふたつよ。この事実から、おそらく残りの権能は戦闘向きではないと推測されているの」

「へえ。そういうこともあるのか」

「アレク王子の迷宮を造り出す権能なんかは、その典型ね。……とにかく、卿の主たる武器は剣と不死身。もし封じられるとしたら、わたしなら剣の方を選ぶけど」

「まあ、俺もそっちを選ぶけどさ。仮定の話をしても意味がないと思わないか？」

　エリカの意図を理解できず、護堂は困惑した。

　まるで、これから『剣』を準備するつもりがあるように思えてしまう。だとしたら、当然エリカとあれをする必要が——まずいまずい。

　護堂はあわてて邪じゃ念ねんを振りはらい、静かに言った。

「どうやって勝負するか、俺のイメージは大体まとまってきてるんだ。だからさ、もう今夜は早めに休んで、力をたくわえるのはどうだろう？　エリカも疲れてるだろ？」

　早めにも何も、まだ一九時にもなっていない。

　いくらなんでも早すぎる。しかし、ほかに話を切りあげる口実がなかった。

「いいえ、特に疲れてないわ」

「そ、そうか……」

「ねえ護堂。今のわたしたち、駆け落ちしたみたいよね」

「へ!?」

　いきなりエリカに言われて、護堂は絶句した。

「昨日からずっとふたりきりで逃げてきて。あたりまえのようにこうして、ひとつ屋根の下ですごして。これを駆け落ちといわずして、何というの？」

「い、いや、そういう見方はあるかもしれないけど、俺たちはなんていうかさ」

　言いよどんでいる間にエリカが立ちあがり、こちらに近づいてくる。ソファにすわる護堂のすぐ隣に腰を下ろしてしまった。

「友達とか、息の合う相棒みたいな感じだと思わないか……？」

「ええ。あとは生しよう涯がいを共にする伴はん侶りよ。永遠を約

束し合った恋人同士かしら」

　何だ、その喩たとえは！　狼ろう狽ばいする護堂に、エリカが寄りかかってきた。

「護堂、もしあなたがエリカ・ブランデッリを唯ゆい一いつ無む二にの異性として強く意識しているならだけど……。わたし、死ぬまであなたと添そい遂とげてあげてもいいくらいには考えてるのよ？」

　エリカの美び貌ぼうが至近距離・真正面から護堂をのぞきこんでいる。

　ここに至って、ようやく気づいた。いや、気づかされた。草薙護堂は今、とてつもなく重大な運命の岐き路ろに立っているのだ！

5

「そ、そういう過激なことは、落ち着いて考えてから言うべきだと思うッ」

「わたしを誰だと思っているの。護ご堂どうに言われる前にたっぷり考えたし、そのうえで抑おさえがたい情熱が心の裡うらにあるとわかったからこそ、行動にうつしたのよ？」

　美しいだけでなく聡そう明めいな美少女は、抜かりなく言った。

　なぜ？　何でエリカは、草くさ薙なぎ護堂ごときにこんな申し出をするのだ!?

「だ、だけどな。どう考えたってつり合いが取れないだろ!?」

「あら。七人目のカンピオーネである草薙護堂の伴はん侶りよとなるには、エリカ・ブランデッリごときでは力不足というの？」

「バカ、逆だろ。俺の方がおまえにつり合わないんだよ！」

「だったら、バカはあなたの方だわ。愛を語らい、恋をささやくと

きにつり合いなんてものを考えるのは愚ぐ行こうもいいところよ。本当に野や暮ぼな人なのね！」

　ついにエリカの口から、愛や恋という単語が出てしまった。

　これでは勘かんちがいのしようもない。愕がく然ぜんとする護堂の耳元に、エリカはやさしく微笑ほほえみながら顔を寄せてきた。

「でも、そういう野暮なところがわたしには愛いとおしいわ。サルバトーレ卿きょうほどではないけどバカで、愚ぐ直ちよくで、不器用で、野暮で、ときどき妙にずるがしこいくせに基本的には素そ朴ぼくすぎる草薙護堂が、わたしのいちばん愛おしい人なの」

　バカにしているくせに、おそろしく愛情深いささやきだった。

「でも、こんなふうに理由を言いつづけることこそが野暮のきわみよね。ねえ護堂、わたしをいつまで鈍どんくさい女のままでいさせる気？　きちんと然しかるべき言葉をかけて欲しいわ」

「し、然るべき⁉」

「俺もおまえのことが、とか。おまえみたいな女は趣味じゃない、とか。どちらにせよ、諾シーか否ノをはっきり告げるべきよね」

　耳元での甘いささやき。護堂の頭がくらくらしてきた。

「だ、だけど急すぎるだろ。今までそんなそぶり、全然なかったわけだし！」

「そうかしら？　わたし、なかなか自分の気持ちを認めたくなくて、たしかにあまり素直には好意を示してなかったけど……。でも、心を決めた今にして思えば、結構わかりやすかった気がするのよね。大体、このわたしが好きでもない男の子に唇くちびるを許すはずないでしょう？」

　すこし恥じらいながら、ほんのりうれしそうにエリカは訴える。



　彼女の言うとおりだとしたら、草薙護堂の目はとんだ節ふし穴あなだったようだ。

「そ、そうだったのか……」

「そうだったの。じゃあ、わたしの方から護堂に訊きくことにするわね。——あなたにとって、わたしは特別？　それとも、ほかの女たちと変わらない程度の存在？」

「い、いや。そりゃいろんな意味で特別に決まってるだろ」

　つい認めてしまった。たちまちエリカはにっこりと笑った。かわいい。

「いい答えね。じゃあ、わたしのいない日本での生活はどうだった？　さびしかった？　ふとした拍ひよう子しにわたしと過ごした日々を思い出したりしなかった？」

「……思い出した、かな」

　またしても白状してしまった。まずい。

「これが最後よ。わたしといっしょにいたい？　いたくない？　どっち？」

「いたくなかったら、わざわざ海を越えて逢あいに来たりしないだろ！」

　しまった。思いどおりにならない自分の舌を、護堂は恐ろしく思った。

　生まれてはじめての経験だった。言ってはいけないと理性ではわかっていることを、エリカの可か憐れんさと情熱にほだされて、ことごとく口にしている！

　……いや、待て。そもそも、どうして言ってはいけないのだ？

　ふと護堂は気づいてしまった。自分もエリカも決まった相手がいるわけでなし。くっついてしまって悪いことは何もない。

　要は思い切りの問題なのだと、はっきり認識してしまった。

「あー……俺たちさ。出会ってから、せいぜい一カ月だろ。しかも、いっしょにいた時間は二週間もないわけで。そんな短いつきあいで、こういう決断をするのは軽けい率そつじゃないか？　もうすこし時間をかけて、ゆっくりおたがいの感情をたしかめようぜ!?」

「恋は稲いな妻ずま。そして、愛は永遠よ」

　エリカは淡く微笑して、やけに詩的な文句を口ずさんだ。

「ほんの一瞬で恋に落ちることだってあるでしょうし、そのまま一生かけての愛を育はぐくむことだってできるはずだわ」

　ダメだ。やはり何だかんだいって、この金髪美少女も情熱のラテン民族。

　こういう局面での決断力が大やまと和みん民族ぞくとはちがいすぎる！

　それに圧倒的なエリカの魅力。ストレートすぎる求愛の言葉。何よりサルデーニャ島以来、ひそかにずっと惹ひかれていたという事実。

　このまま拒否を続ける理由がひとつも見あたらない。

　しかし、護堂はこんな短期間で恋人を作れるほど軟派な人間ではない。また、『永遠』を口にするエリカに軽々しく応こたえるのも、誠意に欠けるような気が——

「ふふふ。護堂がわたしとの関係をまだ決定的なものにできないのなら、しばらく今のままでかまわないわ。わたしの見立てがまちがいなければ、あなたは昨日までのわたしと同じ。ただ踏ん切りがつかないだけに見えるし」

　婉えん然ぜんと微笑ほほえむエリカに、さらりと言い切られてしまった。

　しかし、護堂は否定の言葉を口にできなかった。

「そちらはひとまず脇わきに置いて、緊急の問題を片づけましょう？　わたしたち、サルバトーレ卿との戦いに備えて、ふたたび『剣』を研とぐべきよ」

「ま、待てよ。それって、またアレをすることになるだろ⁉」

「もちろん。でも、問題ないでしょう？　わたしたちの関係が今後どうなるにせよ、もう心の深いところでつながり合ったことは確認できたわけですし。前みたいに変な口実なしで、儀式を愉たのしみましょう？」

「たたた、愉しむ⁉」

「愛いとしい人との口づけなんだから、あたりまえじゃない。——ふふっ。白状するとね、この前の儀式のとき、実はすごくドキドキして、我われを忘れてしまったの。途中から頭が真っ白になった感じで、あなたとのキスに夢中になっていたわ」

「…………！」

「ああいうの、はじめての経験だったわ。ねえ護堂、またわたしを夢中にさせて頂戴。そしてサルバトーレ卿に勝つため、ふたりで最善を尽くすの……」

　と、エリカが桃色の唇を護堂のそれに寄せてきた。

　食後、いつのまにか口紅を塗りなおしていたらしい。つややかに輝く唇が、護堂にはたまらなく魅み惑わく的だった。しかも、自分はそこに口づけ、たっぷりと味わいさえした。それを思い出すと、尚なお更さらだった。

　あと一、二センチで接触する。心臓が早はや鐘がねのように高鳴るのを、護堂は自覚した。

　エリカの想おもいに応えたいという心。エリカにふれたいと願う心。あのバカに負けるわけにはいかないという心。全てがぐちゃぐちゃになっていった。

　そして、気づけば——。

　エリカに唇を奪われ、護堂もそれを受けいれてしまった。

「お、俺はあいつをぶっとばしてやりたい……。力を貸してくれるか？」

「あたりまえだわ。それがあなたの介添え人——いいえ、伴侶とし

ての役目ですもの！」

　いいかげん、堰せきが切れる寸前だったせいか。

　エリカの勢いがふつうでなかった。護堂の唇を激しく吸ってくる。キスで草薙護堂の全てをむさぼるつもりに思えた。

　唇で唇をふさがれた格好のまま、密着しつづける。

　一〇秒、二〇秒とすぎても、エリカはまだはなれない。息が続かなくなってから、ようやく唇を放してハァハァ空気を求めてあえいだ。

　しかし、またすぐにキスしてくる。全身全霊をぶつけるような、熱情のこもった接せつ吻ぷん。

　その甘やかさに、護堂の頭もすこしずつ麻ま痺ひしてきた。

　だから、エリカの激しさにも徐々に応えるようになっていった。エリカが護堂の唇をしゃぶれば、護堂もエリカの唇をしゃぶる。しゃぶり合う。

　自分の唇で相手の唇をはさみ、そのやわらかさをたしかめ、唾だ液えきでうるおす。

　くちゅ、くちゅ——。湿り気のある音が響く。やがて、唇をしゃぶり合う勢いもどんどん増してきた。いつのまにか、ふたりの歯と歯がぶつかってしまっていた。

　今度はガチガチと歯のぶつかる音を聞いた。

　正直に言って、痛かった。

　だからだろう。いつのまにか、ふたりの舌同士がねっとりとからみはじめた。口のなかに舌を押し入れて、相手の舌を探す。舌で舌を巻き取ろうとする。

　唇のまわりは唾液でべとべとになっていった。

「そ、そろそろ肝心の知識も教えなきゃダメね。ごめんなさい、夢中になりすぎたわ」

　我われに返ったように、エリカがささやいた。

「こんな大切なことまで忘れてしまうだなんて、今のわたし、ふつうじゃないわ。この間キスしたときよりもすごいかも……。護堂、あなたがそうさせたのよ」

　とろんとした目つきでつぶやいてから、エリカは言こと霊だまをつむぐ。

「サルバトーレ卿が倒したヌアダ神はダーナ神族トウアハ・デ・ダナーンの王。このダーナ神族とは、アイルランドに住んでいたケルト人の信仰した神々よ」

　護堂の唇を吸いながら、エリカのささやきは続く。

「ケルト人はヨーロッパ大陸の先住者、アングロ・サクソン人によって征服、あるいは駆く逐ちくされた民族というイメージがあるかもしれないけど……」

　ときどき息を継つぎながら、常にささやくかキスするかのどちらかだった。

　甘やかではあるが、荒々しく不器用な交わりだった。それがかえって、心の深い部分でつながるような感覚を起こさせてくれる。

「時代をさかのぼれば、むしろケルト人こそが征服者だったのよ。彼らは長い民族移動の末にインド方面からヨーロッパにたどりつき、さらに大陸からブリテンの島々に渡るの。アイルランドに渡ったケルト人は、先住民と戦い、勝利と敗北を繰りかえしながら、この島をついに彼らの版はん図ととするわ」

　いつしかキスするだけでは飽あきたらず、エリカがしがみついてくる。彼女のやわらかな感触を全身でたしかめて、護堂はしびれるような思いだった。

「銀の腕と光の剣を所有するヌアダ神は、ダーナ神族の王でもあった。彼の神話には、民たみを指揮してアイルランドを制せい覇はした、古代ケルト王の姿がしっかりと刻まれているわ。それを理解して、神を斬きり裂く刃やいばとするのよ、護堂！」

　ケルトの神王ヌアダの知識が、エリカの唇と舌から奔ほん流りゅうのように伝わってくる。

　護堂は『剣』の完成を確信した。いまだ出会ったことのない神を斬り裂くために、黄金の刃が誕生したのである。

第７章　剣の王

1

「ひさしぶりだね、僕の大切なアンドレア！　心配したんだよ！」

「世よ迷まい言ごとをぬかすな！　貴様というやつは本当に最低のクズで最高のバカだな、サルバトーレ・ドニ！」

　あたたかな春の夜。ミラノの高級ホテルのバーラウンジ。

　約半月ぶりに再会した青年ふたりは、心あたたまる言葉を応おう酬しゅうし合った。尚なお、『スフォルツェスコ城、崩壊！』のニュースと極きよく左さテロ組織による犯行声明がイタリア中のメディアをにぎわせたのは、昨日の出来事である。

　そのニュースはもちろん、真実を隠いん蔽ぺいするため捏ねつ造ぞうされたものだ。

　言うまでもなく、主犯の片割れはここにいるサルバトーレ・ドニであった。

「まさか俺を拉ら致ち監かん禁きんしてまで、こんなバカ騒ぎをはじめるとは……」

　怒りで声を震わせながら、アンドレア・リベラは言った。

　通称『王の執しつ事じ』。浮うき世よばなれしたドニの介かい添ぞえ役やくにして監視役だった。

　几き帳ちよう面めんなリベラは、隙すきのない背広姿でいることが多い。だが、今日はノージャケットでネクタイもなし。早すぎる

クールビズだった。

　というのも、謎なぞの誘ゆう拐かい犯はんの魔手から、四時間前に解放されたばかりだからである。

　ジェノヴァの駅で解放されたリベラは、すぐ各方面に連絡を取って情報収集し、主あるじのいるミラノへ急行した。監禁中も着ていた服のまま、身づくろいもせずに。

　ふたりの再会直後のやりとりが、今の会話であった。

「誤解だよアンドレア。君が誘拐されてたなんて、僕はちっとも知らなかったんだ。最近、姿が見えないなーとは思ってたけどさァ」

「どう考えても、貴様が仕組んだことだろうが！」

　無ぶ精しようひげも剃そっていないリベラは、憤ふん然ぜんと主に文句をつける。

　ドニが『王』となる前は友人同士であったため、ふたりきりだといまだに対等の口を利きく関係なのだ。ちなみに現在、バーにふたり以外の客はいない。

　カウンターにバーテンダーがひとり、無言でひかえているだけだった。

　このホテルの経営陣は《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》とつながりがあり、ドニがふらふらバーにやってきた時点で、自動的に貸し切りとなったのである。

　カウンター席にすわるなり、リベラはすぐに注文した。

「銘めい柄がらは何でもいい。ウイスキーをストレートで頼む」

「いきなり飛ばすじゃないか。飲みすぎには注意しなよ？」

「貴様の悪あく行ぎようを揉もみ消す仕事で、明日からいそがしい。飲まずにやっていられるか！」

　終始無言のバーテンダーが、さっと注文の品を用意してくれた。

　琥こ珀はく色の液体を満たしたショットグラス。リベラはそれを

口にしながら言う。

「名門結社を巻きこみ、ミラノの名所をひとつ八つ裂きにしてまで、七人目のカンピオーネに無理矢理ケンカを売る……。こんなことが知れ渡ったら、またヨーロッパ中から生あたたかな目で見られるぞ。なんとしても情報の拡散を防がなければ……」

「アンドレアはあいかわらず体面にこだわるなァ」

「体面じゃないッ。良識と常識だ！　それはそうと、やるのは明日か、明後日あさつてか？」

　ドニが何も注文しないのを見て、リベラは訊たずねた。

　剣のカンピオーネは禁欲とは程ほど遠とおい男である。食べる量も飲む量も人一倍だった。なのに、今夜は一滴の水さえ口にしない。

「明日だよ。僕の求愛がようやく実ったのさ」

　草くさ薙なぎ護ご堂どうからの『決闘状』をつまみあげながら、ドニはささやいた。重要な戦いが近づくと、彼は一切の食を断つときがあるのだ。

　科学的にはまったく非効率で無意味な、断食と水断ち。

　だが、その飢うえと渇かわきが彼の『剣』をいつも以上に鋭く研とぎすます——。

（逆にガツガツと冬眠前の熊のように飲み食いして、力を蓄たくわえようとするケースもあるので、単に気分の問題なのかもしれない。とことん非科学的な男なのだ）

　ともあれ、剣のカンピオーネは戦闘態勢に入っていた。

「でも苦労した甲か斐いあって、今度は向こうもノリノリなんだ。口ではツレないこと言うけど、僕のことが気になって仕方ないはずだよ」

「まあ、相手もカンピオーネだからな」

　この種族に四年も執しつ事じとして仕つかえたリベラは、万ばん

感かんの想おもいをこめて言った。

「どうせそんなところだろうとは思ったさ！　貴様が死んだときは、遺ゆい言ごん書しよどおりに後始末するぞ。かまわないな？」

「あー、前に無理矢理作らされたやつか。あったね、そんなの」

　さすが我わが友。抜かりないなとドニは笑う。

　魔王の執事たるリベラも、今回の敵・草薙護堂がいかなる者かを知っている。武術も魔術も知らず、戦闘経験もわずかな日本の男子学生。理り詰づめで考えれば、ドニが戦死する――どころか負ける要素はひとつもない。

　だが、リベラはそのケースを想定している。わかっているのだ。

　カンピオーネは人の形をしているが、本質はむしろ『獣けもの』に近い。剣や魔術を知らずとも、狩かりや戦闘の経験がなくとも、戦いながら勝手に――自然に力を得ていくと。

　そういう者だから、神を殺害できたのか。

　神を殺あやめたから、そういう存在になったのか。

　それはドニにもわからない。ともかく、自身もまた神殺しの獣でありながら、彼はあえて剣に命運を託たくす変わり種だ。神と神殺しに通用する剣技は、この連中相手に実戦を重ねる以外に磨く術すべはない。だから戦う。

　すがすがしいほどの単純思考で、明日の決戦に備えるドニだった。

　サルバトーレ・ドニと草薙護堂。それぞれの一夜を終えて、迎えた翌日。

　ドニは《赤銅黒十字》に車を出させて、ガルダ湖こ畔はんまで送らせた。ミラノからだと、二時間もかからないのだ。対する護堂は、決闘場に指定した建物で静かに待った。

　四月下旬の週末。すでに陽ひは沈み、闇やみが支配する刻限。

かつて修道院だったというロマネスク建築の別荘跡地で、ふたりのカンピオーネは顔を合わせる。場所はダンスホールとしても使われた二階の大広間だった。

「このときを待ちわびたよ、護堂。僕は今、猛烈に感動している」

「俺は逆に、めちゃくちゃ腹立たしい気分だよ」

ストレートによろこびを口にするドニと、しかめ面つらの護堂。

夜風が窓から入ってくる。外に出れば、春の星座がよく見えるはずだ。そんな気持ちのよい夜なのに、ドニは円筒型ケースから剣を取り出した。

「君も何か使いなよ。ちょっとやりづらいよ」

「ざけんな。銃じゅう刀とう法ほうを違反する気は、俺にはひとかけらもないぞ」

祖国の法律に遵じゆん法ぽう精神を発はつ揮きした護堂へ、ドニは思案顔でつぶやいた。

「そうか。なら仕方ないな。やりづらいのはたしかだけど……まあ、ちょっとだけだし。同じカンピオーネ同士だから対等ってことで、気にしない方向でいこう」

「おまえ、ダメ人間にも程があるだろ！」

年長の相手を、ついに『おまえ』呼ばわりする護堂だった。

イタリアと日本。距離のへだたりはあまりに大きい。にもかかわらず、たがいを折おりにふれて強く意識し合い、最も印象深い同族と認識し合う——。

ふたりの奇縁が本格的にはじまったのは、この瞬間だったのかもしれない。

「前に斬られた礼と、さんざん振りまわされたエリカたちの礼……まとめてしてやるよ、サルバトーレ・ドニ！」

「ふふふ、何か考えがあるようだね。望むところさ、草薙護堂！」

開けはなしてあった窓を護堂がちらりと眺ながめたので、鋭くドニは言った。

だが、そこで敵手の思おも惑わくなど読もうとはしない。智ちを尽くして戦おうともしない。無念無想こそがサルバトーレ・ドニの真しん骨こつ頂ちよう。無む想そう剣けんの礎いしずえなのだ。

全すべてを我が身、我が腕、我が剣に託す。

考えて剣を動かすのではない。ただ心と体と剣が天然自然に動くにまかせる。

対する草薙護堂は、無想の境地に命運を託すような芸はできない。己おのれの力と仲間の力を臨機応変に駆使して、はじめてまともに戦える。

さまざまに対照的な同族同士の、華麗ならざる決闘だった。

ドニとの再戦。前回は護堂が遁とん走そうする形で終わった。野球でいえば、敬遠でどうにかしのいできた大打者と真っ向勝負せざるをえない新人バッテリーのような立場だろう。

圧倒されていたイメージをひきずったまま勝負するのも上う手まくない――。

内角高めの速球を打者の手もとに、ぶつけてもいいぐらいの強気で投手に放らせて、今までとの差をアピールしたいところだった。

『なあエリカ。あの古い別荘、こういうふうに使うのはどうだろう？』

『もちろん、かまわないけど……。あなたって偽いつわりの平和主義者なだけじゃなくて、意外と手段を選ばない人よね』

思いつくまま相棒にプランを語ったら、こう評されたが。

ともかく、持ち主オーナーの許可は得てある。護堂は心置きなく危険球を放った。

「来い！　たっぷり暴れさせてやるから、すぐに来い！」

ウルスラグナ第五の化身『猪』を呼んだのである。

オオオオオォォォォォォォンンンン！

おなじみの咆ほう哮こうが響いてくる。下から——別荘の真下、すなわち地中から。

このやたら立派な廃はい屋おくをくれてやる。代わりに、とにかく場をひっかきまわせ。護堂の意思に応こたえて、突とつ如じょとして巨獣が顕あらわれる。

地中より発射されたミサイルのごとく、『猪』は直上方向に跳びあがってきた！

別荘の土台・一階・二階が紙細工のように貫つらぬかれ、黒き獣の頭と鼻はな面づらと長い牙きばが別荘内の魔王ふたりの前に出現するまで、ほんの一瞬であった。

当然、仕掛け人の護堂はこれを予期していた。

窓に走り、躊ちゅう躇ちょなく空中へジャンプ。下には、別荘時代に使っていたベッドのマットレスを敷いてある。カンピオーネの頑丈さがあれば、その程度の準備でも十分なはずだった。

——窓から跳ぶ瞬間、護堂はドニが剣を真下に繰り出すのを目撃した。

「ははっ。いきなりそう来たか！」

なんと、剣の王は愉ゆ快かいそうに笑っていた。デタラメな先制攻撃に一瞬たりとも動じず、冷静にカウンターの一刀。ドニの右腕はもちろん銀に輝いている。

剣の切っ先が斬きり裂さくのは、下から跳びあがってくる『猪』の頭部のはず。

さすが、デタラメさではこの男も金メダル級——。

護堂は感かん嘆たんした。スフォルツェスコ城すら八つ裂きにした魔剣である。体長二〇メートルの神獣も一刀両断するかもしれない。だが。

オオオオオォォォォォォンンンン！

衝撃波ソニツクウエーブを生み出す、『猪』の超音波付き咆哮だった。

「わあああああああっ！」

剣が刺さる寸前、衝撃波でドニは吹っとばされた。直後、『猪』は石造りの別荘の二階と屋根までもやすやすと貫き、ガルダ湖畔の青空へと舞いあがる。

「デタラメさでは、『猪』のやつもドニに負けないもんな……」

どうにかマットレスの上に落ちることができた護堂は、しみじみつぶやいた。足から落ちて尻しりもちもついたが、足とお尻がちょっと痛い程度だった。

月のきれいな夜空に、容よう貌ぼう魁かい偉いな巨獣がロケットのように上昇していく。

召しよう喚かんに慣れてきた護堂はゾッとした。なんて便利なバケモノなんだと。ほかの化身にくらべて、あつかいやすさが段ちがいだ。

巨大な物体を破壊したいときだけ呼べる獣。

いいかえれば、これだけは唯ゆい一いつ、護堂の心づもりひとつで使える化身。最大火力では『白馬』、柔軟さでは『戦士』が上かもしれないが、あつかいやすさまでふくめれば、まちがいなく『猪』が最強の手札だった。

「あれ……？　もしかして俺、勘ちがいしてたか？」

ふと護堂は気づいた。もしかして、何かを破壊したいときに呼べる獣ではなく。

破壊させることが条件で呼べる獣かもしれないと。出現中、『猪』は目標物の破壊を目的としつつも、護堂の指示をそこそこ聞いてくれるのである。

「……気づかなかったことにするか」

後者よりも前者の方が、まだ人聞きがいい。護堂はひそかにつぶやいた。

「とにかく、あいつを呼ぶといろんなものがぶっこわれるから、注意しなきゃだな」

自じ戒かいをつぶやきながら、別荘の方を見る。空中の『猪』がついに上昇の頂点に達して、落ちてくる。ただし墜つい落らくではなく、急降下であった。

オオオオオォォォォォォンンンン！

猛たけ々だけしい咆哮が獣の闘志を表現している。やつは破壊目標である別荘の上に急降下して、フライングボディプレスを喰くらわせるつもりのようだ。怪獣さながらの巨体で跡形もなく押しつぶすために。しかし、護堂は見た。

屋根の上にひょっこり、金髪の優やさ男おとこが剣を片手に現れる。ドニだった。『猪』の衝撃波をどう堪こらえたのかは不明だが、やはり生きのびていた！

「ただ一振りであらゆる敵を貫く剣よ。全ての命を刈り取るため、輝きを宿せ！」

ドニは言こと霊だまを叫び、槍やり投なげの要領で剣を投げた。

魔ま刃じんの権能を宿して、剣が上空へ飛んでいく。その行く手には急降下してくる巨獣の無防備な腹。すると『猪』は、いつもの咆哮を眼下へと放った。

オオオオオォォォォォォンンンン！

見えざる衝撃波が、ドニの投じた剣を吹きとばす——はずだった。しかし、飛んでいく剣から、水銀に似た溶解した金属が吐き出され、大きく細長いフォルムを形づくる。

溶けた銀はすぐに凝ぎよう固こし、一振りの巨大な『魔剣』となった。

刃渡り七、八メートルはあろう、長大を通りこして超特大の魔刃。それは急ごしらえの即製品のくせに、意外と見ばえよく剣らしい形をしていた。

オオオオオォォォォォォンンンン！

神獣の放つ衝撃波は、並の大きさの剣なら容易に吹っとばしただろう。だが、バカバカしいサイズの剣をそうすることはできなかった。

銀の大魔刃は衝撃波をものともせず飛ひ翔しようし、『猪』の腹に突き刺さり、串刺しにする。

ルアアアアアァァァァァアアアアンンンン！

断だん末まつ魔まの咆哮。この一刀で『猪』は命を絶たれたのだ。だが、ここから黒き神獣は意地を見せた。串刺しにされながらも眼下の別荘への急降下をつづけたのである。

体長は約二〇メートル、推定重量は数百トンだろうか。

そんな怪獣が、巨大な腹を下にして墜落。いかに豪ごう奢しやで広壮な別荘とはいえ、ひとたまりもない。もちろん、あっさり押しつぶされ、崩壊した。屋根も、天てん井じようも、梁はりも、壁も、柱も、床も、グシャグシャに圧あつ壊かいしてしまった。

直後、大魔刃で串刺しにされた『猪』も闇色の靄もやと化して、消滅。

だが、神獣が押しつぶした別荘の屋根には、仇かたきであるサルバトーレ・ドニもいたはず。やつはどうなった——？

護堂は目を凝こらし、もうもうと煙立つガレキの上に人影を見み出いだした。

うなずく。これで勝てれば、そりゃ楽でいい。だが、あの男がかんたんに倒れてくれるとも思えない。戦いはまだまだ終わらないのだ。

2

「やるなァ、護ご堂どう。すごいね。僕はいろんな相手と戦ってき

たけど、ここまで激しい先制攻撃を喰くらった記憶はあんまりないよ！」

　喜き色しよく満まん面めんで叫ぶドニは、完かん璧ぺきに無傷だった。まわりに楔くさび形がた文字のような記号が百近くも、彼を守るように浮かんでいる。この形、たしか北ほく欧おうのルーン文字だったか。

　これがドニを不死身に変えるという、『鋼はがねの加か護ご』の権けん能のうなのだ！

「こうなると、君に負けないくらいド派手な反撃をしたいところだな」

　あろうことか、金髪の優やさ男おとこはまじめな声こわ音ねでつぶやいた。

「剣で斬きりつける以外に芸がないから、僕の決闘にはいまいち華はながないんだよね。そこいくと、君はいろいろ見ばえする技が多そうでいいな……」

「今までやってみせたことだけで、十分ド派手だろうが！」

「え、そう？　じゃあ、このままいってみようか」

　護堂がつっこむとドニは身をかがめ、何かを拾いあげた。

　それはガレキのなかに埋もれていた、さっきの大だい魔ま刃じんだった。あらためて眺ながめると、そのバカバカしさにあきれてしまう。

　刃渡り八メートル弱。プラス柄つかの部分が一メートルほど。

　その長さにふさわしく、刀身の巾はばも広く、がっしりした造りだった。この剣の裏に、子供くらいなら余裕で隠れられるはずだ。

　ドニの身長が一八五センチ前後。彼の背のなんと四倍超のスケールだ。

　まったく釣り合いの取れていない長大すぎる剣を、銀の腕のカンピオーネは〝ひょい〟と片手で振りあげている。すごいを通りこしてバカげていた。

「……参考までに訊きくけど、それ、意外と軽いのか？」

「はかったことないけど、たぶん三〇〇キロ以上あるんじゃない？　でも、この腕と同じ素材だからね。僕には自分の手足みたいなものさ」

　にんまり笑いながら、銀の腕を持つカンピオーネは言った。

「ふふふ。僕らカンピオーネの敵は、人の姿をした連中だけじゃない。やたらとでかい神獣とか魔神とも対決しなくちゃいけないんだ。そいつらを真正面から斬り伏せるため、編み出した秘剣がこれさ！」

「でかい相手にはでかい剣とか、発想がバカすぎるだろ！」

　護堂は文句をつけつつも、実は慄りつ然ぜんとしていた。たしかにバカにも程がある。しかし、意外と理にかなっているのでは？

　このバカげた長さと重さを、ドニがきちんとあつかえるなら――。

「じゃあ、ひとつ派手に決めてみようかな！」

　ついにドニが大魔刃をかまえた。

　長い柄の部分を両手で持ち、刃渡り八メートルの刃やいばをまっすぐ護堂に向けてくる。長ちよう槍そうを装備した重装歩兵のような、今までとは異なるかまえだった。

　ふたりをへだてる距離は一五メートルほど。

　だが、大魔刃をもってすれば、かんたんに間を詰められそうだ。昨日、最良のドニ対策は剣の届くところにいないことだと、護堂は語った。そう上う手まくいかないだろうとも。だが、まさか剣の長さ自体がのびるとは。

　ふぅ。護堂は息を吐き出した。いよいよ真っ向勝負の本番。格上の『王』相手に大立ちまわりする正念場だ。今使える化け身しんはいくつあるか、心を静めて考える。

　三つの化身を使える確信がわいてきた。こいつらを頼りに踏んばるしかない！

「技は力のなかにあり――どんな神技もそれに見合う『力』がなければ、最後は虚むなしく蹴け散ちらされるだけさ」

　剣術の要よう諦ていらしき文句を、ドニは謡うたうようにささやいた。

　これも言こと霊だまだった。銀の大魔刃へ呪じゅ力りょくを送りこみ、凶悪な威力を宿らせるための。そして、ドニは護堂めがけて〝突き〟を放ってきた。

　大きく踏みこみながらの一突き。

　長大な銀の切っ先が、矢のごとく一直線に護堂へ迫ってくる。

「やっぱり、ふつうに使えるのかよ！」

　毒づきながら護堂はサイドステップして、大魔刃をかわす。

　ぎりぎりだった。反応があとコンマ数秒遅れていれば、このバカげた刃で一刀両断されたはずだ。恐れていたとおりの展開になった。

「我われは最強なり。全ての障しょう碍がいを打ち破るものなり！」

　ウルスラグナの聖句を唱となえて、護堂は『雄牛』の化身を使う。使用条件は敵が破格に力強いこと。この速さで振りまわされる大魔刃には、それを満たすだけの『力』があったのだ。

　護堂は『猪』によって生み出されたガレキの山へと駆けよった。

　屋敷だった頃の原形をまったくとどめていない。あの廃はい墟きょを構成していた建材の数々が目に入ってくる。柱、彫刻、壁、床、天てん井じょう……さまざまなガレキたち。

　そのなかから護堂は、格好の得え物ものを発見した。

　一階ロビーに置かれていた、高さ七、八メートルの聖せい母ぼ子し像ぞう！

　奇跡的に原形をとどめていた像を、『雄牛』の怪力で雄お叫たけびと共に持ちあげる。

「だあああああっ！」

　これならリーチでも大魔刃に負けない。護堂は聖母子像を物もの干ほし竿ざおのように振りまわして、ドニに殴りかかった。当たるとは思っていない。牽けん制せいのつもりだったのだが。

　この一撃をドニは避けなかった。

　ガツンと横よこっ面つらを聖母子像でぶん殴れたので、護堂は驚いた。

　ドニのまわりに浮かぶ百のルーン文字が輝いたのは、その瞬間だった。

　護堂は驚きよう愕がくした。硬くて重い鉄てつ塊かいを打ちすえた感触が、両手から伝わってきたのだ。見れば、ドニを殴った聖母子像の方が粉々に砕け散った。

　ルーンをまとう剣の王はまったくの無傷。これが鋼鉄の肉体か！

「いいぞいいぞ！　君の方もエンジンかかってきたね！」

　ドニが今度は大上段からの一刀を振りおろしてきた。

　まさに真っ向幹から竹たけ割わり。この剣も護堂はうしろに跳びすさってギリギリ避ける。

　だが、ドニの攻めは終わらない。振りおろしたばかりの大魔刃を手首のスナップで〝ひょい〟と持ちあげ、護堂の脳天めがけて、また落としてきたのである。

「うわっ！」

　転げるように右へよろけて、かろうじて護堂は大魔刃を逃れた。

　巨大すぎる刃は獲え物ものの代わりに、ガレキだらけの地面にガッと突き刺さる。その瞬間、異変は起きた。大魔刃が抉えぐった箇か所しよを爆心地に、光と爆風と衝撃波が発生した。

「剣よ。光り輝き、焔ほのおを放て！」

「なにィ⁉」

ドニの剣と短い言霊によって、大地が爆発したのだ。

埋まっていた地雷が炸さく裂れつしたかのような熱と衝撃。サルデーニャ島でビアンキに喰らわされた爆裂魔法を格段に強化した感じだった。

それでも、カンピオーネのデタラメな呪術耐性を破ることはできない。

白い爆発に巻きこまれたが、護堂のダメージはすこしの火傷やけどと裂れつ傷しようくらいだった。しかし、爆風と衝撃まではなかったことにできず、吹っとばされた。

ただ斬り裂くだけでなく、こんな追加攻撃までプラスされるとは――。

驚く護堂の体は爆風によって飛んでいった。

ガン！　後頭部と背中が石の壁にぶつかり、短い飛ひ翔しようは終わる。じんじん痛む。だが、おかげでドニとの間の距離が広がった。

護堂は軽く一息ついて、そこらに転がっている〝武器〟をにらむ。

「この距離なら絶対にはずさないしな！」

と、ガレキのひとつを片手で持ちあげた。

ボウリングで使うボールを三倍大きくしたようなサイズだ。これを二塁に盗塁しようとする快足ランナーを刺す要領で投げる。

『雄牛』の怪力があれば、こんな攻撃が砲弾並みの破壊力になるのだ。

投げた先には、もちろん大魔刃を持つドニがいた。石のかたまりが、推定時速一六〇キロで飛ぶ。至近距離で投じられた剛速球ならぬ剛速石だった。

この石を余裕で刺しつらぬくのだから、金髪のカンピオーネも無茶苦茶だ。

　ドニはまた長槍のように大魔刃をかまえていたのだが、護堂に向けていた巨大な切っ先をほんのすこしだけ動かし、ガレキを串くし刺ざしにしたのである。

　そして、爆発——。

　白い閃せん光こうと熱、爆風がガレキから発生した。

　この爆発がドニを呑のみこんだ。斬った対象が爆裂するなら、いちばん近くにいる斬殺者まで巻きこまれるのは必然だろう。

　だが、ルーン文字をまとうドニはあいかわらずの無傷。

　爆発の熱も威力もそよ風くらいにしか感じてないらしく、涼しい顔だった。

　しかし、護堂はすで第二撃を投じていた。さっきの一〇倍ほど大きなガレキを両手で抱えあげ、ぶん投げたのである。しかも、さっきと同等の速さで。

　今度は当たった。おそらく一〇〇キロを超す石のかたまりは、メジャーリーグ最高の打者でも打てない速さと重さでドニの体に激突し、凶悪すぎるデッドボールとなった。

　だが、バラバラに砕けたのは石の方。ドニは小揺るぎもしない。

「ったく。すこしは人間らしいところを見せろよ！」

「そのことを君に言われたくないな！」

　反論しながら、ふたたびドニは突きを放ってきた。

　ごくわずかな刹せつ那なの間に、魔刃の切っ先は護堂の目前に到達していた。

　——ドニは通常サイズの剣で、攻撃をほとんど悟らせない魔性の斬撃を見せた。しかし、大魔刃は刀身が一〇倍以上長い分、ドニとの距離が広がる。

　その距離の分、剣筋を見る時間がわずかに長くなる。

　だからだろう。スフォルツェスコ城のときよりも剣をかわしやす

い。

　護堂はまたもギリギリで跳びのき、切っ先を避けた。しかし、獲物を逃した大魔刃は代わりに背後の壁を一刀両断。例の白い爆発も起きる。護堂の体は吹っとばされた。

　またガレキだらけの床にたたきつけられたが、ダメージは軽けい微びだ。

　起きあがりながら、視線の先の砕けた聖母子像に気づいた。さっきドニを殴るのに使った石像だ。上半身は粉々になったが、下半身はまだ原形を保っている。

　次はこいつを投げて牽けん制せいにでも——と考えた瞬間だった。

　護堂は魔鳥の影を見た。大魔刃を持ったまま、ドニが軽やかに跳躍したのだ。

　別荘の天井は破壊されたので、見あげれば月がよく見えた。だが、その月明かりを銀の魔刃と魔剣士の影がさえぎる。

　護堂との間にあった十数メートルの距離をひと跳びで詰める大ジャンプだった。

　——護堂は思い出した。

　サルデーニャ島でエリカも見せた武芸。生身の人間に自動車並みのスピードと、超人的なジャンプ力をあたえる走法。ドニも使えたのだ！

　ドニが着地したのは、護堂が狙ねらっていた聖母子像の下半身だった。

　優男がはく靴に踏みつけられて、石像はまたも粉々に砕けてしまった。上に乗ってきたドニの体重がトン単位で、その重さに耐えかねたかのように——！

「ふふっ。こいつを使うと、気合いのノリに合わせて体重が勝手に増えちゃうんだ。気をつけないと、あちこち踏みつぶして怒られるんだよね。……ちなみに、今はブルドーザーくらいの重さかな？」

うそぶくドニのまわりで、ルーン文字たちが輝いている。

鋼はがねの堅けん牢ろうさをさずける神秘の印。どうやら効能はそれだけではない……！

「軽自動車くらいまでなら、軽くもできるんだけど。そうしたら、踏んばりがあまり効かなくなるしさ。困ったもんだよ」

「……そうか、硬くなるだけじゃ敵の攻撃を堪こらえきれないもんな。鉄の重さもなかったら、どれだけ硬くても吹っとばされる――！」

さっき聖母子像で殴ったときを、護堂は思い出した。

硬いだけではない。おそろしく重い鉄塊を殴ったような手て応ごたえ。『雄牛』の怪力がなければ、あれで手首を痛めていたはずだ。

ドニはあの一撃にも、ガレキの直撃にも、小揺るぎもしなかった。

それは重い打撃にもびくともしないだけのウェイトが、剣の王にあったからなのだ。護堂は確信した。今のドニなら、巨人メルカルトとヤグルシ・アイムール相手に正々堂々の肉弾戦になっても、互角に戦うだろう。

前に戦ったときの神しん韻いん縹ひよう渺びようたる達人ぶりとは、一八〇度ちがう。

この男は必要に応じて、巨神たちとも渡り合えるヘビー級ファイターに変へん貌ぼうし、『力』で敵を押しつぶすのだ。軽量級の身のこなしを保ったまま。

なんという怪物。こいつと『力』だけで張り合うのは不可能に近い。

護堂は覚悟を決めた。どこまで通用するか読めないが、とにかくやってみなくては。

さっき使えると確信した三つの化身。ひとつめの『雄牛』に見切りをつけ、護堂はふたつめの『戦士』を行使した。

昨夜、エリカが造ってくれた、言霊の刃——。

この武器がカンピオーネの権能に対しても使えると、ついさっき護堂は知った。ふたりが万一のためにと心を通わせた行為は、この土ど壇たん場ばで切り札となってくれたのだ。

3

「サルバトーレ・ドニ。あんたが倒した銀の腕のヌアダは、古代のケルト人が崇あがめたダーナ神族の王だ。この神様は古代世界の王の在あり方を現代にもよく伝えてくれる存在だ」

護ご堂どうのささやきに応こたえて、光が生まれる。

黄金に光る、球状の輝き。野球のボールと同じほどの大きさだった。

「ダーナ神族の王であるヌアダは、勝利の剣を持つ軍神でもあった。この頃の彼はまだ、銀の腕じゃなかった。でも、配下をひきいてアイルランドに侵攻したとき、先住者だった神との戦いで負傷し、右腕を失ってしまったんだ」

護堂のまわりで輝く光の玉は、またたく間に数を増やしていく。

はじめはほんの数個だったのがすぐに数十となり、一〇〇を超すようになった。

「ヌアダはその傷を理由に王位を譲る。そこで医術の神が隻せき腕わんとなった先王のために、銀の腕を造ってくれた。でも、銀の腕の神となったヌアダが玉ぎよく座ざに返り咲くことはなかった。彼が復位できたのは、生身の腕を完かん璧ぺきに再生してもらったあとだ」

言葉をつむぐたびに光球が生まれ、周囲を照らす輝きも増す。

この輝きこそが、『戦士』となった護堂の武器——言こと霊だまの『剣つるぎ』だった。

「王は戦士であらねばならない。強くあらねばならない。傷を持つ身であってはならない。古代世界ではしばしば見られた原則だ。ヌアダの属性が『隻腕の神』であるかぎり、彼は決して再即位できないんだ！」

　輝く『剣』たちは銀河をいろどる星々のごとく、燦さん然ぜんときらめく。

　おびただしい数の輝きを目にして、ドニは小さく笑った。

「ふふふ……僕にはわかるよ」

　いつもの陽気で能天気な笑い方ではない。比ひ類るいなき剣王の異いオさいにふさわしい、闘争の喜き悦えつに満ちたふくみ笑いだった。

「これは『剣』だね。鉄を鍛きたえて研とぎすました剣じゃない。言霊を刻んで形と成す、呪じゆ術じゆつの剣だ。護堂、君もまた剣を操る神殺しだったのか！　面白い！」

　魔刃を手にしたドニが高らかに言いはなつ。

「鋼はがねの剣を下げ僕ぼくとする僕に、君は呪しゆをつむいだ剣で対抗する……。サルバトーレ・ドニと草くさ薙なぎ護堂のやり方はどこまでも交まじわらないらしい。ふふ、それでこそ僕たちだよ！」

　奇妙な同族意識と対抗心が、ドニの瞳ひとみに揺ゆらいでいた。

「そうさ。カンピオーネ同士の戦いはどちらの流りゆう儀ぎが勝るか、いつだって意地の張り合いみたいなものなんだ。そのお約束、君ももうわかってるみたいでうれしいよ！」

　ドニがふたたび大魔刃を突きこんでくる。

　しかし、護堂はもう避けない。代わりに言霊を唱える。

「勝利に輝く我われを、邪じや悪あくなるものは討つあたわず！」

　周囲できらめいていた数十の『剣』たちが加速する。

　流星のごとく天あま翔かける彼らが襲いかかるのは、ドニが即席

で造りあげた大魔刃！

　一いつ閃せん、二閃、三閃、四閃——立てつづけに『剣』の光がきらめき、白銀製の特大な刃と一瞬の交こう錯さくを果たす。

　それは、あとコンマ一秒のさらに十分の一で魔刃が護堂を斬り裂くときだった。

　護堂の頭頂から股こ間かんまでをきれいに両断するはずだった大魔刃は、ガラス細工のようにパリンパリンと砕け散った。

　銀の腕のヌアダを斬り裂くための『剣』が、大魔刃を消滅させたのだ。

　しかし、サルバトーレ・ドニの右腕は白銀化したままだった。その腕は大魔刃の材料となった、何の変哲もない平凡な剣をにぎっている。

　ドニの権けん能のう『斬きり裂さく銀の腕』は、依い然ぜんとして健在なのだ。

「深くは切れなかったか……」

「十分みごとだと思うよ。僕が打ちこむ剣に技を合わせられるやつなんて、神様たちをのぞけば地球上に四人もいないはずだからね」

　ドニの心身の深い部分に根づいている、ヌアダの権能。

　その核の部分を斬れなかったと察した護堂に、自じ称しよう『世界でも四番目以内の戦士』は自じ画が自じ賛さんこみで賛さん辞じをくれた。

　だが、次は斬ってみせる——。護堂が言霊を唱えようとしたときだった。

「さすが言霊の剣と言っておこうかな。なかなか便利でいいじゃないか。でも、そういう武器だとわかれば、相応の覚悟もあるものさ」

　ドニが微笑ほほえむと、そのまわりから守護のルーン文字が消えた。

「僕は……僕に斬れぬものを許さない」

　銀の腕が輝きを増し、同じ光がドニの持つ剣にも宿る。

「護堂、君の『剣』は僕の『魔剣』を斬り裂くための武器らしい。でも誓うよ。その『剣』さえも斬ってみせる。僕の全身全霊をかけて！」

　剣のカンピオーネの述じゆつ懐かいは、そのまま言霊であった。

　サルバトーレ・ドニはなんと、ヌアダの天敵たるウルスラグナの『剣』をも一刀両断すると宣言して、呪力を燃やしているのだ！

　そのために『鋼はがねの加か護ご』も解除して。

　そのために、今使える全ての呪力を『魔剣』に注ぎこんで。

　護堂がゾッとしたのは、『戦士』の化身だからだろう。敵の来歴を知り、深く理解する。その特性ゆえに、『戦士』は敵手の思おも惑わくをなんとなく読める。

　その能力が警告していた。ドニの誓いはおそらく——成じよう就じゆする。

　ただ〝斬る〟ことに特化したドニの権能。その単純さゆえに、銀の魔剣は自身の天敵さえも斬り裂く神しん威いを宿すだろうと！

「だったら……斬られる前に斬ってやるさ」

　護堂が心を決めるのと同時に、ドニも飄ひよう然ぜんと歩きだした。

　距離を一息に詰めるでもなく、悠々と歩いてきたのだ。まるで友人か家族の家に上がりこむような、何気ない足取りだった。とても決闘の最中には見えない。

　だというのに、気づけばドニは『するり』と目の前にいる。ひょいと剣を突き出せば、護堂の体を捉とらえられる距離に！

　まったく速く見えないのに、気づけば剣の間合いにいる。

　スフォルツェスコ城でも見せた、雲に乗る仙人まがいの歩法だっ

た。

「百の打撃により一千を、千の打撃により一万の敵を滅ぼせ！」

　ドニの神技に戦せん慄りつしながら、護堂はとっさに言霊を唱えた。

　数百の『剣』たちを瞬時に呼びよせ、己の前面に防御壁として展開させたのだ。星雲のごとく密集する黄金の光に、ドニは火の出るような一剣をたたきつけた。

　その瞬間、『剣』と『魔剣』がついに正面衝突を果たした。

　黄金の光に受け止められて、銀の魔剣は動きを止めた。あと五〇センチ先に護堂の体があるというのに、それ以上進めなくなっていた。

　剣をつつむ白銀の光は、消えかけたロウソクの火のように激しく揺らぐ。

　この剣の行く手をはばむ黄金の星々に、銀の腕の権能を封じる効能があるためだった。ドニの『魔剣』はすこしずつ〝全てを斬り裂く力〟を削そぎ取られ、弱められているのだ。

　しかし、あせりで顔をゆがませるのは護堂だった。

　そして、不敵にほくそ笑むのはドニだった。

「メルカルトとの決闘を観測したパレルモの連中から聞いたよ。君はウルスラグナから、神様たちの『神格』そのものを斬る能力も簒さん奪だつしたらしいね。それを使えば、たしかにいろんな神との戦いに役立つだろうさ」

　わずかずつ、ドニが光の魔剣を押しこんでくる。

　一センチ、また一センチと、わずかずつ切っ先が護堂に近づいてくる。

「でもさ。所しよ詮せんひとりの神様が持ってた権能のごく一部だろ？　まあ、それだけであらゆる戦いを押し切れるほどの御ご利り益やくはないだろうな——って報告を聞いたとき思ったんだけど、やっぱりだったね！」

まったく、ドニの言うとおりだと護堂もうなずいた。

黄金の『剣』たちは本来、白銀の剣を苦もなく斬り刻むはずだった。だが、相手が〝全てを斬る〟というシンプルすぎる能力だったのと、それを全力で強化しようという能天気すぎる性格だったのが災わざわいしたのか。

斬れるはずなのに、斬れない。斬っているのに斬りきれない。

しかも、ドニの『魔剣』は力を削そぎ取られながらも、すこしずつ迫ってくる！

護堂はサルバトーレ・ドニを、激しくにらみつけた。

この優やさ男おとこが大バカなのはまちがいない。いろいろ隙すきが多いのも明らかだ。だが、要所要所で抜け目なく狡こう猾かつさを示す。しかも、身につけた神技の数々。

エリカはこの男を剣の天才と呼んだ。

だが、実際に戦ってみて、その形容ではまったく足りないことを知った。

ドニがどれだけの研けん鑽さんを積んだのか、未熟な護堂には想像もつかない。しかし、それはきっと狂気の領域に踏みこむような日々の積み重ねだったのではないか――。

寝食を忘れ、全ての雑事を捨て、ただ技の錬れん磨まにのみ専心する。

日常などない。幸福などない。ただ技ぎ倆りようを高めんと工夫を凝こらし、試し行こう錯さく誤ごする日々。

もちろん行きづまっただろう。ＲＰＧで経験値を集めるようにはいかないのが芸事というものだ。しかし、そこで己おのれを甘やかさず、妥だ協きようせず、疲れた心身に鞭むち打うち、蹴け飛とばしながら、愚ぐ直ちよくに〝その先〟をめざす――。

その果てにドニは、剣魔とも剣仙とも呼ぶべき境地に達したはずなのだ。

「……これだけのやつ相手に、半端な覚悟で勝てるわけないもんな

――」

　ひそかに護堂は口のなかでつぶやいた。

　黄金の『剣』による防御壁で、どうにかドニの剣を押しとどめている。だが、あと二〇センチほどで刃は草薙護堂の肉体に到達するだろう。

　それまでにドニの『魔剣』を斬り裂く自信は、護堂にはなかった。

　だが、まだ奥の手がある――。なまじ『戦士』になったせいで、敵の偉大さを理屈抜きで実感し、認めたくないが絶賛すらしたくなっていた。

　だからだろうか。護堂はごく自然に切り札の投入を決断できた。

「だったら、俺も根性見せてやるよ！」

　防御壁に使っていない『剣』を全て呼びよせる。

　黄金の光球たちは護堂の体に吸いつき、寄りそい、燦さん然ぜんと輝く。

　銀河の星々をまとったかのような護堂が直後に取った行動。これにはサルバトーレ・ドニも虚きよを突かれたようだった。

「なんだって!?」

　護堂は、我とドニの間に造った防御壁を解いていた。

　障害物が消えたので、白銀の光をまとう剣は一直線に護堂へ襲来する。それは、左の脇わき腹ばらから右肩までを斬りあげる逆ぎやく袈け裟さの太た刀ちとなった。

　黄金の光をまとっていた護堂の体は、存分に斬られた。

　大量の鮮血がほとばしる。ちょうど『／』の字を上半身に刻まれた。

　こんな傷を受けたのは、生まれてはじめての経験である。皮ひ膚ふと肉だけでなく、左の脇腹から右肩までにあった臓器と骨をこと

ごとく斬られた。

　痛いというよりも熱かった。護堂の体はよろけ、膝ひざをつきそうになった。

　堪こらえられたのは、カンピオーネの頑丈さと体育会系の根性ゆえだ。まったく、サルバトーレ・ドニはすさまじい。たいした業わざ物ものでもない駄剣で、鉄より硬いはずの骨さえも断ち切る。

　しかも権能に頼らず――。

「ふ、ふふふふふ。そうかそうか。その手があったか」

　一方、ドニはくつくつと肩を揺らして笑っていた。

　白銀化していた腕は生身にもどり、血濡れた剣に銀の輝きはもうない。

「そりゃそうだ。君の体を斬りにいったんだから、そこに『剣』を置いておけば、僕の『魔剣』を迎え撃つのもむずかしくない。ただ、斬られる覚悟が必要なだけで！」

　笑いながら護堂を見つめる瞳ひとみは、ひどく熱っぽかった。

　ドニの言ったとおりだった。草薙護堂が投入した切り札は〝我が身〟。自分の体を囮おとりにして『魔剣』を呼びこみ、斬られる代わりにこちらも存分に斬ったのだ。

　ヌアダの権能を間一髪で無力化できたから、護堂は一刀両断されずにすんだ。

　代償は大きかったが、上う手まくいってくれた……。

　おそらく『剣』はヌアダの権能を一時的に無力化しただけだろう。なんとなく手応えから察せられた。だが、この決闘の間くらいは十分保つはずだ。

「この局面でそれを思いつく発想力と、実行しちゃう決断力がすばらしいよ！　護堂、君ってやつは本当にバカでいいな！」

「ば、バカにバカと言われたくはない……！」

「おいおい。今のは誉ほめ言葉だって」

　激痛にあえぎながらの反論に、ドニが涼しい顔で言う。

「護堂との決闘を望んだのは、単に君がカンピオーネだったからだけど。でも、それが心得ちがいだったと今わかったよ。草薙護堂——君は僕が『友』と認めるに足る男だと、はっきり理解できた」

　神の聖なる腕と剣魔の武技を持つ青年は、飄ひよう然ぜんと語る。

「と、友だって……？」

「ああ。ただつるむだけの相手じゃない。僕たちはたぶん、これから幾度も刃を交え、拳こぶしで語り合う仲になるだろう。ときに敵対し、ときに肩をならべて戦いながら、最後には必ず雌し雄ゆうを決するために互いを求める——そういうふたりになるはずさ」

「そ……そういうのは友達じゃないっ。宿敵とかライバルっていうんだ！」

　痛みを堪こらえて護堂が言うと、ドニはけろりとした顔でうなずいた。

「そうとも。『強敵』と書いて『友』と訓よむ。素敵な関係だろ？」

「どこがだよ！」

　なんで命がけでつっこみをせねばならないのか？

　ぼやきながら、護堂は『駱らく駝だ』の化身を使った。友——ではなく敵がヌアダの腕を失った以上、もう『戦士』でいる必要はない。

　ちょうどよく深ふか傷でを負ったので、これが使用可能になった。

　黄金の光球たちは消え、代わりに猛たけ々だけしい獣の闘争力が体に宿る。

　ウルスラグナの能力のうち、接近戦ではおそらく最強の化身。こ

れならドニをあそこに追いこめるかもしれない。護堂は戦いが最終局面に来たことを悟った。

4

昨夜、ヌアダの神しん格かくを斬り裂く『剣つるぎ』が完成したあと。

エリカ・ブランデッリは、草くさ薙なぎ護ご堂どうに対する態度を一変させた。すでに愛を明らかにし、熱く口づけまで交わした以上、ひかえめに振る舞う意味などなかったのだ。

まず修正したのは、護堂との距離感だった。

ちょっと手をのばせば、すぐに護堂の体にふれることができる距離。あるいは、すこし顔を近づければ彼にキスできる距離。

それくらいの至近距離を維い持じすることにしたのである。

すると、あからさまに落ち着きを失う護堂が面白くも可愛かわいかった。

つい悪いたずら戯心ごころを起こして、意味もなく彼の体を撫なでたり、不意に軽めのキスで彼の頬ほおや唇くちびるをさわったりもした。

「ねえ護堂……やっぱり今夜も、わたしたちの部屋は同じにすべきよね？」

夜も更ふけてきた頃には、護堂の耳元にこうもささやいた。

その提案を彼は必死に拒絶して、ひとり別室に閉じこもってしまったが。

——今まで異性との恋愛にまったく興味がなかった点では、エリカも護堂も似たようなものだろう。だが、ふだんからオープンな男女関係を間近で見る機会の多いエリカに対し、護堂はそういう事柄について、どこまでもひっこみ思案だった。

民族性と個性のちがいがよく現れていた。

その差もふくめて彼との関係を楽しもうと決めたエリカは、今朝になると、愛する少年を外へ連れ出した。

ふたりで二〇分ほど歩いて、湖こ畔はんのカフェに行った。

歩く間も店内でも、エリカはもちろん護堂と密着せんばかりに寄りそっていた。

昨日までのふたりを見ても、人は『仲のよい友人同士』と思っただろう。だが、今朝のふたりを見れば、ふつうに『恋人同士』と察するはずだった。

エリカはそう見られることが爽そう快かいだった。

一方、護堂はずっと所在なげに身を小さくしていた。

ようやくいつもの態度にもどったのは、水辺のテーブルでエスプレッソとクロワッサンの朝食を終えたあとだった。それはエリカがさりげなく決闘のことを話題にし、今日の最重要事項を思い出させたからであったが。

「……今、なんとなく思ったんだけど」

護堂はようやく瞳ひとみに鋭えい気きを取りもどしていた。

だが、エリカと見つめ合うのが気恥ずかしいらしく、目が合うとすぐにそらす。だからなのか、視線を湖みずうみの方に固定していた。

「決闘場所の指定、あそこにするって手もあったよな」

「あそこって……護堂、まさかあれのこと？　どうして？」

愛する少年が見つめる先にあるもの。

美しい湖水に悠ゆう々ゆうと浮かぶそれに気づいて、エリカは訊たずねた。

「ほら。修道院だった昔の別荘、壊していいかって話しただろ？　あれをあそこでやれば、そのままドニの野郎を湖みずうみの底に沈

められるかなって思ったんだ。——いや、ダメか。あのバカが水入りになった程度で、戦いをやめるとは思えないもんな……」

　ぶつぶつと、護堂は胡う乱ろんなことをつぶやいた。

「水中では、むしろ護堂が不利かもしれないわよ。あの方、数千メートルの深海でも生きのびたらしいから」

　いつもは良識に抑よく制せいされている護堂の過激さが、だだ洩もれであった。

　決闘が近いせいだろう。それを面白がりながらエリカは言った。

「サルバトーレ卿きようの不死身の権けん能のう、ただ体が硬くなるだけじゃないようなの。以前、どこかの海神と戦ったとき、乗っていらした船ごとプエルトリコ海かい溝こうに沈められたそうだけど、一週間後に生還されたという冗談みたいな逸いつ話わがあるわ」

「あいつは深海生物かよ……」

「クマムシ並の生存能力があっても、意外ではないわよね」

　ちなみにクマムシは、体長一ミリほどの微生物である。仮死状態になると、超高温・超低温・真空といった劣れつ悪あくな環境下でも生きのびる生命力の持ち主だ。

「護堂にその気があるなら、あれを乗っ取る手伝いもできるけど。ほら、昨日言った術。わたしの技ぎ倆りようなら、あのくらい大きな金属でも動かすだけなら問題ないわよ」

「ば、バカ。今のはただの思いつきだ。本気にするなよっ」

　とりあえず申し出たら、護堂に拒絶された。

　おそらく、五二％くらい本気で思案していたはず……とエリカは推すい察さつしたが、口には出さなかった。騎士の情けである。

　——ともあれ、ついに迎えた決闘の夜。

　エリカ・ブランデッリは不参加だったのではない。メルカルト戦のように、戦況の変化に備えて待機していたのである。魔王ふたり

から、すこし距離を取って。

　尚、エリカの参加について、

「一対一のケンカなのにって、文句つけられたりするかな？」

「大丈夫じゃない？　護堂が『猪いのしし』を呼んだら、メルカルトも下げ僕ぼくを呼んだでしょう。神獣や使い魔に戦いを手伝わせるのは、あなたたちの場合、むしろ基本みたいなものだわ」

　気にした護堂に、あっさり言ったものだ。

　そしてエリカが見守るなか、護堂は我が身を囮おとりに『魔剣』を封じ込んだ。

　深ふか傷でを負ったが、『駱らく駝だ』の化身も使う。剣のカンピオーネと真正面から向かい合う。

「さあ、ここから仕切り直しだ」

　ささやくドニのまわりに、『鋼はがね』のルーン文字が展開する。

　護堂の方は斬きられた傷が痛むらしく、苦しげに眉まゆをひそめていた。

　だが、出血は止まっていた。いつもより治ち癒ゆ力りよくが強いように見える。それも『駱駝』の能力なのかもしれない。この化身は野獣のごとき格闘能力と、ケタはずれのキック力を護堂にさずける。身も軽くなるようだ。

　いきなり走りだした護堂は、どんな陸上選手も追いつけないスピードだった。

　しかし、サルバトーレ・ドニは騎士の跳ちよう躍やく術じゆつでついていく。これは中華の武ぶ侠きようたちが軽けい功こうと呼ぶ体術で、使い手は異常な走力と跳躍力を発揮できるのだ。

　ドニが駆け抜けたあとを見ると、土に足跡がくっきり深々と残っていた。

　重機が通りすぎる際に残す、キャタピラの跡を思いだした。彼自

身が言ったとおり、ウェイトがすさまじく増えているのだろう。

　なのに、通常時と同じ速さ・身のこなしでドニは走っていく。

「サルバトーレ卿の『鋼の肉体』……思っていた以上にデタラメだったわね」

　ぼそりとつぶやいて、エリカも走りだす。

　跳躍術なら彼女も使えるので、置き去りにされる心配はなかった。昨日、三〇分かけて登った山道を、護堂は数分で駆けおりた。やや遅れてドニ、隠れているエリカが続く。

　護堂が駆け込んだのは、湖のほとりにある波は止と場ばだった。

　たくさんの自家用ヨットが停泊している。イタリア最大の湖であるガルダ湖は、マリンレジャーも楽しめる水場なのだ。

　金髪のカンピオーネに追われながら、護堂は走っていく。

　彼がめざすのは、おそらく——。エリカは進行方向から察しをつけた。

　ちらりと見る。彼女の視線の先には、ガルダ湖を遊覧するための船があった。もう夜なので、明日の船出にそなえて停泊中なのだ。

「……平和主義の常識家が聞いてあきれるわ。自分の戦いに役立ちそうなものを見つけたら、ほとんど躊ちゆう躇ちよせずに利用しようとするんだから」

　意外と手段を選ばない、どころではない。エリカはひとりごちた。

「たぶん、それがよほど卑ひ怯きようとか悪あく辣らつな策じゃないかぎりは、えげつないくらい手段を選ばない人なんだわ。しかも即断即決で！」

　護堂がエリカに期待しているであろうことも、想像できた。

　生来の聡そう明めいさと、あの少年との短くも濃密な日々が、彼の思いつきそうなことを自然に思いつかせてくれたのだ。

見れば、護堂はあざやかな身軽さでジャンプ。遊覧船の甲かん板ぱんへ飛びこんでいく。

それを追いかけてドニも跳躍し、船上の人になる。彼が飛びのった瞬間、船は大きく揺らいだ。金髪の優男に、それだけ過か剰じょうなウェイトが上乗せされていたのだろう。

状況がととのったので、船の前に来たエリカは言こと霊だまを唱となえた。

「主はその宮殿より我が声を聞き給たまい、我が叫びは主の耳に入りぬ。ここに地は震え、天の礎いしずえも動き震えり……其そは、主の怒り給えばなり！」

決闘場を船に指定して、そこを『猪』に破壊させる今朝の案。

だが、サルバトーレ・ドニは破は天てん荒こうに生きのびてしまうだろう。何より『猪』はしばらく再使用できない。護堂の狙いはそれではないはずだ。

彼はおそらく、敵の〝不死身〟を逆用するつもりなのだ……！

修道院跡地から、五、六分ほどの長距離走を経へて。

場所を遊覧船の甲かん板ぱんに移し、ついに最終ラウンドがはじまった。護堂はななめ一文字の刀傷を上半身に刻まれながら、ドニと対たい峙じする。

「やっと駆けっこをやめてくれたね……。趣味じゃないけど、何か飛び道具を使おうかと思いはじめていたんだよ」

駄剣と鋼のルーンをしたがえるドニは、不敵に笑う。

今までよりも表情の能天気さが減り、鋭さが増していた。この顔つきだと、ドニが端正な色男に見えることを護堂は知った。

ささやくように吐き出す美声も、甘やかでいながら十二分に男らしい。

「銀の腕が使えれば、地面を八つ裂きにして足止めできたんだけど

ね……」

「そういう非常識な真ま似ねをさせずにすんで、ほっとしたよ」

　皮肉っぽく言う護堂には、『駱駝』の化身がある。ななめ一文字の傷がさほど痛まず、じんじん熱いだけなのも、こいつの御ご利り益やくだろう。

「フフフ。自分のことを棚上げするのは、君のよくないくせだな」

　失礼な批評をしながら、ドニが〝するり〟と近づいてきた。

　そして、例の陽かげ炎ろうめいた太た刀ちさばきで斬り込んでくる。サルバトーレ・ドニはヌアダの権能がなくとも、ある意味で魔剣の使い手なのだ。

　魔性の太た刀ち筋すじを、『駱駝』の格闘センスがどうにか見切らせてくれた。

　ぎりぎり避けた護堂を、ドニは涼しい顔で眺めた。

「今度は僕とも殴り合いできそうな力を使ってきたね。——君の権能、軍神ウルスラグナが変わるという十の化身と見た」

「……当たりだよ」

「なるほど。十もバリエーションがある分、使用条件がいろいろついてる感じか。君が全ての化身を掌しよう握あくするまで待つのも面白そうだ」

　ドニが剣をだらりと下げ、半身になる。例のかまえだった。

「でも、ここで勝負を放り出すのは、面白くなさすぎる！」

　凛り々りしく言った瞬間、斬り込んできた。今度は横殴りの斬ざん撃げき！

　ドニの剣を見切るため、護堂は目を凝こらした。

　たとえばエリカなどが振るう剣と、ドニが振るう剣。後者の方が、剣の軌道が遥はるかにコンパクトであることをついに護堂は知った。

　より短く、より小さな軌道で、より速く剣を振るっている！

　しかも、より強大なインパクトと、より激烈な威力を剣に乗せながら！

　それらの積み重ねが〝陽かげ炎ろう〟に見えるほどの避けにくさを生み出していたのだ。おそらく、わずか三〇センチでも剣を振ることができれば、ドニは最大最強の威力をその一斬に乗せてしまうのではないか。まさに破格の魔剣だった。

「これだから達人ってやつは！」

　賞賛といまいましさを声に乗せて、護堂は避けなかった。

　胴を薙なぎにきた必殺剣。これは避けられない。横にもうしろにも活路はない。『駱駝』となった護堂は直感した。唯一の活路は――前！

　体が勝手に動く。剣を振るうドニの方へ踏み込んで、軽くジャンプ。鋼の硬さと重さを持つカンピオーネの顔面に、膝ひざ蹴げりを突き刺そうとした。

　その膝はドニの左ひだり掌てのひらで受けとめられる。

　鉄板を蹴りつけたような感触だった。だが、護堂の膝は砕けない。『駱駝』の蹴りにはコンクリートを砕き、鉄板を割る威力があるからだ。

　ドニの左掌はまったくの無傷だが、それも問題ない。

　前に出たおかげで、剣ではなくドニの右腕に体をたたかれるだけでしのげたからだ。

「へえ」

　つぶやいたドニは護堂の足の甲に、自みずからの踵かかとを踏みおろす。

　おそろしく重い鉄てつ塊かいをたたきつけられる感触。左足の甲がぐしゃりとつぶれた激痛に、護堂は注意を奪われた。その瞬間だった。

　ドニは剣を持たぬ左手のひらで、護堂の胸をトンと突きとばした。

　軽く押しただけに見えただろう。だが、すさまじい掌しよう打だだった。

　ズシンと体の芯しんまで砕くような衝撃を浴びて、護堂は大きくのけぞった。アクセル全開で突っこんでくるダンプに轢ひかれた気分だった。

『鋼の加護』がもたらす重さは、攻撃にも役立つのだ！

　しかも、そうして作ったスペースに、ドニは右腕の剣をねじこんでくる。護堂の喉のど仏ぼとけをつらぬくための、まっすぐな突きだった。

　回避のために、護堂は背中から倒れこむ。そして、真上に足を跳ねあげた。

　空くうを突いたドニの剣。その柄つかをにぎる右拳に、護堂は蹴りをたたきつけたのだ。しかし、硬いうえに重い腕は小揺るぎもしない。

「粘ねばるじゃないか、護堂。でも、どこまで保つかな⁉」

　あおむけに寝る体勢になっていた護堂の腹に、ドニが剣を振りおろす。

　これはゴロゴロと転がって避けた。みっともない姿だが、背に腹はかえられない。死なないために、護堂は必死だった。

　敵は白はく兵へい戦せんのスペシャリストで、しかも超ヘビー級。

　そのうえ左足を踏み砕かれ、身軽さでもかなわない。旗はた色いろは圧倒的に悪かった。だが、起きあがった護堂は頬ほおを撫なでる夜風の冷たさに気づいた。

「いいや。もう保たせる必要はなさそうだ。ほっとしたよ」

　ここまで追いつめられると、さすがに接近戦ではかなわない。

　だが、護堂は笑う。ひどく獰どう猛もうそうに唇がゆがむのを自覚した。ついに反撃の時間が来たことを悟り、闘争心が激しく高まったせいだった。

「俺にはあって、あんたにはないものが最後のチャンスをくれたよ。これでダメなら、もう勝ち目はないかもだけど――やるだけやってみるさ」

「ふふ、愉うれしいことを言ってくれるね……」

　ドニと言葉を交わしながら、護堂はエリカに感謝した。

　打ち合わせする暇ひまもなかったが、〝相棒〟はみごとに察してくれた。

　神殺しふたりが甲板で戦っている間に、いつのまにか遊覧船は船出していた。昨日と今朝言っていた『金属を動かす魔術』をエリカは使い、この船を出航させてくれたのだ。

　夜の湖上を吹く風は冷たかった。

　フェリーは湖岸をはなれ、かなり沖合の方に来ていた。

　このあたりなら、水深は十分なはず。ガルダ湖はイタリアで最も深い湖らしいから、尚なお更さらだろう。護堂は言った。

「あんたが言ったとおり、俺の力にはむずかしい使用条件が多いんだ。こいつはなかでも、かなりめんどくさい方だ。だけど、あんたの場合、最初から問題なかった」

　さっき使えると確信した三つの化身。今こそ三つめを解き放つときだった。

「むずかしい、だって？」

「民衆を苦しめる大罪人にしか使えないってやつだよ。……あんた、ふだんどれだけ人様に迷惑かけてんだ？　いちばんの大技が最初から使えるもんだから、使いどころをいつにしようか逆に迷ったぞ！」

「失敬だな。僕はすこしばかりお茶目がすぎるだけさ。それに僕が大罪人なら、今夜の様子を見るかぎり、君も同じ評価に落ち着くは

ずだよ？」

「あんたにだけは言われたくない！」

　魔王同士の決闘にふさわしからぬ、威い厳げんに欠ける会話だった。

　しかし、それでも状況はととのった。護堂は遊覧船の甲板から、船の外をちらりと見やった。東の空に、遠く星々のまたたきが見える。

「我がもとに来たれ、勝利のために。不死の太陽よ、輝ける駿しゅん馬めを遣つかわし給え！」

　護堂が言霊を叫ぶと同時に、東の空が暁あかつき色いろにそまった。

　それは早すぎる夜明けの光こう明みようだった。そして、東天より太陽のかけらが焔ほのおの槍やりとなって降こう臨りんする瞬間だった。

　ウルスラグナ第三の化身『白馬』が到来したのである。

「く――ッ！」

　さすがのサルバトーレ・ドニも、ふりそそぐ陽光は避けられなかった。

　白い光に呑みこまれ、審判の焔ほのおに灼やかれる。

　シチリアのときのように火力全開では、自分まで巻き添えになる――。焔と熱線を極限まで集束させたいと、護堂は必死に念じた。祈りが通じたのか、降臨した白き劫ごう火かはドニと、その周囲数メートルを灼く程度の火柱であった。

　遊覧船の船体にも大穴が開いたが、どうにか航行は続いている。

　ドニの叫びを聞いたのは、このときだった。

「やってくれるね！　でも、僕の不死を舐なめないで欲しいな！」

　白い火柱のなかでドニは雄お々おしく微笑していた。

　極限の窮きゆう地ちが『戦士のなかの戦士』に文字どおり火をつけ、熱く猛たけらせているのだ。

「たとえ砕け散ろうとも、剣は決して滅びない！　折れた刃をふたたび炉ろで溶とかし、鍛え直せば、新たな剣として新生する。この程度の焔で僕を滅ぼせるものか！」

　己を守護する『鋼の加護』を最大限に発動させるための言霊。

　ドニを取りまくルーン文字が数百に増え、赤い輝きを放つ。なんと、その中心で金髪のカンピオーネは健在だった。

　白い超々高熱に灼かれて服は燃え、剣はどろどろに融ゆう解かいしている。

　鞭むちのようにひきしまった逞たくましい裸身は赤く変色——いや、高温にさらされた金属のように赤熱していた。だが、いまだ無傷！

　同時に『白馬』の焔は、遊覧船の船体をも燃やし、融解させていく。

「友よ、僕はこの熱にも耐えきってみせる！　そのあとで最終ラウンドと洒落しやれこもう！」

「冗談じゃない。大体、もう今の段階で最終ラウンドだ！」

　護堂は満まん身しん創そう痍いの体に鞭むち打うって、湖へ飛びこもうとしていた。

　船体がもう限界だと悟ったからだ。このまま焼け死ぬより、傷だらけの夜間水泳に挑む方がマシな運命だろう。

　そんな護堂に、ドニは赤く灼けた腕をのばす。

「つれないことを言わないでくれ。僕たちの戦いはこれからさ！」

「だから無理だって！　あんたがその重さで水に浮けるなら、べつだけどさ！」

「え？」

ついに遊覧船は融解しながら沈没し、ふたりの魔王はガルダ湖の水に落ちた。

だが、そこからの運命は対照的だった。

どうにか立ち泳ぎでちゃぷちゃぷ浮かぶ草薙護堂。

対して『鋼』たる肉体を極限まで強化していたサルバトーレ・ドニは、鋼鉄の錨いかりよろしく水中にぶくぶくと沈んでいったのである。

しかも、『白馬』の陽光は沈んでいくドニをなんとしても灼やき尽くそうと、東の空から照射されたままだった。護堂がそうなるよう念じていたのだ。

超々高熱によって、湖水が蒸発していく。

もうもうと水蒸気が立ちこめ、湯のように水が熱くなっていく。

「わあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ…………」

サルバトーレ・ドニの声と姿は、水に消えていった。

しかし、東天から降る『白馬』は沈んだ標的を徹底的に灼き尽くさんと、青い湖水を熱しつづける。ドニはまだ水中で生きているのだ。

一、二分ほどして、エリカが手こぎのボートで救助に来てくれた。

戦況を見て、抜かりなく舟を出してくれたのだ。護堂が水から救出されたあとも、レーザー照射はしばらく続いた。

光と焔がようやく消えたとき、ボートの上で護堂はぼそりと言った。

「……まさかとは思うけど、あいつ死んだかな？」

「……そこは『まさか』じゃなくて、『やっぱり』を使うべきところよ。でも」

エリカは憂ゆう鬱うつと賛さん辞じが渾こん然ぜん一いつ体たい

となった、複雑な表情を浮かべていた。

「あの方があれで亡くなられたとは、わたしもちっとも思わないのよね。なんだか『死ぬかと思った！』とかおっしゃって、水から出てこられそうな気がするわ」

　それについては、まさに護堂も同感だった。

終章

　湖水に落ちた護ご堂どうは、エリカが漕こぐボートに拾いあげられた。

　だが、岸へ戻る前に意識不明となった。ドニの剣で斬きり裂さかれ、さらに追加で喰くらったダメージがひどく、瀕ひん死しの重体となったのである。

　どうやら『駱らく駝だ』の化け身しんは、打たれ強さも強化していたらしい。

　それが消えたことで、限界が来たのだ。意識を失う前、もちろん護堂は『雄お羊ひつじ』を使い、超回復の準備をした。そして翌朝。

　ログハウスの別荘でエリカに見守られながら、護堂は復活を果たした。

　またしてもひどい空腹だった。なので、金髪の美少女といっしょに外へ出て、たっぷり飢うえを満たすべく湖こ畔はんのカフェに入ったら――。

「……あれ、君たちもここに来たんだ。奇き遇ぐうだね」

　店の奥で、真っ赤に日焼けしたサルバトーレ・ドニと再会した。

　春だというのに、火ぶくれしたような肌の赤さだった。エリカは一瞬だけ天ならぬ天てん井じようを仰あおぐと、肩をすくめて言った。

「一日ぶり――いえ、一晩ぶりです、サルバトーレ卿きよう。ご無事でいらしたのですね」

「うん。死ぬかと思ったけど、どうにか生還したよ。ええと、君の名前はエリカ・ブランデッリだっけ？」

「……はい。わたしの名前、いつのまに覚えていただけたのですか？」

「愛いとしい護堂のお付きだからね。そりゃ覚えもするさ」

　意外そうなエリカに、ドニはあっけらかんと笑いかける。昨夜、決闘の終盤で見せた鋭気と雄お々おしさはすっかり影をひそめていた。

　王と騎士のやりとりに、護堂はしかめ面つらで口をはさんだ。

「いや、あんたがあのまま死ぬとは俺たちも思ってなかったけどさ。どうやって生きのびたんだよ？　非常識にも程ほどがあるだろ!?」

「ふふふ、よく聞いてくれた。あのまま灼やかれつづけたら、さすがにやばいと思ってね。実は仮死状態になって、焔ほのおをやりすごしたんだよ。あとは、また鉄の体になって湖の底を歩いたり這はったり跳んだりして、なんとか陸に戻ったのさ！」

「仮死状態って、本当にクマムシかよ!?」

　驚きの生態を教えられて、護堂は頭が痛くなってきた。

「鉄の体はたしかに水に浮かないけど、窒ちつ息そく死しとも低温症とも縁がなくなるからね。……ただ仮死状態になると、しばらく死にっぱなしになるのが厄やつ介かいなんだ。そのまま水底で一晩すごしちゃったよ。今け朝さになってようやく目覚めることができたんだ」

　冗談のような生せい還かん劇げきを、笑顔で語るドニだった。

　いや、護堂自身も似たような生命力なので、あまり人のことは言えないが。

「さすがの僕もくたくたに疲れたし、腹ぺこだ。全身傷だらけだしね。君と戦う元気もさすがにない。昨日の決闘、引き分けってことでいいかな？」

「べつに何だっていいよ、もう……。でも、どこが傷だらけなんだ？」

　ドニの肉体に、日焼け以外の変化は何も見あたらなかった。

　護堂は胡う散さんくさく思いながら言ったのだが。

「ほら、これ。僕、肌荒れとか皮ひ膚ふガンが怖いから、ＵＶケアはおこたらない方なんだ。なのに、こんなに赤く日焼けしちゃって……。やってくれたじゃないか、護堂」

「そんなことをまじめな顔で言うな！」

　きりっと顔をひきしめたドニの向かい側に、なんとなく護堂はすわってしまった。

　ほとんど無意識の行動だった。隣にエリカもすわる。

　待つこと十数分。運ばれてきた料理を食べはじめる。ふつう、イタリアでは朝食を簡素にすませる。クロワッサンや菓子パンに、エスプレッソないしカプチーノを合わせるくらいだ。

　しかし、今朝は例外だった。

　羊乳から作るコクのあるチーズと黒くろ胡こ椒しようをからめた、大皿いっぱいのパスタ。

　これを護堂とドニはむさぼるように食べはじめたのである。尚なお、エリカはひとり平和に甘いクリーム入りのクロワッサンを注文していた。

「あ、こら。そんなに持ってくな。ほかの人間の分も残そうって気はないのかよ!?」

「おいおい護堂。食卓に休戦協定なんてないことは、万国共通だろ。ここでは弱肉強食、適者生存が唯ゆい一いつ最大のルールなのさ！」

「くそっ。だったら、こっちにも考えがある！」

　右手にフォーク、左手に取り皿を持って、ドニと護堂は山盛りのパスタを奪い合う。どちらがより速く、より大量に食べるか、真剣

勝負で競おうとする。



そのありさまに、エリカがしみじみとつぶやいた。

「なんていうか……短い間に頼もしくなったわね、護堂。サルバトーレ卿にまったく見劣りしていないわ。これも魔王の資質ということかしら……？」

「俺をこのバカといっしょにするな！」

「つれないことを言わないでくれよ。たしかに僕ら、似てるところも多いんじゃない？」

「あってたまるか、そんなところ！」

草薙護堂とサルバトーレ・ドニの決闘劇、この一幕が最終場であった。

部下が車で迎えにくるというドニと別れ、護堂とエリカは別荘へもどることにした。

ふたりで美しい湖畔を歩く。

おだやかな春の朝。空は青く晴れわたり、吹きぬける風も静かで心地よい。何より、すぐそばには気心の知れた〝相棒〟がいてくれる。

かつて感じたことのない充足感に満たされるのを、護堂は自覚した。

そして、理由もなく思った。

きっとエリカも同じだろうと――。隣にいる彼女を見ると、護堂が知るかぎり最も華麗で美しい美少女はあでやかに微笑ほほえんでくれた。

「いろいろあったけれど、まずは『めでたし』というところかしらね？」

と、エリカはあたりまえのように寄りそってきた。

護堂の右腕に自分の腕をからめる。これではまるで恋人同士だ。

しかも、エリカは顔がカッと熱くなった護堂の頬ほおに唇くちびるを寄せ、軽くキスまでした。

「よ、よせよ。こういうことはよくないと思うんだっ。やっぱりもっと健全に、友達同士のつきあいをするべきだって！」

　本当はこのまま、成りゆきに身をまかせたい気持ちはあった。

　しかし、最大限に理性を働かせて、護堂は訴えた。あまりに一足飛びに仲が深まったので、どうにも腰がひけてしまうのだ。

　このあたり、年齢＝彼女いない歴男ゆえの悲しさかもしれない。

「ふふふ、照れるあなたもかわいいものね。でも、まわりをよく見て。気にしている人なんか誰もいないわ。わたしたち、堂々と愛をたしかめ合っていいのよ？」

　エリカの言うとおりだった。

　ときどきすれちがう人たちは、ふたりのじゃれ合いなど気にも留とめない。情熱のラテンの国では、この程度のスキンシップはむしろ当然なのだろう。

　護堂がひとりで迷い、煮えきらず、躊ちゆう躇ちよしているだけなのだ。

　足踏みする理由など、何も思いつかないのに。のちにルクレチア・ゾラが理由を喝かつ破ぱするまで、護堂を悩ませる謎なぞのはじまりだった。

「とにかくさ。一段落ついたことだし、ミラノにもどってエリカのおじさんにあやまりにいこうぜ。迷惑かけてすみませんって。それでエリカのことも許してもらおう」

　護堂は努力して心を引きしめ、いちばんの懸けん案あんを口にした。

　自分のために、エリカは結社を抜け、唯一の肉親に別れを告げた。この問題を放置したまま、日本に帰れない。幸い、黄金連休ゴールデンウイークはまだ残っている……。

　彼女に対して責任を果たすべく、護堂は真しん摯しに訴えたのだ

が。

「ああ、そのことならいいの。もう解決ずみよ」

　ひどくあっさりとエリカは言った。

「さっき護堂とサルバトーレ卿が食欲を発はつ揮きしている間、ミラノの叔お父じさまへ電話して、結果報告とわたしを呼びもどすメリットについての意見を伝えておいたの」

　そういえば朝食中、エリカはしばらく席をはなれていた。

　自分とドニの食欲にあきれたのかとも思ったが、ちがったのだ。

「一、草薙護堂はサルバトーレ卿と互角に戦い、引き分ける潜在能力の持ち主である。

　二、そんな彼とエリカ・ブランデッリは個人的な愛人関係を結んでいる。

　三、この立場をわたしが上う手まく利用できるなら、魔術結社《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》は草薙護堂の傘さん下かとならずに、彼の庇ひ護ごを得ることもむずかしくない。

　四、この功績をもって、わたしを結社に復帰させて、ついでに騎士筆頭の称号『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』も授けて、叔父さま……そんな話をひととおりしたの」

「そ、それで向こうはなんて？」

「全て了解した。エリカ・ブランデッリの帰還を認める——だそうよ。ありがとう、護堂。全てあなたのおかげだわ」

　エリカは微笑ほほえんでいた。それはいつかも見た、悪魔の微笑だった。

　誰よりも華麗な笑顔。雌め獅じ子しの笑顔。貴婦人めいた笑顔。あどけない少女の笑顔。たくさんの顔を持つ彼女には、人を困らせて愉たのしむ悪魔のような面がたしかにあった……。

　そのことを、護堂はあらためて思い出した。

「いろいろ迷惑かけてるわけだし、俺のことを上う手まく利用してくれるのは全然かまわないんだけどさ。……で、でも、その『愛人関係』ってのは何だ!?」

　ギブアンドテイク、利害関係の一致。

　あやしい親しん戚せきや知人が多い（筆頭は祖父と母である）せいで、護堂はそういう事柄にかなり鷹おう揚ような方だ。しかし、聞き捨てならない言葉がそれだった。

「み、妙にいかがわしい響きだぞ。なんていうか、人聞きが悪いっ」

「そこがいいのよ。ちょっと不健全そうで、ふつうに『恋人同士♪』とか名乗るより淫いん靡びな感じがして、聞く人に訴えかける力が大きいわ」

「だだ大体、事実に反しているし」

「まあ。あんなに熱いキスを交わした仲なのに？」

「うぐっ」

「ふふふ。実は叔父さまに、ザンパリーニの館やかたであった一切を遅ればせながら報告したの。あの夜、わたしたちは一いつ糸しまとわぬ姿を見せ合い、肌を重ね、褥しとねを共にして、何度も狂おしく唇を重ねたんだって——」

「な、なんでそんな誤解を受けそうな説明するんだよ!?」

「誤解？　いいえ。わたしたちの関係を正しく伝えるためよ。叔父さまったら深くため息をついて、『こんなに早く花嫁の父の心境を味わえるとは……』なんて愚ぐ痴ちってらしたわ」

　ふと気づけば、護堂の腕を取るエリカの力が強くなっていた。

　とっさに引き抜こうとする。だが、びくともしない。もしかして、魔法か何かで腕力をアップさせているのか？

　エリカの顔を見ると、疑惑を認めるようにかわいらしく微笑まれた。

「護堂がミラノに行こうって言ってくれて、助かったわ。まず叔父さまに会ってもらいたいし、何よりわたしの『紅き悪魔』就任のお祝いに出てもらいたかったし」

「そういうことなら、話はべつだっ。俺は日本に帰るぞ！」

「何言ってるの、飛行機のチケットだって取っていないくせに」

「キャンセル待ちはできるし、いざとなったらザンパリーニさんに頼む手もある！」

「薄情なことを言わないで。実はね、トスカーナ州の広野を流れる大きな川があるのだけど、そこに最近、巨大なウナギの怪物が出るそうなの。ミラノに寄ったあと、ふたりで捕まえにいってみましょう」

「そんなの、ひとりで行けばいいだろう⁉」

「それがこの怪物、神獣クラスの生命体らしいの。ウナギではなくて、蛇へび型の神獣かもしれないわ。カンピオーネである護堂でなければ、手に負えない相手よ」

「俺はもう戦いたくない！　今回みたいなことはたくさんだ！」

「何を言うの。あんなに活いき活いきと戦っていたくせに。それに、神獣ごときがカンピオーネにかなうはずないわ。不安要素といえば、トスカーナはサルバトーレ卿の本拠地だから、あの方がしゃしゃり出てくることくらいよ」

「どう考えても、いちばん危険な要素じゃないかよ！」

　草薙護堂とエリカ・ブランデッリ。

　七人目のカンピオーネと、紅き十字の筆頭騎士。

　ふたりのはじまりは終わり、それに次ぐ長い冒険のはじまりだった。

著者紹介

丈月　城（たけづき　じょう）

埼玉県出身。

２００８年スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！」にてデビュー。

同作は好評を博し、シリーズ化され代表作となっている。

シコルスキー

ライトノベルの挿絵を中心に活動中のイラストレーター。

集英社ｅスーパーダッシュ文庫

カンピオーネ！

XI　ふたつめの物語

著者　丈月　城

２０１２年８月28日発行

この電子書籍は、集英社スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！
XI　ふたつめの物語」

２０１２年６月６日発行の第４刷を底本としています。

発行者　鈴木晴彦

発行所　株式会社　集英社

東京都千代田区一ツ橋２丁目５番10号

〒１０１－８０５０

［電話］

０３－３２３０－６０９５（編集部）

０３－３２３０－６３９３（販売部）

０３－３２３０－６０８０（読者係）

制作所　有限会社ワイズネット